兵庫県文化財調査報告　第73冊

谷町筋遺跡

―淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―

平成２年３月

兵庫県教育委員会

谷町筋遺跡正誤表

頁数	行数	誤	正
2	3行目	大日川沿いに	新川沿いに
4	30行目	されているが判り、	されていることが判り、
44	30行目	遺構群中	遺構群
54	11行目	掘り込んだ	掘り込まれた
66	29行目	突起で中心を	突起で、中心を
72	2行目	土壙1・3	土壙1・4
79	5行目	出土したである。	出土している。
114	2行目	(585) は	(585) の
114	11行目	(587・589・591～594) ははっきり	(587・589・591～594) は、はっきり
123	1行目	器高に対し	口径に対し
124	22行目	(723・733・734)	(723・734)
126	12行目	椀A (745)	椀B (745)
126	21行目	杯Bはb2(767・768)・b3 (770)	杯Bはb(767・768・770)
130	7行目	色調をする	色調を呈する
135	24行目	皿 (865) はA1に、(867) はB1に分類される。	皿 (865・867) はB1に分類される。
137	10行目	壺は底部は	壺は底部が
139	5行目	縦横のナデ調整	縦横にナデ調整
142	13行目	横方向の刷毛	横方向に刷毛
152	33行目	約40m方画に	約40m角に
153	2行目	明確な方画	明確な方形
153	4行目	西の庄遺跡	西庄遺跡
153	4行目	方画	方形区画
153	9行目	(屋内作業場県倉庫)	(屋内作業場兼倉庫)
153	9行目	方画	方形区画
154	2行目	建物の持つ構造	建物の構造
159	16行目	D類分類	D類に分類
159	30行目	型式的には編年	型式的に編年
159	33行目	E4・	E3・
160	6行目	E2・E3・F3、	E2・F3、
162	18行目	稜を持つA	稜を持つ壺A
163	13行目	C4、に分類	C4に分類
164	5行目	平安学園考古クラブ	平安学園考古学クラブ
164	22行目	第19会資料	第19回資料

頁数	行数	誤	正
165	14行目	内湾して	内彎して
165	22行目	建物址9おいて検出されているが、	建物址9から出土しているが、
166	22行目	(801)	(892)
166	23行目	もつものである。	持つものである。
167	7行目	(Ⅲ期)	(Ⅱ期)
167	9行目	内湾	内彎
167	25行目	捏ね鉢	捏鉢
167	26行目	備前A期	備前ⅣA期
167	33行目	16世紀の頭頃	16世紀の初頭
168	23行目	内湾 (2カ所)	内彎 (2カ所)
169	4行目	須恵器杯B	須恵器杯A
169	20～21行目	「註4の本文」7行目～8行目を続ける 7行目末尾 8行目頭 箆切りであるが←形態的には類似している。	
202	№609	須恵器 杯身C2	須恵器 杯C2
202	№610	須恵器 杯身C2	須恵器 杯C2
202	№611	須恵器 杯身C2	須恵器 杯C2
209	№767	杯Bb2	杯Bb
209	№768	杯Bb2	杯Bb
209	№770	杯Bb3	杯Bb
215	№744の枠下	平安時代末～	表12　平安時代末～
217	№796	B	A3
219	№827	椀ⅠA	椀Ⅰ
219	№836	皿A1	皿A
221	№865	皿A1	皿B1
225	№895	小皿	小皿Ⅱ

谷　町　筋　遺　跡

―淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―

平成２年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本報告書は三原郡西淡町志知(せいたんちょうしちたたら)字アサカに所在する谷町筋(たにまちすじ)遺跡の報告書である。

2．発掘調査は本州四国連絡橋公団による一般国道28号改良工事（通称淡路縦貫道建設工事）に伴って、昭和58年から平成２年にかけて実施したものである。

3．現地調査は松下勝、小川良太、井守徳男、吉識雅仁、岡田章一、長谷川眞、岸本一宏、西口圭介が担当し、昭和57年～昭和60年に株式会社橋詰建設・西淡建設の協力を得て実施した。

4．整理調査は吉識が主となって、昭和61・62・63、平成元年度に実施した。

5．現地調査、整理調査に係る経費は全て本州四国連絡橋公団が負担した。

6．遺構の実測は原田和幸の補助を受け、調査員が実施した。遺物の実測は土器を前田陽子、吉本佳恵、長浜幸子、本岡雅子、井川佳子、井上京子、川崎保、三原慎吾が、石器を山口卓也が行った。

7．遺構・遺物の浄書は前田が主となって行い、吉本・長浜・本岡が補助した。石器の浄書は山口が実施した。

8．遺構写真の撮影は調査員が実施したが、遺物については森昭氏に依頼して実施した。

9．本書の編集は前田・吉本・長浜・本岡の補助を得て、吉識が行った。

10．本書に使用した標高の数値は、本四公団の工事用Ｂ.Ｍ.を利用した海抜高であり、方位は座標北である。

11．本書に掲載した挿図の内、第１図は国土地理院発行の１/25000の地図を利用したものであり、図版第１は国土地理院撮影の航空写真を利用したものである。

12．原稿の執筆分担は以下に記したが、石器は山口卓也、縄文土器は川崎保が担当した。

吉識雅仁　第１章、第２章第１節、第２節１・２・３、第３章第１節２・３、第４章第２・３・４節

西口圭介　第２章第２節４、第３章第１節４、第２節、第４章第１・５節

山口卓也　第３章第３節

川崎　保　第３章第１節１

表類については担当者がそれぞれ作成した。

13．出土した遺物類はすべて兵庫県教育委員会で保管・管理している。

14．本書の作成にあたっては、波毛康宏氏を代表とする淡路考古学研究会の方々を始め、本州四国連絡橋公団等の関係機関の多大なる協力を得た。記して感謝の意を表します。

本文目次

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過 …… 1

第2節　調査の経過と体制 …… 2

1.　昭和57年度の調査 …… 2

2.　昭和58年度の調査 …… 3

3.　昭和59年度の調査 …… 4

4.　昭和60年度の調査 …… 5

5.　昭和61年度の調査 …… 5

6.　昭和62年度の調査 …… 5

7.　昭和63年度の調査 …… 5

8.　平成元年度の調査 …… 6

第3節　歴史的環境 …… 7

第2章　遺跡

第1節　調査区の概要 …… 15

第2節　遺構 …… 29

1.　縄文時代の遺構 …… 29

2.　弥生時代～古墳時代前期の遺構 …… 30

3.　古墳時代後期～平安時代前半の遺構 …… 39

4.　平安時代末～室町時代の遺構 …… 43

第3章　遺物

第1節　土器 …… 65

1.　縄文時代の土器 …… 65

2.　弥生時代～古墳時代前期の土器 …… 71

3.　古墳時代後期～平安時代前半の土器 …… 107

4.　平安時代末～室町時代の土器 …… 129

第2節　金属製品 …… 143

第3節　石器 …… 144

第4章　まとめ
第1節　鎌倉時代～室町時代の遺構 …… 151
第2節　弥生時代～古墳時代前期の土器 …… 157
第3節　古墳時代後期～平安時代前半の土器 …… 161
第4節　製塩土器 …… 163
第5節　中世の土器 …… 165

表　目　次

表1　遺跡地名表 …… 10
表2　調査区西壁（1）土層名 …… 23
表3　調査区西壁（2）土層名 …… 23
表4　8ライン土層名 …… 24
表5　13ライン土層名 …… 25
表6　建物址一覧表 …… 64
表7　銅銭一覧表 …… 142
表8　縄文土器観察表 …… 171
表9　弥生時代～古墳時代前期の土器観察表 …… 174
表10　古墳時代後期～平安時代前半の土器観察表 …… 200
表11　製塩土器観察表 …… 210
表12　平安時代末～室町時代の土器観察表 …… 215

挿図目次

第1図　試掘溝配置図 …… 2
第2図　遺構検出範囲 …… 4
第3図　位置と周辺の遺跡 …… 9
第4図　奈良時代以前の遺構全体図 …… 17・18
第5図　西壁土層 …… 19・20
第6図　8・13ライン土層 …… 21・22
第7図　台地上の遺構全体図 …… 27・28
第8図　土壙5 …… 29
第9図　縄文土器出土範囲 …… 29
第10図　住居址1 …… 30
第11図　住居址2・3 …… 31

第12図　住居址４ …… 33
第13図　住居址５ …… 34
第14図　住居址６ …… 35・36
第15図　土壙６ …… 38
第16図　住居址７ …… 40
第17図　溝41土層 …… 41
第18図　旧河道土層 …… 42
第19図　平安時代末～鎌倉時代の遺構全体図 …… 45・46
第20図　北地区全体図 …… 47・48
第21図　建物址４ …… 49
第22図　建物址１ …… 50
第23図　建物址８ …… 51
第24図　溝４ …… 52
第25図　柱穴190遺物出土状態 …… 53
第26図　土壙10・11 …… 54
第27図　土壙14 …… 55
第28図　土壙15 …… 55
第29図　土壙20 …… 56
第30図　東地区全体図 …… 57・58
第31図　建物址11 …… 59
第32図　柱穴38遺物出土状態 …… 60
第33図　南地区全体図 …… 61・62
第34図　土壙23・24 …… 63
第35図　縄文土器（１） …… 67
第36図　縄文土器（２） …… 68
第37図　縄文土器（３） …… 69
第38図　縄文土器（４） …… 70
第39図　縄文土器（５） …… 71
第40図　溝42出土土器（１） …… 72
第41図　溝42出土土器（２） …… 73
第42図　溝43出土土器 …… 75
第43図　溝40出土土器（１） …… 76
第44図　溝40出土土器（２） …… 77

第45図　住居址４出土土器 …… 78
第46図　住居址１・２・５・６出土土器 …… 79
第47図　土壙１出土土器（１） …… 80
第48図　土壙１出土土器（２） …… 81
第49図　土壙３・６・７出土土器 …… 82
第50図　旧河道出土土器 …… 83
第51図　Ｃ－７土器群 …… 85
第52図　包含層下層出土土器（１） …… 86
第53図　包含層下層出土土器（２） …… 87
第54図　包含層下層出土土器（３） …… 88
第55図　包含層下層出土土器（４） …… 89
第56図　包含層下層出土土器（５） …… 90
第57図　包含層下層出土土器（６） …… 91
第58図　包含層下層出土土器（７） …… 92
第59図　包含層下層出土土器（８） …… 93
第60図　包含層上層出土土器（１） …… 96
第61図　包含層上層出土土器（２） …… 97
第62図　包含層上層出土土器（３） …… 98
第63図　包含層上層出土土器（４） …… 99
第64図　包含層上層出土土器（５） …… 100
第65図　包含層上層出土土器（６） …… 101
第66図　包含層上層出土土器（７） …… 102
第67図　包含層上層出土土器（８） …… 103
第68図　包含層上層出土土器（９） …… 104
第69図　包含層上層出土土器（10） …… 105
第70図　包含層上層出土土器（11） …… 106
第71図　その他の包含層出土土器（１） …… 108
第72図　その他の包含層出土土器（２） …… 109
第73図　その他の包含層出土土器（３） …… 110
第74図　製塩土器 …… 111
第75図　住居址７出土土器 …… 112
第76図　溝41出土土器 …… 113
第77図　溝47出土土器 …… 115

第 78図　旧河道出土土器（確認調査時）…… 115
第 79図　旧河道出土土器（1）…… 116
第 80図　旧河道出土土器（2）…… 117
第 81図　旧河道出土土器（3）…… 118
第 82図　旧河道出土土器（4）…… 119
第 83図　旧河道出土土器（5）…… 121
第 84図　旧河道出土土器（6）…… 122
第 85図　旧河道出土瓦 …… 125
第 86図　包含層出土土器（1）…… 126
第 87図　包含層出土土器（2）…… 127
第 88図　製塩土器（1）…… 128
第 89図　製塩土器（2）…… 129
第 90図　北地区建物址出土土器 …… 131
第 91図　北地区柱穴内出土土器 …… 132
第 92図　北地区土壙出土土器 …… 133
第 93図　北地区溝出土土器（1）…… 136
第 94図　北地区溝出土土器（2）…… 137
第 95図　東地区出土土器 …… 138
第 96図　南地区土壙24出土土器 …… 139
第 97図　包含層出土土器 …… 140
第 98図　土錘・紡錘車 …… 141
第 99図　鉄製品 …… 143
第100図　銅銭 …… 143
第101図　石器（1）…… 145
第102図　石器（2）…… 146
第103図　石器（3）…… 147
第104図　石器（4）…… 148
第105図　石器（5）…… 149
第106図　石器（6）…… 150

図版目次

図版第1　遺跡航空写真
図版第2　上）遺跡全景（南から）
　　下）遺跡全景（北から）
図版第3　上）台地南側地区土層（調査区西壁）
　　下）台地南側地区土層（B－9～10間）
図版第4　縄文時代　上）土壙5検出状況
　　下）土壙5完掘状況
図版第5　縄文時代　上）縄文土器包含層（G－5～6間）
　　下）縄文土器出土状態全景
図版第6　縄文時代　上）縄文土器出土状態
　　下）縄文土器出土状態
図版第7　弥生時代～古墳時代前期　上）台地上の遺構全景（東より）
　　下）台地上の竪穴住居址群（北より）
図版第8　弥生時代～古墳時代前期　上）住居址4
　　下）住居址1
図版第9　弥生時代～古墳時代前期　上）住居址2・3
　　下）住居址5
図版第10　弥生時代～古墳時代前期　上）住居址6
　　下）土壙1
図版第11　古墳時代前期～後期　上）土壙6
　　下）住居址7
図版第12　平安時代末～室町時代　上）北地区遺構全景（東より）
　　下）北地区東半遺構群（東より）
図版第13　平安時代末～室町時代　上）建物址1
　　下）溝4
図版第14　平安時代末～室町時代　上）東地区全景（北から）
　　下）東地区全景（西から）
図版第15　弥生時代～古墳時代前期の土器
図版第16　弥生時代～古墳時代前期の土器　土壙1出土土器
図版第17　弥生時代～古墳時代前期の土器　C－7土器群
図版第18　弥生時代～古墳時代前期の土器　包含層出土土器

図版第19　弥生時代～古墳時代前期の土器　包含層出土土器
図版第20　弥生時代～古墳時代前期の土器　包含層出土土器
図版第21　弥生時代～古墳時代前期の土器　包含層出土土器
図版第22　弥生時代～古墳時代前期の土器　包含層出土土器
図版第23　古墳時代後期～平安時代前半の土器　住居址７出土土器
図版第24　古墳時代後期～平安時代前半の土器　旧河道下層出土土器
図版第25　古墳時代後期～平安時代前半の土器　旧河道上層出土土器
図版第26　古墳時代後期～平安時代前半の土器　旧河道上層出土土器
図版第27　古墳時代後期～平安時代前半の土器　包含層出土土器
図版第28　平安時代末～室町時代の土器　北地区遺構内出土土器
図版第29　平安時代末～室町時代の土器　北・東・南地区遺構内出土土器
図版第30　平安時代末～室町時代の土器　包含層出土土器
図版第31　平安時代末～室町時代の土器　土師器
図版第32　平安時代末～室町時代の土器　上）須恵器
下）陶磁器
図版第33　土錘・紡錘車・製塩土器　上）土錘・紡錘車
下）製塩土器
図版第34　製塩土器
図版第35　製塩土器
図版第36　墨書土器・鉄製品・銅銭
図版第37　石器

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

本州と四国を結ぶ本州四国連絡橋計画の内、最も東側のルートである神戸・鳴門ルートは、神戸市垂水区から明石海峡を明石海峡大橋で渡り、淡路島を縦貫して、鳴門海峡に至り、鳴門海峡を大鳴門橋で渡り、徳島県鳴門市に至るルートである。島内は一般国道28号を改良し、淡路縦貫道と通称される自動車専用道を建設して、両橋間のスムーズな交通の流れを確保すると共に、７ヵ所のインターチェンジを設け、島内産業の活性化に貢献しようとする計画である。

こうした計画にもとづき、昭和47年本州四国連絡橋公団（以下本四公団と略称）から兵庫県教育委員会（以下県教育委員会と略称）に事業の概要説明があり、あわせて巾200mの道路計画予定地について、埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。これを受けた県教育委員会は計画予定地を３地区に分け、分布調査を淡路考古学研究会（当時代表　岡本稔氏）に依頼し、昭和47・48年の２ヵ年にわたって実施した。この分布調査では26ヵ所の散布地が発見されたが、特に三原平野に集中するような状態であった。

この報告を受けた県教育委員会は、昭和49年兵庫県の窓口である淡路縦貫道対策室も交えて、本四公団の立会いの下、26ヵ所の散布地について現地確認を行い、本四公団と散布地の取扱いをめぐって協議に入った。その場で県教育委員会は本四公団に対して、散布地の現状保存を求め、道路詳細計画からこれらの散布地を除外するように求めた。またやむを得ず、道路計画にかかる散布地については、今後事前の調査を行う事で合意した。

昭和48年のオイルショックで、明石海峡大橋の建設計画は凍結となり、淡路縦貫道も北半部は工事計画が凍結となった。しかし南半部の津名郡以南は工事計画続行となり、用地買収の終了した三原インターチェンジ計画地内の２ヵ所の散布地（志知川沖田南遺跡）について、昭和53年に確認調査の依頼が、県教育委員会にあった。それを受けた県教育委員会は昭和53年に２ヵ所の散布地について確認調査を実施した。そして翌昭和54年から昭和57年までの４ヵ年にかけて全面にわたる調査を実施した。

この志知川沖田南遺跡の調査が終了した昭和57年、三原インターチェンジより西側に位置する４ヵ所の散布地（谷町筋・鈩田・新川西・寺田）について調査の依頼があった。依頼を受けた県教育委員会は用地問題が終了した昭和57年９月より確認調査を実施した。確認調査の結果、遺構の確認された谷町筋・鈩田遺跡については全面にわたる調査が必要と判断し、昭和58年から２遺跡の全面調査を行った。しかし洲本市側で相次いで新たな遺跡が発見され、その調査を急ぐことになったため、谷町筋遺跡の本格的な調査は翌年に延期し、昭和59年に実施した。

第 2 節　調査の経過と体制

1．昭和57年度の調査（第１図）

昭和47年度に実施された淡路縦貫道予定地内の分布調査の結果、大日川沿いに、下流側から寺田・新川西・鈩田・谷町筋の４ヵ所の遺物散布地が確認された。本年度はこれら散布地の確認調査を実施することになり、昭和57年９月６日、最も下流側の寺田散布地から開始した。そして順次上流側に調査を進め、谷町筋遺跡については、途中他の遺跡の確認調査を行ったが、同年10月８日から11月４日まで調査にあたった。

谷町筋遺跡は長さ約350m、平均巾約65mの広範囲に及ぶ。そのため、調査にあたっては、２m四方のグリッドを、当初は粗く、約40m間隔で設定し、そこでの遺構の有無、遺物の出土状態、土層の堆積状況等を確認し、必要に応じてトレンチ等を設定する方法を採った。その結果、２m四方のグリッド27ヵ所、巾１mのトレンチ10本・総延長約230mとなった。しかし現表土下の砂礫層からの出水が極めて多く、充分な調査を行い得ない地域もあった。

グリッド８～14

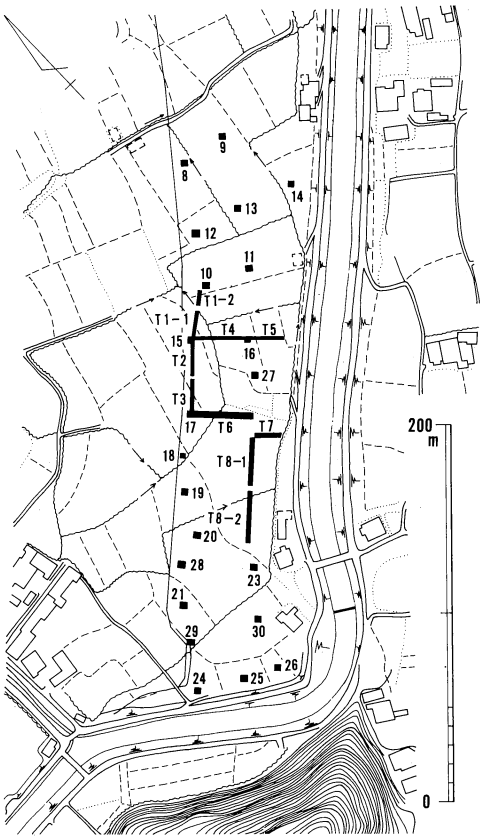
この地域は鈩田遺跡と隣接した地域で、台地下の沖積地にあたるが、川寄りのグリッドでは現表土下からの出水が酷く、充分な調査が実施し得なかった。しかしグリッド10・12から多量の遺物の出土があり、グリッド10は青灰色砂・砂礫層が認められ、旧河道にあたるものと思われる。

グリッド15・17・18、トレンチ１～４・６

この地区は、現地形でも一段高く、調査地区の西方から張り出してくる、台地の末端に当たる地区である。グリッド15では竪穴住居址が検出され、そこから南方に伸ばしたトレンチでも住居址と思われるものが確認された。またトレンチ４では台地下方にあたる部分から、グリッド10から続く旧河道が検出された。さらにトレンチ６の西端付近では極めて多量の遺物の出土があった。

グリッド16・27、トレンチ４・５

この地区は台地東方の沖積地にあたり、トレンチ４では不整形な溝状の落ちが確認された。また川寄りの地区では包含層が確認されている。



第１図　試掘溝配置図

トレンチ6～8

現地形では、これまでの沖積地から一段高くなって、台地末端にあたる地区とほぼ同じ高さを示す地区である。調査の結果、トレンチ6では2層の包含層と、上層の包含層を切り込むピット状の遺構、グリッド10・トレンチ4から伸びてくる旧河道が検出された。この遺構の時期は不明であるが、同じ上層の包含層を切り込む旧河道が奈良時代の土器を出土していることから、それ以降のものと思われる。

グリッド19～26・28～30

今回の調査対象地の中では最も高位地区であるが、グリッド24～26は新川の氾濫をまともに受けた地区で、遺物の出土もほとんど見られなかった。ただグリッド19では土師器小皿が出土しており、周辺に遺構の存在する可能性が残る。

まとめ

以上、これらの確認調査の結果から、台地の末端にあたるグリッド15・17・18、トレンチ1～4・6の地区については全面にわたる調査が必要と判断され、グリッド10・11からグリッド20までの間の沖積地についても、再度の調査が必要と判断された。ただ沖積地の地区は現表土下からの出水が酷く、その処理を考えねばならないであろう。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主査　松下　勝、主任　井守徳男、技術職員　吉識雅仁　別府洋二、
事務員　嶋本文子、整理作業員　浅井多英美

2．昭和58年度の調査（第2図）

先年度の調査で遺構が検出され、全面調査が必要と判断された2600㎡と、再度の調査が必要とされた約4800㎡について、再確認の調査を実施することになった。しかし昨年度の確認調査では表土下からの出水が酷く、充分な調査ができない状態であったため、本年度は全体を機械力で剝ぎ、その後に全面、確認の調査を実施することにした。

そこで昭和58年9月22日、表土を除去する作業から開始した。ただ調査区内に縦横に設けられている農業用水路を確保するため、調査区西端に仮設の水路を設けた。また調査区の掘削により、調査区西側の水田の中には進入路がなくなるものがあり、その確保のため、調査区南西端に巾4mの仮設道路を設けた。このように仮設水路・仮設道路を設けたため、調査区西端は巾約4mほど調査の実施し得ない地区ができた。

また調査区が巾60m、長さ140mと広く長いため、表土除去作業にあたっては、20m間隔で土層観察のための畦畔を設けた上に、西端を除く3周と、調査区中央に仮設道路を設けた。廃土は、調査区の南側と北側に、ダンプによって運び出した。

こうした表土除去作業の結果、再度の調査が必要とされた調査区北端の地区や調査区中央東

端の地区でも遺構が検出された。調査区北端の遺構はさらに北に伸びる可能性があったため、調査区北側でトレンチ調査を行ったが、遺構は確認されなかった。その結果、全面にわたる調査が必要な地区は約5200㎡となった。

ところが、表土除去作業と並行して進めていた洲本市側の確認調査で、森遺跡・寺中遺跡等の新発見の遺跡が相次ぎ、また新しく散布地等も発見された。そこでその取扱いを本四公団と協議したが、洲本市側の調査を優先させることになった。そのため今年度の調査は表土掘削終了段階で中断することになった。しかし表土を除去し、遺構面が剝き出しになった状態で半年以上も放置すると、遺構面が傷むことが予想された。そのため遺構面をビニールシートで覆い、その上から土を被せて保護する作業を行った後、昭和58年12月に本遺跡の調査は中断した。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主任　小川良太、技術職員　吉識雅仁　岸本一宏

補助員　原田和幸　山崎敏昭、事務員　浅井多英美

整理作業員　山岡仁美　木下ひふみ

3．昭和59年度の調査

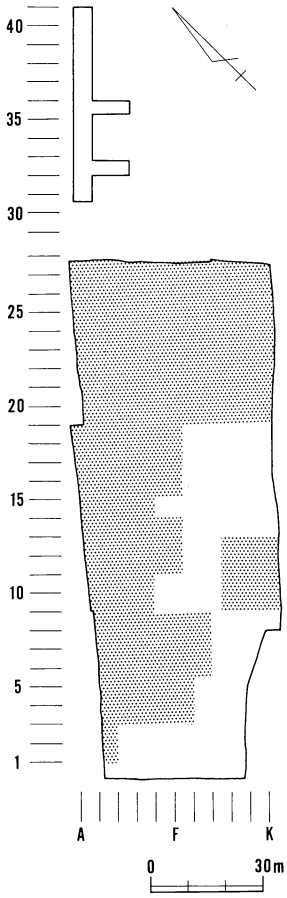
本年度は6月23日より、これまでの調査で遺構が確認された約5200㎡について全面調査を行い、合わせてトレンチ調査で遺物の採集を目的とした調査を行った。しかし約7ヵ月も放置していたため、調査区は傷んでおり、本来の調査を開始するまでに、約1ヵ月以上もかかったため、旧河道と遺物採集の調査は充分行い得なかった。

確認調査等で検出された遺構は弥生時代～古墳時代のものと、平安時代末以降に分けられるため、まず上層の平安時代末以降の遺構の調査から取りかかり、ほぼ9月1日にこの調査を終了させた。そして9月3日からは、下層の弥生時代から古墳時代の遺構の調査に取りかかり、12月21日にこの調査を終了した。

ところが下層の遺構の調査中、遺構面上及び遺構面に縄文土器が含まれていることが判明し、本四公団と協議したところ、再度確認調査を実施することになり、昭和60年3月15日から3月31日までかけて、その調査を行った。その結果極めて狭い範囲ではあったが、縄文土器が比較的良好な状態で包含されているが判り、次年度に縄文土器を採集する調査を実施することになった。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課



第2図　遺構検出範囲

調査担当　技術職員　吉識雅仁　西口圭介、補助員　原田和幸、事務員　浅井多英美
整理作業員　山岡仁美　木下ひふみ

4．昭和60年度の調査

昨年度、縄文土器の包含層が確認された地区について、その採集を目的とした調査を、4月20日から同月30日までの間に実施した。その結果、浅い凹地内に流入した縄文土器を採集した。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　技術職員　岡田章一　長谷川眞

5．昭和61年度の調査

昭和57年度から昭和60年度までの4年間の調査で出土した遺物の整理作業を、4ヵ年計画で実施することとし、本年度は水洗い作業と、ネーミング作業を実施した。ネーミングは簡略化するため、記号化することにし、遺跡名を「TN」と表し、採集した袋毎に1から順に付っていった。したがって土器自体に書き込んだのは「TN−1」といった記号だけである。ネーミング順は遺構出土の土器を優先させ、包含層出土のものはその後とした。また遺構出土の土器でも住居址・土壙・柱穴・溝等の順に行い、包含層出土の土器はA−1からグリッド順に行った。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主任　吉識雅仁　岡田章一、技術職員　長谷川眞　西口圭介

6．昭和62年度の調査

昨年度に引き続いて整理作業を実施し、本年度は遺物の接合・復元・写真撮影を行った。遺物は遺存状態が悪く、出土時は完形に近いものでもなかなか復元できず、作業は手間取った。

遺物の写真撮影は森昭氏に依頼して実施したが、写真撮影にあたっては、完形あるいはそれに近いものは横位置の状態で撮影し、破片類は粗く分類した後、俯瞰状態で撮影した。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主任　吉識雅仁　岡田章一、技術職員　長谷川眞　西口圭介

補 助 員　森岡みゆき　奥林由季子　岡崎輝子　吉田由起子　二階堂康

7．昭和63年度の調査

本年度は遺物の実測作業と金属器の保存処理を行った。実測作業にあたっては、遺構出土の土器を優先させた。また遺構出土の土器は可能な限り実測したが、包含層出土の土器は出土量が多く、遺存状態の悪いものが多かったため、選別して実測した。

その結果、実測個体数は弥生土器・土師器が約719個体、須恵器が約126個体、縄文土器が約80

個体、陶磁器類が約25個体、黒色土器・瓦器約14個体、製塩土器約103個体、その他瓦類等約19点、計約1086点となった。しかし遺物は完形に復元されたものが少ない上に、器壁が剝離するなど遺存状況が悪く、調整等細かい点が不明なものが多かった。

遺物の実測は調査補助員が行い、原稿執筆者が実測図のチェックをして、完成させた。

金属器の保存処理は台帳を作成し、X線撮影した後、脱塩・錆取り・樹脂含浸といった作業を行った。特に鋤先については錆が酷かったため、一度仮の含浸を行った後、錆落としを行った。処理過程は以下の通りである。なお保存処理は加古が担当した。

①台帳作成、X線撮影——→ ②脱塩（6ヵ月）——→ ③錆取り（2週間）——→ ④脱塩（1ヵ月）——→ ⑤錆取り（2週間）——→ ⑥仮強化含浸（2回含浸）——→ ⑦錆取り（1週間）——→ ⑧含浸・乾燥（3回繰り返す）——→ ⑪処理後の写真——→ ⑫保管

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主　　任　吉識雅仁　加古千恵子（保存処理担当）　岡田章一

技術職員　長谷川眞　西口圭介

補 助 員　前田陽子　吉本佳恵　井川佳子　井上京子　川崎　保　三原慎吾

8．平成元年度の調査

これまでの教育委員会社会教育・文化財課から、「兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所」が地方機関として独立し、発掘調査・整理調査は調査事務所で行うことになった。そこで本遺跡の整理調査も調査事務所で実施した。

本年度は調査報告書の刊行を目指して、遺構・遺物図のトレース、レイアウト、原稿執筆、印刷の作業を行った。

調査主体　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当　調査第1課　主　　任　岡田章一　長谷川眞

調査第2課　主　　査　吉識雅仁

技 術 職 員　西口圭介

整理普及課　主任技術員　前田陽子　吉本佳恵　長浜幸子　山口卓也

企画技術員　本岡雅子

補　助　員　川崎　保

第 3 節　歴史的環境（第3図）

淡路島内で考古学的な手法によった発掘調査が実施されるようになったのは、昭和35・36年に行われた西淡町沖ノ島古墳群の調査からであり、その後洲本市下加茂岡遺跡・武山遺跡、西淡町古津路遺跡等の調査が行われた。昭和50年代に入ると圃場整備に伴う確認調査が全島で始まり、昭和53年からは淡路縦貫道建設に伴って大規模な発掘調査が実施されるようになったが、県下の他地域に比較すると発掘件数は少ない。

したがって調査によって実態が明らかにされた遺跡は少ないが、淡路考古学研究会をはじめとする地元研究者の熱心な踏査によって、三原平野でもかなり遺跡が知られている。

しかし旧石器時代の遺跡は最近まで知られておらず、ようやく昭和61年に、三原町神代で採集された遺物の中にナイフ形石器が含まれていることが判明し[註1]、淡路島内にも旧石器があることが明らかとなった。

縄文時代の遺跡も三原平野やその周辺には少なく、緑町柿坪遺跡・安住寺遺跡、三原町南畑遺跡・次郎池遺跡、南淡町長原遺跡・高萩遺跡、西淡町鈩田遺跡等が知られているにすぎない。この内、柿坪遺跡・長原遺跡では有舌尖頭器が採集されており、縄文時代草創期と考えられている。安住寺遺跡は円形押形文土器が圃場整備に伴う確認調査で出土し[註2]、南畑遺跡では前期に属する土器とともに多量の石器が採集されている[註3]。次郎池遺跡は三原平野南端の山間地に位置し、溜池の岸で石鏃・スクレパー・勾玉等が採集されている[註4]。鈩田遺跡は淡路縦貫道建設に伴って調査された遺跡で、本遺跡とは極めて近接し、本来同一の遺跡ないし遺跡群として捉えられる遺跡であるが、後期あるいは晩期と考えられる土器片1点が出土している[註5]。

弥生時代に入ると遺跡数は増加し、前期の古・中段階には西淡町北所遺跡・沖田南遺跡等が営まれている。北所遺跡では木の葉文状の文様を持つ土器が採集されており[註6]、沖田南遺跡では壷棺が検出されている[註7]。使用されていた壷は口縁部を欠くが、肩部と頸部の間は段をなしており、前期の古段階に属すると思われる。この他、前期新段階の遺跡としては西淡町鈩田遺跡・雨流遺跡等が知られ、雨流遺跡ではこの時期の水路が検出されている。また雨流遺跡の出土遺物の中には紀伊型甕が認められている[註8]。

中期の遺跡は雨流遺跡・沖田南遺跡・鈩田遺跡等が知られているが、遺物が僅かに出土しているに過ぎず、実態は不明である。

後期の遺跡としては沖田南遺跡・鈩田遺跡等の存在が知られ、鈩田遺跡では後期前半の土器が一括して出土している。それらの土器には畿内的な様相が強く認められるが、瀬戸内地方の影響も見られる。沖田南遺跡では後期末から古墳時代初頭の土器が出土し、水田が検出されている。ただこの遺跡から出土した遺物は非常に特徴的で、壷等には底部が丸底に近いものが見られるのに対し、甕の底部は全て平底で、体部も後期の土器に近い形態を持つ。土器の中には

四国系の所謂「矢野式土器」[註9]に近い特徴を持つものが見られたり、甕の口縁部に刻み目を持つものがあり、紀伊地方の影響も見られる。

またこの他、淡路の弥生時代を特徴づけるものに青銅器がある。中でも銅鐸は最大数を採れば現在、13遺跡から出土した20口が知られている[註10]。三原平野では8口を出土した西淡町中の御堂遺跡の他、出土地点が比較的明らかな緑町倭文銅鐸出土地（笹尾遺跡）等がある[註11]。銅鐸の他、西淡町古津路遺跡では中細形銅剣が10数本出土しており[註12]、西淡町西原地方松原遺跡等の砂堆上に位置する遺跡では銅鏃8口が採集されている[註13]。このように三原平野では遺跡数のわりには多くの青銅器の出土が知られている。

古墳は淡路島全体に少なく、三原平野では現在26基が知られているに過ぎない[註14]。しかしいずれも保存状態が悪く、墳形・内部主体とも不明なものが多い。その中で墳形の判明しているものは全て円墳で、内部主体は陶棺を持つ1基を除いて、横穴石室か小型の竪穴石室である。時期的にも前・中期に遡るものは知られておらず、後期古墳に限られている。

これら26基の古墳は位置的な関係から、①西淡町志知北から三原町志知佐礼尾に至る大日川中流域左岸の丘陵地帯に位置するグループ、②南淡町賀集付近の大日川上流域に位置するグループ、③三原町榎列付近の成相川と三原川の合流点付近の丘陵地帯に位置するグループ、④成相川上流の三原町八木付近の丘陵地帯に位置するグループにまとめられる。

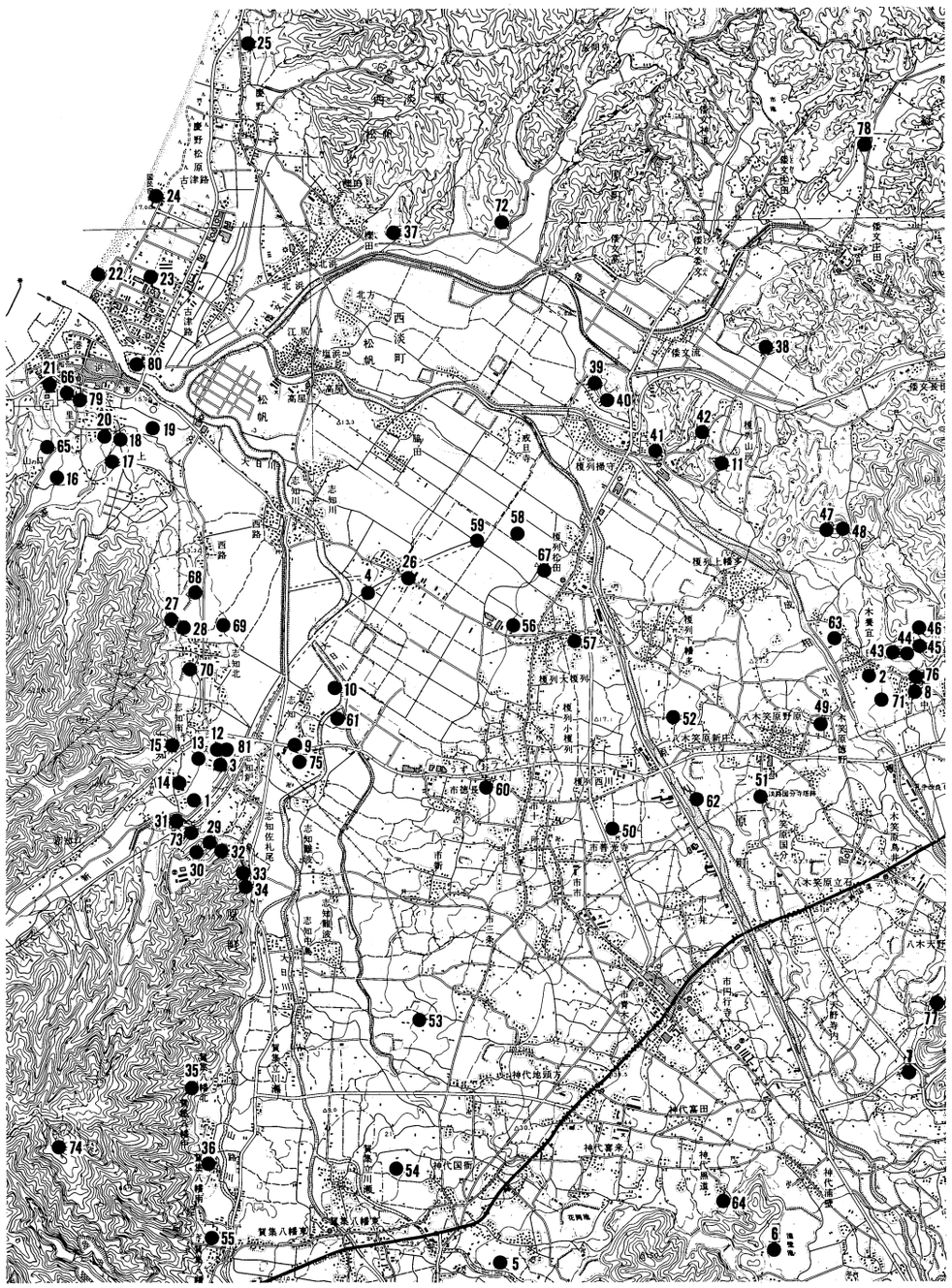
①のグループは横穴石室を内部主体にする庚申1・2号墳から佐礼尾2号古墳までの9基の古墳で構成されるが、最近の調査で墳丘が完全に削平されたハバ古墳が発見されており、他にも開墾時に削平されて消滅、あるいは墳丘が失われた古墳があったものと思われる。このグループの内、佐礼尾古墳は小型の竪穴石室を内部主体とする古墳であるが、六鈴鏡・鉄器等が発見されている[註15]。またハバ古墳は残っていた石室の床面から銅鏡・金銅製馬具・鉄器等が調査時に出土している[註16]。このグループは銅鏡を副装品に持つ等、他のグループに比べると副装品から見れば、三原平野では比較的有力な勢力であったものと思われる。

②のグループは4基で構成されるが、その内賀集西山北古墳は長さ約8mの横穴石室を内部主体とし、淡路では最大の横穴石室を内部主体とする古墳である[註17]。他の西山南古墳・小山古墳は横穴石室、野田山古墳は小型の竪穴石室を内部主体とする古墳である[註18]。

③のグループは掃守岡山寺1・2号墳と里見山古墳・山所古墳の4基で構成されるが、内部主体等は不明である。④のグループは入田山1～3号墳と野原塚村古墳の4基と長田山1・2号墳をまとめたが、長田山1・2号墳はやや離れて存在している。野原塚村古墳は淡路では唯一陶棺を内部主体とする古墳である。

これら4グループの他に、倭文川流域に倭文委文古墳・榛田山古墳が単独で存在している。

古墳時代の集落址としては、鈩田遺跡で前期の方形住居址が、雨流遺跡で方形住居址で構成された中期の集落が発見されている。この他、淡路・志知川沖田南遺跡では弥生時代後期から



第3図　位置と周辺の遺跡

表1　遺跡地名表

	遺跡名	時期
1	谷町筋遺跡	縄文後・弥生～室町
2	南畑遺跡	縄文前
3	鈩田遺跡	縄文晩・弥生前～鎌倉
4	志知川沖田南遺跡	弥生前～古墳前
5	鐘原遺跡	弥生後
6	浦壁池遺跡	弥生？
7	戎添遺跡	弥生？
8	大土居中遺跡	弥生？
9	志知松本遺跡	弥生・古墳
10	伊勢の森遺跡	弥生
11	里見山下遺跡	弥生？
12	志知鈩高所遺跡	弥生・平安
13	しずかい遺跡	弥生・奈良
14	城の元遺跡	弥生・奈良
15	飯山寺遺跡	弥生・奈良
16	やまご遺跡	弥生？・平安
17	美園遺跡	弥生
18	井手の内遺跡	弥生？・平安
19	岡所西遺跡	弥生？・奈良
20	薬師遺跡	弥生？・平安
21	湊明神前遺跡	弥生？・平安
22	西原地方松原遺跡	弥生？・奈良
23	西原（古津路）遺跡	弥生
24	松原千畳敷遺跡	弥生・奈良
25	北所遺跡	弥生
26	雨流遺跡	古墳
27	庚申1号墳	古墳
28	庚申2号墳	古墳
29	斎谷古墳	古墳後
30	斎谷山1号墳	古墳後
31	斎谷山2号墳	古墳後
32	佐礼尾古墳	古墳後
33	佐礼尾1号墳	古墳後
34	佐礼尾2号墳	古墳後
35	賀集西山北古墳	古墳後
36	賀集西山南古墳	古墳後
37	櫟田山古墳	古墳後
38	倭文委文古墳	古墳後
39	掃守岡山1号墳	古墳後
40	掃守岡山2号墳	古墳後
41	里見山古墳	古墳後

	遺跡名	時期
42	山所古墳	古墳後
43	入田山1号墳	古墳後
44	入田山2号墳	古墳後
45	入田山3号墳	古墳後
46	上八木古墳	古墳後
47	長田山1号墳	古墳後
48	長田山2号墳	古墳後
49	徳理塚村古墳	古墳後
50	淡路国府推定地	奈良～平安
51	淡路国分寺址	奈良
52	淡路国分尼寺址	奈良
53	山惣廃寺	奈良
54	国衙廃寺	奈良
55	護国寺	奈良
56	大榎列遺跡	奈良
57	宮の内遺跡	奈良
58	松田下遺跡	奈良
59	大榎列下遺跡	奈良
60	畑田遺跡	奈良
61	馬乗捨川遺跡	奈良
62	国分遺跡	奈良
63	入田稲荷前遺跡	奈良
64	汁谷窯址	奈良
65	原田遺跡	平安
66	殿の下遺跡	平安
67	婦毛遺跡	平安
68	西路庚申遺跡	平安
69	門の上遺跡	平安
70	南平遺跡	平安
71	戒壇寺跡	平安
72	赤金遺跡	平安
73	佐礼尾窯址	平安
74	南辺寺址	弥生・平安
75	志知城址	室町
76	養宣館址	鎌倉～室町
77	佐保谷窯址	奈良
78	加地館址	室町
79	湊城址	室町
80	叶堂城址	室町～江戸
81	ハバ古墳	古墳後

古墳時代前期の水田址が発見され、5世紀末の須恵器も出土している。また三原町志知松本遺跡でも5世紀末の須恵器が出土している。[註19]

須恵器生産は三原町汁谷窯址が7世紀前半から操業していることが確認されている。[註20]

律令期、淡路島は「淡路」一国とされ、三原平野は「三原郡」に編入される。国府は三原郡に置かれたとされているが、現在その位置は確定されていない。ただ三原町と南淡町に4ヵ所の推定地が揚げられており、その内、三原町市市・十一ヵ所・三条にまたがる推定地が比較的有力と言われている。[註21] この国府推定地の東、三原川の対岸の三原町八木国分には淡路国分寺が存在し、国分尼寺は国分寺の北方に比定されている。国分寺はこれまでの調査で、寺域の北・東限、金堂、塔址が確認されている。[註22]

三原郡の郡衙は南淡町賀集付近に推定されている。また三原郡には「神稲・榎列・倭文・幡多・養宜・阿万・賀集」の7郷が置かれ、7郷は全て現在残されている地名等から三原平野に比定されており、本遺跡の所在地は「神稲」郷に比定されている。「和名抄」によれば耕地面積は2650町9段160歩とされており、昭和4年の10,985町に比較すると、約29%となっている。和名抄には各郡の田地面積は記されていないが、鎌倉時代の太田文では三原平野に位置していたと思われる荘園・郷・保で、淡路全体の約38%となっている。これを基に単純に計算すれば和名抄成立以前の三原平野は耕地面積約1,007町となる。

条里型地割りは①南淡町賀集付近から三原町志知難波にかけての地域、②三原町志知佐礼尾付近から西淡町志知付近にかけての地域、③三原町榎列松田付近から緑町倭文委文にかけての地域で明確に残り、他に直線的な地割りが三原町八木・榎列小榎列付近に残っている。明確に条里型地割りを残す3地域は地形分類では谷底平野と後背湿地にあたっている。また3地域の内、南淡町賀集付近の条里型地割りはほぼ南北方向を採り、他の2地域は北東－南西方向を採っている。これは条里型地割りの成立時期が異なるとも考えられるが、賀集付近の谷底平野が南北に長く、他の2地域が利用した三角洲Ⅰ[註23]は北東－南西方向に長く広がるという、地理的な条件に起因するものとも考えられる。

この時期の遺跡は先の淡路国府・国分寺・国分尼寺の他、寺院址としては三原町山惣廃寺、国衙廃寺が知られているが、礎石等は確認されておらず、官衙的な遺跡の可能性も残されている。集落遺跡としては西淡町鈩田遺跡・雨流遺跡が挙げられる。鈩田遺跡は7世紀後半から9世紀前半にかけての遺跡で、建物址が検出されている。出土遺物に中空把手付円面硯・緑釉陶器等が見られることから、官衙的な性格を持つ遺跡と考えられている。また製塩土器が多量に出土しているが、地理的に塩の生産遺跡とは考え難い。[註4] 雨流遺跡は8世紀後半から9世紀前半にかけての遺跡で、井戸・建物址等が検出されている。この遺跡でも製塩土器が出土している。

三原平野周辺での製塩は弥生時代後期の西淡町伊毘遺跡から始まり、律令期以降、淡路の調品目に塩があり、平城京からも三原郡阿万郷戸主が調として塩を貢納した木簡が出土している。[註24]

したがって奈良時代以降も三原平野周辺の地域で、製塩が行われていたことは確実と考えられる。しかし現在、製塩方法の変化か地理的条件の変化によるためか、この時期以降の製塩遺跡は知られていない。

須恵器生産は三原平野南部の丘陵裾に、三原南部窯址群が知られ、この内三原町汁谷窯址は古く7世紀後半から操業し、佐保谷窯址・戸川池窯址は8世紀後半に操業している。[註25]

奈良時代から平安時代にかけて淡路に淳仁天皇・早良親王・不破内親王等が配流され、淡路は皇族配流の島となる。島内にはそうした皇族の陵墓という伝説も残るが、[註26]確定はされていない。また939年、藤原純友が反乱を起こし、翌年淡路の国府は急襲を受け、武器等を略奪されるという事態が起こっている。

平安時代末には淡路国に対し荘園の整理が命ぜられていることから、[註27]それ以前に荘園が成立していたようであるが、三原平野では古代に成立したことが確実な荘園ははっきりしていない。

鎌倉時代、淡路は佐々木経高を初めとする佐々木氏が守護となるが、承久の乱後、長沼氏が守護と国司を兼ね、淡路を支配する。

この時期、「太田文」[註28]の記載では、三原平野は荘園・郷・保・村が乱立した状態となるが、郷として存続するのは「西神代郷」だけとなる。西神代郷には「志知」が含まれており、現在の地名から言えば、本遺跡はこの「西神代郷」に含まれていたと思われる。また「志知」には、太田文に花押した「右馬允藤原朝臣」の広大な屋敷があったとされている。[註29]

また「太田文」によれば、淡路の田地面積は1449町3段60歩とされ、その内三原郡は国衙領238町20歩、荘園397町とされている。淡路全体では先の和名抄が2650町余りであったのに対し、田地面積は約1200町歩減少している。しかしこれは単に水田面積が減少したのではなく、太田文には荘園の面積記載に問題があるためと思われる。太田文に記された荘園の内、三原平野に位置したと思われるものは、「賀集荘」・「阿万荘」・「国分寺荘」・「掃守荘」・「慶野荘」等であり、三原平野全体の約63%に上っている。

平安時代末から鎌倉時代にかけての遺跡としては、西淡町鈩田遺跡がある。鈩田遺跡も本遺跡と同様、現在の行政区画では西淡町志知に入り、地名からいえば、太田文に見える「西神代郷」に属していたと思われる。この遺跡では溝内から瓦器椀・土師器椀・白磁等が多量に出土しているが、須恵器椀が見られないという、特異な器種構成を示しており、注目される。[註5]

また本遺跡すぐ南側の丘陵地帯では、三原町佐礼尾窯址が平安時代末に操業を開始し、須恵器の皿類とともに、瓦類も生産している。[註30]

室町時代、南北朝の内乱期を過ぎてからは細川氏が守護となるが、戦国時代には阿波の三好氏が淡路を攻め、淡路をその支配下に治めている。また安宅氏・野口氏等の、淡路十人衆と呼ばれる国人の台頭が目立つようになる。

この時期の遺跡は、本遺跡以外では確認されていないが、三原平野と平野を取り囲む丘陵に

は城館が残されている。代表的なものに、三原町養宜館址・上田土居・志知城、西淡町湊城・叶堂城、緑町船越館址等がある。養宜館址は守護細川氏の館址と伝えられ、東西約120m・南北約250mの規模で、現在も北・東側に土塁が残り、東限には濠跡が残る。[註31] 志知城は本遺跡の東方約750mの大日川沿いに位置し、大日川を利用した縄張りをしている。淡路国人の一人野口氏の居館址といわれ、豊臣氏による淡路攻めで開城し、加藤嘉明が配されている。[註32] 現在は東を除く三方に濠が残り、その中央に東西・南北とも約72mの規模の不整形な方形の本丸台地が残されている。叶堂城はこの志知城の石垣を移して築城されたと言う伝説が残り、志知城に代わる水軍基地として豊臣氏によって築城が開始されたが、築城途中関ヶ原の戦いが起こり、西軍が敗れたため、この城も廃城されたといわれている。[註33] 現在は三原川の改修のため壊されたが、それに伴って実施された調査では穴太積みの石垣・堀等が確認されている。[註34]

江戸時代、淡路は当初池田氏の所領となるが、大坂冬の陣後、阿波蜂須賀氏の所領となる。蜂須賀氏は最初洲本市由良に本拠を置くが、後に洲本市洲本城に本拠を移す。そして家老の稲田氏を派遣して淡路を治めた。

註1　神戸新聞1986年7月16日掲載記事

註2　浦上雅史「安住寺遺跡」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員会　1982年

註3　岡本　稔「三原郡のあけぼの」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年

註4　岡本　稔「埋蔵文化財と遺跡」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年

註5　吉識雅仁「鈩田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報－昭和58年度－』兵庫県教育委員会　1986年

註6　岡本　稔「淡路の弥生時代の考察－洲本川流域を中心として－」『淡路考古学研究会誌』
淡路考古学研究会　1974年

註7　松下　勝他『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会　1987年

註8　1985年～1988年まで兵庫県教育委員会が調査。調査担当の長谷川眞氏の教示による。

註9　岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』17　1984年

註10　種定淳介『兵庫の銅鐸』兵庫県立歴史博物館　1987年

註11　高井悌三郎・三木文雄「三原郡緑町倭文字庄田笹尾出土銅鐸」『桜ケ丘銅鐸銅戈』
兵庫県教育委員会　1969年

註12　三木文雄「三原郡西淡町笥飯野字古津路出土銅剣」『桜ケ丘銅鐸銅戈』兵庫県教育委員会　1969年

註13　直良信夫「淡路松帆及同福良の遺跡－金石併用時代文化研究資料－」
『考古学雑誌』第二十巻第一号　考古学会　1930年

註14　兵庫県教育委員会『特別地域埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表　第1分冊』
兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表　第7集』1971年

註15　岡本　稔「埋蔵文化財と遺跡」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年

註16　岡本　稔「ハバ古墳について」『竹ベラ』第6号淡路考古学研究会　1986年

註17　兵庫県教育委員会『特別地域埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表　第1分冊』

註18　兵庫県教育委員会『特別地域埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表　第1分冊』
岡本　稔「埋蔵文化財と遺跡」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年

註19　波毛康宏氏の教示を得た。

註20　浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌　第3号』淡路考古学研究会　1980年

註21　直木孝次郎「律令制の社会」『兵庫県史　第1巻』兵庫県史編集専門委員会　1974年
菊川兼男「律令制の時代」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年

註22　高井悌三郎・森郁夫他『淡路国分寺－発掘調査概報－』三原町教育委員会　1985年

註23　高橋　学「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発－地形環境分析による－」
『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会　1987年

註24　『平城京木簡二』奈良国立文化財研究所　1974年

註25　浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌　第3号』淡路考古学研究会　1980年

註26　例えば南淡町賀集中村の天王の森は淳仁天皇の陵墓参考地とされ、馬目山を淳仁天皇の母当麻夫人の古墓という伝説等が残る。

註27　大山喬平「武士と荘園」『兵庫県史　第1巻』兵庫県史編集専門委員会　1974年

註28　竹内理三編『鎌倉遺文』東京堂出版　1981年

註29　「太田文」では右馬允藤原朝臣の屋敷があるが、志知庄と言う荘園は無いとされており、在地官人であると思われる右馬允藤原朝臣が志知を荘園化していた可能性があり、国衙領である「西神代郷」も実体は荘園に近いものであったものと思われる。

註30　浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌　第3号』淡路考古学研究会　1980年

註31　菊川兼男「記念物」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年
今井林太郎他『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会　1982年

註32　菊川兼男「記念物」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年
今井林太郎他『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会　1982年

註33　菊川兼男「記念物」『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年
今井林太郎他『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会　1982年

註34　水口富夫「叶堂城」『兵庫県埋蔵文化財調査年報－昭和58年度－』兵庫県教育委員会　1986年

第２章　遺　　跡

第１節　調査区の概要

遺跡は三原平野の西方を縁取る丘陵地帯に、東西に細長く入り込んだ谷口に位置し、大日川の支流である新川が、平野部に流れ込むのを塞ぐように、山麓から沖積地に向かって東西に張り出した台地上と、台地前面に広がる沖積地に位置している。

調査区は西方の山麓から張り出してくる台地の末端から沖積低地にかけて位置し、調査区全体は調査前は水田となっていた。また調査区は全体としては南西から北東方向に傾斜するが、調査区中央西端は台地の末端にあたり、沖積低地より一段高くなっている。調査区の標高は最も高い水田面で約7.2m、最も低い水田面で約5.2mを測り、標高差は約２mを測る。

今回の調査で出土した遺物には縄文後期、弥生時代前・中・後期、古墳時代から平安時代前半、平安時代末から室町時代のものが見られるが、遺構には縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代前期～後期、奈良時代、平安時代末以降のものが見られる。土層の堆積が複雑で、遺構面は一定した土層とはなっていない。さらに地形が台地末端と沖積低地にまたがる上、台地と沖積低地との境付近に古墳時代後期（５世紀末）以前の旧河道があり、台地上と沖積低地との土層関係はより判り難い状況となっていた。

縄文時代の遺構面は、台地上にあたる地区では、弥生時代後期・古墳時代前期の遺構面と同じ、黄灰褐色シルト上であったが、縄文時代の遺物包含層が調査区西壁の８～11ライン（第35～37層）、５・８ライン（８ライン一第38層）で確認されている。Ｆ～Ｊ－５～８・Ｅ－９区では、浅い谷状の地形内に溜まった状態で、遺物が出土している。また遺物は認められなかったが、13ラインの第57層がこれら縄文時代の遺物包含層にあたるものと思われる。この第57層は旧河道西側で、台地上に向かって急激に登っており、縄文時代には台地末端は高さ約1.5m前後の崖状となっていたものと思われる。ただ13ラインより北の地域では縄文時代の包含層にあたる層は明確にできなかった。

弥生時代の遺構は台地上と台地縁辺の斜面部でも検出されている。台地上にあたる地区では縄文時代の遺構面と同じ黄灰褐色シルト上となっている。台地縁辺にあたる地区の内、縄文土器包含層が認められた台地南側の地区では、この包含層上面が弥生時代の遺構面にあたる。また沖積低地にあたる地区では、遺構は認められなかったものの、５・13トレンチでは縄文土器包含層の上の層（８ライン一第32～35層・13ライン一第53・54層）まで、弥生土器の包含が認められており、沖積低地にあたる地区でも、南半は縄文土器包含層上が弥生時代の生活面にあたるものと思われる。

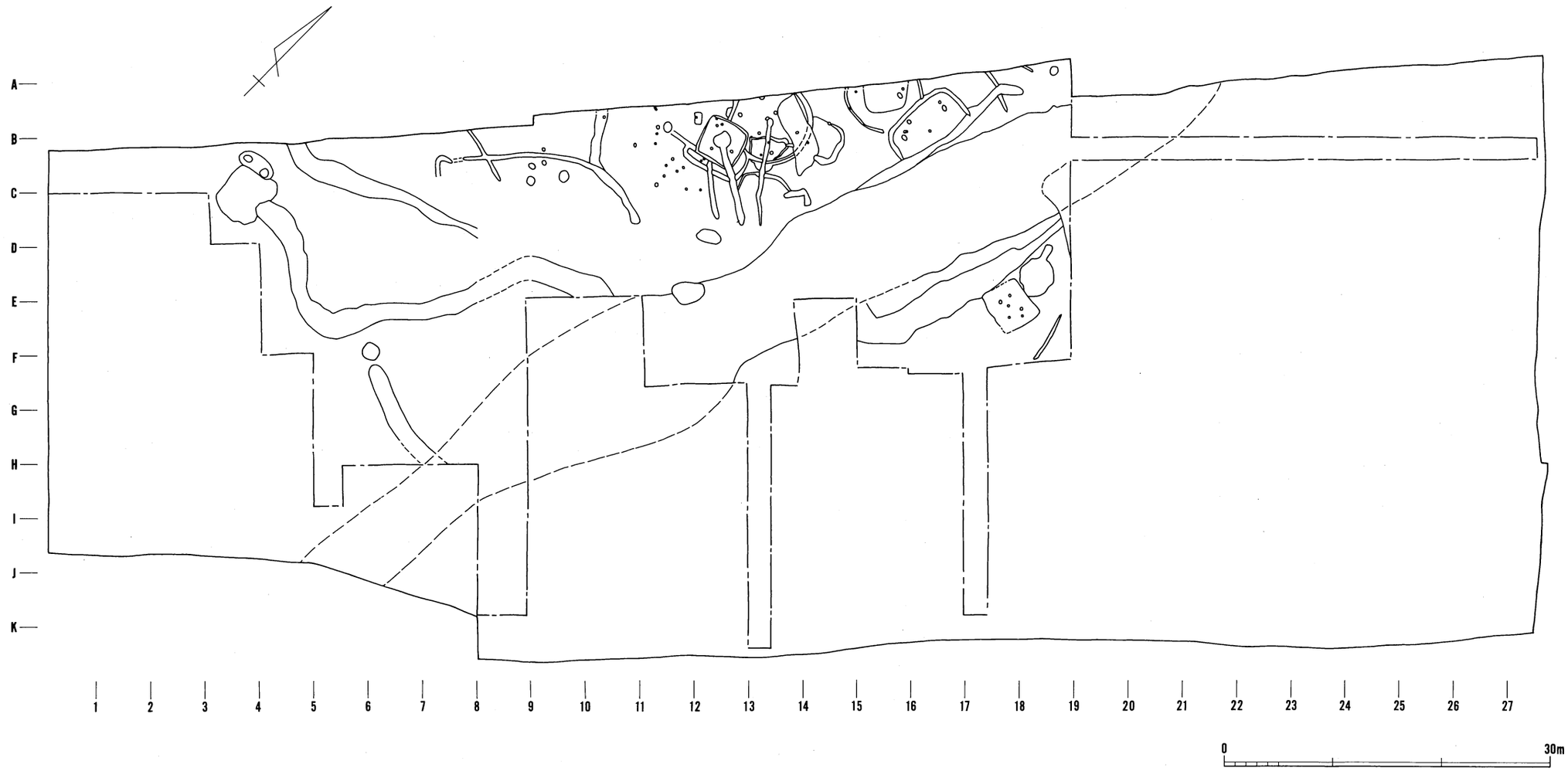
弥生土器は遺跡全体から出土しているが、台地南斜面にあたるA～D－8～11の地区で最も多く出土している。包含層は暗灰色粘質シルトであるが、台地肩部ほど堆積が厚く、斜面下方ほど薄くなっている。土器は破片が多かったが、溝42の両肩付近と溝42の東延長上付近では比較的まとまった状態で出土している。したがって当初は溝42は溝43と合流せず東に伸びると思われたが、溝は伸びず、土器は包含層に含まれているものであった。弥生土器包含層の上は古式土師器の包含層であり、両包含層の区別が非常に難しかったことから、遺物の取り上げに際しては、大きく2層に分けて行った。しかし台地肩部に当たる地区では土層の傾斜もあり、土器が混じった可能性もある。また古墳時代前期の遺物包含層との区別が土層的には難しかったことや、取り上げ方法が悪かったためか、遺物には年代幅が認められる。

台地南側の斜面にあたる地区以外では土器量は少なく、特に沖積低地に設定したトレンチでは極めて少なくなっている。

古墳時代前期の遺構は台地上の地区で竪穴住居址等が検出されているが、検出面は縄文・弥生時代の遺構と同じ、黄灰褐色シルト上面である。ただ一部弥生時代の遺構を切った状態で検出されている。台地南側の斜面には土壙等が弥生土器包含層上から掘り込まれ、また掘り込みは検出されなかったが、C－7区では8ラインの第28層にあたる土層上に置かれた状態で、土器が出土している。この時期の遺物包含層は5ラインでは第27層、8ラインでは第26層の黒灰褐色極細砂混じりシルトであり、両ラインの土層断面で見る限りでは、台地と沖積低地との境には浅い谷状地形ができていたものと思われる。また古墳時代前期の遺物は台地南側斜面の弥生土器包含層の上層、黒灰色シルト・暗灰色シルトからも多量に出土している。さらに旧河道東側の溝40からも、この時期の遺物を出土している。したがって沖積低地の内、8ライン付近では第27・28層上面、13ライン付近では第42・44・45・46・62層上面が、古墳時代前期の生活面にあたるものと思われる。ただ北半では遺物量も少なく、B－20～26トレンチでは土層堆積も薄いことから、この時期の生活面は特定できなかった。

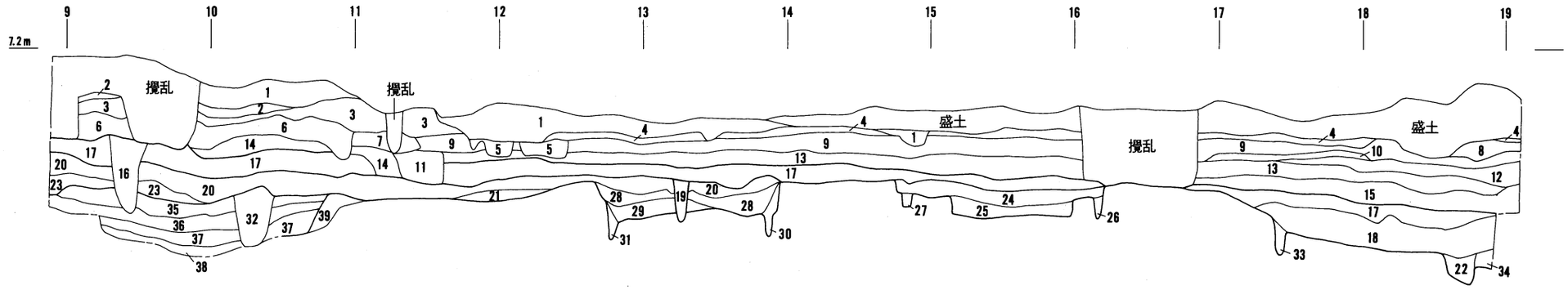
古墳時代前期の土器包含層は基本的には黒灰色シルトであり、8ラインでは途中旧河道に切られているが、ほぼ調査区の西端から東端まで認められている。しかし5ラインでは調査区の西端に限って見られ、13ラインでは溝40内から同時期の遺物が出土するだけで、明瞭な包含層は認められていない。したがってこの時期の包含層（黒灰色シルト）は、台地南側の谷部にだけ堆積したものと思われる。こうした包含層の堆積状況であるが、同じ包含層でも遺物の出土量は異なり、A～D－7～9区付近から最も多く土器が出土している。

古墳時代後期の遺構は旧河道東側で検出された竪穴住居址だけであるが、遺物は旧河道・溝41上層・包含層等から出土している。竪穴住居址は13ラインの第46層にあたる層の上面から掘り込まれ、遺構面は東に傾斜していたようである。また溝41は8ラインの第26層上面から掘り込まれ、第26層は古墳時代前期の遺物包含層であることから、この時期の遺構面は第26層上面

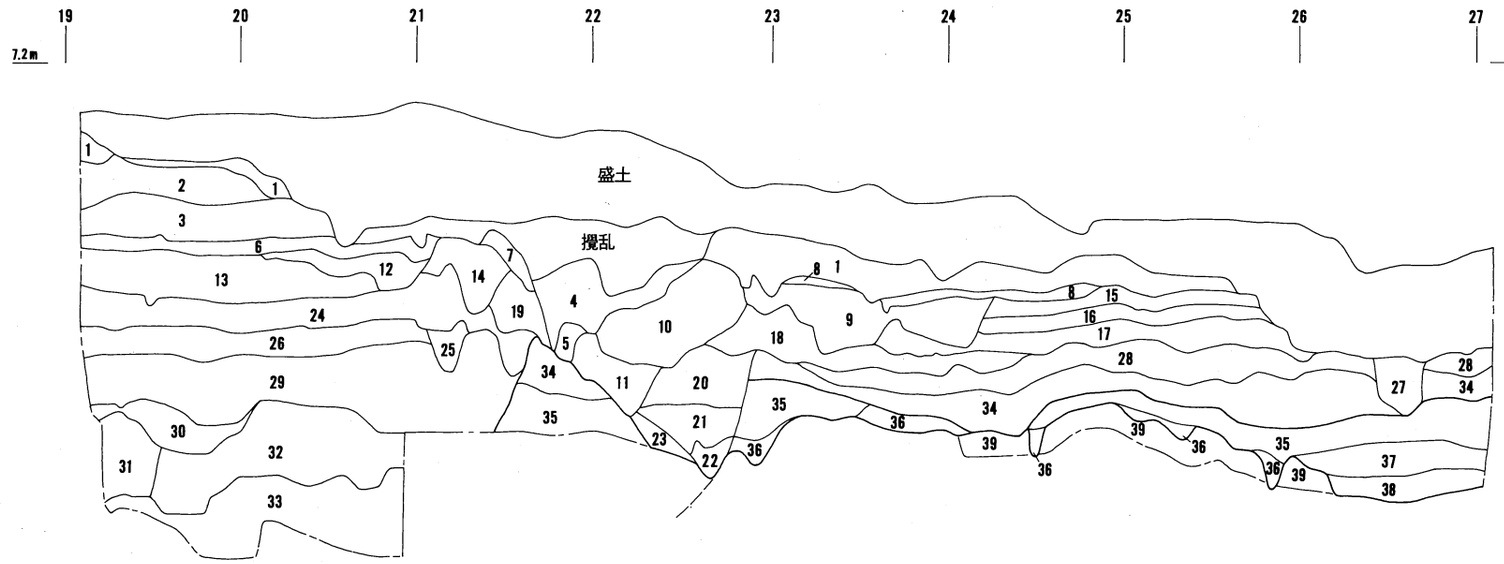


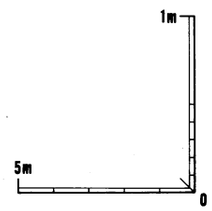
第４図　奈良時代以前の遺構全体図

西壁（1）



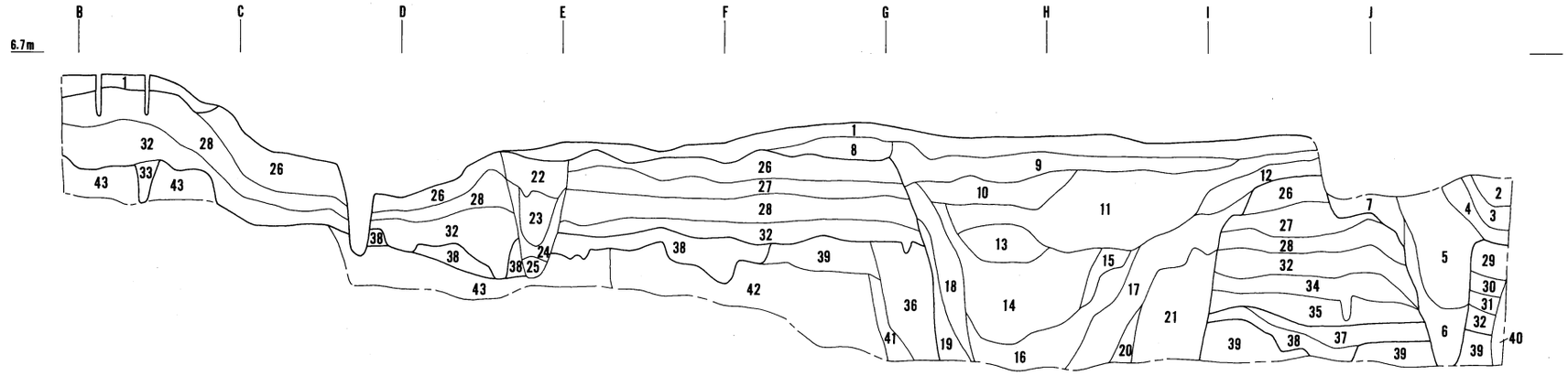
西壁（2）



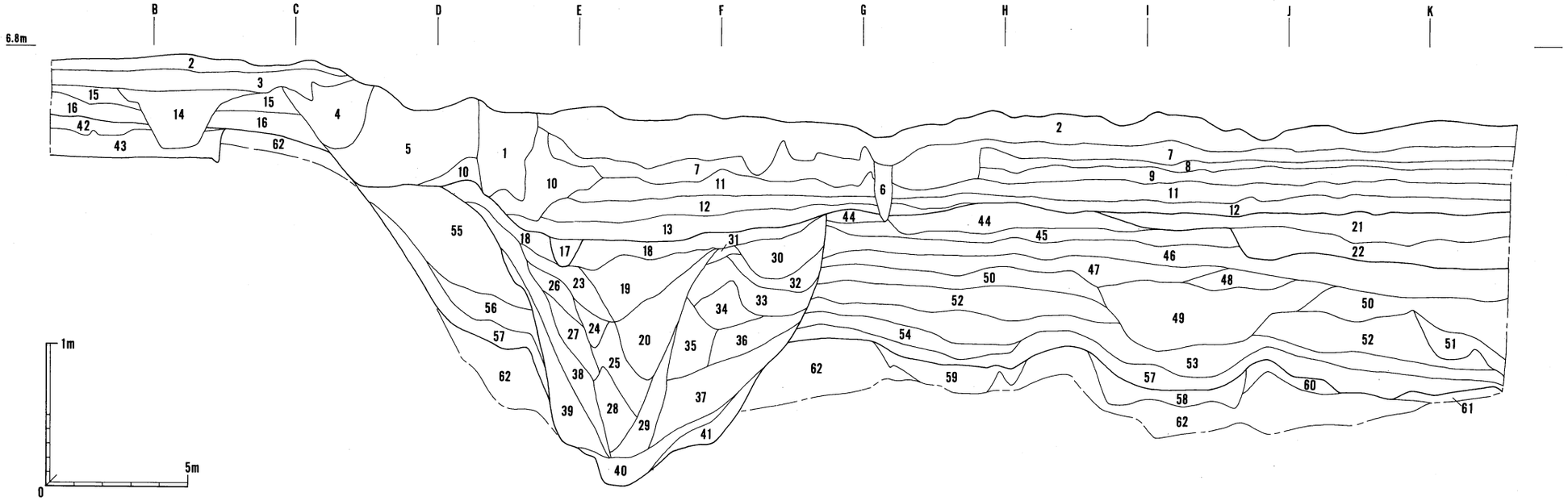


第5図　西壁土層

8ライン



13ライン



第6図　8・13ライン土層

表2　調査区西壁（1）土層名

土層No.	土　層　名
1	耕土
2	黄褐色極細砂
3	黄灰褐色極細砂
4	黄灰褐色極細砂
5	灰褐色砂礫
6	灰褐色シルト（礫混じり）
7	黄灰褐色シルト
8	黄灰褐色シルト
9	黄灰褐色シルト
10	黄灰褐色シルト
11	灰褐色砂礫
12	黄灰褐色シルト
13	黄灰褐色シルト
14	灰褐色シルト
15	淡黄灰褐色シルト
16	灰茶褐シルト（礫多量に混じる）
17	黒褐色砂質シルト
18	灰茶褐色シルト（2～3㎝の礫含む）
19	黒褐色シルト
20	黒褐色砂質シルト
21	暗灰褐色シルト（礫混じり）
22	灰褐色極細砂混じりシルト
23	暗灰褐色砂質シルト
24	灰褐色礫混じりシルト
25	灰褐色礫混じりシルト
26	暗灰色極細砂混じりシルト
27	暗灰褐色礫混じりシルト
28	暗灰褐色礫混じりシルト
29	暗灰褐色礫混じりシルト
30	茶褐色礫混じりシルト
31	灰褐色シルト
32	暗茶褐色シルト混じり極細砂
33	灰褐色シルト
34	灰褐色シルト
35	暗灰褐色砂質シルト
36	暗灰褐色砂質シルト
37	黒褐色細砂混じりシルト
38	暗灰褐色中砂混じりシルト
39	暗灰褐色シルト混じり極細砂

表3　調査区西壁（2）土層名

土層No.	土　層　名
1	耕土
2	黄灰褐色極細砂
3	黄灰褐色シルト
4	灰褐色砂混じりシルト
5	暗黄色礫混じり細砂
6	灰褐色シルト
7	濁灰色細砂
8	黄灰褐色シルト
9	黄灰褐色細砂混じりシルト
10	黄灰褐色極細砂
11	青灰色極細砂
12	黄色中砂
13	黄灰褐色シルト（3層に分層可能）
14	灰褐色細砂
15	黄灰褐色シルト
16	淡黄灰褐色シルト
17	淡黄灰褐色シルト
18	暗灰褐色極細砂混じりシルト
19	灰白色礫混じりシルト
20	黄灰褐色シルト混じりシルト
21	濁灰褐色細砂
22	黒灰色粘質シルト
23	青灰色シルト混じり中砂
24	灰白褐色シルト
25	暗青灰極細砂
26	赤灰褐色シルト混じり細砂
27	灰茶褐色礫混じりシルト
28	灰褐色極細砂混じりシルト
29	赤灰褐色細砂混じりシルト
30	灰褐色シルト
31	灰褐色砂礫
32	暗灰褐色シルト混じり極細砂
33	青灰色シルト
34	暗灰褐色極細砂混じりシルト
35	暗灰褐色極細砂混じりシルト
36	黒褐色極細砂混じりシルト
37	暗灰褐色シルト
38	暗灰褐色細砂混じりシルト
39	黄灰褐色シルト

表4　8ライン土層名

土層No.	土　層　名	土層No.	土　層　名
1	淡黄灰褐色極粗砂混じりシルト	23	暗灰褐色細砂混じりシルト
2	暗灰褐色細砂混じりシルト	24	濃灰色細砂混じりシルト
3	暗灰褐色細砂混じりシルト（風化礫含む）	25	濃灰色砂礫
4	黄灰褐色細砂混じりシルト	26	黒灰褐色極細砂混じりシルト（土師器多）
5	灰色砂礫（1～5㎝大の礫）	27	黄灰褐色細砂混じりシルト
6	灰色砂礫（2～5㎝大の礫）	28	濃灰褐色細砂混じりシルト
7	灰褐色細砂	29	濃灰褐色細砂混じりシルト（第28層に対応）
8	灰褐色細砂	30	灰褐色細砂混じりシルト
9	黄灰シルト混じり細砂（第8層と同一？）	31	淡灰褐色細砂混じりシルト
10	黄灰色細砂（第8・9層と同一？）	32	濃灰茶褐色細砂混じりシルト
11	灰褐色細砂混じりシルト	33	黒褐色シルト（溝45埋土）
12	濃灰褐色細砂混じりシルト	34	黄褐色細砂混じりシルト
13	黄灰褐色砂礫	35	淡黄灰褐色細砂混じりシルト
14	灰褐色砂礫	36	灰褐色細砂混じりシルト
15	灰褐色中砂混じり細砂	37	淡灰褐色細砂混じりシルト
16	灰褐色砂礫	38	黒褐色細砂混じりシルト（縄文土器包含層）
17	濃灰褐色細砂	39	黄灰褐色細砂混じりシルト
18	濃灰褐色細砂混じりシルト（礫含む）	40	灰褐色砂礫（シルト混じり）
19	青灰色極細砂	41	灰褐色礫混じり細砂
20	青灰褐色細砂	42	灰褐色砂礫（5～10㎝大までの礫）
21	灰褐色シルト混じり細砂	43	淡黄灰褐色細砂混じりシルト
22	暗灰茶褐色細砂混じりシルト		

表5　13ライン土層名

土層No.	土　層　名	土層No.	土　層　名
1	青灰褐色シルト（旧水路）	33	灰白色細砂（灰色シルトと互層となる）
2	耕土	34	灰茶褐色極細砂
3	黄灰褐色シルト	35	灰褐色極細砂
4	青灰褐色シルト（旧水路）	36	灰褐色極細砂
5	青灰褐色シルト（旧水路）	37	黄灰褐色極細砂
6	灰褐色シルト（撹乱）	38	黒灰褐色極細砂混じりシルト
7	黄灰褐色シルト	39	暗灰色シルト混じり極細砂
8	黄灰褐色シルト	40	黄灰褐色砂礫（2～3cm大の円礫）
9	黄灰褐色シルト	41	青灰色粗砂混じり中砂
10	青灰色砂礫（旧水路埋土）	42	黒褐色砂質シルト
11	黄灰褐色シルト	43	暗灰褐色礫混じりシルト（住居址4埋土）
12	黄灰褐色シルト	44	黄灰褐色極細砂混じりシルト
13	黄灰褐色極細砂	45	暗褐色シルト
14	淡灰褐色極細砂混じりシルト	46	暗黄褐色シルト
15	灰褐色極細砂混じりシルト	47	黄褐色砂質シルト（極細砂含む）
16	暗灰褐極細砂混じりシルト	48	灰褐色シルト（細砂含む）
17	淡灰褐色極細砂	49	暗灰褐色シルト
18	灰褐色シルト混じり極細砂	50	暗黄褐色シルト（細砂含む）
19	黄色砂礫	51	暗灰褐色シルト
20	黄灰色砂礫	52	黄褐色砂質シルト
21	黒灰褐色シルト	53	黄灰褐色粘質シルト
22	黒灰褐色シルト	54	黄褐色粘質シルト
23	灰色極細砂	55	灰褐色砂礫
24	暗灰褐色礫混じり細砂	56	黄灰褐色粘質シルト
25	灰色砂礫	57	黒灰褐色シルト（縄文土器包含層に対応？）
26	灰色極細砂	58	暗灰褐色粘質シルト
27	黒灰色礫・極細砂混じりシルト	59	暗灰褐色シルト（1cm大の礫含む）
28	灰色砂礫（3～10cm大の礫）	60	黄褐色粘質シルト
29	灰色砂礫（5cm大の礫）	61	黄褐色粘質シルト（第60層と同一）
30	黄褐色砂礫（2～3cm大の礫）	62	黄褐色シルト（細砂を多く含む）
31	淡黄灰褐色極細砂	63	灰褐色砂礫（5cm大の円礫）
32	灰白褐色極細砂		

であったものと思われる。また底から古墳時代後期（５世紀末～６世紀初頭）の遺物を出土した旧河道も同じ面を削り込んでいる。遺物は出土量が少なく、一部17ライン付近で、この時期の包含層が確認されているだけで、明確な包含層は認め難い。

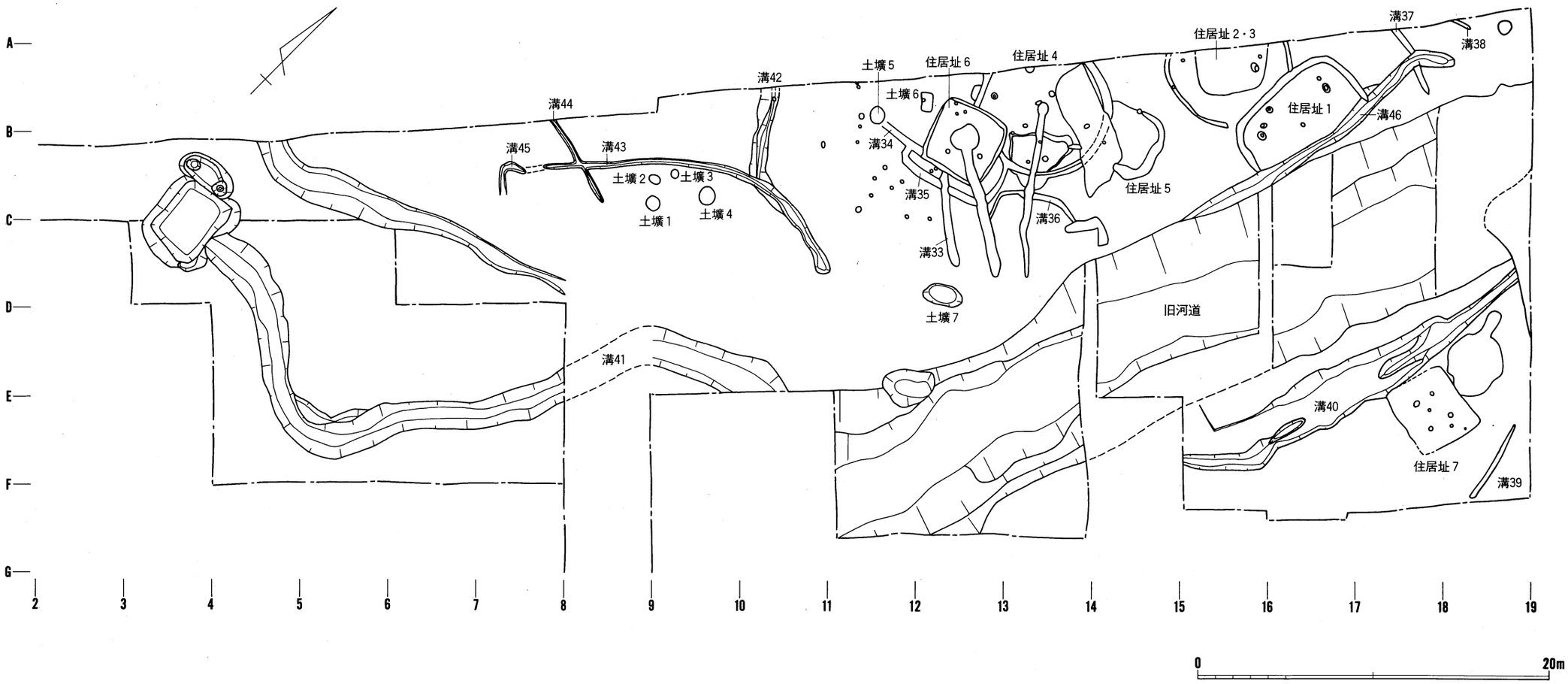
飛鳥～平安時代前半の遺構は、台地上にあたる地区では、黒褐色砂質シルト（西壁第20層）上で柱穴が検出されただけである。沖積低地にあたるＦ－５区では８ラインの第26層にあたる土層の上面から井戸と溝が検出されている。したがって台地上の地区と５ライン付近では、この時期の遺構面は古墳時代後期の遺構面とほぼ同様であったものと思われる。ただ13ライン以北の地区ではこの時期の包含層、遺構等が検出されず、遺構面の特定はできなかった。ただ平安時代末以降の遺構埋土から、この時期の遺物が出土している。また旧河道からもこの時期の遺物が出土しているが、旧河道の切り込み面は平安時代末以降の遺構面と同じ面である。したがって調査区の北半では、平安時代末以降の遺構面と同じ面であった可能性が高い。

平安時代前半までの遺構が台地上とその周辺に限られるのに対し、平安時代末以降の遺構は、時期的には幅が認められるが、ほぼ調査区全域に展開している。しかし遺構の分布は大きくＢ～Ｆ－３～５、Ｅ・Ｆ－８・９の地区（南地区）、Ｈ～Ｌ－９～13の地区（東地区）、19ライン以北の地区（北地区）の３群となっており、その間の地区はほとんど空白域となっている。僅かに台地上にあたる地区で、性格不明の土壙が西壁（１）の第17層（黒褐色砂質シルト）上から検出されている程度である。南地区は遺構も稀薄であるが、北地区は比較的濃く遺構が認められた。ただこれらの地区は沖積低地にあたる地区であるため、遺構面は一定した土層とはなっていないが、遺構の検出面は南西から北東方向に傾斜している。南地区の遺構面は淡黄灰褐色シルト（８ライン第１層）、東地区では黒灰褐色シルト・黄灰褐色シルト（13ライン第12層）であった。北地区では黄灰褐色シルト・暗灰褐色シルト・淡黄灰褐色シルト等となっている。

北地区で検出された遺構の内、遺構群を区画する溝23・24は現在の溝の下層となっている。こうしたことから室町時代以前に、現在見られるような区画ができあがった可能性が高い。

この時期の包含層は東・南地区では確認できず、北地区中央付近だけで、炭化物を含む暗灰褐色シルト層が確認されている。

このように途中断絶があるものの、縄文時代後期、弥生時代から室町時代後半に至る遺構が検出され、遺跡地は非常に長期に渡って居住域として利用されていたことが判明した。江戸時代以降は居住を示す遺構は検出されず、居住域としては利用されなくなり、水田化したことが窺える。さらに室町時代の建物址を取り囲む溝は現代まで継続して、農業用水路として利用されており、室町時代の集落廃絶後の遺跡地における水田開発は、集落存続時の土地割りを受け継いで行われたものと類推される。



第7図　台地上の遺構全体図

第 2 節　遺　　構

1．縄文時代の遺構

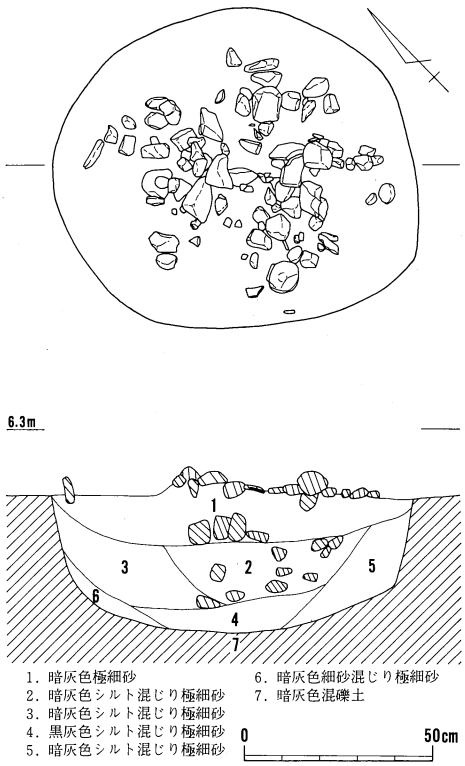
今回の調査では縄文時代後期・弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代末・室町時代の遺構が検出されたが、遺構が多いのは古墳時代前期と室町時代である。縄文時代の遺構は円形土壙１基だけである。

土壙 5（第８図、図版第四上・下）

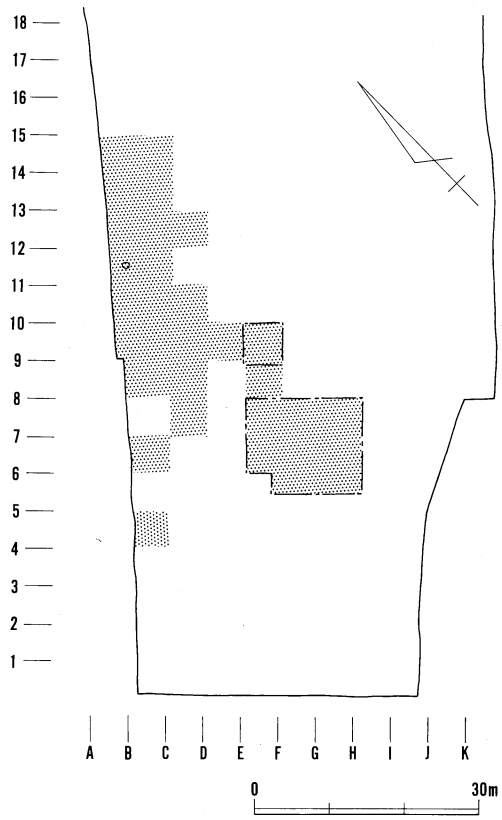
台地上の南寄りの地区で検出された、長径約95cm・短径約85cm・深さ約40cmの、円形に近い楕円形の平面プランを持つ土壙である。内部には暗灰色・黒灰色極細砂が堆積し、河原石が含まれていた。この河原石の間から縄文土器が出土しており、時期的には縄文時代後期の遺構と思われる。

縄文土器出土状態（第９図、図版第五下・第六上・下）

台地上の南端から台地南側の谷底部にかけて縄文土器が出土している。その内明らかに縄文土器を包含する層が認められたのは、①A－９・10～C－９・10にかけての地域と、②E～H



第８図　土壙５



第９図　縄文土器出土範囲

－５～８、Ｅ－９の地区である。①の地区は台地南側の斜面にあたり、そこに包含層が認められたが、遺物量はＡ－９・10区で多くなっている。しかし②に比べると遺物量は少ない。

②の地区は台地南側の谷口付近にあたり、谷底部の浅い窪みに堆積した包含層から縄文土器が出土している。この地区では比較的まとまった状態で出土しているが、包含層には礫が混じり、台地上あるいは谷上流からの流れ込みと思われる。

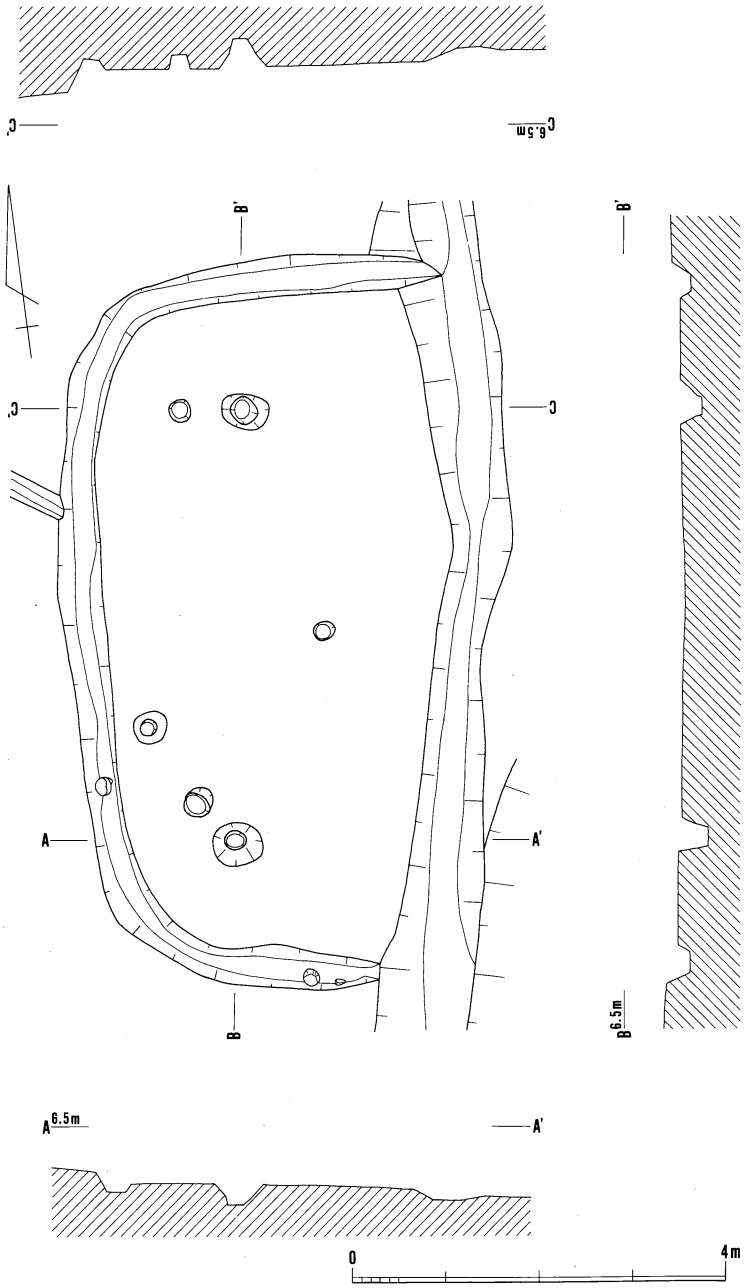
２．弥生時代～古墳時代前期の遺構（第７図）

台地上にあたる地区と台地南側斜面部から検出された、竪穴住居址６基と土壙５基、溝３条がある。他に溝37・38の２本がこの時期になる可能性がある。また台地南側谷部では包含層内に土器の集中した箇所があり、これも遺構として扱った。

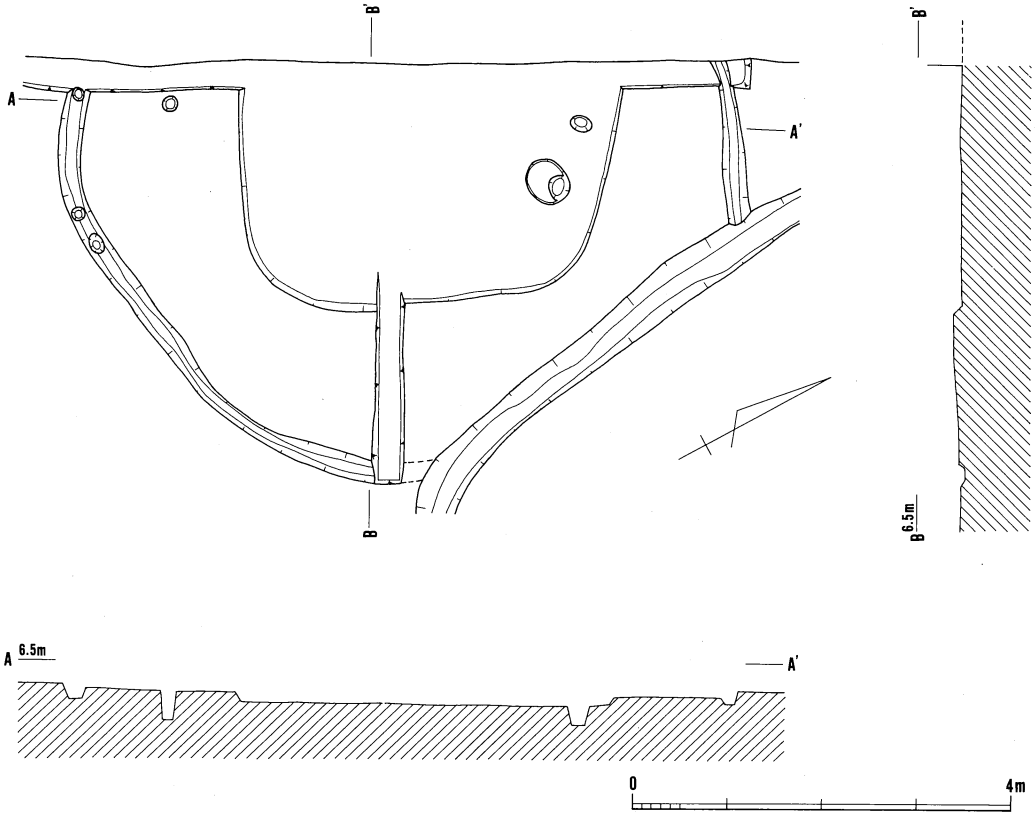
住居址１（第10図、図版第八下）

住居址２を切って検出された住居址で、東半は古墳時代後期の旧河道と平安時代末の溝46に切られて検出できず、西半の約1/2が「コ」の字状に検出された。

住居址の規模は南北約7.8m、東西は約4.2m以



第10図　住居址１



第11図　住居址２・３

上を測り、検出された部分のコーナーは丸くなっていることから、全体の平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。壁は最高約27cmの高さまで確認でき、壁下には巾約30～35cm、深さ約13cm前後の壁溝が巡らされていた。

床面上からは柱穴が６本検出されたが、主柱穴は位置・規模からみて２本と思われる。２本の柱穴はともに、平面形は長径約50cm・短径約40cm前後の楕円形を呈し、深さは南側の柱穴が約32cm、北側の柱穴が約28cmとなっていた。また南側の柱穴からは径約20cm、北側の柱穴からは径約28cmの柱痕跡が確認されている。

床面上から出土した遺物は無く、壁際に落ち込んだ状態で出土している。(137) の鉢は南壁際の壁溝上で、床面からは約６cm浮いた状態で出土しており、(138) の壷体部は西壁際の壁溝上で、床面から約８cmほど浮いて出土している。ともに庄内式併行期のものと思われる。

住居址２・３（第11図、図版第九上）

台地上の北端近くのA－14～16区で、古墳時代前期の住居址１に切られて検出された住居址である。西半は調査区域外となっているため、検出できなかった。したがって住居址の全容は

把握できていない。

住居址３は南北約7.3m、東西約4.45m以上の規模で、住居址１に切られているが、検出できた部分は、一部やや角張った所も見られるが、ほぼ半円形を呈することから、平面形は円形になるものと思われる。壁はほとんど失われ、検出できた部分では最高約７㎝程度であった。特に斜面下方側では壁は全く失われ、壁下に設けられていたと思われる壁溝を検出しただけである。壁溝は幅約15～23㎝、深さは10㎝前後となっている。

床面は中央が南北約4.1m、東西2.6m以上の隅丸方形状に一段深く、壁下が一段高くなっている。したがって当初は２基の住居址の切り合いも考えられたが、土層観察ではそうした状況が見られず、一段深くなる部分が円形住居の中央にあたることから、内側が方形を呈する高床部を持つ住居址と考えた。高床部は約５㎝の高さまで遺存していた。また床面からは柱穴が３本検出されたが、位置から見て、この住居址に伴う柱穴である可能性は少ない。

出土遺物はほとんどなく、僅かに（139）の鉢と（140）の甕が図化できたに過ぎない。いずれも埋土からの出土であることから、この住居址の時期は明確にし難いが、平面形が円形であり、高床部を持つことから、ここでは一応、弥生時代後期後半～後期末にかけての時期としておきたい。

住居址４（第12図、図版第八上）

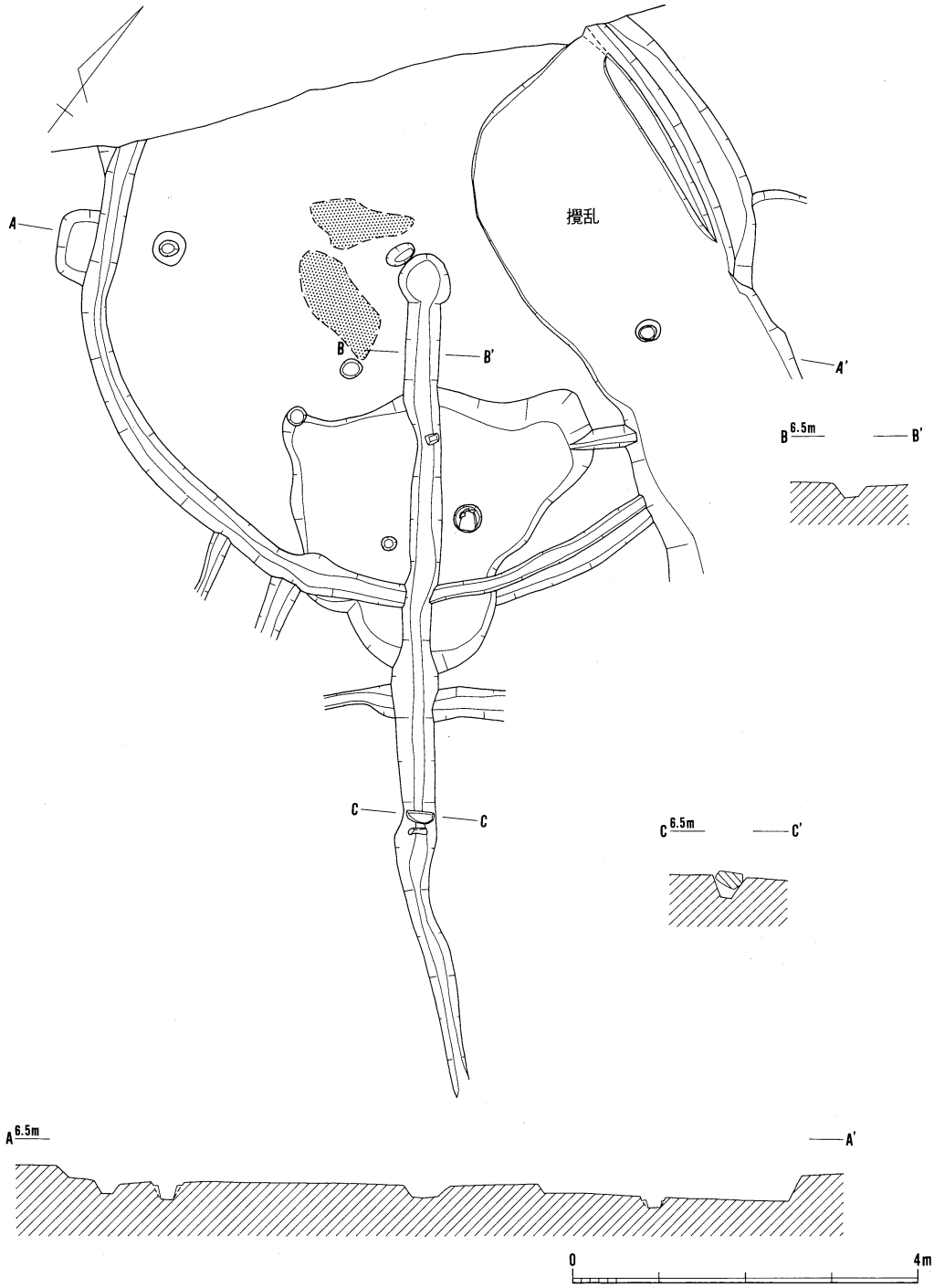
台地末端にあたる地区のほぼ中央付近で、住居址５・６に切られた状態で検出された住居址である。住居址の西端は調査区外となって検出できず、また北壁の一部から床面にかけてと、屋内溝が屋外に向けて伸びる付近の壁から東半の床面にかけては後世の攪乱を受けていた。

住居址は全容が検出されてはいないが、円形住居址で、検出できた部分では南北径約7.9m、東西径約6.4m以上の規模を測る。壁は最高約29㎝まで遺存していた。また検出された部分の壁下には全て、壁溝が認められることから、本来壁溝は壁下を全周していたものと思われる。壁溝は巾約20～25㎝・深さ約15㎝を測り、屋内溝より約３㎝前後浅くなっている。

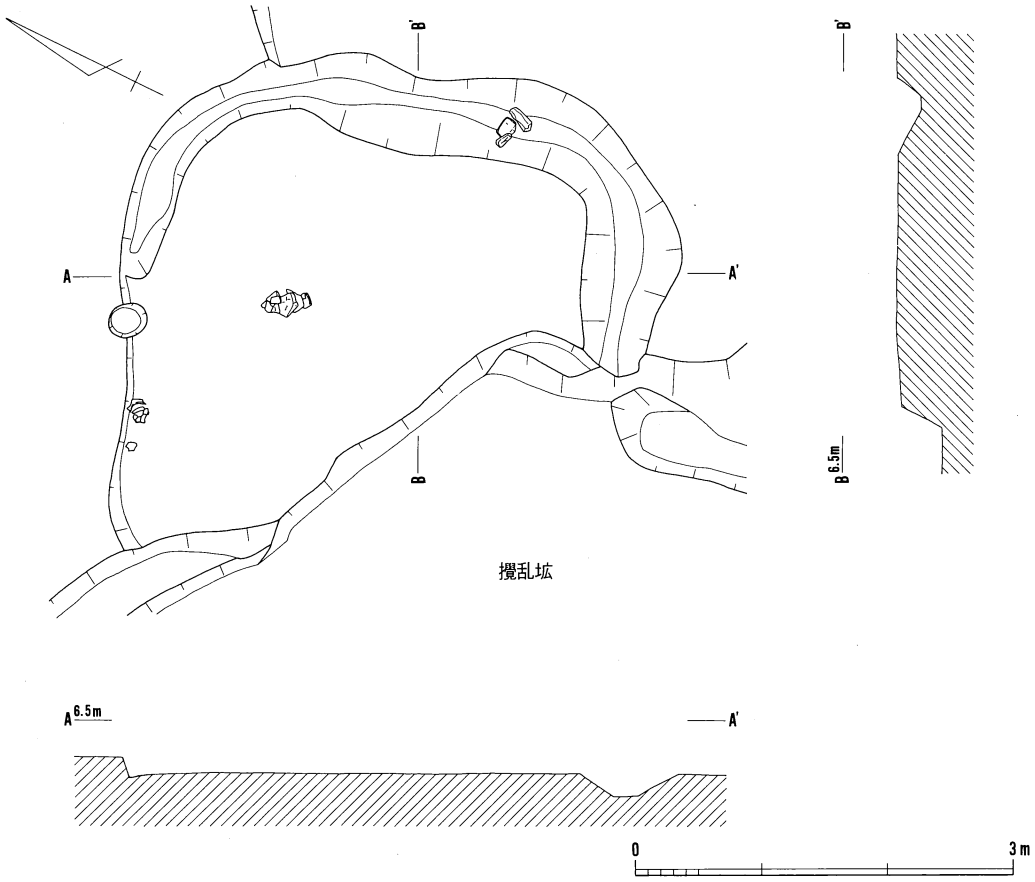
床面上からは柱穴が６本検出されたが、その内、主柱穴と思われるのは３本である。３本の主柱穴は30～40㎝の径で、深さ10～20㎝を測る。また２本の柱穴では径約18㎝の柱痕跡が確認され、残る１本には角石が埋め込まれていた。検出された３本の柱穴の位置から見て、住居址６と切り合っている部分に１本、北半の攪乱壙内の西端付近に１本、調査区外に１本の配置が考えられ、この住居址は６本柱の構造を持つ住居址と考えられる。

床面中央には径約60㎝・深さ約16㎝の土壙が認められ、土壙から東の台地斜面に向けて、屋内溝・屋外溝が伸びている。内部には黒褐色シルトが堆積し、炭化物も認められた。また土壙周辺の床面上には、２ヵ所に炭化物が集中している部分が認められた。

土壙から屋外に伸びる溝の内、屋内にあたる部分は巾約40㎝・深さ約17㎝を測り、断面は逆台形を呈している。屋外に当たる部分は最大巾約52㎝・深さ約30㎝を測り、先端は台地斜面に



第12図　住居址4



第13図　住居址 5

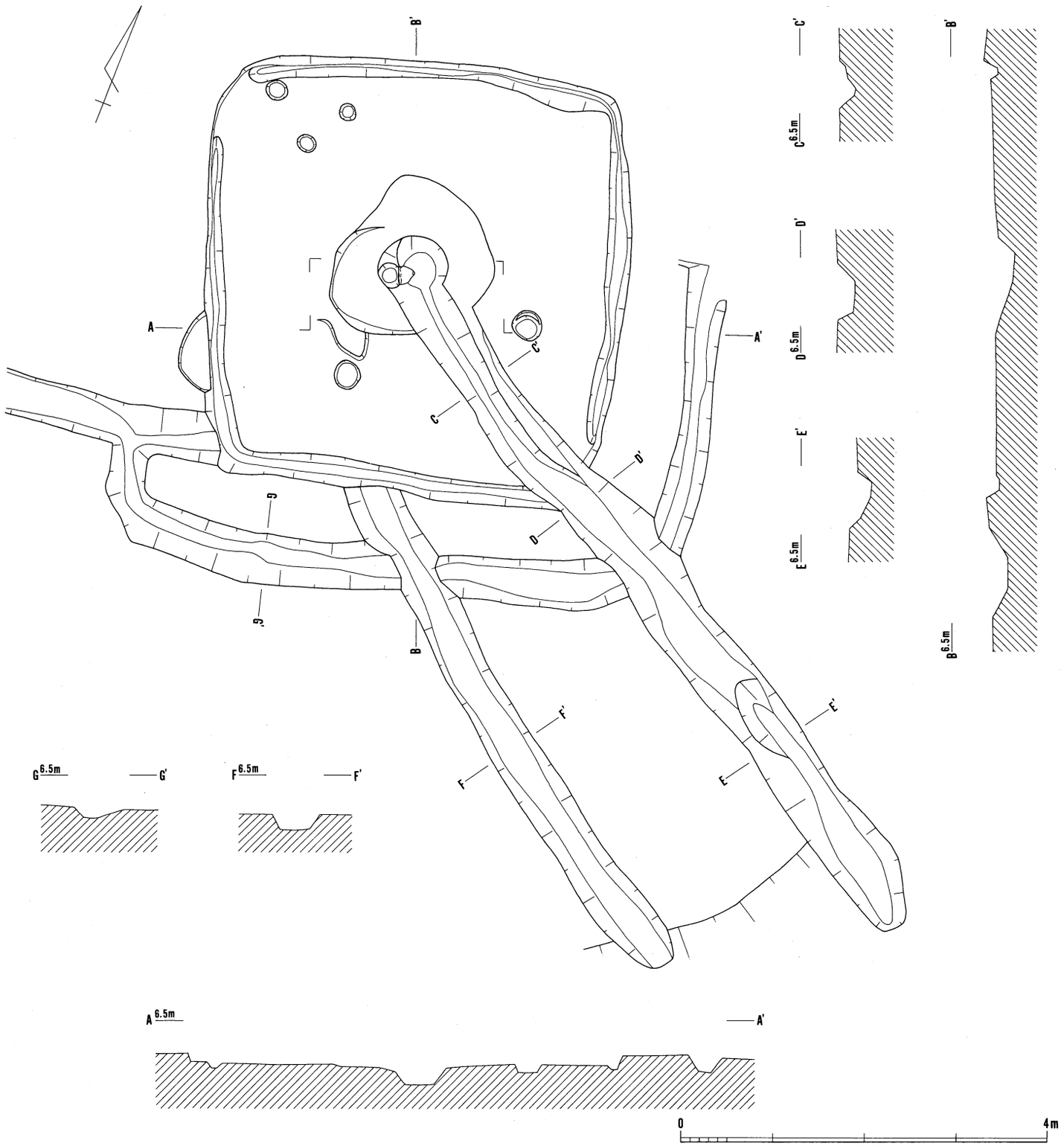
たれ流す状態で終わっている。屋外溝には溝を塞き止めるような状態で石が見られる部分もあったが、その意図は不明であり、屋外溝に伴うかどうかは判断できない。

この住居址も床面上には遺物は見られず、出土した（131～136）の土器と（20）の石斧は埋土からの出土である。したがって時期の特定は困難であるが、一応土器の示す弥生時代後期中半から後半の時期を考えておきたい。

住居址 5（第13図、図版第九下）

台地上にあたる地区のほぼ中央で、住居址 4 と切り合って、「コ」の字状に検出された土壙であるが、北・東の壁下に溝が巡らされていることから、住居址と判断した。ただ住居址 4 との切り合い関係は埋土の識別が困難であったため、把握できていない。

平面形は隅丸方形を呈し、東西約5.5m、南北は約5.4m以上の規模であるが、南北も本来ほぼ5.5m程度の規模であったものと思われる。壁は東側では残存していなかったが、西側では最高約16cmの高さまで遺存していた。壁溝は西壁下の北半から北・東の壁下に巡らされ、巾約



第14図　住居址 6

40～80cm・深さ約16cmを測る。床面上には何らの施設も認められなかった。

出土遺物は図化できた（141・142）の他、甕胴部が中央付近から比較的まとまって出土している。（141）の壷口縁は西壁際で、床面からやや浮いた状態で出土している。

住居址6（第14図、図版第十上）

台地上にあたる地区の中央南寄りで、住居址4を切って検出された住居址である。南北約4.7m・東西約4.2mの隅丸方形の住居址で、壁は北壁で最高約11cmまで遺存していた。壁下には壁溝が巡らされていたが、北西コーナー付近と南東コーナー付近の屋内溝が取り付く部分では途切れており検出できなかった。壁溝は巾約20～25cm・深さ約6cmを測る。

床面は北から南に僅かに傾斜するが、ほぼフラットで、中央には土壙が設けられ、中央土壙周囲の床面は中央土壙に向かって傾斜している。中央土壙は径約50cm・深さ約15cmを測り、炭化物を少量含む暗灰色シルトが堆積していたが、壁面に焼土化した部分は認められなかった。

中央土壙からは巾約40cm・深さ約17cmの屋内溝が南東コーナーに向けて伸び、そのまま壁を貫いて屋外に伸びている。屋内溝と中央土壙の底はほぼ同じレベルとなっていた。屋外溝は巾約45cm・深さ約17cmを測り、台地東斜面まで伸びて、先端はたれ流しの状態で終わっている。柱穴は5本検出されたが、主柱穴となるものは特定できなかった。

出土遺物は（143～145）の3点が図化でき、庄内～布留式に併行する時期に位置づけられるものと思われる。

この住居址の周囲には住居址を囲む様に溝35が存在し、また溝35と切り合って、この住居址の屋内・屋外溝と並行する溝33が存在している。しかし溝と住居址の関係は把握できなかった。

土壙1（図版第十下）

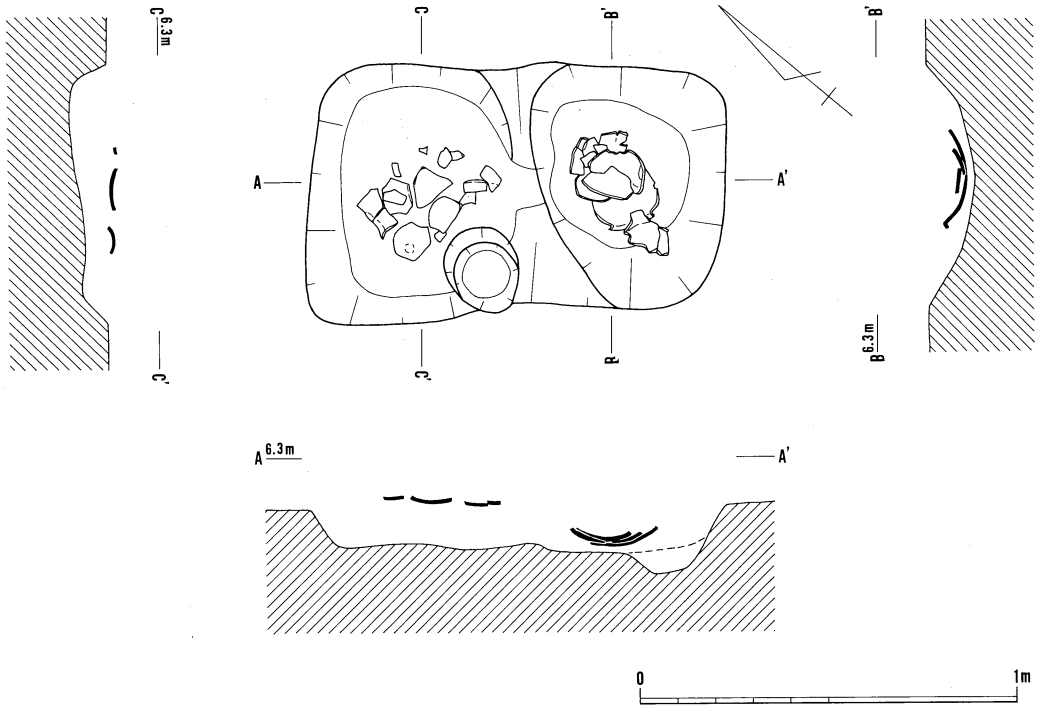
台地南側の谷底部にあたる地区で検出された、長径約90cm・短径約80cm・深さ約35cmの円形土壙である。内部には5層の暗灰色極細砂が充満していた。内部からは、布留式前後の特徴を持つ（146～171）の壷・小型丸底壷・甕・鉢・高杯・器台が河原石とともに投棄された状態で出土している。出土した土器の内、高杯類が6点と多く、（150）の小型丸底壷には底部に穿孔が見られるなど、土器が祭祀に関連したものであることを窺わせる。

土壙2

台地南側の谷底にあたる地区で、土壙1の北約1.2mの位置で検出された土壙である。長径約73cm・短径約52cmの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。内部には炭化物を含む暗灰色シルトが堆積し、河原石と土器類が出土している。しかし出土した土器類は図化できるものがないため、時期・性格等は特定できなかった。ただ土壙1とは近接した位置にあり、土壙1と同様、内部に河原石を含むなど、共通点が多い。

土壙4

台地南側の谷底部で検出された、長径約100cm・短径約90cm・深さ約23cmの、円形に近い平



第15図　土壙6

面プランを持つ土壙である。内部には炭化物を含む暗灰色シルトが堆積していた。出土土器は（176）の甕1点だけである。

土壙6（第15図、図版第十一上）

台地上の中央付近、住居址6の南側で、奈良時代以降の柱穴に西壁の中央を壊された状態で検出された土壙である。長軸約110cm・短軸約67cmの長方形を呈し、長軸を北西－南東方向に置く。底は南半が一段深くなっており、その部分で深さ約18cmを測り、一段高い北半部分では深さ約11cmを測る。北半からは（175）の甕が、南半部分からは（172～174）の壷・甕が、床面からは浮いた状態で出土している。、これらの土器は庄内～布留式の特徴を持つ。

溝40

台地東側の沖積地で、旧河道と並行するように検出された溝である。北端は中世の溝23に切られ、それ以北は検出されない。また南端は底が浅くなり、ほとんど検出できない状態となっていた。溝巾は最も遺存状況の良い所で約2.2mを測るが、底は一様でなく、一段深く抉れている部分があり、人工的な溝とは考えられず、南北端では遺物量も少なくなることから、この溝の調査は途中で打ち切った。

出土した遺物は相当量あったが、図化できたものは（96～130）の35点である。遺物の取り

上げは上下2層に分けて行ったが、2層とも混じりが多い。時期的には弥生時代後期前半から古墳時代前期（布留式）のものである。

溝42

台地の南側斜面部、丁度台地が緩く傾斜して斜面部に変わる、傾斜変換点のやや下方で検出された溝である。巾約90cm・深さ約40cmを測り、断面は逆三角形ないし逆台形を呈する。溝の西半はほぼ東西走行であるが、東半は溝43に合流するような形で終わっている。内部の堆積土は大きく3層に分けられ、下から暗灰色シルト質細砂、茶褐色シルト質細砂、茶灰色極細砂が堆積していた。

溝内からは完形の遺物の出土はなかったものの、多くの遺物が出土し、（69～91）の遺物が図化できた。遺物は上層・下層に分けて取り上げたが、時期巾が見られ、時期的には弥生時代後期中半から後半のものが出土している。

溝43

台地南側の谷部から台地斜面にかけて検出されたほぼ南北走行する溝で、途中、溝42が合流する形となっている。また南端は一部途切れ、その先は90°に近い角度で東に折れている。巾は平均約50cm、深さは約30cmを測る。内部には暗灰色シルトが堆積していた。

内部からは（92～95）の遺物が出土しており、特に溝42を切った部分から多く出土している。遺物には（94・95）のように古い様相を持つものと、（92・93）のように新しい様相を持つものが見られるが、弥生時代後期末と考えておきたい。

C－7土器群

台地南側の谷底部にあたる地区で、黒灰色シルトを掘り下げ中、土器がまとまって置かれた状態で出土した。土器は径約80cm程の範囲で、黒灰色シルト下層の濃灰褐色シルト上に置かれていた。土器類の器種は甕・鉢・高杯・器台で、図化できなかったものも含め、高杯が多い。おそらく祭祀に関連した土器が置かれたものと思われる。

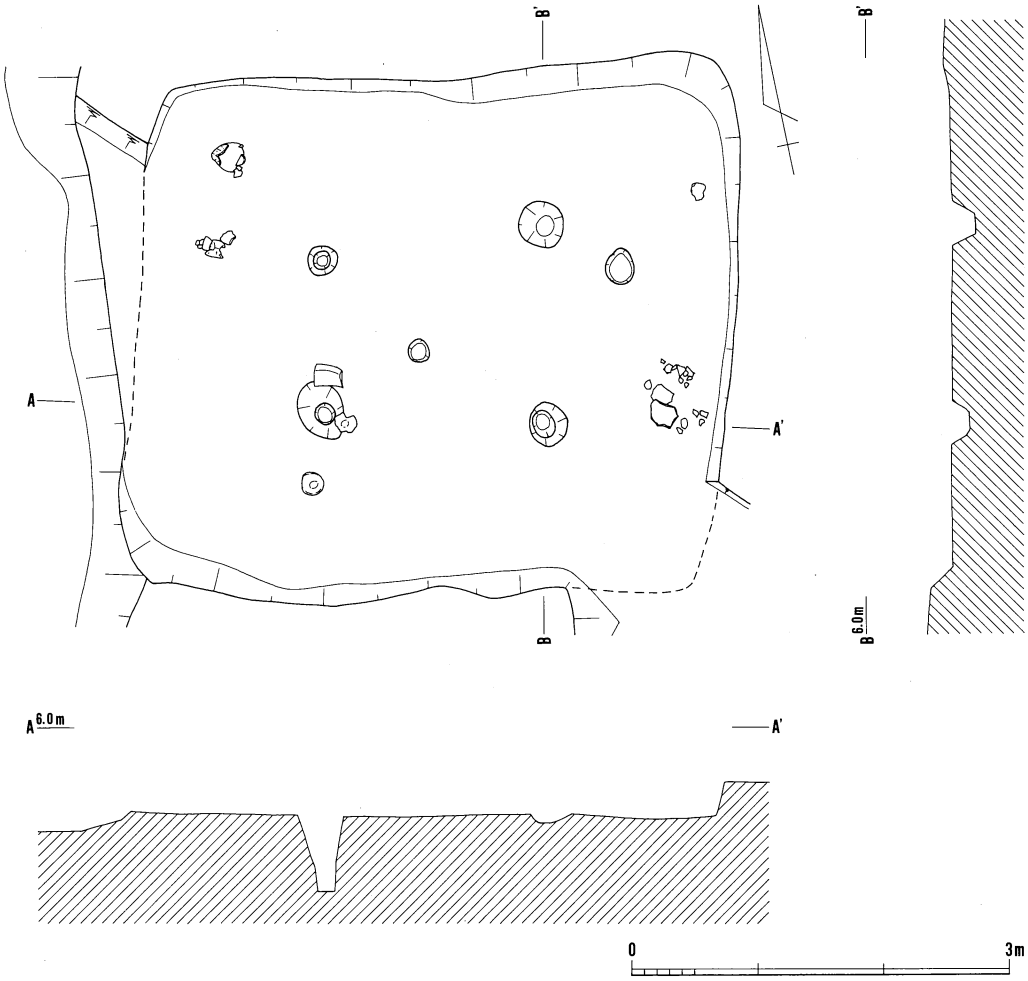
3．古墳時代後期～平安時代前半の遺構

この時期の遺構としては住居址1棟・井戸1基・溝2条があり、台地東側には旧河道が北流するようになる。またそれまでの集落範囲は台地上あるいは台地南側の谷部に限られていたが、この時期に台地上を降りて、旧河道東側の沖積地にも営まれ、集落範囲が拡大している。

住居址7（第16図、図版第十一下）

旧河道東側の沖積地で、溝40を切って検出された住居址である。調査当初は切り合い関係がつかめなかったため、溝40とともに全体を掘り下げた。そのため住居址の西壁と南東コーナー部の壁を壊してしまった。

このため住居址の平面形ははっきりしないところもあるが、一応住居址は長辺約4.7m・短辺約4.2mの長方形を呈し、壁は最高約19cmまで遺存していた。



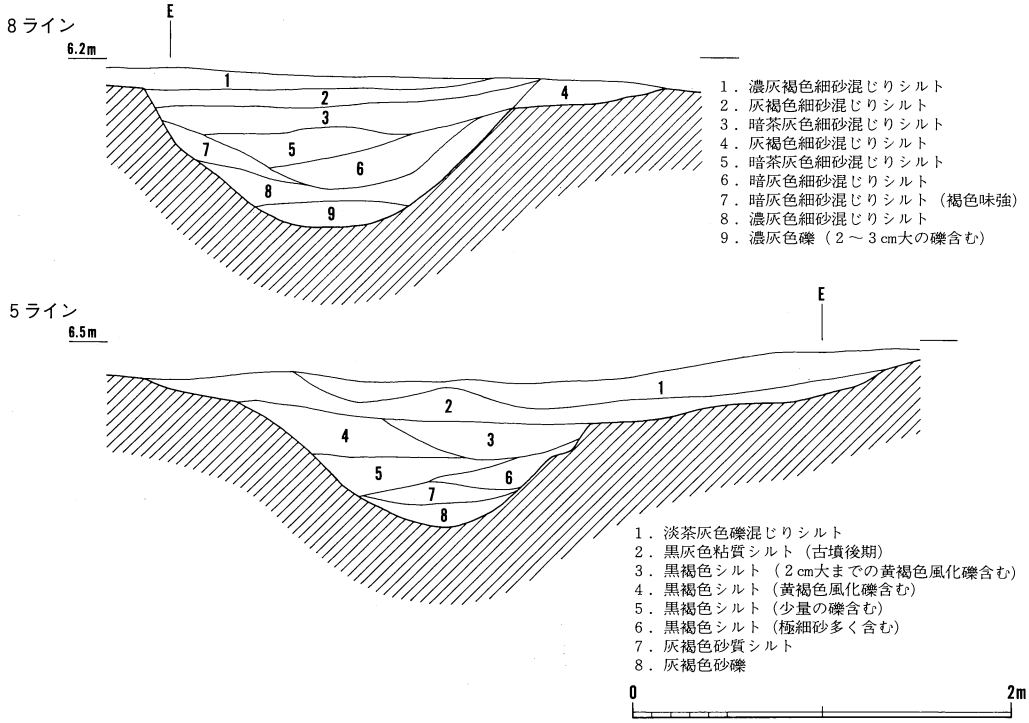
第16図　住居址７

床面上からは６本の柱穴が検出されたが、その位置から見て、主柱穴は４本と思われる。４本の主柱穴は径20～30cmの円形あるいは楕円形の平面プランを呈し、深さは約20～55cmであり、北東の柱穴を除く３本からは径約16cmの柱痕跡が確認された。

床面上には遺物が遺存しており、北西コーナー付近には（571）の甕と、（575・576）の高杯、南西隅の柱穴付近には（569）の須恵器杯蓋と（573）の土師器杯が、東壁際の中央寄りには（577）の甑が遺存していた。須恵器の杯蓋は田辺編年のＴＫ-10型式前後に位置づけられることから、住居址は古墳時代後期の６世紀後半に営まれたものと思われる。

井戸１

Ｆ－６の杭近くで検出されたものであるが、ちょうどＦラインと６ラインの土層観察用の畦



第17図　溝41土層

畔下となっており、井戸とは確認できず、溝47として調査を行った。こうした調査の拙さから、掘り方はほとんど検出できず、不明な点も多い。

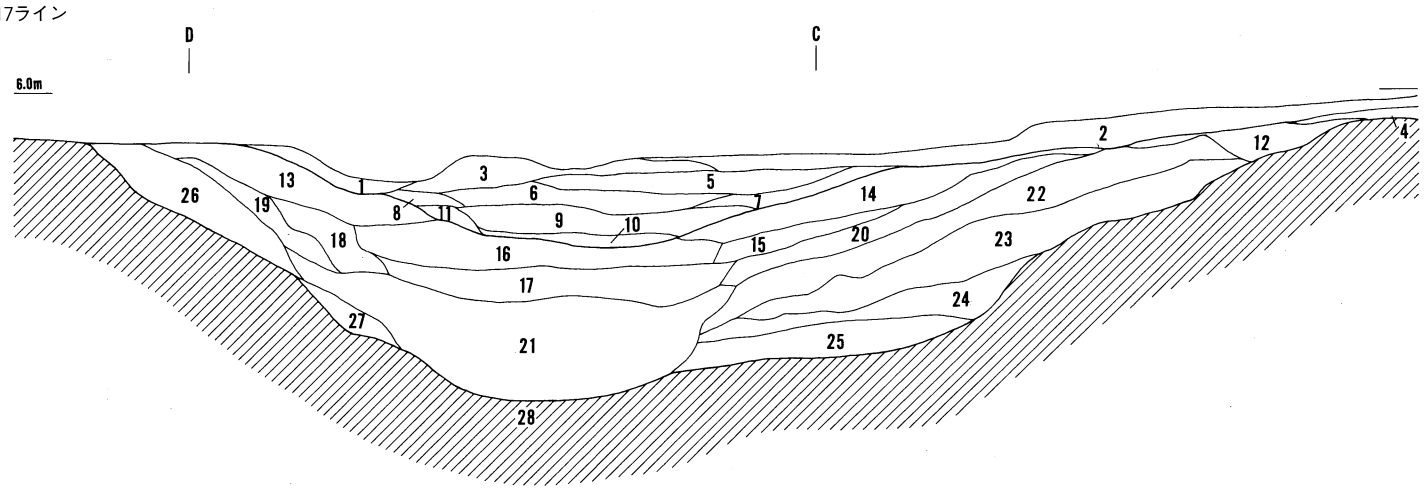
土層観察用の畦畔では、井戸は径約250cm・深さ約120cmの掘り方に、丸木をくり抜いた井戸枠を据えたものである。井戸枠は径約70cmで、約45cmの高さまで遺存していた。井戸枠と掘り方の隙間は30cm大の河原石を埋め込んでいた。

井戸上面からは奈良時代後半の須恵器とともに、製塩土器が出土している。

溝41（第17図）

台地南側の沖積地で検出された、古墳時代前期の包含層（黒灰色シルト）を切り込んだ溝である。巾は約150～240cmを測り、深さは約30～50cmを測る。深さは下流側ほど深く、南端の室町時代の土壙に切られている付近では浅くなっている。検出できた部分では、溝南半は東流した後蛇行して北流するが、その部分でも蛇行している。そのため人工的なものとは考え難い。

溝内の最下層には灰色礫が堆積しているが、その上層には黒褐色シルト等が堆積している。溝底に近い黒褐色シルトからは（581～584）の土師器類が出土し、須恵器は認められなかった。しかし溝埋土の最上層である黒灰色粘質シルトからは（580）の須恵器が出土している。したがってこの溝は古墳時代中頃から後半にかけての溝と思われる。



1．淡灰茶褐色細砂混じりシルト
2．淡灰褐色シルト混じり細砂
3．灰茶褐色細砂混じりシルト
4．濃灰色シルト粘質
5．灰色中砂混じり細砂
6．緑灰色細砂
7．シルト混じり灰色細砂
8．灰色シルト
9．濃灰色シルト混じり細砂
10．褐色礫
11．濃灰色シルト混じり灰色細砂
12．淡茶灰色細砂混じりシルト
13．灰褐色細砂混じりシルト
14．淡灰色シルト混じり細砂
15．緑灰色細砂混じり中砂
16．灰色礫
17．暗灰色礫
18．灰色シルト混じり細砂
19．濃灰褐色細砂混じりシルト
20．緑灰色シルト混じり中砂
21．褐色礫
22．暗灰色細砂混じりシルト
23．灰緑色中砂混じり細砂
24．緑灰色細砂
25．濃青灰色細砂混じりシルト
26．濃灰茶色シルト
27．濃青灰色細砂混じりシルト
28．黄灰褐色シルト

0　4m

第18図　旧河道土層

溝47

井戸のすぐ東側で検出された溝で、巾約150cm・深さ約120cmを測る。断面は「U」字形を呈し、東端は調査を実施していないためはっきりはしないが、旧河道の上層につながるものと思われる。西端は井戸から約50cmしか離れておらず、井戸に伴う排水溝である可能性が高い。

溝内部から奈良時代後半～平安時代初めと思われる須恵器、製塩土器等が出土している。

旧河道（第18図）

調査区をほぼ南北に走行する河道で、13ライン以南は沖積地を削り込んでおり、13ライン以北では台地の裾を削るように北流している。調査当初は全体を完掘する予定であったが、規模が大きいわりには遺物量も少ないことことから、トレンチ調査に変え、比較的遺物の出土した13・17ライン付近についてのみ、底まで掘り下げた。ただ13～19ラインまでは溝の上層に護岸状の石敷が認められたため、上層を完掘した後、部分的に底まで掘り下げた。

17ライン付近では巾約10m・深さ約２mを測り、13ライン付近では巾12.5m・深さ約1.9mを測る。河道内の堆積土は幾層にも重なるが、大きく２層に分けられる。上層（第１～11層）は濃灰色ないし灰色のシルトおよび砂で、内部からは７世紀後半から９世紀前半の須恵器が出土している。この段階の河道西岸には河原石を使用した護岸と思われる石敷が認められた。しかし石を組み合わせたものではなく、乱雑に撒いた状態のものであった。

下層は溝中央に褐色ないし灰色砂礫が数層堆積し、その両側に砂が堆積していた。17ラインでは砂層は河道の北岸に厚く認められ、砂層の最下層、溝底付近から古墳時代後期（５世紀末～６世紀前半）の土器が出土し、（606・616～619・623・625）は一括して出土している。

こうした出土遺物から、この旧河道は古墳時代後期に調査区内を北流し始め、平安時代前半には完全に埋没したものと思われる。

４．平安時代末～室町時代の遺構（第19図）

この時期の遺構には、調査区の北半（北地区）・東半（東地区）・南半（南地区）の３地区で検出された、掘立柱建物址・土壙・溝等がある。これらの遺構はそれぞれの地区でまとまりを持ち、遺構群を形成している。以下、遺構群ごとに記述することにする。

北地区の遺構（第20図、図版第十二上・下）

a）群構成

遺構群の内、北地区遺構群は遺構が広範囲に及び、密度が最も濃く、建物址９棟、約400個の柱穴、土壙14基、溝23条が検出されている。ただ東端の遺構は調査区外に伸びており、必ずしも遺構群全体が検出されたわけではないが、東端では遺構密度が薄くなることから、調査区外にはそれほど大きく広がらないものと思われる。

建物址群を取り囲んで、南・西側に溝23が、北側には溝24が存在し、溝23は出土遺物から見て、室町時代以降現代まで存続する溝である。建物址との位置関係から、建物址等の遺構群を

区画する溝と断定してよいものと思われる。溝24は建物址等の遺構群とは距離を置くが、溝23と同様にほぼ室町時代以降現代まで存続する溝で、溝23と同一の方向性を持つ。こうしたことから、溝24もこの地区の遺構群を区画する溝と捉えてよいものと考えられる。このように、この地区の遺構群は3辺を溝によって区画されており、南北約42m、東西約60m以上の歪な方形の区画が想定できる。東半を区画する遺構は検出できなかったが、東半にも新川を利用した区画あるいは溝等による区画が想定される。

区画内の遺構は中央から南側に集中し、北側の約1/3は全く遺構が存在しない空白域となっている。また建物址1の西側と溝23の間も遺構は見られず空白域となっている。ただ溝23が東西走行する部分の北側に遺構は検出できなかったが、溝3による小区画が想定され、建物址5の西側にも柱穴群が存在することから、本来は遺構が存在していたものと思われる。

遺構群の内部は建物址9棟・土壙14基・溝21条で構成されるが、溝21条は東西ないし南北の直線的な走行方向を持つもの（溝1～3・17・21）と、弓状に彎曲するもの（溝9・10・11・13・15・16）が検出されている。直線的な走行方向を持つ溝は建物址に伴って、建物を区画する溝ないし、建物の雨落ち溝と捉えられる。弓状に彎曲する溝は東半に集中し、建物址7・8に伴う柱穴に切られていることから、両建物址以前に存在し、出土遺物から北地区遺構群の中核をなす建物址3～6と同時期と捉えられる。中核の建物に付随し、区画内に存在した畑等の生産領域を区画する溝であった可能性が高い。

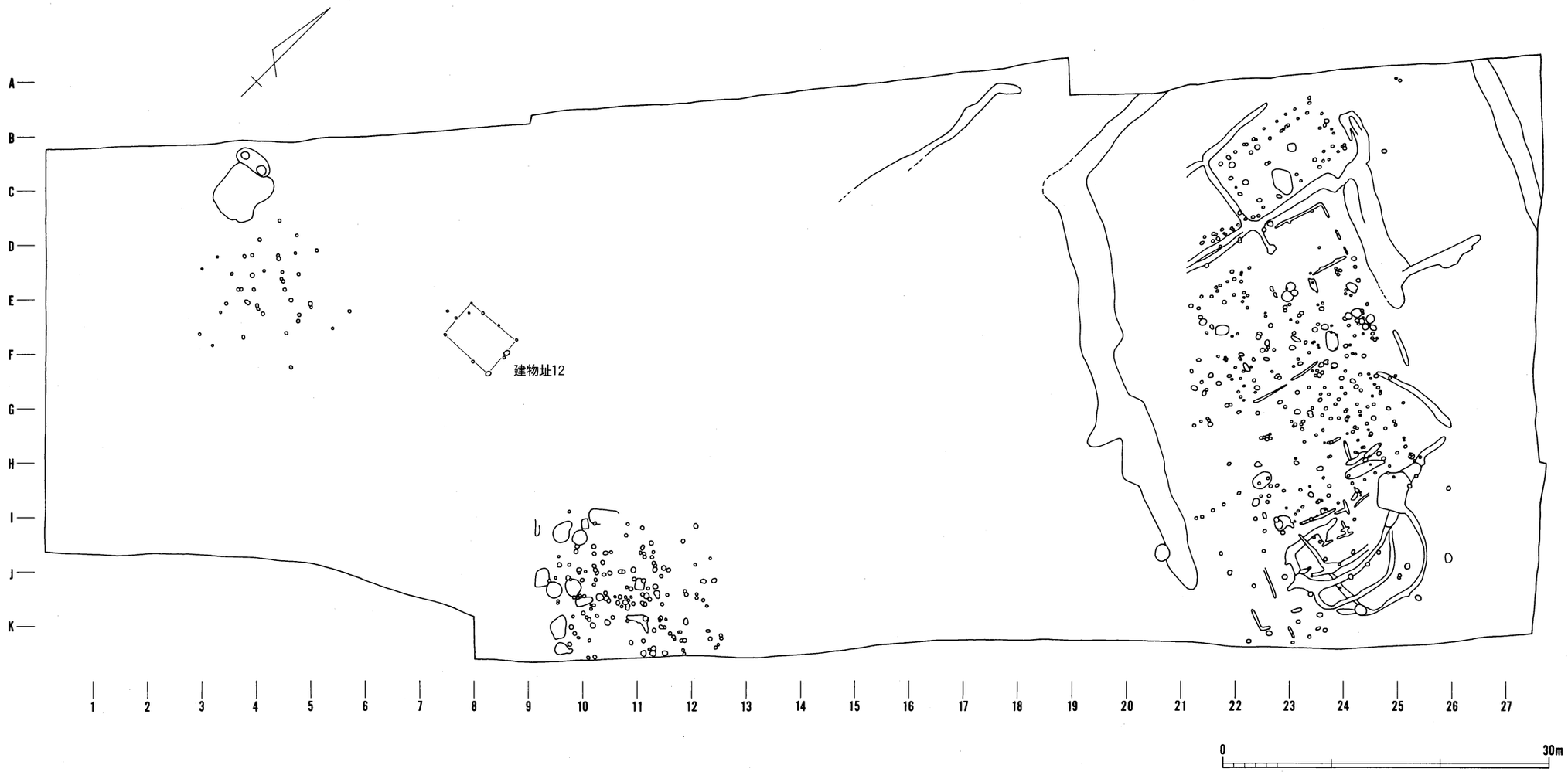
建物址9棟は区画内の中央から南側で検出されているが、9棟の他に建物址とは捉え切れなかったが、建物址1の南側に溝3による区画があり、建物址が存在していた可能性が高い。また溝3の東側で、溝3と建物址5との間にも多数の柱穴が検出されており、建物址の存在が想定される。したがってこの遺構群中には建物址11棟前後が存在していたものと思われる。

土壙14基は20・21の2基以外はいずれも建物址と関連した位置にあり、特に建物址2・3の周辺に10基が集中している。その内、6基は建物址の北側桁行きに沿う形で検出されている。残る4基は建物址の内部に設けられていることから、建物址の付属施設であった可能性が高い。

b）建物址（第21～24図、図版十三上・下）

検出された9棟と、想定される2棟の建物址は遺構群の中央から南寄りに集中し、①棟方位をN17°Eか、もしくはそれと直交する方位に置く建物址3～6、溝4とした建物址、②棟方位をN9°Eか、もしくはそれと直交する方位に置く建物址1・7、③棟方位をN26°Eか、もしくはそれと直交する方位に置く建物址2・8の3群にまとめられる。①群の建物址は遺構群の中では中央に位置し、遺構群中の中核を形成する建物址群である。それに対し、棟方位の異なった②・③のグループは①群の西・東に存在し、時期的にも遅れることから中央の建物址群が東西に増築されていったものと思われる。

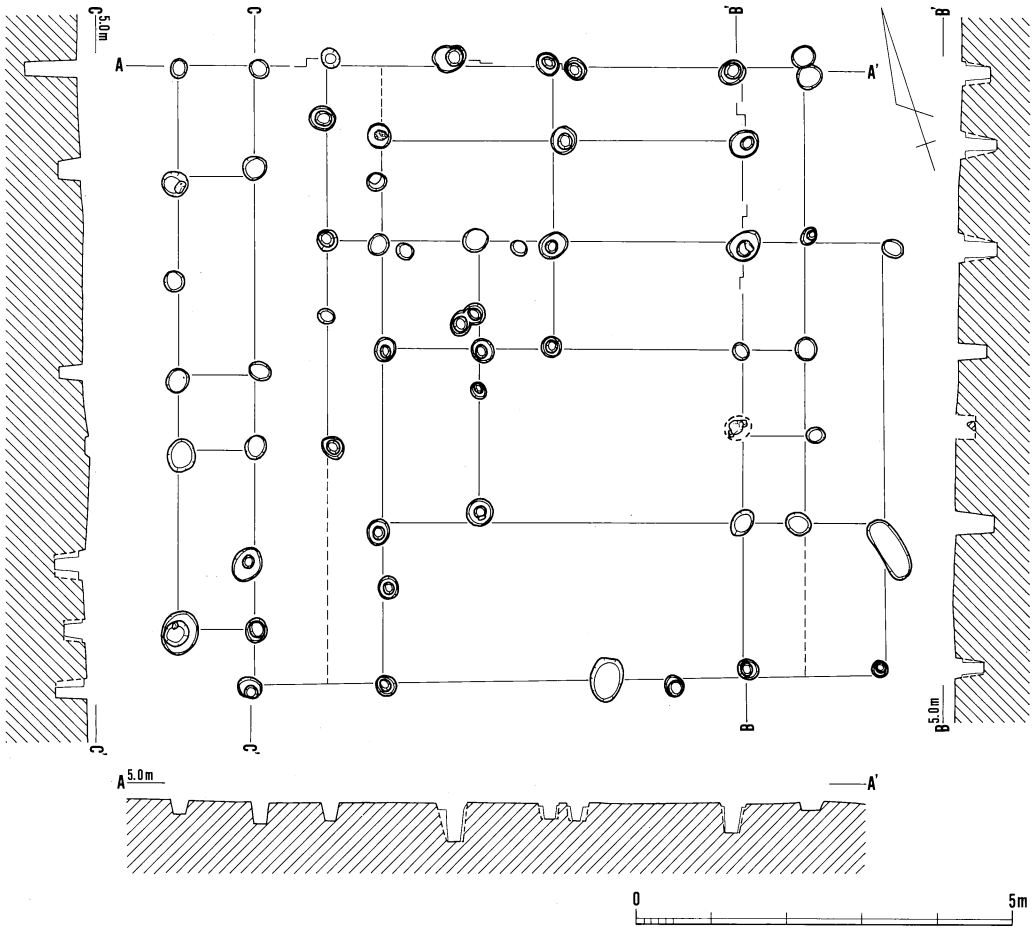
①群の建物址　構成する5棟の建物址の内、主屋と考えられる建物址4は上屋間で梁行2間、



第19図　平安時代末～室町時代遺構全体図

27
26
25
24
23
22
21
20
19
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
0
20m
溝24
溝1
溝2
溝3
溝4
溝6
溝9
溝10
溝11
溝13
溝15
溝16
溝17
溝21
溝23
建物址1
建物址2
建物址3
建物址4
建物址5
建物址6
建物址7
建物址8
土壙8
土壙9
土壙10
土壙11
土壙12
土壙13
土壙14
土壙15
土壙16
土壙17
土壙18
土壙19
土壙20
土壙21
P101
P104
P125
P117
P129
P113
P150
P226
P243
P245
P301
P190
P195
P247
P249
P180
P170
P164
P176
P191
P419
P272
P275
P306
P314
P311
P312
P327
P250
P254
P292
P410
P283
P289
P417

第20図　北地区全体図

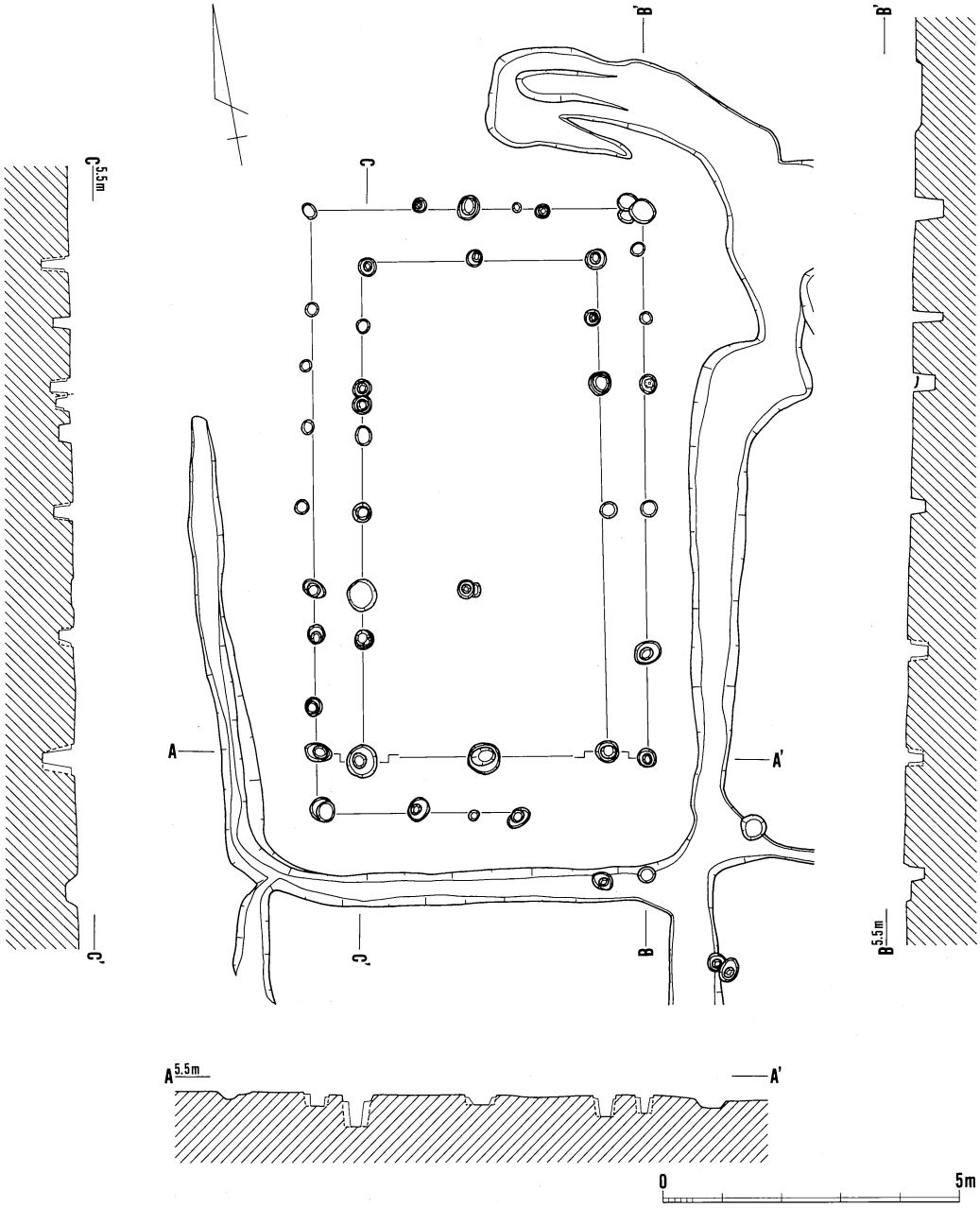


第21図　建物址 4

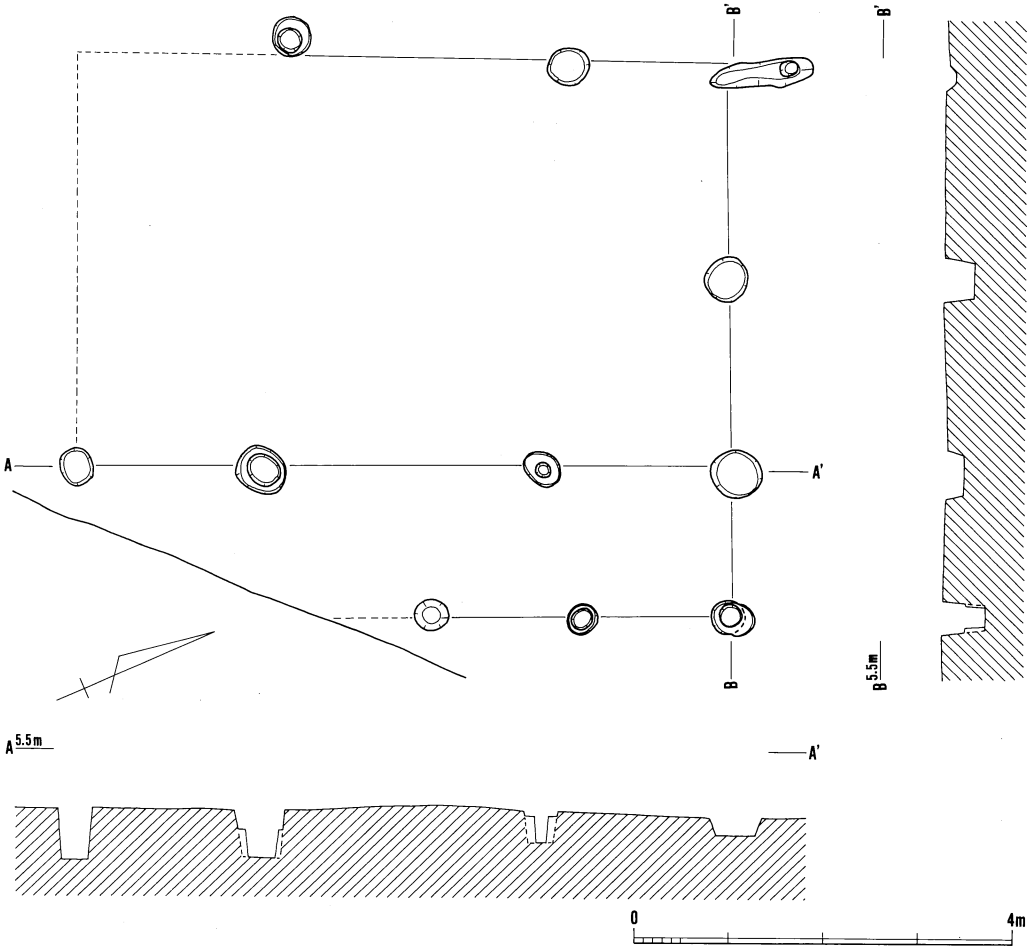
桁行は東桁行で5間で、東・北・西の3面に下屋と思われる施設が付く。西側はそこから更に1間分の付属施設が設けられ、この付属施設と建物東側の下屋からは1間分の張出部が設けられている。ただ西側張出部は南側が建物より控えて取付けられ、東側張出部も北側1間分は控えて設けられている。また西側に設けられた下屋から出る付属施設と張出施設の柱通りは、下屋・上屋の梁行きの柱通りとは揃っておらず、後に敷設された可能性がある。(779～784) の土師器小皿・椀類、須恵器椀、白磁碗底部が出土している。

建物址3は東西棟の3間×2間の側柱建物址で、建物址2に切られている。また内部に土壙12が存在するが、この建物址か建物址2に伴うものと考えられるが、どちらに伴うかは特定できない。

建物址5は南北棟の5間×1間の側柱建物址であるが、南側2間の柱穴が細く、深さも浅いことから、この部分は別の建物、あるいは後に増築された可能性がある。(785) の土師器皿、



第22図　建物址 1



第23図　建物址 8

(786～788) の須恵器椀・小皿類、(789) の瓦器皿が出土している。

建物址 6 は南北棟の 2 間× 1 間の建物址で、4 本の柱穴で根石が確認された。また 2 本の柱穴で柱痕跡が認められているが、径15cmと細いものである。(792・793) の土師器椀と備前焼が出土している。

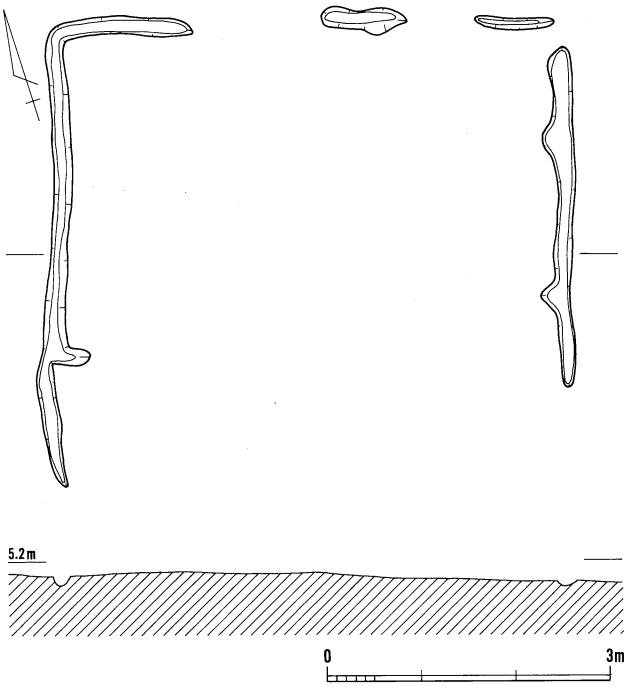
溝 4 とした建物址は、巾約20～30cm・深さ約10～15cmの溝が、北辺側で途切れるが、「コ」の字状に検出されたものである。東・西側の溝が部分的に内側に膨れ、柱穴の存在が想定されたが、柱穴としては捉えきれなかった。そのため建物址と断定はできないが、他遺跡の例では竪穴式住居状の簡易な建物が想定されていることから、建物址として扱った。

これらの建物址は出土遺物から室町時代前半と考えられるが、建物址 4 ・ 6 には切り合い関係が認められ、建物址 4 が 6 を切った状態で検出されている。したがって建物址 6 は建物址 4

に先行する可能性が高い。また建物址３と溝４とした建物址とは近接した位置にあり、上部構造が接触あるいは重なる可能性があり、前後関係があるものと思われる。

ただそれ以外には建物址に切り合い関係が認められないことから、同時期に存在した建物址を抽出することは困難である。

②群の建物址　①群の建物址の外側に設けられた建物址１・７の他、建物址１の南側で、溝３に囲まれた地区に想定される建物址も、この方位を持っていたものと思われる。建物址１は遺構群の中央に位置する①群の建物址の北西側に設けられた、南北棟の側柱建物址で、４面に下屋あるいは庇と思われる施設が設けられている。ただこの施設の南東隅柱は検出できず、その部分は設けられていなかった可能性も残る。11本の柱穴から柱痕跡が検出されている。北西隅を除く４周に溝（溝１・２）が設けられており、建物に付随した雨落ち溝等と考えられる。(773～776）の土師器類と須恵器底部（777)、常滑焼（778）が出土している。

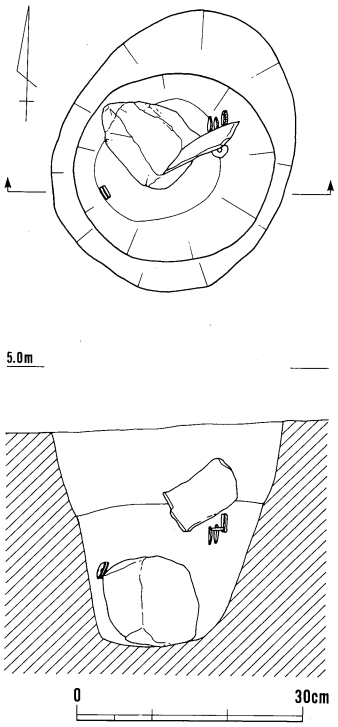


第24図　溝４

建物址７は畑の痕跡と思われる溝状遺構を切って検出された建物址である。土壙21が南桁行側の中央の柱穴が存在していた位置にあり、土壙21は柱の抜き取り跡とも考えられる。柱穴(283）内から（794・795）の備前焼擂鉢が出土している。

この群の建物址は、①群の建物址の東西に位置し、①群の建物址群と重複しないことから、①群の建物址が存在していたと考えられる時期に、その付属施設として、増築された建物址群と捉えられる。

③群の建物址　N26°Eもしくはそれと直交する方向に棟方位を置く群で、建物址２・８の２棟がある。建物址２は３間×２間の東西棟の総柱建物址である。建物址３を切って設けられており、建物址３とほぼ同規模であることから、建物址３の建て替えにあたる建物址と捉えられる。南桁行の柱穴（190）では、底から浮いた状態で須恵器甕片と銅銭20枚が出土している。銅銭20枚の内、出土状態が明らかにできたのは僅かに７枚で、それらは２群に固まって出土している。残る13枚の銅銭は調査の拙さから、出土状態は明らかでない。須恵器甕片は直立した



第25図　柱穴190遺物出土状態

状態で、銅銭からも浮いた状態であった。これらの遺物は柱穴に埋納されたものかどうかは、13枚の銅銭の出土状態が明らかにできなかったため、詳細は不明であるが、その可能性が高い。

建物址８は遺構群中ではもっとも南東隅に位置し、３間×２間の南北棟の側柱建物址である。東側に庇と考えられる施設が付く。ただその南側は調査区外となって検出されておらず、調査区外まで伸びるかどうかは不明である。１本の柱穴では柱根が遺存しており、他の３本の柱穴からは径約20cmの柱痕跡が確認された。この建物址の南側で遺構群を区画する溝23が途切れており、その部分が入口と想定されることから、建物址８は入口を塞ぐような形で存在している。(790)の土師器小壺と(791)の須恵器片が出土している。

この２棟の建物址は遺構群中の中央を占める①群の建物址中の１棟の建て替えと、建物群の外側への拡張にあたり、遺構群の中央の建物址群と併行して存在していたことが窺われる。

c）土壙

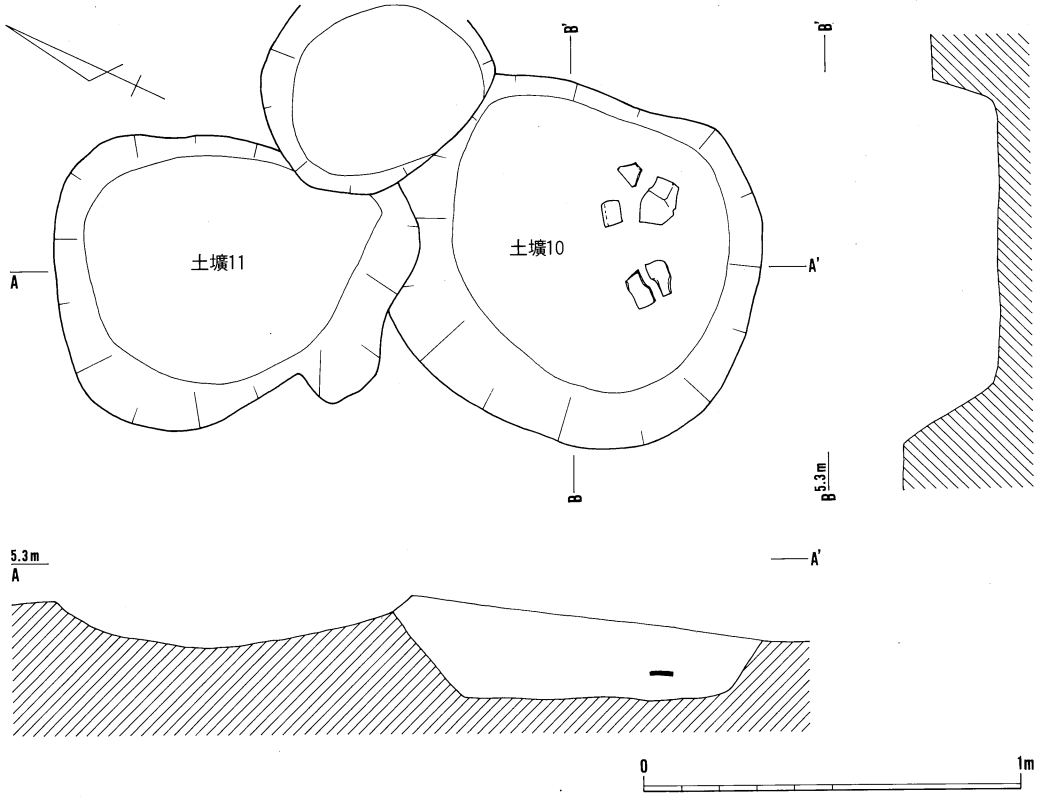
14基が検出されているが、平面形が円形を呈するものと楕円形を呈するものが見られる。円形を呈する土壙は建物址２・３の桁行北側付近に６基（土壙13～18）が、建物址２・３の南西隅柱付近から２基（土壙10・11）が検出されている。桁行北側の土壙６基は切り合うことなく近接していることから、ほぼ同時期に設けられたものと思われる。また建物址２・３に切られており、溝４と同様に焼土塊を含むものがあることから、溝４とした建物址に関連したものと捉えられる。残る６基の内、５基の土壙は建物址の内部と考えられる位置に、それぞれ存在している。これらは前述の８基の土壙と比較すると規模が大きく、形は不整形な楕円形を呈する。残る１基は建物址群の東側で、弓状の溝を集める位置にあり、弓状の溝との関連が考えられる。

土壙８は建物址１の東側桁行のほぼ中央に位置する、長軸約210cm・短軸約140cm・深さ約45cmの、不整形な楕円形を呈する土壙である。位置から建物址１を切って設けられたものとも捉えられるが、すぐ南側には下屋を構成する柱がずれて配置されており、建物址に伴っていた可能性もある。内部からは土師器皿・須恵器椀片と、細片であるが、銅銭が出土している。

土壙９は建物址の存在が想定される溝３と建物址５の間で検出されたもので、長軸約128cm・短軸約100cm・深さ約23cmの楕円形の土壙である。

土壙10は径約100cm・深さ約25cmの円形を呈するもので、(820)の土師器椀が出土している。

土壙11は長径約95cm・短径約80cm・深さ約15cmの、円形を呈するものである。備前焼の甕口



第26図　土壙10・11

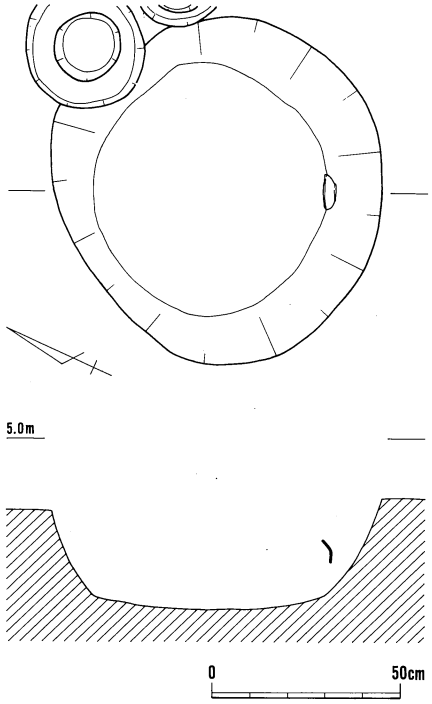
縁部（823）が出土している。

土壙12は建物址２・３の内部にあたる位置にある、長軸約182cm・短軸約115cm・深さ約15cmの長楕円形を呈する土壙である。

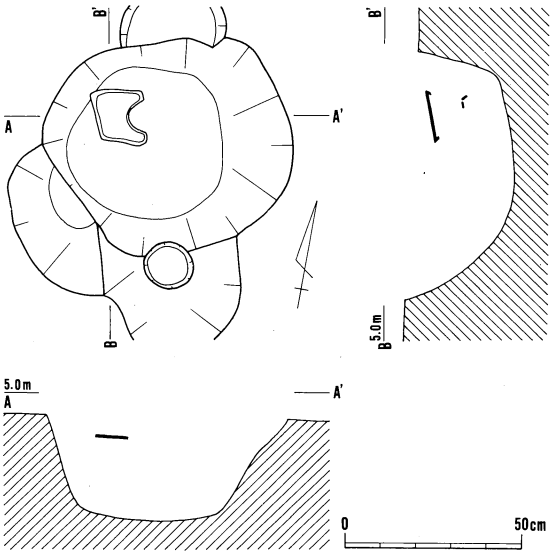
土壙13～18は径約60cmから90cmの円形を呈し、断面が箱形を呈する土壙群である。土壙13は径約58cm・深さ約30cmで、埋土に焼土塊が含まれていた。土壙14は径約90cm・深さ約40cmで、やはり埋土に焼土塊が含まれていた。土壙15は径約70cm・深さ約30cmの土壙で、内部から鉄製鋤先と銅銭（No.16）が出土している。その他、土壙14から須恵器椀（821）が、出土している。

土壙19は長軸約235cm・短軸約50cm・深さ約15cmの不整形で、浅い土壙である。主軸方位が建物址４と合い、建物址４の内部にあたる位置に設けられていることから、関連性が考えられる。（816～819）の土師器類が出土している。

土壙20は２段に掘り込んだ土壙で、上段が長軸約170cm・短軸約130cmの不整形な方形を呈する。下段はさらに不整形な形を呈し、全体の深さは約30cmを測る。溝９・10・13が取り付いているが、切り合い関係が認められなかったことから、３条の溝がこの土壙に流入していた可能性が高い。内部から（825～838）の土師器・須恵器類が出土している。



第27図　土壙14



第28図　土壙15

土壙21は径約105cmの円形に近い平面形を呈する土壙で、深さ約40cmを測り、断面は擂鉢状を呈する。位置から見て建物址７の柱抜き取り跡の可能性がある。

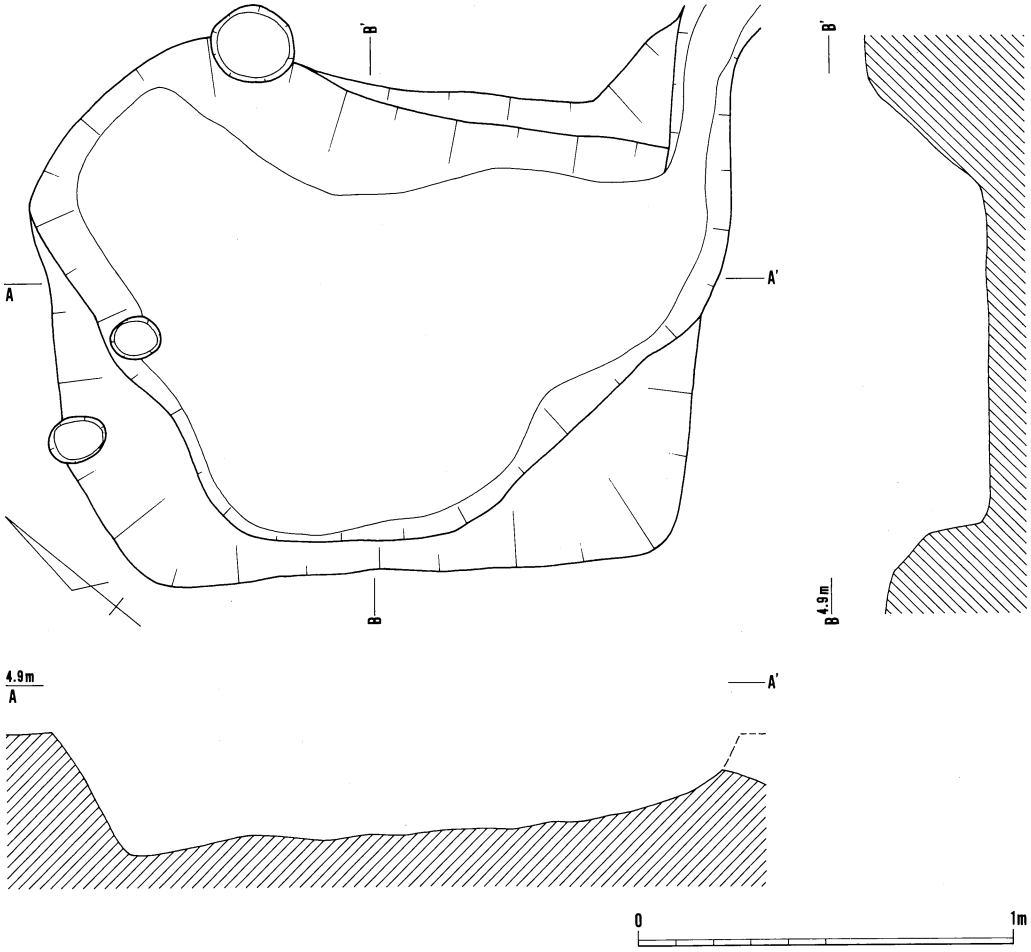
d）溝

23条が検出されたが、直線的に走行する溝と、弓状に彎曲する溝が見られる。直線的な溝は遺構群の西半に見られ、その位置関係や走行方向が建物址の方位と合うこと等から、建物址と関係して、建物址を区画する溝ないし雨落ち溝と捉えられる。弓状に彎曲する溝は東半に見られ、詳細は不明だが、畑等に伴う溝の可能性がある。

直線的な溝の内、溝１は建物址２・３の北側から建物址１の北側に回り込む溝で、巾約３m・深さ約20cmの溝である。埋土は上下２層（灰色細砂・濃灰色細砂）に分かれ、溝４とした建物址の北側では炭化物が多く含まれていた。溝内からは（843～849）の土師器・須恵器類と青白磁の合子が出土している。

溝２は北西隅を除いて、建物址１の東・南・西の３方を取り囲む溝で、巾約50cm・深さ約30cmを測る。溝１に取り付く部分は屈曲して不整形となっており、建物址１の南・西側を囲む部分と東側を囲む部分は設けられた時期が異なる。溝内からは（850～854）の土師器・瓦器・須恵器類が出土している。

溝３は溝２の南東隅部分から南に伸びる、巾約１m・深さ約10cmの浅い溝である。ただ２本の溝が重なっており、掘り直された形跡が認められる。また溝２の南西隅部分にほぼ並行する溝が検出されており、この溝とともに建物址の雨落ち溝となる可能性が高い。



第29図　土壙20

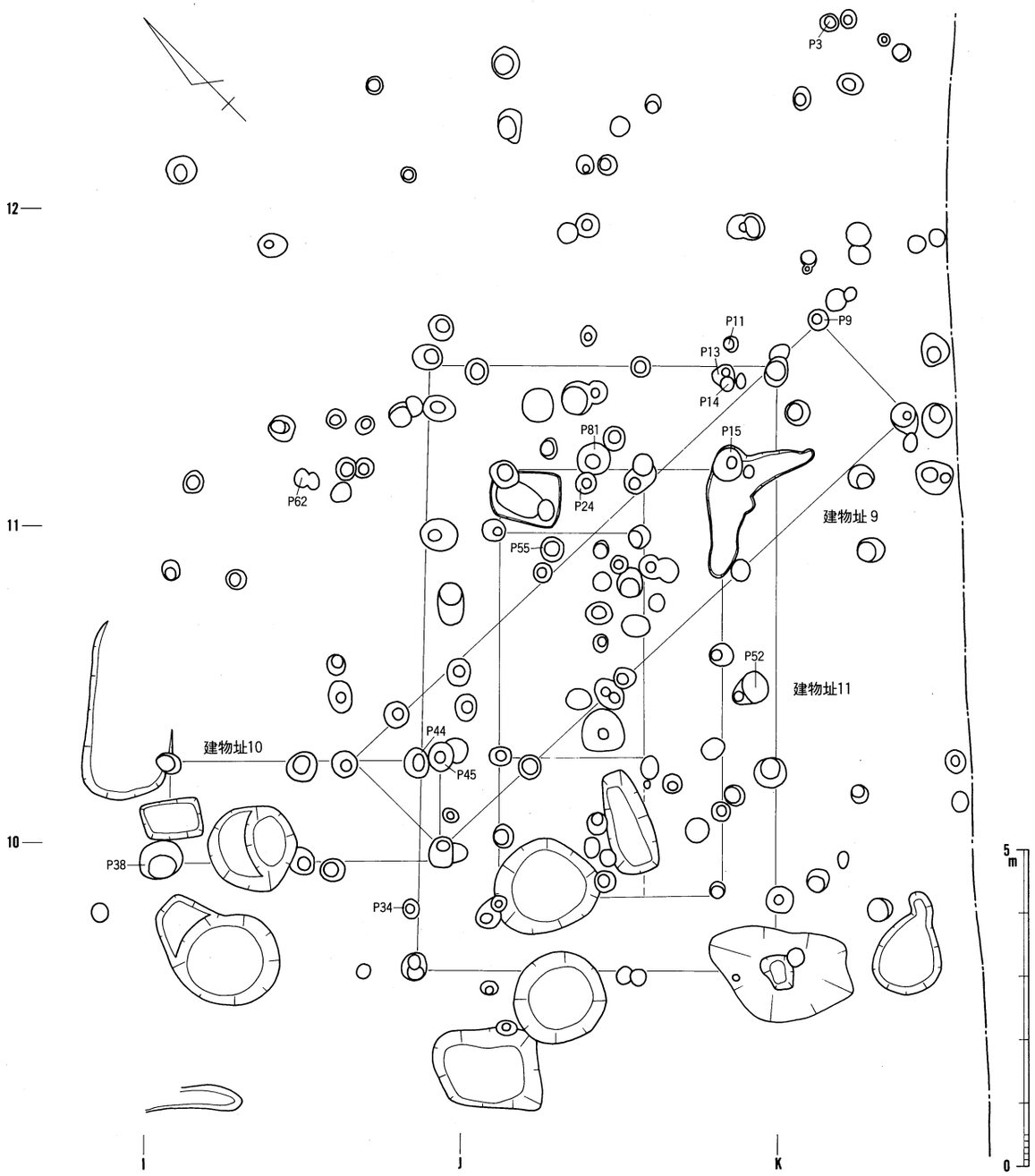
溝６は溝２の南東隅から東に伸びる巾約30cm・深さ約10cmの溝で、溝４とした建物址に伴うものと思われる。

弓状を呈する溝９・10・11・13・15は巾約30～50cm・深さ約10～20cmの浅い溝で、９・10・11・13は土壙20に流入している。性格は不明だが、畑等に伴うものと思われる。

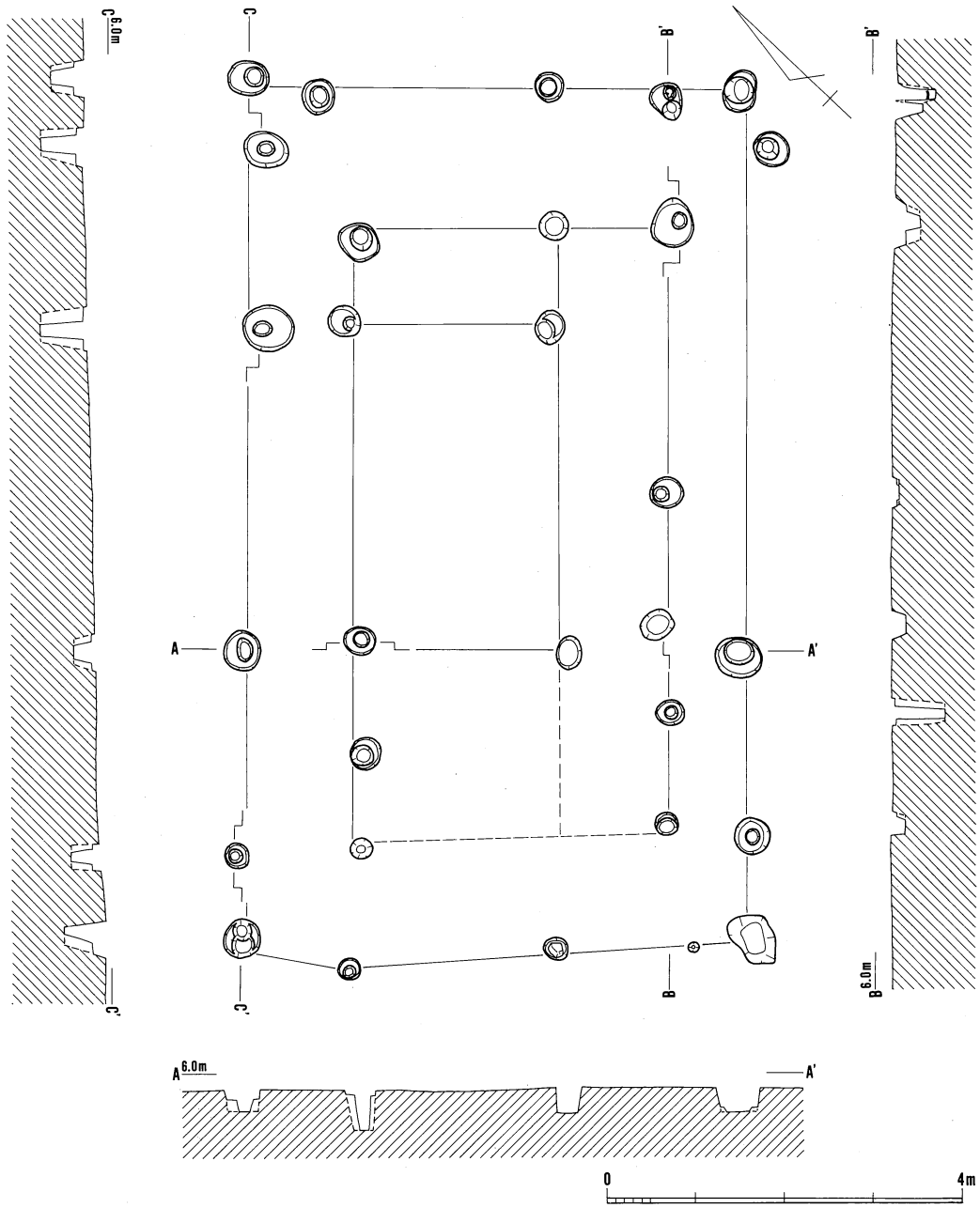
北地区遺構群の南から西を区画する溝23は巾約２～３m、深さ約20～70cmの溝であり、南側の中央付近が不整形である。内部から（864～875）の土師器・須恵器が出土している。

北辺を区画する溝24は巾約２m・深さ約40cmを測る。内部から（876・877）が出土している。

以上の溝の他、区画西側の台地縁辺にあたる地区で、溝46が検出されている。台地上の地区では、これ以外に遺構が認められなかったため、ここで扱った。溝46は巾約60～80cm・深さ約20～30cmで、北端は東に屈曲して終わる。（839～842）の土師器・瓦器の椀・皿類が出土した。


P3
12
P11
P9
P13
P14
P81
P15
P62
P24
建物址9
11
P55
P52
建物址11
P44
建物址10
P45
10
P38
P34
5
m
0
I
J
K

第30図　東地区全体図



第31図　建物址11

東地区の遺構

南北約20m、東西約15mの範囲に建物址３棟、土壙等の遺構が検出されているが、土壙は遺構群の南端で多く検出されている。

建物址３棟は互いに重なり合って検出され、建物址９は桁行４間、梁行１間の建物址で、東側に半間分の張出部を持つ建物址である。棟方位を北地区の②群の建物址とほぼ直交した東西としている。北西隅柱の柱穴は建物址10に切られていることから、建物址10よりは先行するものと思われる。(888) の土師器が柱穴内から出土している。

建物址10は棟方位をN45°Wに置く、２間×１間の建物址である。切り合い関係から建物址11に先行するものである。柱穴（38）内から（889～893）の土師器類が出土しているが、(890・891）は重なって伏せられた状態で出土したことから、埋納されたものである可能性が高い。

建物址11は建物址10と直交する方位に棟を置く、２間×５間の建物址で、４面に下屋と考えられる施設が付く。柱穴内から丸瓦（897）が出土している。

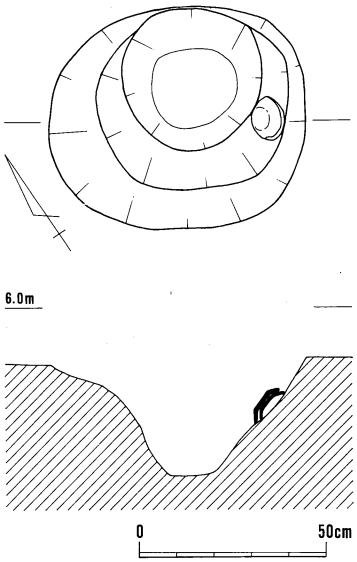
南地区の遺構

建物址３棟（12～14）と土壙２基が検出されたが、建物址の内、２棟（13・14）は重なり合い、１棟（12）は離れた所に位置している。２基の土壙は建物址と同じ方向性を持ち、建物址との関連が考えられる。建物址は３棟とも北地区の②群の建物址と同じ方向性を持つ。

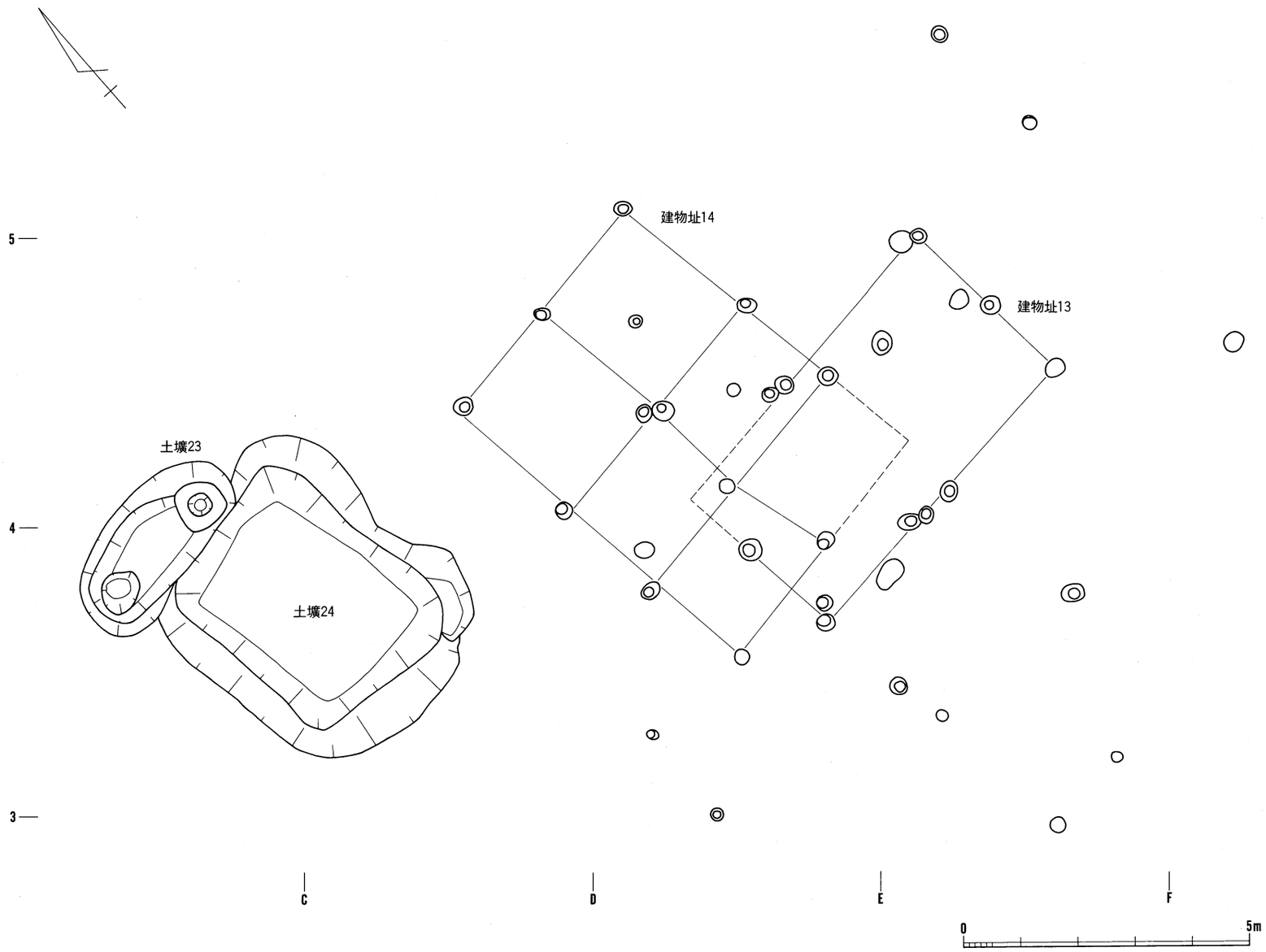
建物址12は３間×２間で、棟を東西に置く側柱建物である。建物址13は２間×２間で、棟をほぼ東西に置く側柱建物である。建物址14は３間×２間で、棟方位をほぼ南北に置く、総柱建物である。

２基の土壙の内、土壙23は土壙24を切った状態で検出された長径約3.4m・短径約1.7m・深さ60cmの土壙である。土壙の両端が円形に約10cm深くなっている。埋土は最下層に黒灰色シルト、それより上層は砂とシルトとが自然堆積した状態であった。

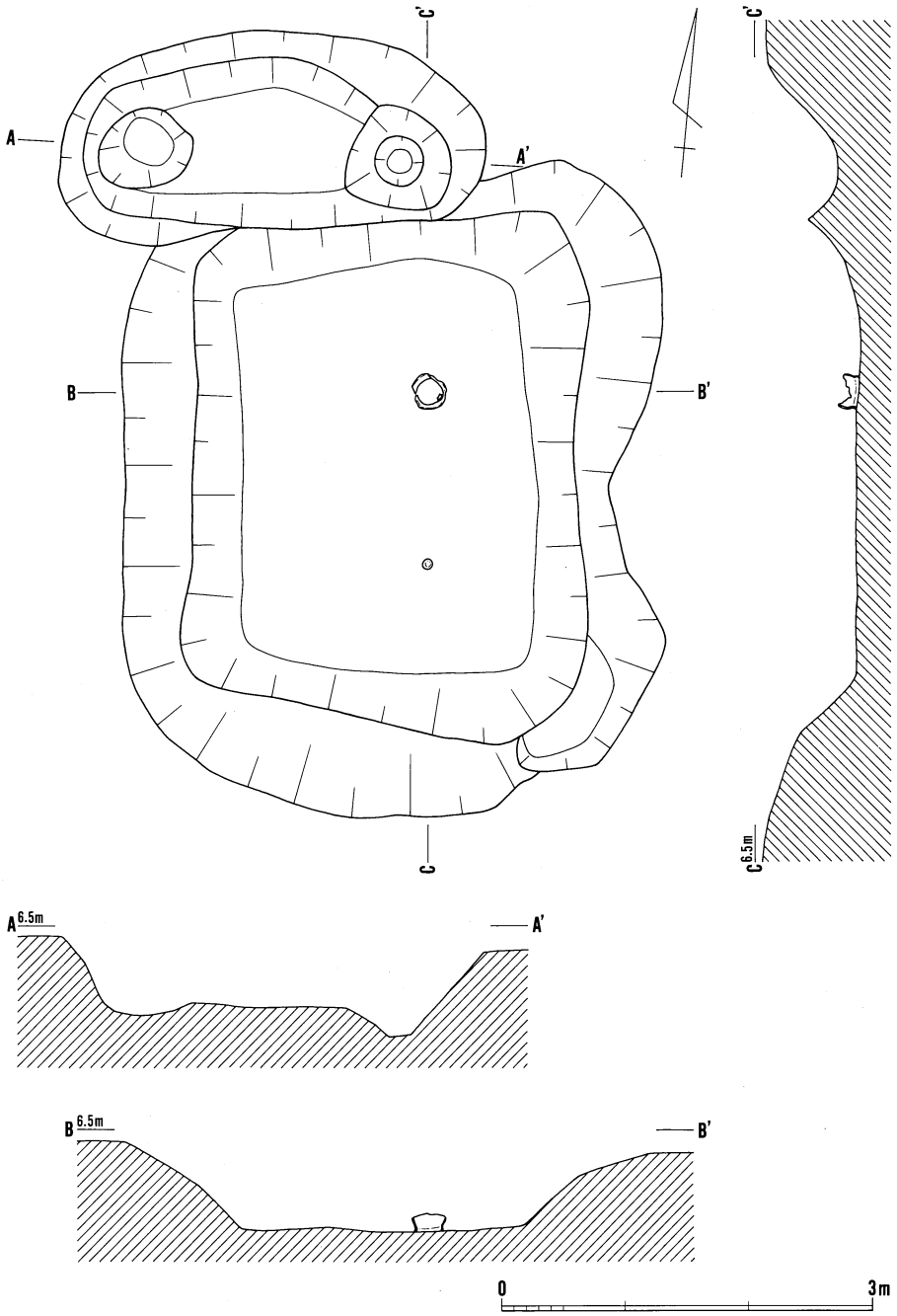
土壙24は長辺約５m・短辺約4.2mの隅丸方形の土壙で、深さは約75cmを測る。掘り方は中段までが緩やかな傾斜で掘られ、下段は急となる、２段掘りである。内部の埋土はシルトと砂の互層であり、土壙が自然に埋没したことが窺われる。(898～909) の土師器類が内部から出土しているが、(908) の土鍋は土壙の中央で底から浮いた状態で、逆転して出土している。



第32図　柱穴38遺物出土状態



第33図　南地区全体図



第34図　土壙23・24

表6　建物址一覧表

番号	規模 上段　間数 下段　cm	床面積 ㎡	棟方位	柱間		柱穴		柱痕	備考
				桁行　cm	梁行　cm	径　cm	深　cm	径　cm	
1	5×2(上屋部) (420×390)	16.4	N 9°E	上屋210 下屋 東桁行 70·110 170·210 240 西桁行 70·105 140·170	上屋195 下屋170 210	上屋30 ～50 下屋 20～40	上屋30 ～50 下屋 30～50	上屋 30～50 下屋 15～20	雨落ち溝(溝1・2)が巡る
2	3×2 (750×530)	39.75	N66°W	250	250·280	25～30	15～30	15	建物址3に切られる　土壙10に切られ、12·15を切る 建物址4・5・6と直交
3	3×2 (750×460)	33.75	N72°W	200·240 310	230	25～30	30～50	15～20	建物址2を切る　柱穴3本に根石 柱穴(190)に銅銭を埋納する
4	5×2(上屋部) (720×550)	39.6	N17°E	150·225	180·225	25～30	20～40	15～20	建物址3・5・6と同方向 建物址6を切る　西側に拡張か?
5	4×1 (760×190)	14.44	N15°E	140·190 250	190	30 40	20 40～50	20	建物址3・4・6と同方向
6	2×1 (440×220)	8.8	N17°E	180·218	220	25～40	20·60	15	建物址3・4・5と同方向 4本の柱穴で根石を検出
7	3×2 (550×480)	26.4	N87°W	275	150·180	30～40	25～50	15～20	建物址1と同方向 溝12·13を切る
8	3×2 (700×440)	30.8	N26°E	200·300	210	40 庇30	30～50 20	20 20	建物址2と同方向 溝13を切る
9	4×1 (920×210)	19.53	N12°E	240·210 張出 105	210	30	40～60	15	建物址10に切られる
10	2×1 (430×150)	6.45	N45°W	215	150	40～50	40	15	建物址11と直交　建物址9を切る 柱穴(38)に土師器皿を埋納する
11	5×2(上屋部) (690×370)	25.53	N45°E	上屋100 130 下屋110 210 260	上屋130 270 下屋90 130 260	上屋 20～40 下屋 30～40	上屋 40 下屋 40～60	上屋 15 下屋 15～20	建物址10と直交 建物址10を切る
12	3×2 (550×400)	21.30	N88°E	160 185 200	185 200	20～30	20 40 90	10	建物址13と同方向 建物址14と直交
13	2×2 (600×330)	19.8	N85°E	260·340	150·180	25～30	20	15	建物址12と同方向 建物址14と直交
14	3×2 (650×440)	28.6	N 8°W	265·200	240	25～30	40～50	10	建物址12・13と直交

第 3 章　遺　物

第 1 節　土器

1．縄文時代の土器

縄文時代後期の縁帯文土器に属する有文土器が多く、器形は基本的に深鉢形土器が大半であろう。ただし、口縁部のみの破片が多く、他の器形、特に鉢形土器が含まれているかもしれないが、口縁部だけで器形を区別することは難しく、よって小稿では口縁部の形態によって3類に分けた。a類は口縁部外面が縁帯状に肥厚して文様を有するものである。b類は口縁部内面が若干肥厚して文様を有するものである。c類は口縁部がT字形もしくは逆L字形を呈しているものである。b類と関係が深く、明確に分類しにくいものもこの類に含めた。この他、縁帯文土器とは異なる系統もしくは異なる時期と考えられる有文土器をd類とした。また、縁帯文土器に伴うと考えられる条線文深鉢形土器をe類とした。無文土器は巻貝条痕を有するものや口縁を肥厚させるものなど形態も様々で、時期が異なりそうなものも存在するが、まとめて記載した。

胴部破片や底部破片も多少、縁帯文土器以外のものも含まれると考えられるが、それぞれまとめてある。

有文土器a類（第35図）　泉拓良氏のいう深鉢A類の口縁に相当しよう。泉氏のいう北白川上層式1期に見られるようにしっかり縁帯が肥厚したり屈曲したりせず、いずれも穏やかな肥厚に留まっている。

（1・7・8）は縄文原体を横位回転押捺した後に、半截竹管状施文具によって区画している。本遺跡では縄文を回転押捺しているものは少ない。図化したもののみである。（7）は口縁が波状を呈し、波頂の下に櫛状施文具で縦位に条線を施している。（8）は縄文原体RLを横位回転押捺し、そのあと半截竹管状施文具による沈線で区画している。（2・3）は篦状施文具によって施文されている。これ以外は図に掲載したものはいずれも半截竹管状施文具によるものである。（5）は単位文様が同心円になるものであろう。（6）は口縁が波状を呈し、波頂部を中心に弧状沈線が左右対称に連続して施されている。（9）はほどんど肥厚しない。外面に櫛状施文具による条痕が見られる。(10) は若干口縁部が肥厚し、波状を呈する。(11) は口唇部を丁寧に面取りしている。(12) は口縁が波状を呈し、波頂直下に穿孔している。(13) も口縁は波状を呈している。波頂直下に内外面より竹管状施工文具によって刺突をしているが、穿孔はしていない。刺突を中心にして、弧状の沈線が施されているようだ。

有文土器b類（第36図）　泉氏のいう深鉢B類[註1]の口縁に相当する口縁部内面に文様を施すもの

である。a類同様穏やかな肥厚に留まっている。

(14) は、半截竹管状施文具による弧状の沈線文を単位文様として配し、直線の沈線文が単位文様の間を埋めるように施されている。(15) は半截竹管状施文具によって、波状をなす口縁に平行な沈線が2条施されている。外面には櫛状施文具による条痕が施されている。(16) は半截竹管状施文具によって縦位の短沈線が単位文様として配され、単位文様間に2条の沈線文が施されている。外面には、櫛状施文具による条痕が施されている。(17) は波条を呈する口縁に平行な沈線を施している。(18) は口縁に平行な半截竹管状施文具による幅広の沈線を2条施している。(19) は左右対称に弧状沈線を連続させたもので、口縁内面がやや肥厚している。(20) は口縁がやや屈曲し、c類に近い形状を呈している。半截竹管状施文具による幅広の沈線が施されている。

有文土器c類（第37図）　口縁が屈曲するものをc類としたが、a類、b類よりバラエティーに富んでいる。b類と区別しにくいもの（21・24・25・30等）、明確に屈曲させるもの（23・31・32・35～37等）、屈曲してはいるが外面に文様帯が向いているもの（34）、さらにそれらの中間的な形態を示すものも存在しているが、ここではc類をさらに分類はしなかった。

(21) は屈曲した口縁内面に縄文原体RLを横位回転押捺している。外面には櫛状施文具による条痕が施されている。(22・23) は口縁内面に縦位の短沈線を単位文様として施し、その左右に口縁と平行な沈線を施している（22も欠損しているが23と同じような文様構成であろう)。外面には櫛状施文具による条痕が施されている。(24・25・27・30・31・33) は口縁に平行な2条の沈線が単位文様の間に施されているのであろう。(25) は篦状施文具によって沈線が施されているが、それ以外は半截竹管状施文具によるものと思われる。(26) は縦位の短沈線を単位文様として施している。(28・29) は弧状の沈線を単位文様としている。(32) は2個の凹線が波頂部内面に単位文様として施されている。(34) は口縁部の断面はT字形を呈し、外面に条線を施す。こうした形状を示すものは少ない。(35) も外面に条線を施す。また、口縁に平行な沈線を条線と口縁直下の無文部との境界に施す。内面には縄文原体RLを横位回転押捺した後沈線で区画する。(36) は口縁部の断面T字形を呈するが、文様帯は内面に屈曲している。(37) も若干文様帯の幅が広いが (36) と同様な断面形態を示している。単位文様としては、同心円の弧状文を描き、その間を2条の沈線で埋める。

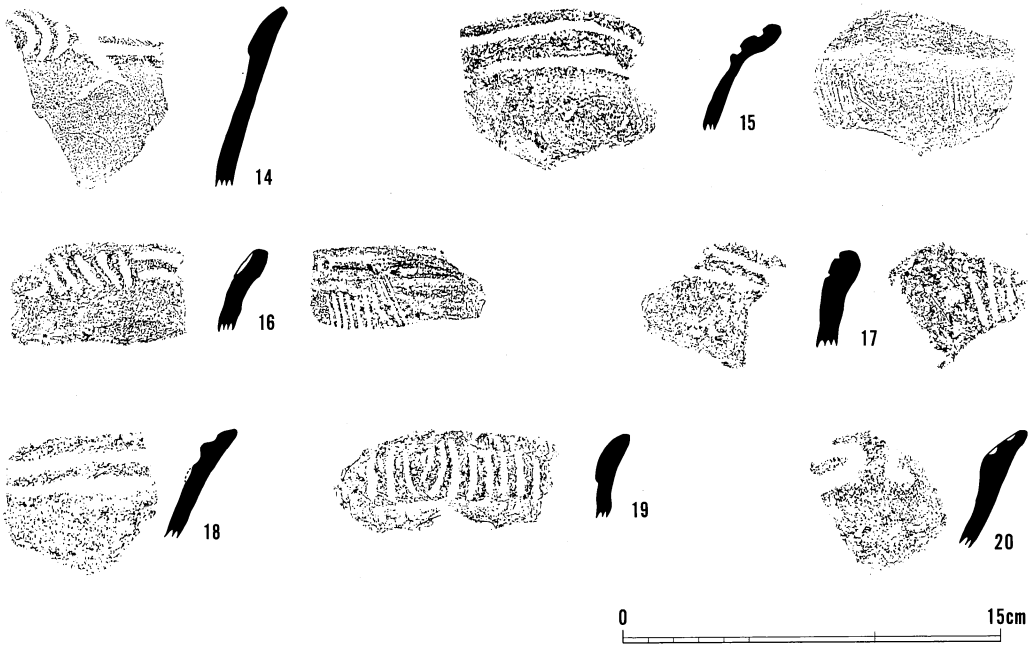
有文土器d類(第38図)　既に述べてきた縁帯文土器に含まれない有文土器をd類とした。(38) は口縁部の突起で中心を穿孔する。(39) は口縁端部を肥厚して窪ませる。特に外側の端部を刻んでいるが、これは「四つ池式」[註2]の特徴である。(41) は胴部が膨らむ壺形土器で、外面を向いた口縁端部に沈線を施し、縄文原体RLを横位回転押捺した磨消縄文である。九州の鐘崎式系土器と考えられる。関西では京都府舞鶴市桑飼下遺跡[註3]、和歌山県海南市溝ノ口遺跡[註4]などに類例がある。

第35図　縄文土器（1）

条線文土器（第38図）　条線のみで器面を飾った土器である。(42) は口縁部内面を緩く肥厚させる。(43) は口縁部が緩やかに外反している。いずれも縁帯文土器に伴なうものであろう。

無文土器（第38図）　(44・45) は口縁部が若干肥厚する。(46) は巻貝条痕を施す。(44～47) は縁帯文土器に伴うものであろう。(47・48) は器面調整や口縁部の形態により時期が異なるものと考えられるが、これらに対応する有文土器が本遺跡では出土していない。

有文胴部（第39図）　(49・50) は胴部に3条の沈線を施し、前述の「四つ池式」のものか。(51



第36図　縄文土器（2）

～53・55～59）は条線を施す。（54）は胴部の単位文様で同心円を描いている。（60）は縄文地の胴部である。これらは全て縁帯文土器に伴うものである。（61）は磨滅していて分かりにくいが、2条の沈線の間に縄文原体ＲＬを横位回転押捺している磨消縄文である。後期初頭のものか。

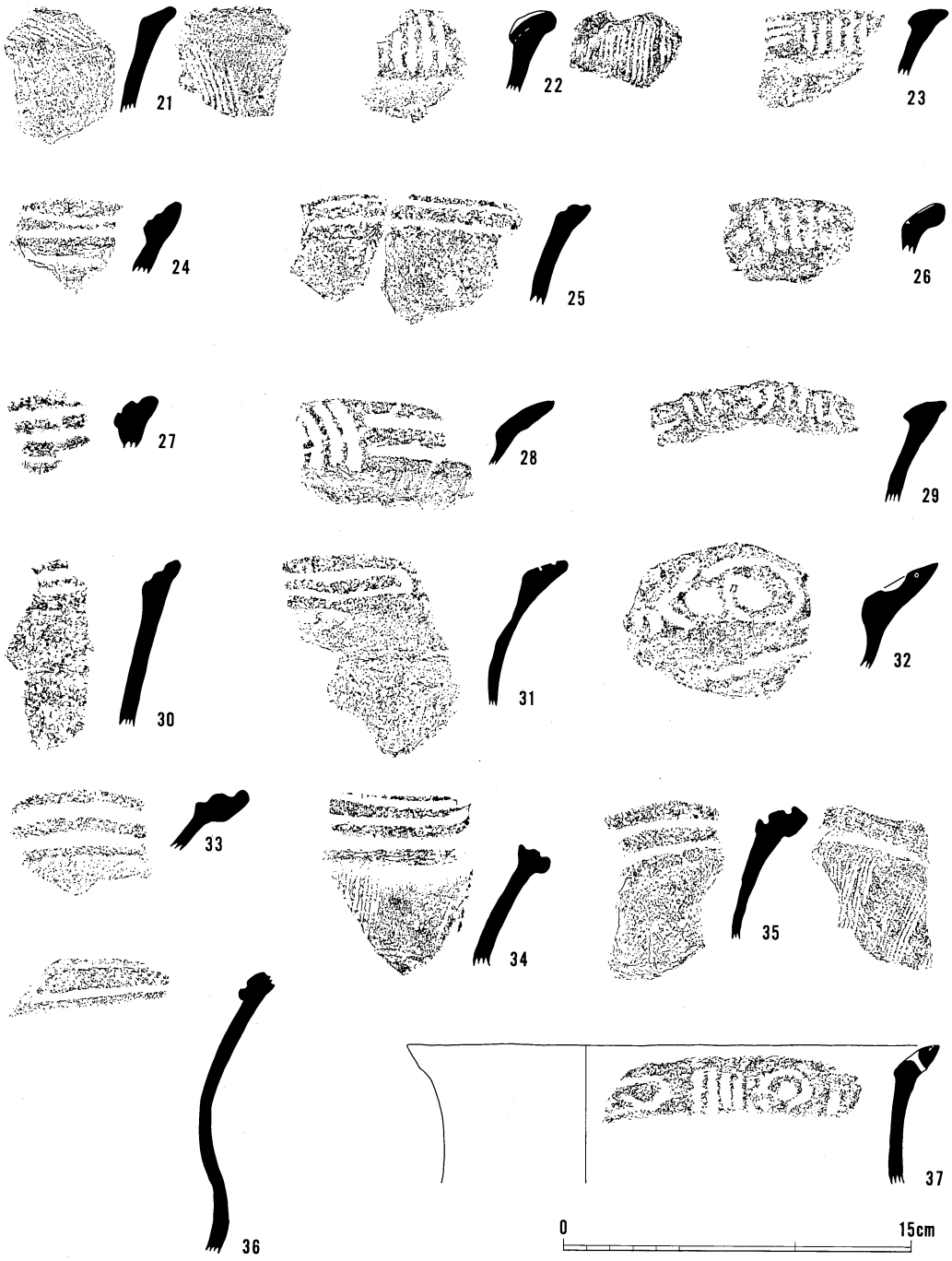
底部（第39図）　（62）は短い脚を有し、（65～68）は凹底である。（63・64）は平底である。凹底が多く見られるが、津雲貝塚をはじめとする瀬戸内の土器の特徴である。

まとめ

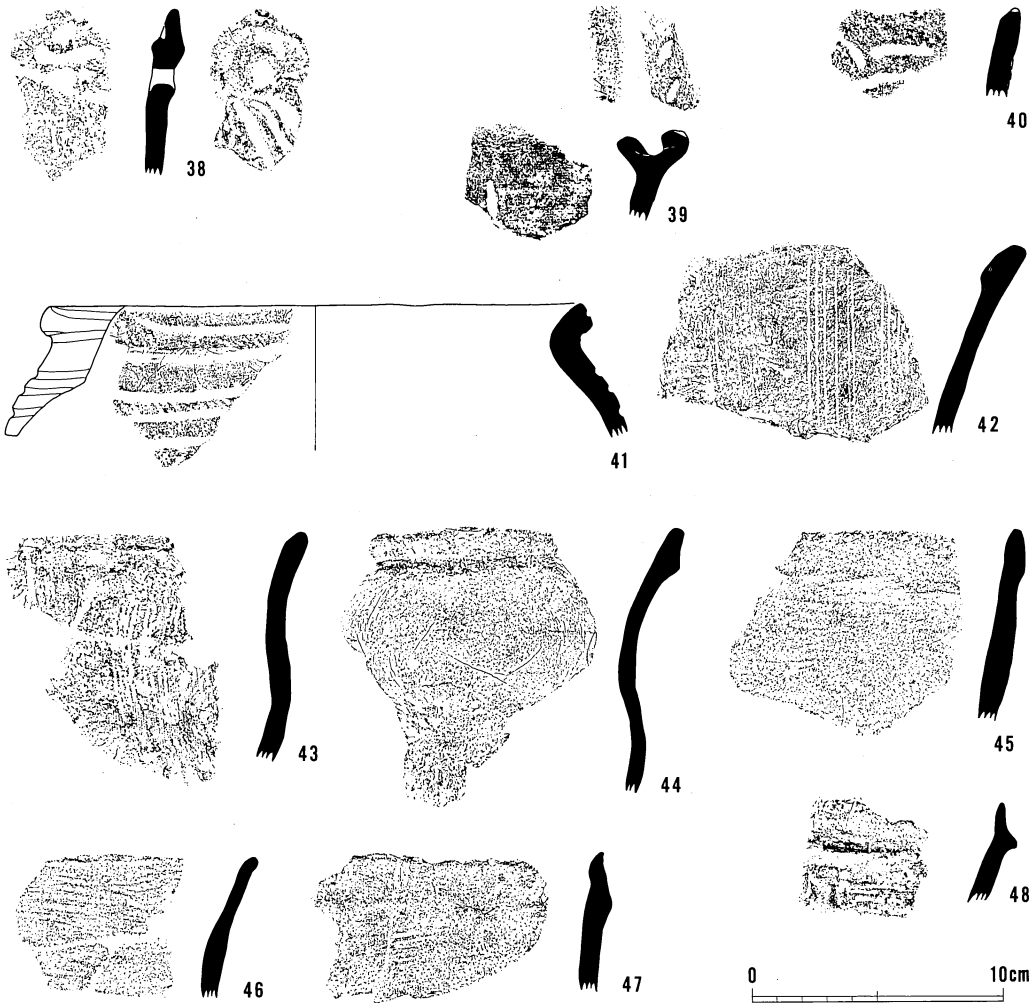
基本的に縄文時代後期前葉の資料であるが、一部後期初頭に遡りそうなもの（61・中津式、39・「四つ池式」）や晩期に下るようなもの（47・48）がある。しかし、基本的には北白川上層式1期の範疇に収まるものであろう（特に新しい様相を示すものであろう）。

口縁の形態は大きく3類に分類したが、いずれも北白川上層式1期や2期に見られるものである。既に述べたが、京都大学植物園の資料[註5]などによる1期のものと比較すると外面を肥厚するａ類の屈曲がなだらかで、内面に施文するものが多い。また、文様に関しては、単位文様に弧状文や縦方向の短沈線を配する文様が大半を占め、こうした単位文様の間を沈線で区画したり埋めたりしている。これらは地域差であると考えるよりは所謂1期の資料よりやや後出のものであるためと考えたい。

他地域の土器に関しては、近畿地方では当該期に一器種として存在していたと考えられる堀



第37図　縄文土器（3）



第38図　縄文土器（4）

の内式系の土器が存在せず、かわりに九州の鐘崎式系の土器（41）が見られる[註6]。これも本遺跡の地理的条件によるものと考えられる。

註1　泉拓良「後期の土器―近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣　1981年

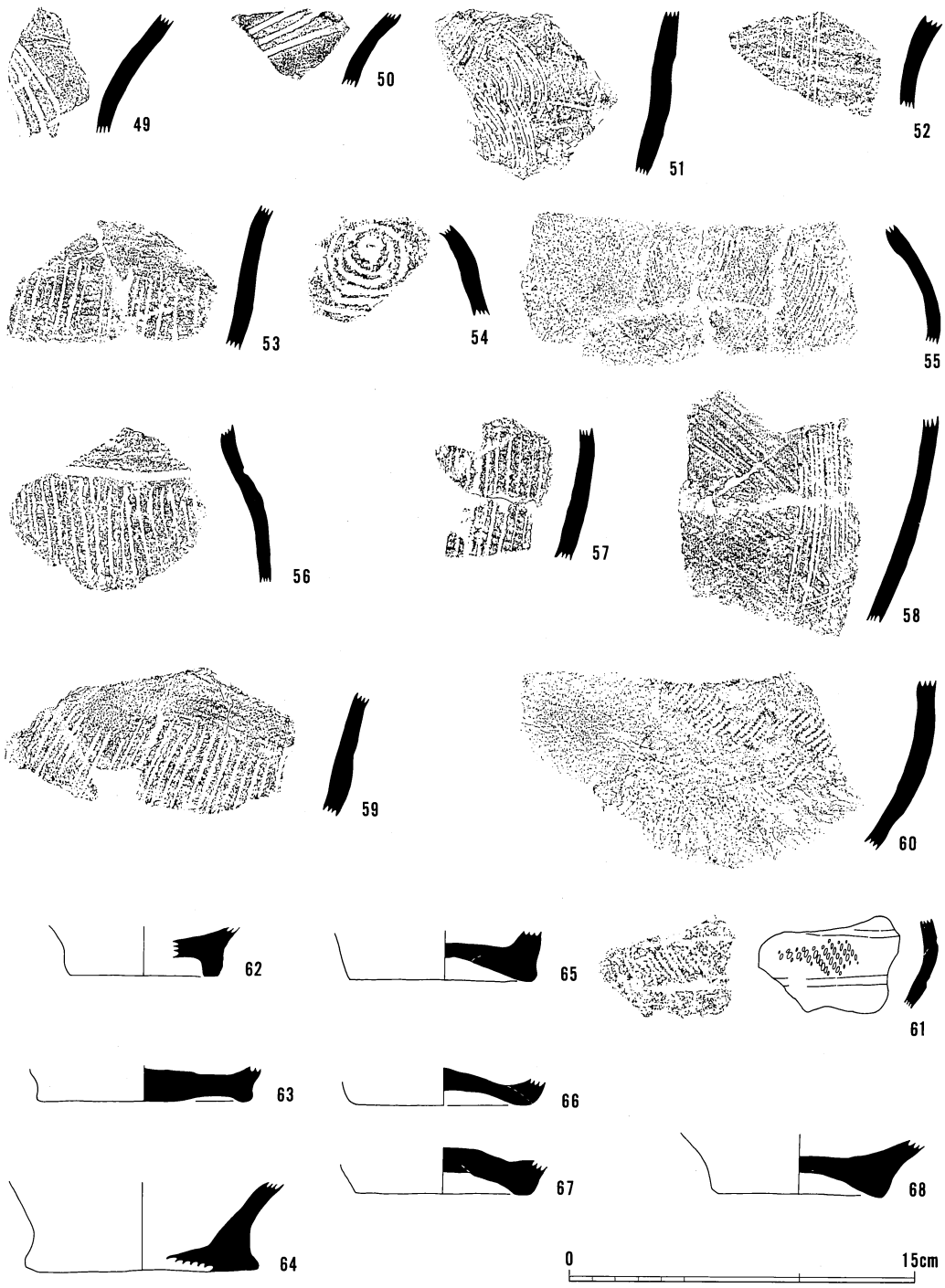
註2　泉拓良・玉田芳英「文様系統論―縁帯文土器―その成立を中心に」『季刊考古学』17　雄山閣　1986年

註3　渡辺誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』　平安博物館　1975年

註4　中尾憲市・前田敬彦『溝ノ口遺跡』Ⅱ　海南市教育委員会　1987年

註5　中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』1974年

註6　千葉豊氏の御教示による。



第39図　縄文土器（5）

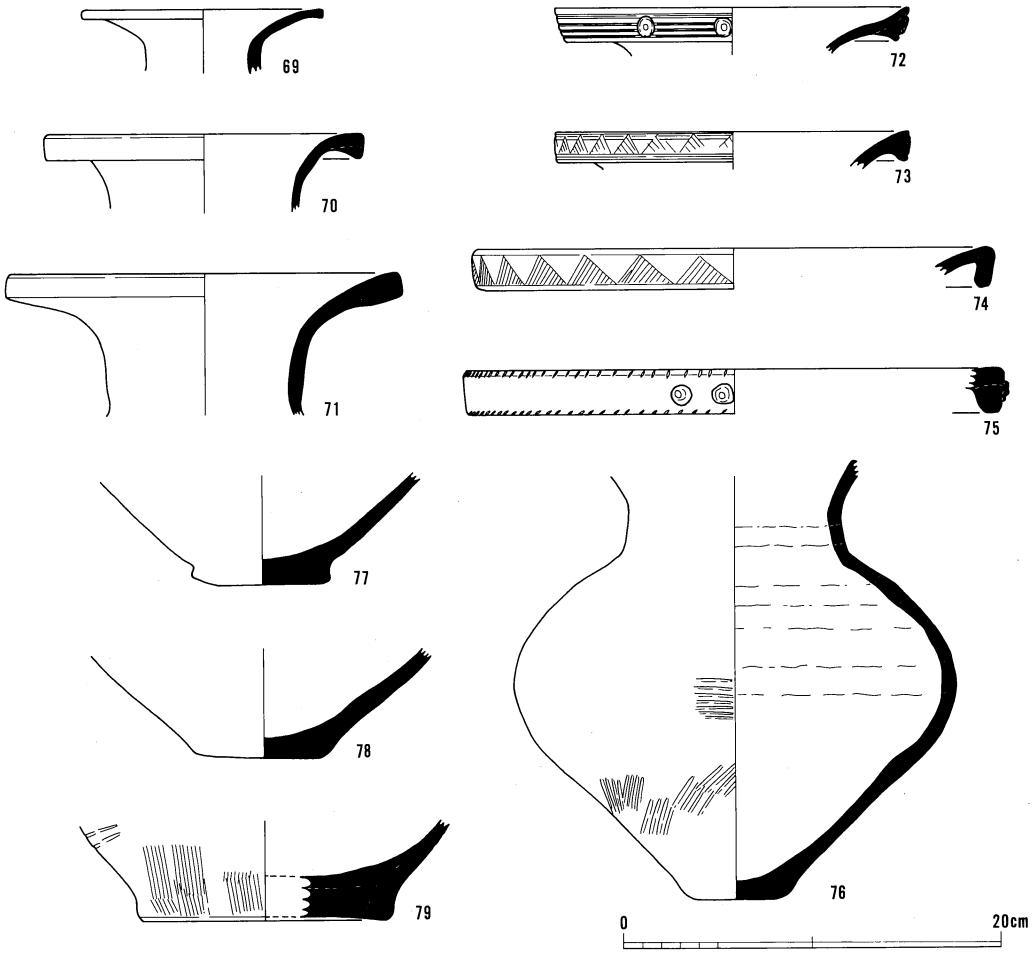
2．弥生時代～古墳時代前期の土器

この時期の遺物は住居址１～６、土壙１・３・６・７、溝40～43、旧河道下層、包含層等から多量に出土しており、遺跡全体から出土した遺物量の半数近くを占める。ただ破片が多く、完形に復元できたものは少ない上、遺存状況が悪く、調整等の不明なものが多い。

溝42出土土器（第40・41図、図版第十五）

壷・甕・鉢・高杯・器台が見られ、他に壷底部と甕底部が見られる。

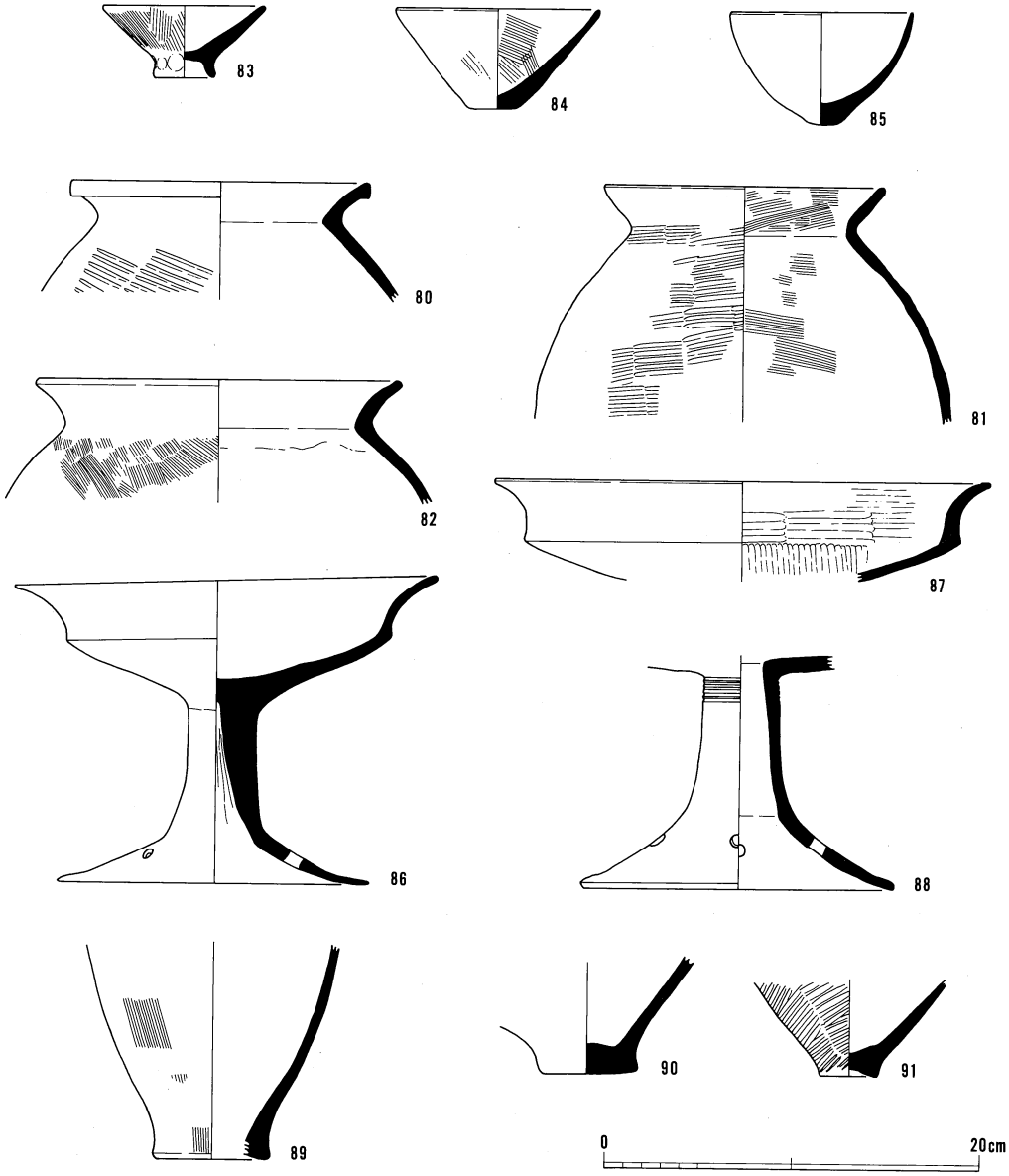
壷類（69～76）の内、（71）はＡ２類に、（70）はＡ３類に、（69）はＣ１類に、（72）はＥ１類に分類され、（73～75）はＡ～Ｃに分類した広口壷に属するものであろうが、小片のため特定できない。（69～71）の口縁端面は無文であるが、（72）の口縁端面には４条の凹線が施された後竹管円形浮文が貼り付けられ、（73）は口縁端面の上下端に凹線を施し、その間を鋸歯文



第40図　溝42出土土器（１）

で、(74) の端面は鋸歯文だけ、(75) は口唇部と端面下端に刻み目文を施し、端面には2個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。(76) の壷体部は頸部中央に屈曲が見られ、C類に属するものと思われるが、口縁端部を欠くことから詳細は不明である。体部中位下半に屈曲が見られ、体部上半と下半では内外面の調整に差異があることから、分割成形されたものであろう。

甕 (80～82) の内、(80) はB3類に、(81) はE3類に、(82) はF1類に分類されるもの



第41図　溝42出土土器（2）

であるが、器面の遺存状況が悪く調整は不明な部分が多い。(82) は体部の外面を刷毛調整しているが、粗い刷毛である。

鉢類 (83～85) には、B 1 類に属するもの (83・84) 2 点と、B 3 に属するもの (85) が見られ、(83) は他のB 1 類と異なり、底部は上げ底になっている。(85) の底部は小さな平底である。

高杯類 (86・87) にはA 1 類に分類される (87) と、A 2 類に分類される (86) があり、(87) の口縁は体部より器壁が厚くなっている。(86) はほぼ完形に復元されたもので、脚部は柱部が厚く、脚柱部が下端で屈曲して裾部となり、裾部は大きく広がる。(86) は脚部に僅かに篦磨きの痕跡が残り、(87) は内面に篦磨きが残る。

(88) は器台の脚部で、受け部を欠損しているが、受け部の底部は横方向に広がっている。脚部上端に沈線が施され、形態的には高杯A 1 類の脚部に類似する。

(77～79) は壷の底部と思われるもので、すべて体部から突出している。(89～91) は体部から突出した甕の底部で、(89) は体部下半まで残るが、細長い形状を呈し、底部の形状も古い様相を示している。(91) は底部輪台技法である。

以上の出土土器の内、壷A 2 ・A 3 類に属する (71・70) と類別の不可能な (73～75)、甕B 3 類 (80)、鉢B 1 類の内の (84)、高杯A 1 ・A 2 類の (87・86) と器台 (88) は弥生時代後期でも前半から中半と考えられるのに対し、甕E 3 とF 1 類の (81・82) と鉢B 1 とB 3 類の (83・85) には新しい様相が認められ、庄内併行期頃に位置付けられるものと思われる。

溝43出土土器 (第42図)

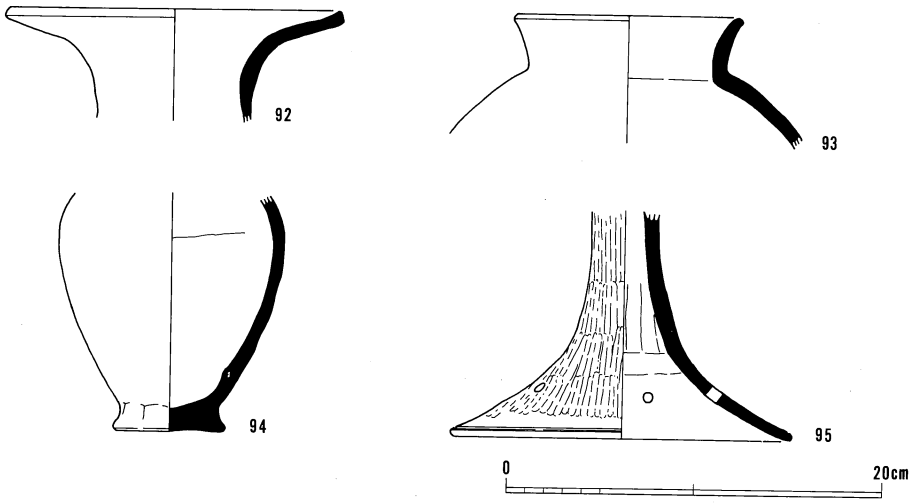
溝42と合流して南北に走行する溝であるが、壷・甕等が出土している。壷にはD 1 類に属する (92)、I 3 類に属する (93) があるが、遺存状況が悪く、調整等は不明である。

(94) は小形の甕の体部であるが、口縁部を欠損しているため、類別は不可能であった。ただ体部は肩部が張り、踏ん張り気味に下外方に開く底部の形状は甕C 1 類に類似している。(95) の脚部は器台か高杯と思われるが特定はできない。脚柱部が細く、裾部が外反して開く形状は高杯A 1 類の (280) の脚部と類似している。

溝40出土土器 (第43・44図)

埋土は上下 2 層に分けることが可能であったが、出土した遺物は上下層とも混じり合っており、ここでは一括して扱った。出土遺物には壷・甕・鉢・高杯・器台がある。

壷 (96～109) にはA 2 (96) ・A 3 (104) ・A 4 (101・107) ・A 5 (100) ・F 6 (108・109) ・I 1 (99) ・I 2 (97・98) 類が見られ、他に広口壷でA類に属すると思われるが、帰属の不明な (102・103・106)、壷か器台か判別できない (105) がある。A 3 類の (104) は頸部が短い特徴を持つ。また (98) は胎土、調整が他の壷類と異なり、新しい様相を示し、住居址 7 に属する可能性がある。壷類の内、A 2 (96) ・A 4 (107) ・A 5 (100) ・I 2 (98)



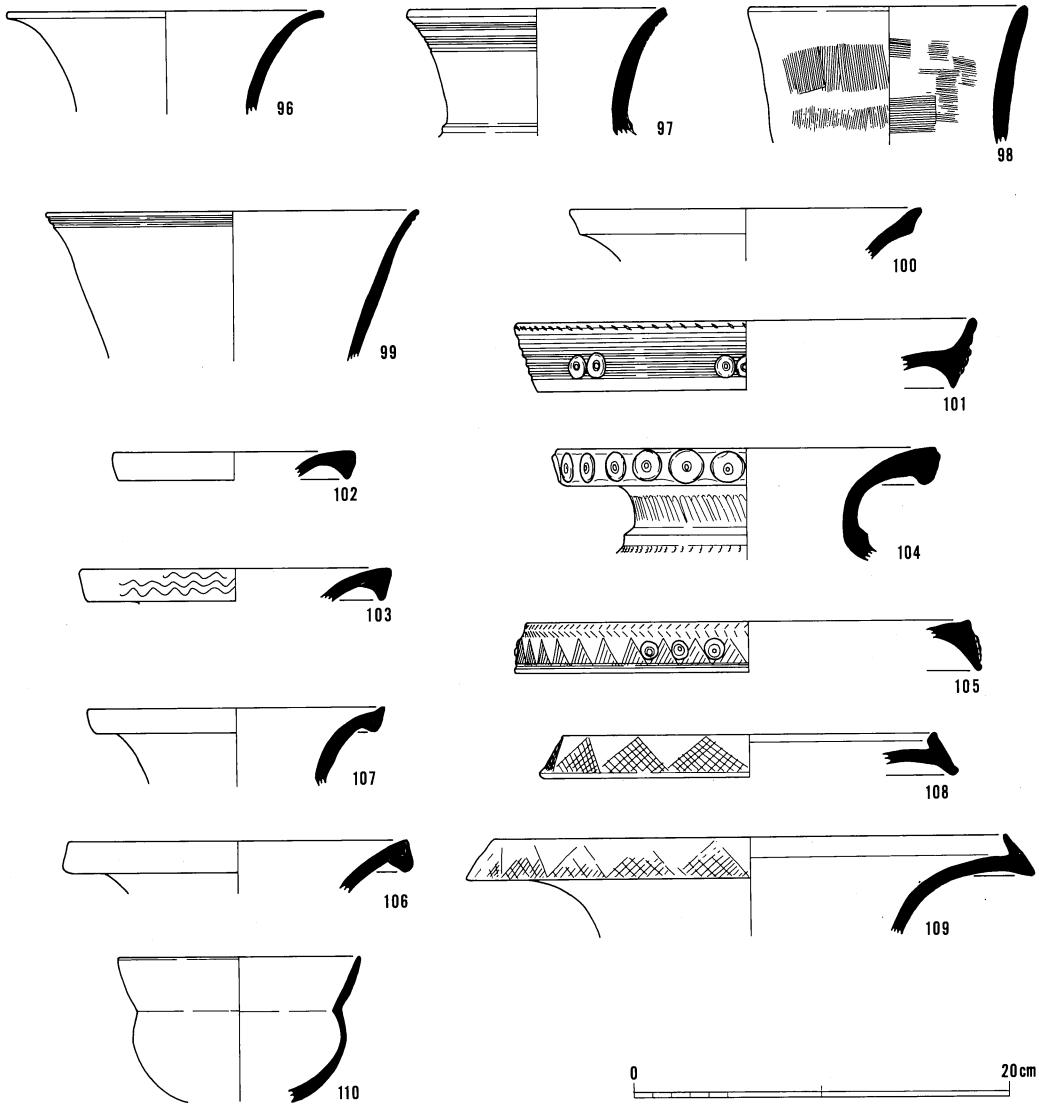
第42図　溝43出土土器

類と帰属の不明な（102・106）は口縁端面に文様は認められないが、他の壷類の口縁端面は加飾される。口縁端面に竹管円形浮文だけを貼り付けたもの（104）、凹線文の上から竹管円形浮文を貼り付け、さらに口唇部に刻み目文を施したもの（101）、上端に綾杉に列点文を、下端に凹線を施し、その間に鋸歯文と3個1組の竹管円形浮文を施したもの（105）、内部を格子状とした鋸歯文を施したもの（108・109）、1条単位に施した3条の波状文を施したもの（103）が見られる。

甕（111～118）にはA1（111・116）・B1（112～114）・B2（115）・E2（117）・F1（118）類が見られるが、A1（111）・B1（112～114）・B2（115）類は口縁端部にしっかりした面を持つ等、弥生時代後期でも比較的古い様相を示す。それに対しF1類の（118）は口縁端部が長く伸び、口縁部外面を粗い縦方向の刷毛で調整する等、新しい様相を持っている。（116）は口縁部に刻み目文が施され、紀伊系の特徴を示している。

鉢類はB3類に属する（119）1点だけが出土している。（119）はB3類の中では底部が上げ底になる特徴を持つ。

高杯はA類の（122）とA類に属するものと思われる（123）があり、他に脚部（124～126）が出土している。（122）は長く伸びる口縁部が端部付近でやや内彎する特徴を持つ。（123）は杯体部が内彎しているが、体部から口縁部への屈曲は鈍く、A4類に属する可能性が高い。（123）の脚部は脚柱部が中実で、裾部は脚柱部から屈曲して内彎しながら広がる。脚部（124～126）の内、（124）は「ハ」の字状の脚部で、（125）は中央が膨らんだ中空の脚柱部から屈曲して裾部が開く。（126）は太い中空の脚柱部から外反して広がる裾部を持ち、脚柱部上端に沈線が施されている。（125）は古式土師器でも新しい様相を持ち、（126）は弥生時代後期の土



第43図　溝40出土土器（1）

器の中でも比較的古式の様相を持つ。

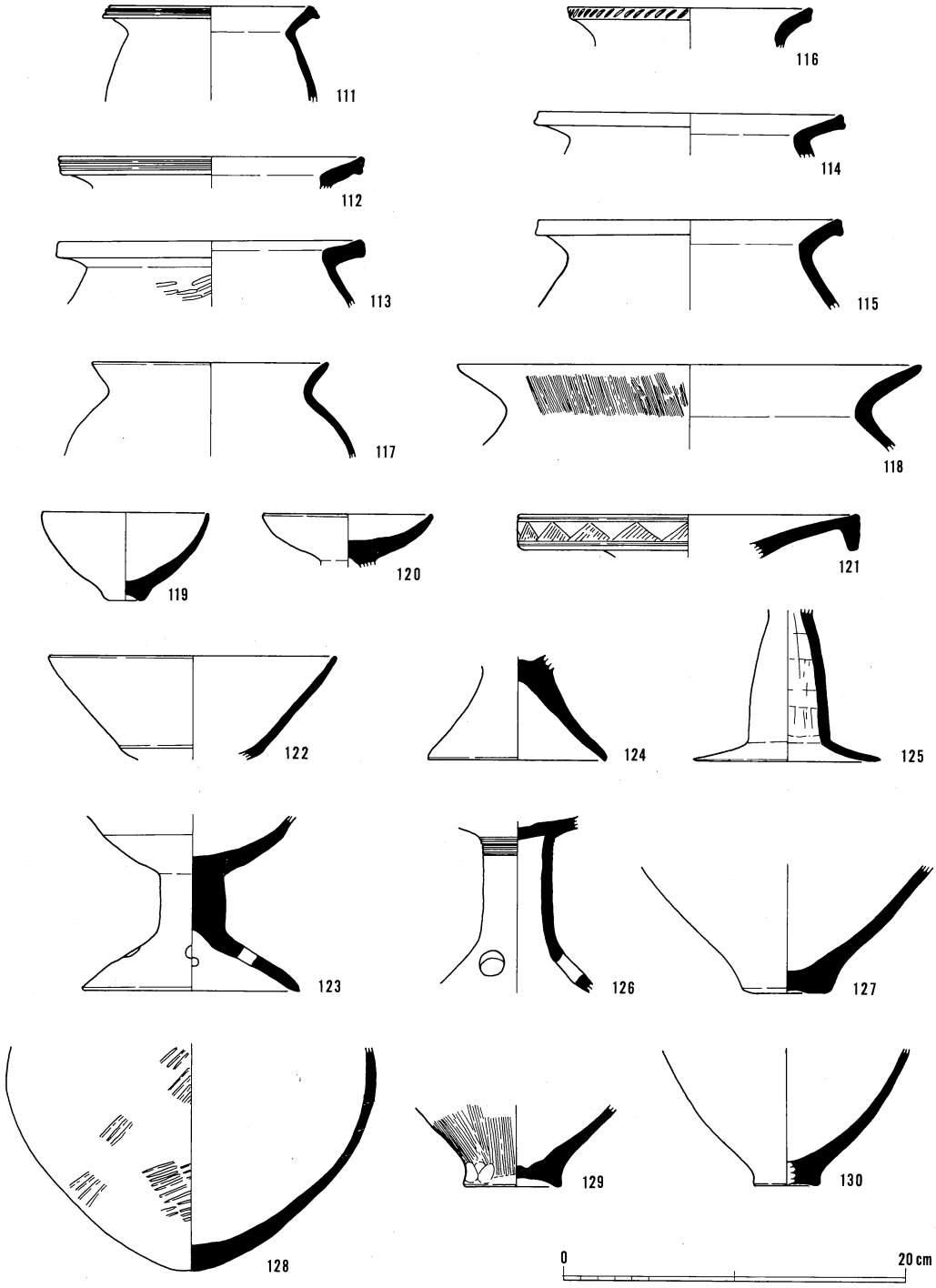
器台はB類に属する（121）、D２類に属する（120）の２点が出土している。（121）の口縁端面には上下端に凹線が施され、その間に鋸歯文が施されている。

小形丸底壷はD類に属する（110）１点が見られ、埋土上層から出土している。

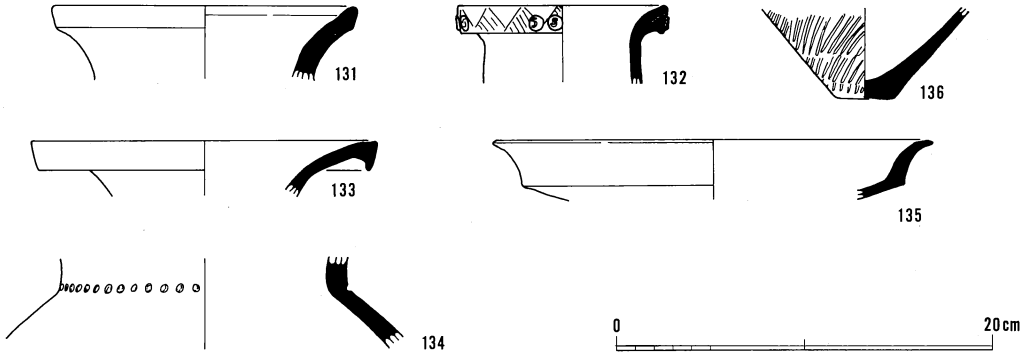
住居址４出土土器（第45図）

壷４点、高杯１点・甕か鉢の底部１点の計６点が図化できたが、全て埋土からの出土である。

壷にはA３（133）・A５（131）・C２（132）類と、帰属不明な頸部から体部にかけての



第44図　溝40出土土器（2）



第45図　住居址４出土土器

破片（134）がある。Ａ３（133）・Ｃ２（132）類は外面に縦方向の篦磨きの痕跡が残る。(132)は頸部から屈曲する口縁が短く、Ｃ２類としたが、特異な存在である。(132)は口縁端面に鋸歯文と２個１組の竹管円形浮文、(134)は体部と頸部の境に竹管文が刺突されている。

高杯（135）はＡ１類に属するものであるが、口縁端部内面が強いヨコナデで凹線状に窪む特徴を持つ。また口縁部は体部より器壁が厚くなっている。

(136)の底部は外面に右上がりの叩きを残し、甕か鉢と思われるが、特定できない。

住居址１出土土器（第46図、図版第十五）

住居址内に落ち込んだ状態で、ほぼ完形の鉢（137）と壷の体部（138）が出土している。(137)は鉢Ｃ１に分類されるが、他のＣ１類とは異なり、体部がほぼ直線的に伸びる特徴を持つ。また底部周囲を篦削りすることによって、突出した底部を作り出している。(138)の壷体部は小さな上げ底の底部を持つ。口縁部を欠くため、類別は不可能であった。

住居址２出土土器（第46・98図、図版第十五）

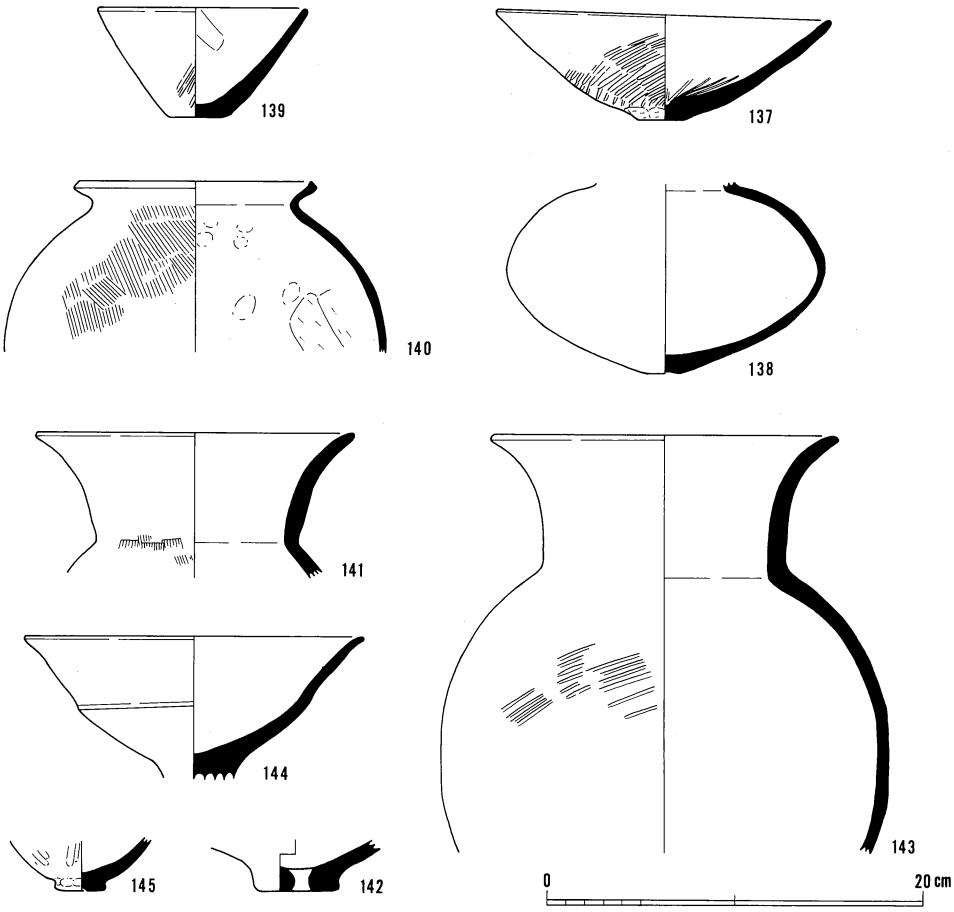
Ｇ１類に属する甕（140）とＢ１類に属する鉢（139）の２点が出土している。(140)の甕は所謂讃岐系の甕に属するものであるが、体部は強く張って、新しい特徴を持つ。(139)の鉢は底部周囲に絞り痕が残る。他に櫛描波状文が描かれた壷体部片を利用した紡錘車（第98図５）が出土している。

住居址５出土土器（第46図）

住居址内に落ち込んだ状態で、(141)の壷口縁が出土し、(142)の底部は埋土からの出土である。(141)は壷Ａ２類に属するもので、端部は丸く納められる。内面に僅かに篦磨きの痕跡が残る。(142)は有孔の底部で、穿孔は焼成前に内側から行われており、鉢になると思われる。

住居址６出土土器（第46図、図版第十五）

(143～145)の３点が図化でき、住居址中央の中央土壙付近の床面から（144）の高杯が出土し、(143)は中央土壙内から出土している。(143)は壷Ａ１類に分類されるが、口縁端部は丸



第46図　住居址1・2・5・6出土土器

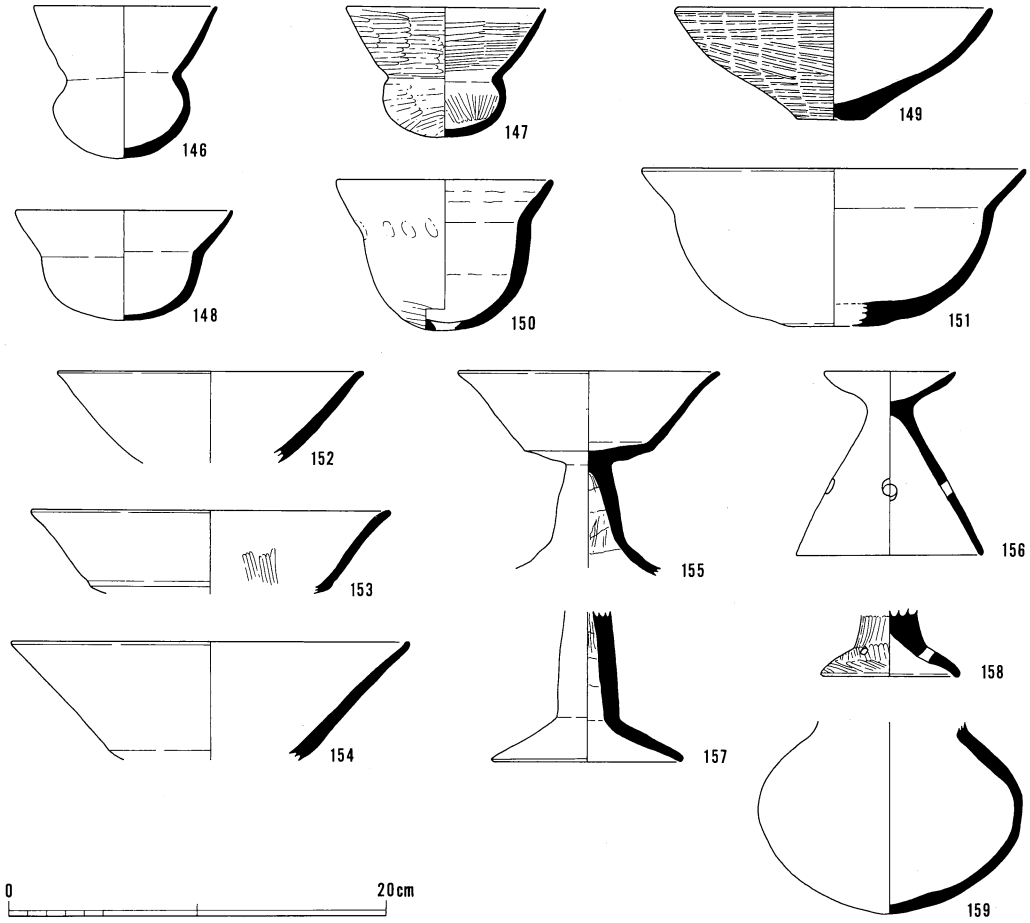
く、頸部は直立する。外面は叩き後にナデ調整されるが、調整が粗く、叩きの痕跡が認められる。(144) は高杯A 3類に分類されるが、体部と口縁部の屈曲部は内彎するだけに退化している。(145) の底部は体部外面に篦磨きの痕跡が残り、鉢になるものと思われる。

土壙1出土土器（第47・48図、図版第十六）

今回の調査では最もまとまった状態で出土したである。

出土した土器には壷・甕・鉢・高杯・器台の他、高杯と思われる脚部片が見られるが、壷は (159) の小形壷の体部が見られるだけである。(159) の底部は尖り気味の丸底である。

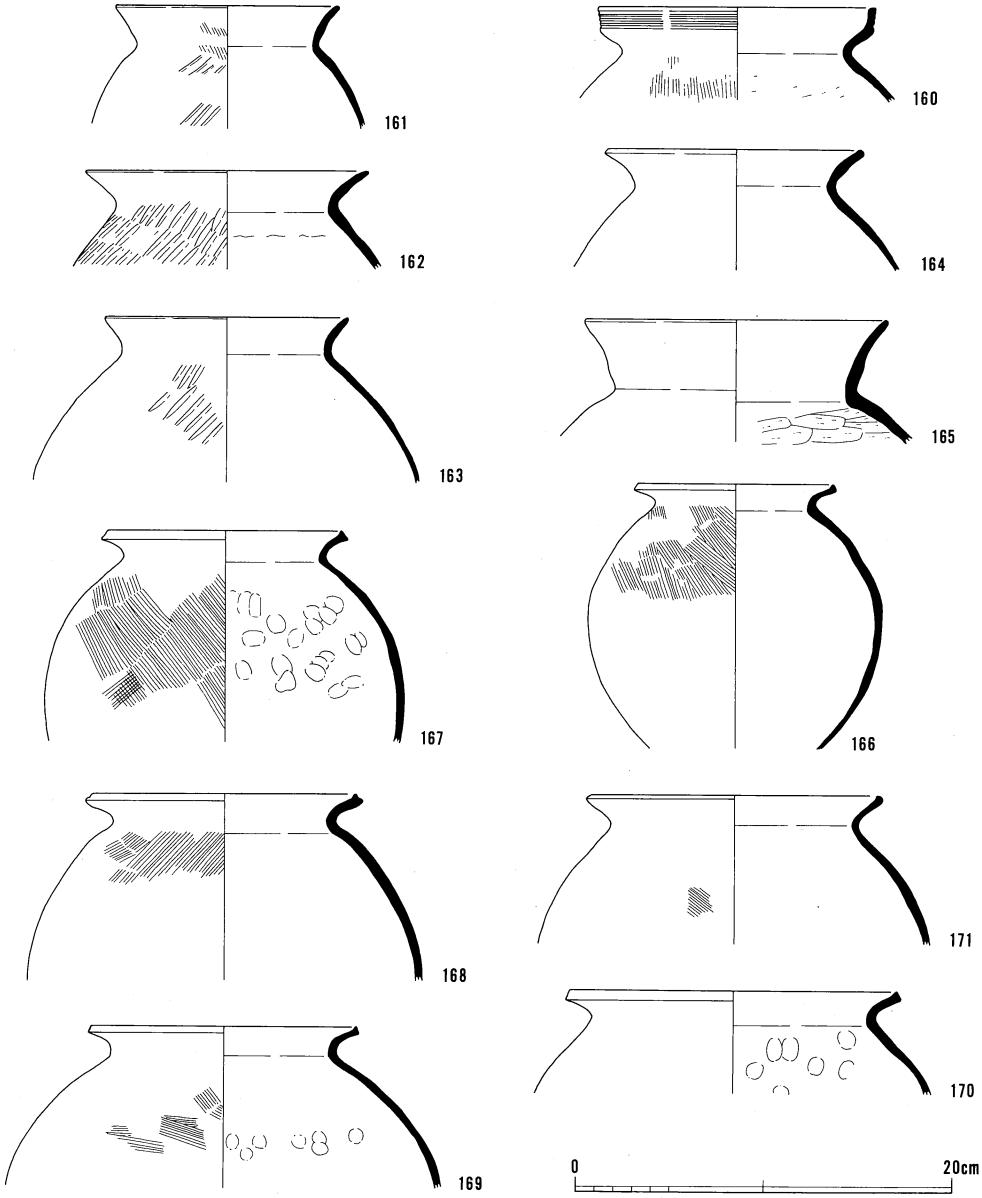
小形丸底壷（146～148・150）には精製のB類に分類されるもの（146・147)、頸部が窄まらずD類に分類されるもの（148・150）がある。(146) は器表が剝離しているため、調整ははっきりしないが、一部に篦磨きの痕跡を残している。(150) は頸部外面に指押さえの痕跡が残り、粗製であり、鉢に分類されるべきものかも知れない。



第47図　土壙１出土土器（１）

甕（160～171）はＥ２（161～163）・Ｅ３（165）・Ｆ１（164）・Ｇ１（166～170）・Ｇ２（171）・Ｈ１（160）類が見られ、Ｇ類が図化した甕の半数を占める。体部から屈曲して外反しながら外上方に伸びる口縁を持つＥ２類（161～163）は体部外面に叩き目を残し、（161）は口縁部外面に刷毛の痕跡を残している。Ｇ１（166～170）・Ｇ２（171）類は（170）を除いては体部外面に細かな刷毛目が見られ、（167・169・170）は内面に指押さえの痕跡を残す。Ｇ２類（171）は口縁部が外上方に直線的に伸び、Ｇ１類の退化した型式と考えられる。Ｈ１類の（160）は口縁部外面に櫛描きの直線文が施され、体部内面は篦削りされる。所謂酒津式の範疇で捉えられるものである。

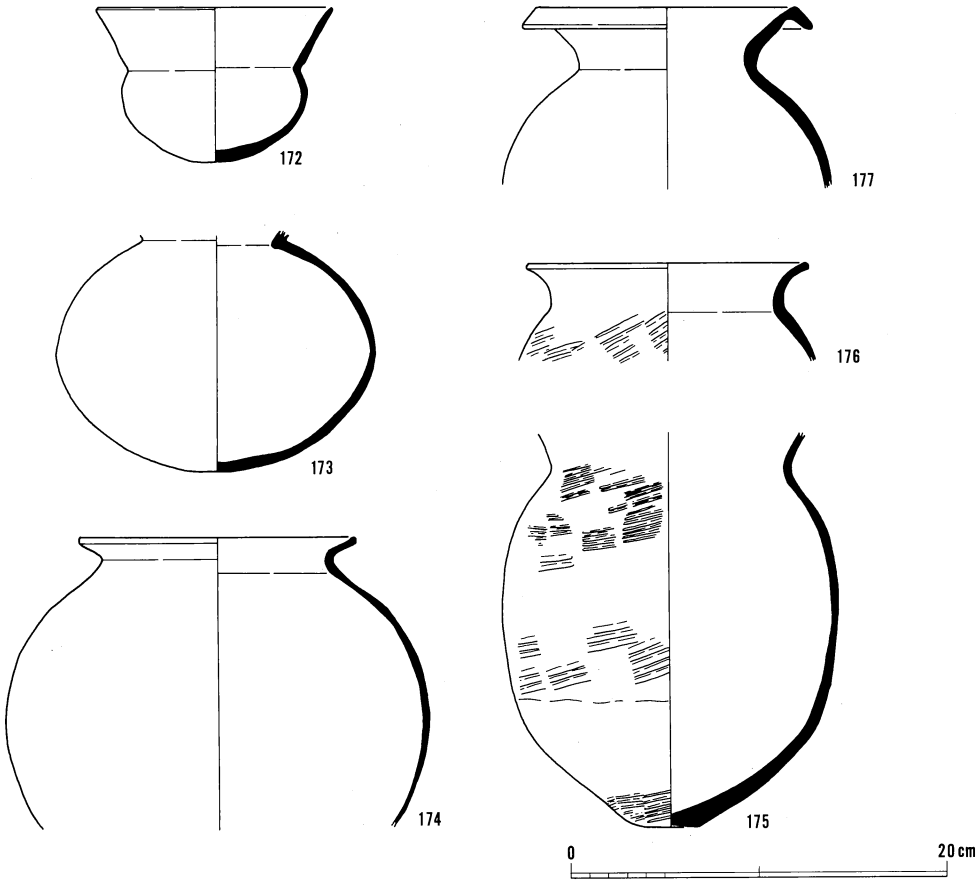
鉢はＡ３（151）・Ｃ１（149）に分類される２点が出土している。（151）は他のＡ３類の鉢と比較すると体部が深い。（149）は体部外面全体に叩き目を残し、底部は中央がやや窪んだ平底であり、古い様相を残している。



第48図　土壙１出土土器（２）

高杯（152～155）は、（155）だけがＢ１類に分類される。口縁部は上半で外反し、脚部は脚柱部中央が膨れ、中空である。残る３点は体部を欠くため、類別は不可能であった。ただ（153・154）は口縁部が屈曲することからＡ類かＢ類に分類されるものである。また（154）は口縁端部が僅かに上方に摘み上げられている。

器台はＤ２類に分類される（156）１点だけが見られ、脚部は内彎気味に下外方に伸びる。



第49図　土壙4・6・7出土土器

比較的脚部が長い特徴を持つ。

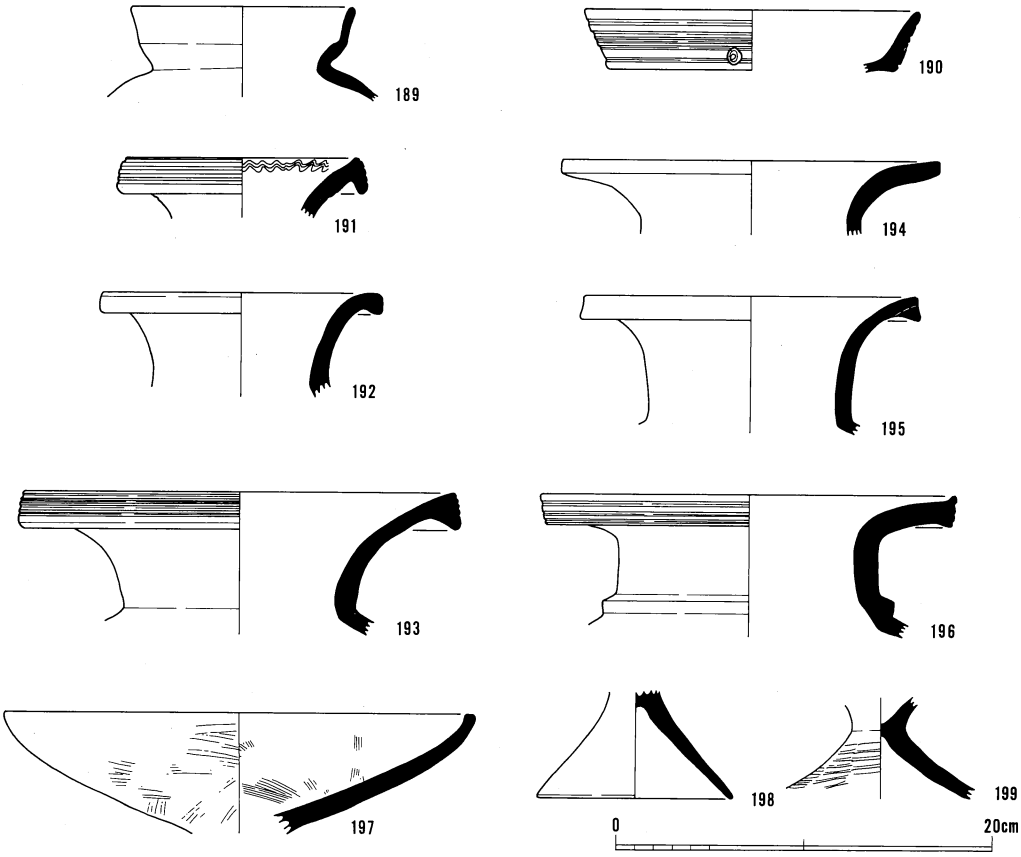
(157) は中空の脚柱部が下端で屈曲して裾部となるもので、(158) は小形で短い脚柱部と内彎して開く裾部を持つものである。(158) の外面は丁寧な篦磨きが施されている。

土壙6出土土器（第49図、図版第十五）

住居址6の南側で検出された土壙で、ほぼ床面上から (172～175) の土器が出土している。

出土土器には壷・甕があり、(173) は丸底で偏平な体部であり、頸部が細いことから長頸壷か直口壷になる可能性が高い。器壁が薄い特徴を持つ。(172) は小形丸底壷Cに分類されるものであるが、口縁部が長く、端部付近で外反する特徴を持つ。

甕 (174・175) は (174) がG1類に分類されるが、調整は全く不明である。(175) は、類別ははっきりしないが、口縁下半部が外上方に伸びることから、E2類になる可能性が高い。体部下半が屈曲し、その部分に接合痕を残すことから、分割成形と思われる。



第50図　旧河道出土土器

土壙4・7出土土器（第49図）

ともに1点づつの出土であるため、まとめて記載する。

（177）の壷は土壙7から出土したもので、B2類に分類されるものである。

（176）は土壙4出土の甕で、甕E1類に分類されるが、口縁端部には小さな面を持つ。

旧河道出土土器（第50図）

河道内の中層（礫層）と下層（青灰砂等）に混じり込んでいた古墳時代前期以前の土器をここで扱い、壷7点、甕・高杯・蓋がそれぞれ1点の他、高杯脚部1点を図化した。

壷（190～196）は（192・193・195）がA3類に、（191）がB2類に、（194）がC1類に、（196）がD1類に、（190）がF3類に分類される。（191・193・196）は口縁端部外面に凹線が施され、（191）は口縁端部内面にも櫛描きの波状文が施されている。（196）は頸部と体部の境に凸帯が巡らされている。（190）は口縁端部外面に凹線が施され、竹管円形浮文が貼り付けられる。（192・194・195）は無文で、（195）は頸部と体部の境が屈曲することから、体部は球形に近い形状

になるものと思われる。

甕はＨ１類に属する（189）１点があるが、他のＨ１類と比較するとロ縁の屈曲は甘く、頸部は外上方に短く開く。ロ縁部外面は無文であり、Ｈ１類の中では退化型式と思われる。

高杯（197）はＤ類に属するもので、ロ縁端部は凹状となる面を持ち、内外面に篦磨きの痕跡が残る。瀬戸内系統の土器と思われる。

（199）は蓋形土器の破片と思われるが、両端部を欠損し、はっきりしない。外面に叩きの痕跡を残す。（198）は「ハ」の字状に開く高杯の脚部で、高杯Ｄ類の脚になると思われる。

包含層出土土器

a）台地南側地区出土土器

遺物に若干の混乱は認められるが、大きく上下２層に分かれて出土している。また上層で祭祀に関連したと思われる土器群が認められており、それは別個に扱った。

ｉ）Ｃ－７土器群（第51図、図版第十七）

黒灰色土層（第26層）中でまとまって出土した土器群で、下層の第28層上に廃棄あるいは置かれた状態で出土した土器群である。

甕・鉢・高杯・器台が見られるが、壷類を欠いている。甕類はＥ２（178）・Ｆ３（179・180）に分類され、Ｆ３（180）類は体部外面を横方向の刷毛で調整し、ロ縁部が内彎して、ロ縁端部が内側に肥厚する等、所謂布留式土器である。

鉢は（181～183）の３点が図化でき、（181・182）はＣ１類、（183）はＣ３類に分類される。（181・182）とも丸底に近い、極めて小さな平底である。（182・183）は篦磨きの痕跡を残す。

高杯（184～186）は、（184）がＡ４類に、（185）がＣ１類に、（186）がＣ２類に分類される。（184）は体部が極めて小さく、Ａ類では最も退化したものであろう。（185）はロ縁端部が短く外反し、脚部には刷毛状工具で沈線状の文様を施している。体部外面を篦削りしたもので、今回の調査ではこの１点だけの出土である。（186）は脚柱部が太く、裾部は外反して開き、ロ縁端部は小さな面を持つ。杯部と脚部の接合は円板充填法である。（187）は屈曲した裾部を持つ脚部であるが、脚柱部は直線的に立つ。

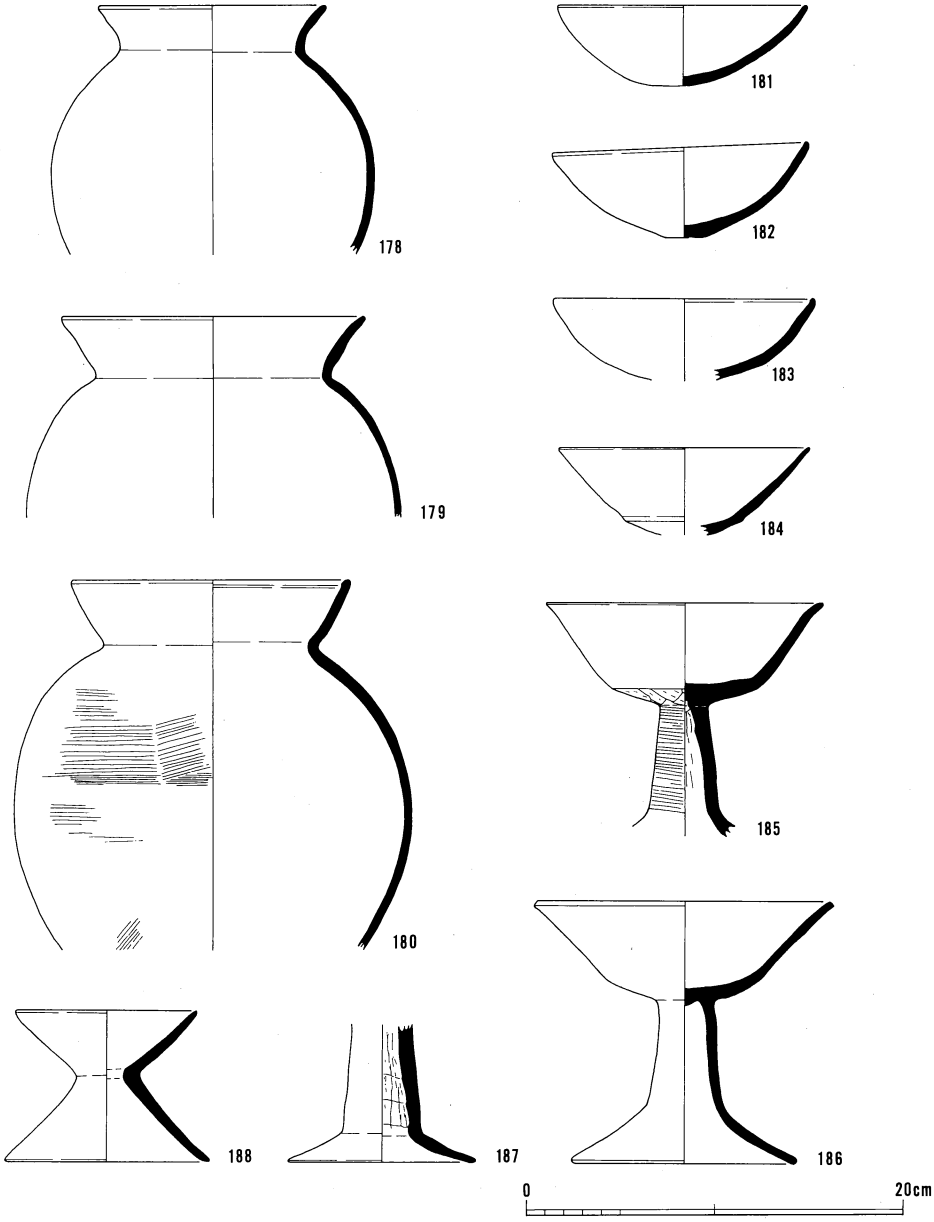
器台はＥ類に分類される（188）の１点だけが見られるが、調整は不明である。

ii）下層出土土器（第52～59・74図、図版第十八・十九・二十・三十三下）

壷・甕・鉢・高杯・器台が出土しているが、時期的には弥生時代後期に属するものが多く、一部弥生時代中期に属するものと古墳時代前期に属するものが見られる。

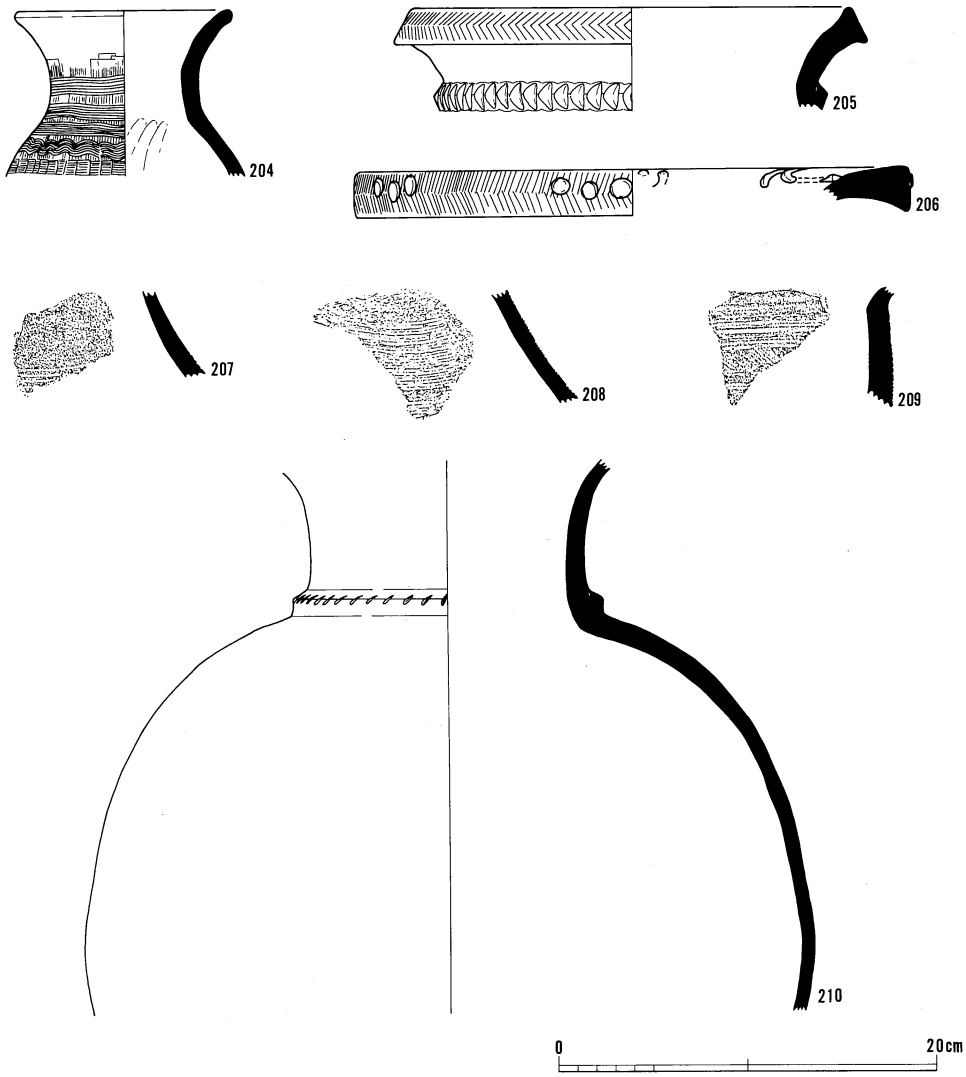
壷類（204～208・210～249・252～257）は51点を掲示したが、広口壷Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ａ５・Ｂ１・Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３、二重口縁壷のＦ５、長頸壷Ｇ１・Ｇ２・直口壷Ｉ１・Ｉ２類の多種にわたる器種が見られ、量的には広口壷に属するものが多い。

壷Ａ類ではＡ１類が（238・247）の２点、Ａ２類は（229・237）の２点、Ａ３類は（216・219



第51図　C－7土器群

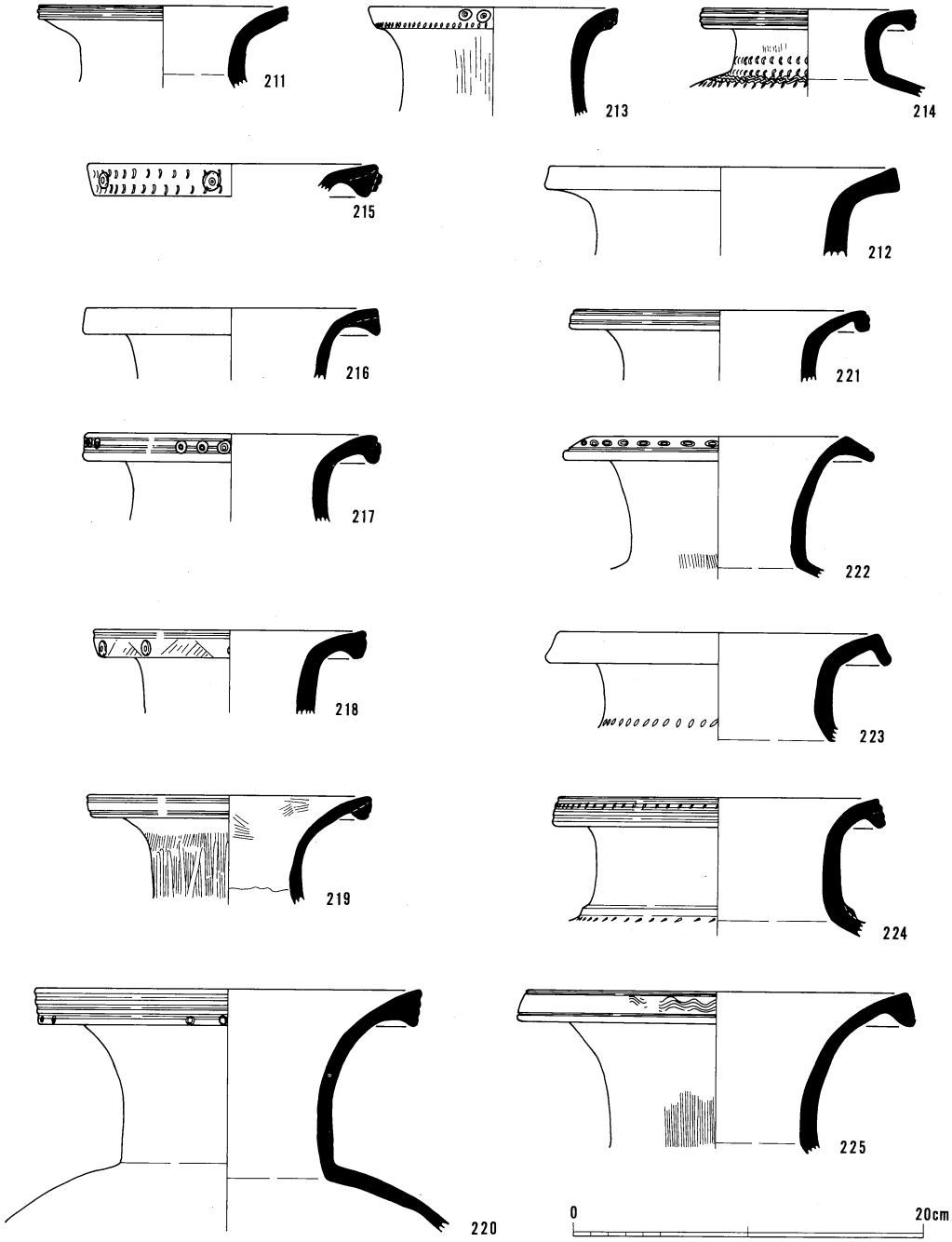
・220・222・225・234～236）の8点、A4類は（231・242・243）の3点、A5類は（241）の1点があり、口縁部を下方に拡張したA3類が多く見られる。B類の壷はB1に分類される（239・240）の小形の壷2点だけで、量的には少ない。壷C類ではC1類が（211・212）の2点、C2類は（214・215・228）の3点、C3類は（213・217・218・221・223・224・232・233）



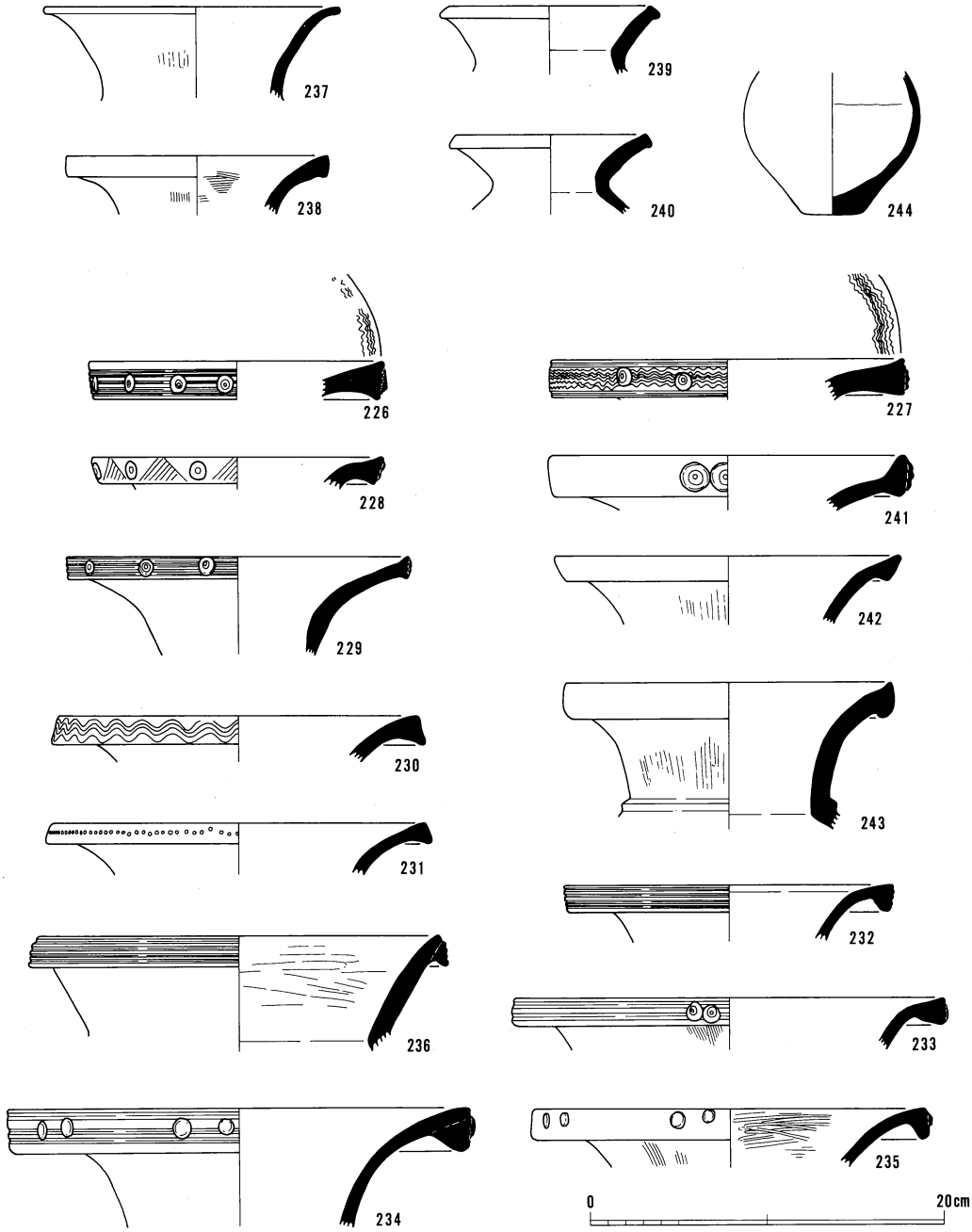
第52図　包含層下層出土土器（1）

の8点が出土している。F5類は（253）の1点だけが出土している。G類にはG1類に分類される（256）1点とG2類に分類される（254・255）の2点があり、（256）の口縁端部は折り曲げて下方に拡張されている。I類はI1（257）・I2（252）の1点づつが出土している。この他、小片のため類別しなかったが、（245・246・248・249）はA類に属する壷と思われる。

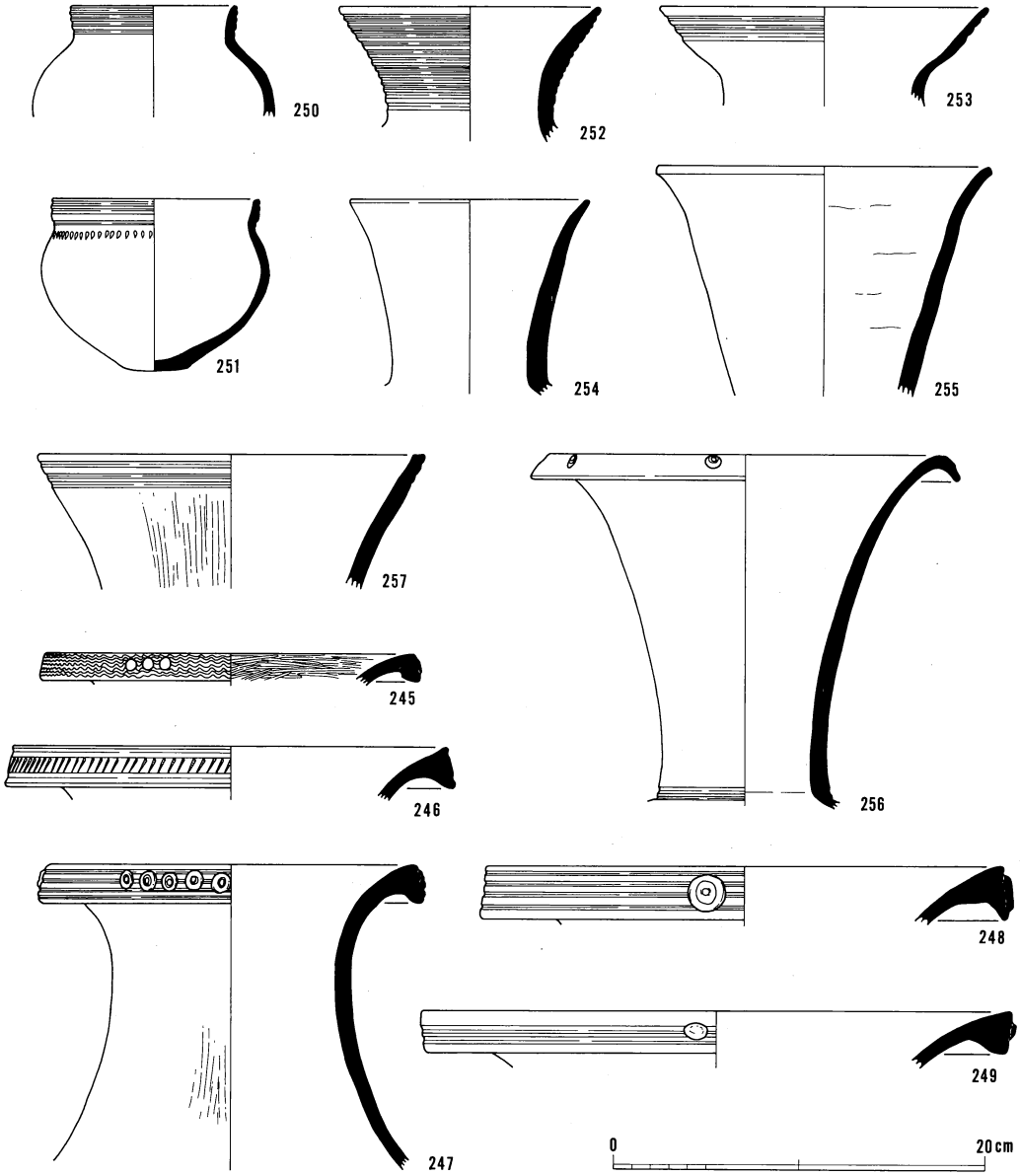
これら壷類の調整は、器表の遺存状況が悪いため不明なものが多いが、壷A・C・I類では外面を篦磨きし、A・C類は内面も篦磨きする。A類の（219・222・233・235・236）は外面を刷毛調整後に縦方向の篦磨きし、（225）の内面の篦磨きは頸部内面にも及んでいる。壷B類



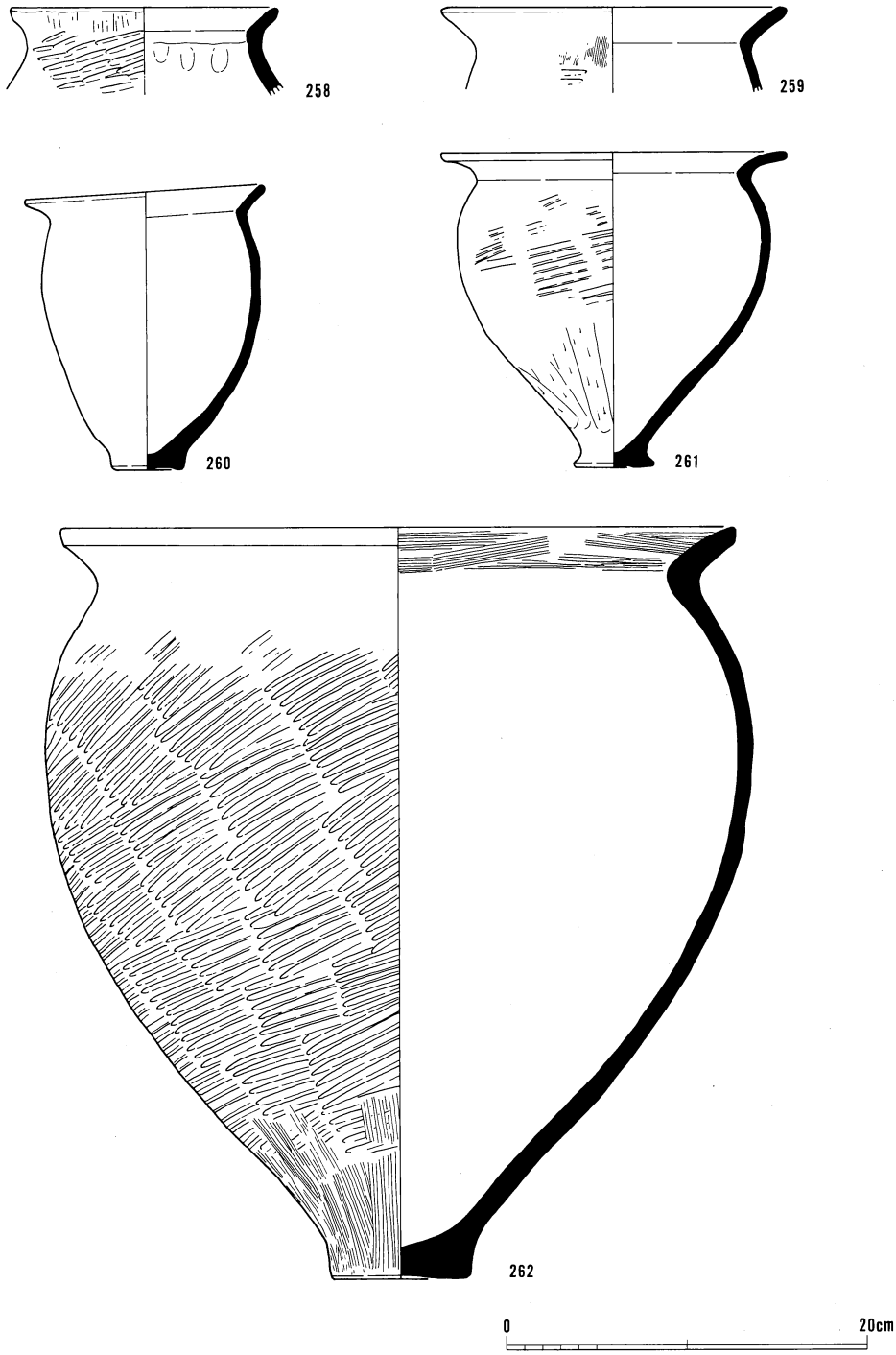
第53図　包含層下層出土土器（2）



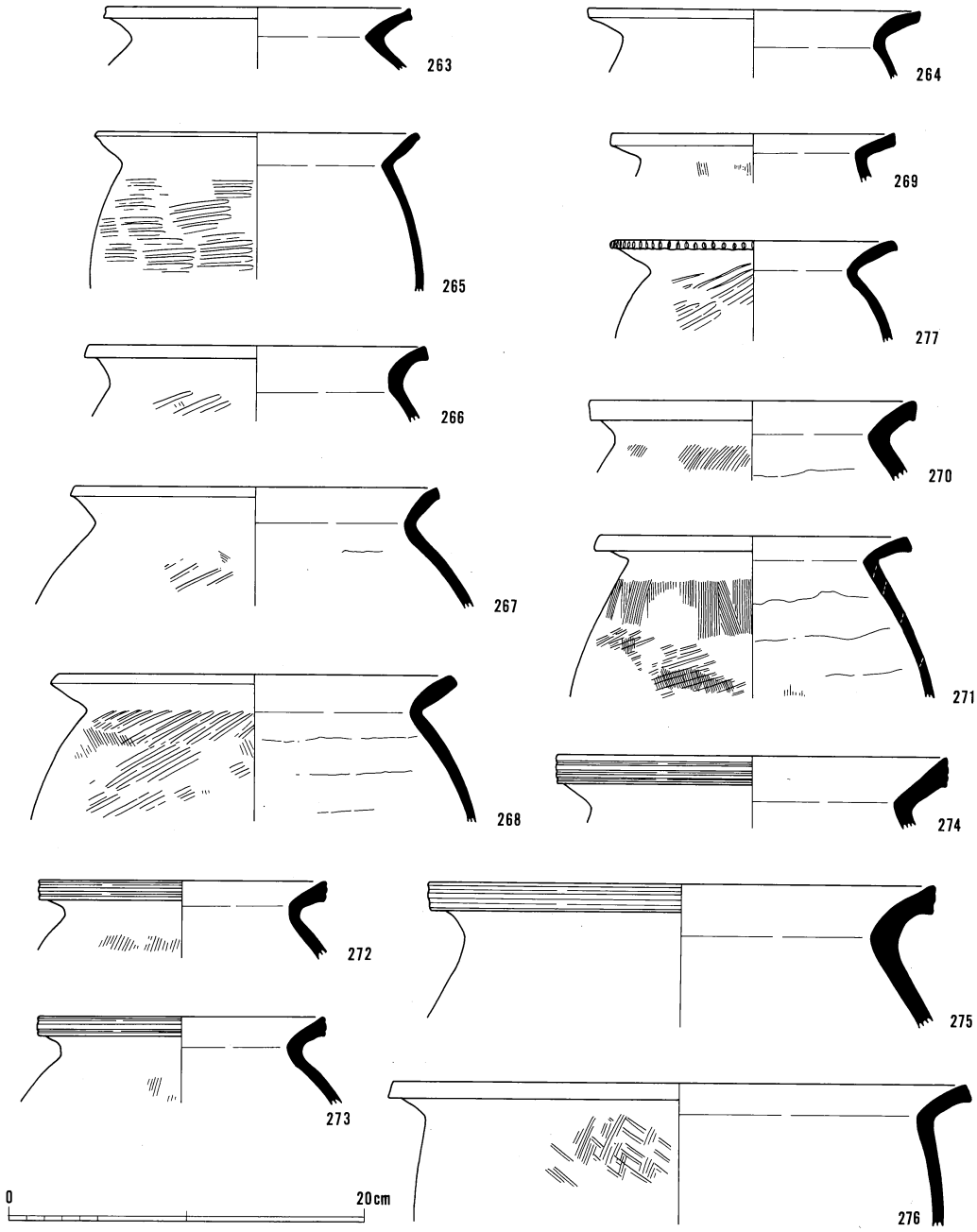
第54図　包含層下層出土土器（3）



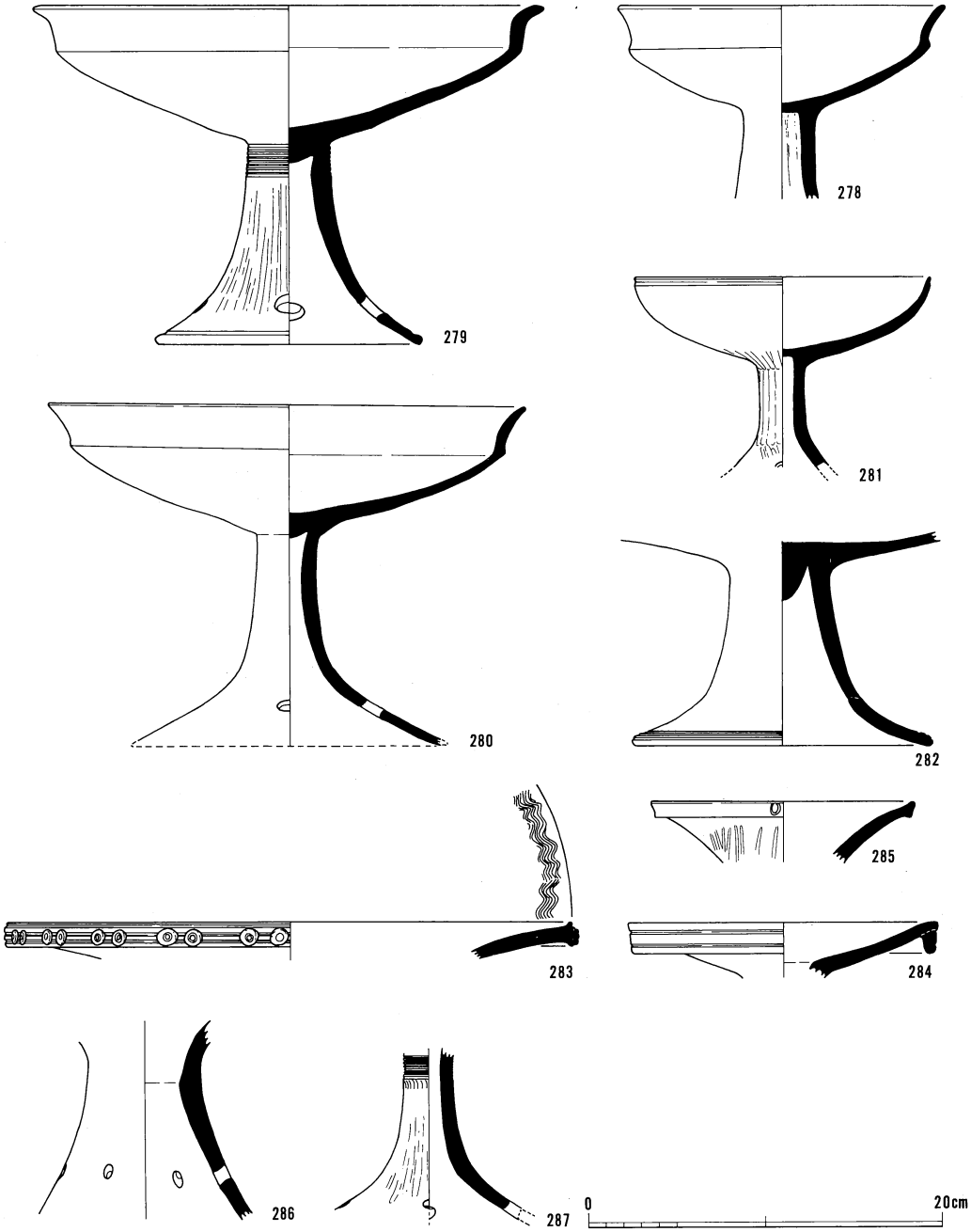
第55図　包含層下層出土土器（4）



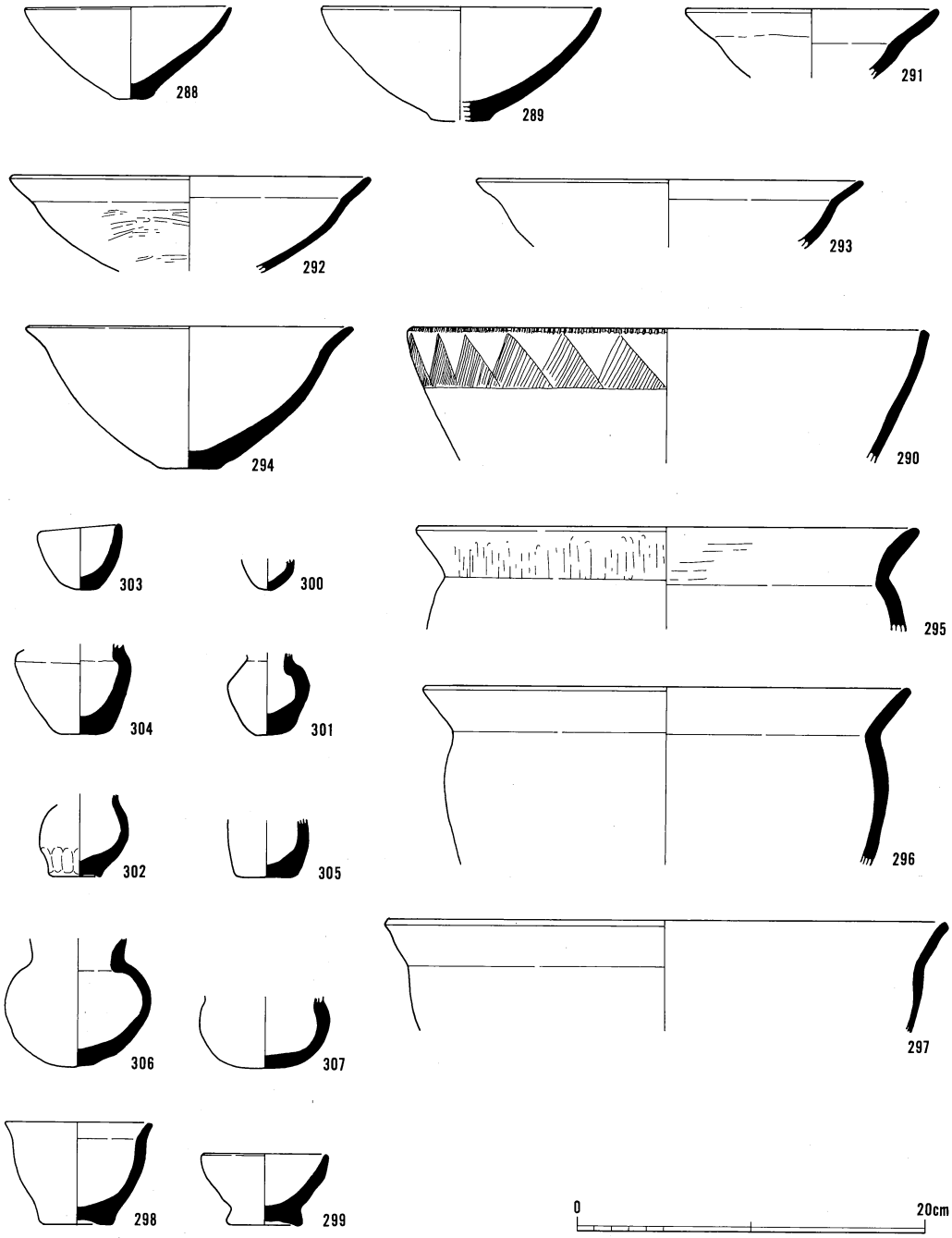
第56図　包含層下層出土土器（5）



第57図　包含層下層出土土器（6）



第58図　包含層下層出土土器（7）



第59図　包含層下層出土土器（8）

(239・240) はヨコナデ後に篦磨きしている。

A1・A3・A4・A5・C2・C3、F5、G1・I1・I2類の口縁部外面は、無文のものが少なく、凹線・竹管円形浮文・波状文・鋸歯文・列点文・竹管文等を駆使した文様で飾られたものが多い。特に凹線・竹管円形浮文を主とした文様構成をとるものが多く見られる。また (210・214・223・224・243・256) は頸部と体部の境も列点文・凸帯文で飾られ、G1類の (256) は頸部下端にも凹線が施されている。

(204) は小形の広口壷であるが、頸部外面から体部にかけて、上から3段に櫛描直線文を施し、その下段に櫛描波状文、櫛描簾状文を施している。(205) は短く外反する口縁を持つ広口壷で、口縁部に綾杉状の列点文を施し、頸部に竹管状工具で刻み目を施した凸帯を巡らす。(206) はほぼ水平に外反して開く広口壷で、口縁端部を下方に肥厚させて、口縁部に櫛で綾杉状に列点文を施した後、円形浮文を貼り付ける。口縁部内面には2条の凸帯を注ぎ口状に巡らしている。(207・208) は壷の体部で、(207) には篦描きによる沈線が4条まで確認でき、(208) は5段の櫛描直線文が確認できる。(208) の直線文は、施文後に指状のもので消されている。

甕類は21点を掲示したが、A1・B1・B2・C1・C2・D1類に分類されるものが出土している。(209) は甕の頸部から体部にかけての破片で、口縁部は体部から外反して開き、口縁端部を欠損している。体部には櫛描直線文を2段に施し、その間に櫛描斜線文を施している。

甕にはA1類 (272～275) が4点、B1類 (264・269) 2点、B2類 (263・266・270・271・276) 5点、C1類 (261) 1点、C2類も (262) の1点で、D1類は (258～260・265・267・268・277) の7点が見られる。口縁端部に面を持つ器種が多く見られ、B2類の (270) は口縁端部を下方に、A1類の (275) は上下に拡張している。(272～275) の口縁部外面には凹線が施されている。

調整は (259・267・268・270～273・276) の体部外面は叩き後に刷毛調整され、(258・265) は叩き目を残したままで、(258) は口縁部も叩き出し、その後に板状工具でナデている。内面の調整は不明なものが多いが、唯一 (272) の体部内面に篦削りの痕跡が認められる。(276) はB2類としたが、中期の土器である可能性が高く、別に扱った方が良いものと思われるが、1点であるためここに分類した。(261) は体部上半に叩き目を残すが、体部下半の篦削りに中期的な技法を残すものである。底部は踏ん張り気味に下端が広がる特徴を持つ。(262) は極めて大形の器形で、他に余り見ない器形である。

鉢類は14点を掲示したが、A2類は (294～297) の4点、A3類は (291～293) 3点、D類は (250・251) の2点、A1類 (298) ・B1類 (299) ・C1類 (288) ・C2類 (289) ・E類 (290) は1点つづがあり、(290・295～297) は大形の鉢である。口縁部の形状には、外反するもの (294・295) と、直線的に開くもの (296)、やや内彎気味に開いた後短く外反するもの (297) が見られ、(297) が後出の可能性が高い。(288・289) はともに底部は平底となって

いる。(299) は小形で、体部に指押さえと思われる痕跡を残すことから、ミニチュア土器に分類した方がよいのかも知れない。

調整は (289・292・295) に篦磨きの痕跡が認められるが、他のものは不明である。

D類の2点 (250・251) は形態的には山陰地方のものに、文様構成は瀬戸内地方のものに似た特徴を持つ。(290) は鉢E類に分類したが、器形の不明な土器である。

高杯はA1類 (278～280) 3点、D類 (281) 1点、脚部2点 (282・287) の6点が図化できた。A1類 (278～280) の内、(278) は小形で、(279・280) は大形である。また (279) の脚部は太く、裾部が短く外反するのに対し、(280) は細く長い脚柱部から大きく広がる裾部を持つ。脚部と杯部の接合はともに円板充填法である。D類の (281) は口縁端部下には凹線が施される。

(282・287) は脚部片であるが、(282) は太い脚部から横上方に開く杯部を持つ。(287) は細い脚柱部で、上端に沈線と列点文を施している。ともにA1類の脚部になるものと思われる。

調整は (279・281・287) の外面に篦磨きの痕跡が残る以外不明である。

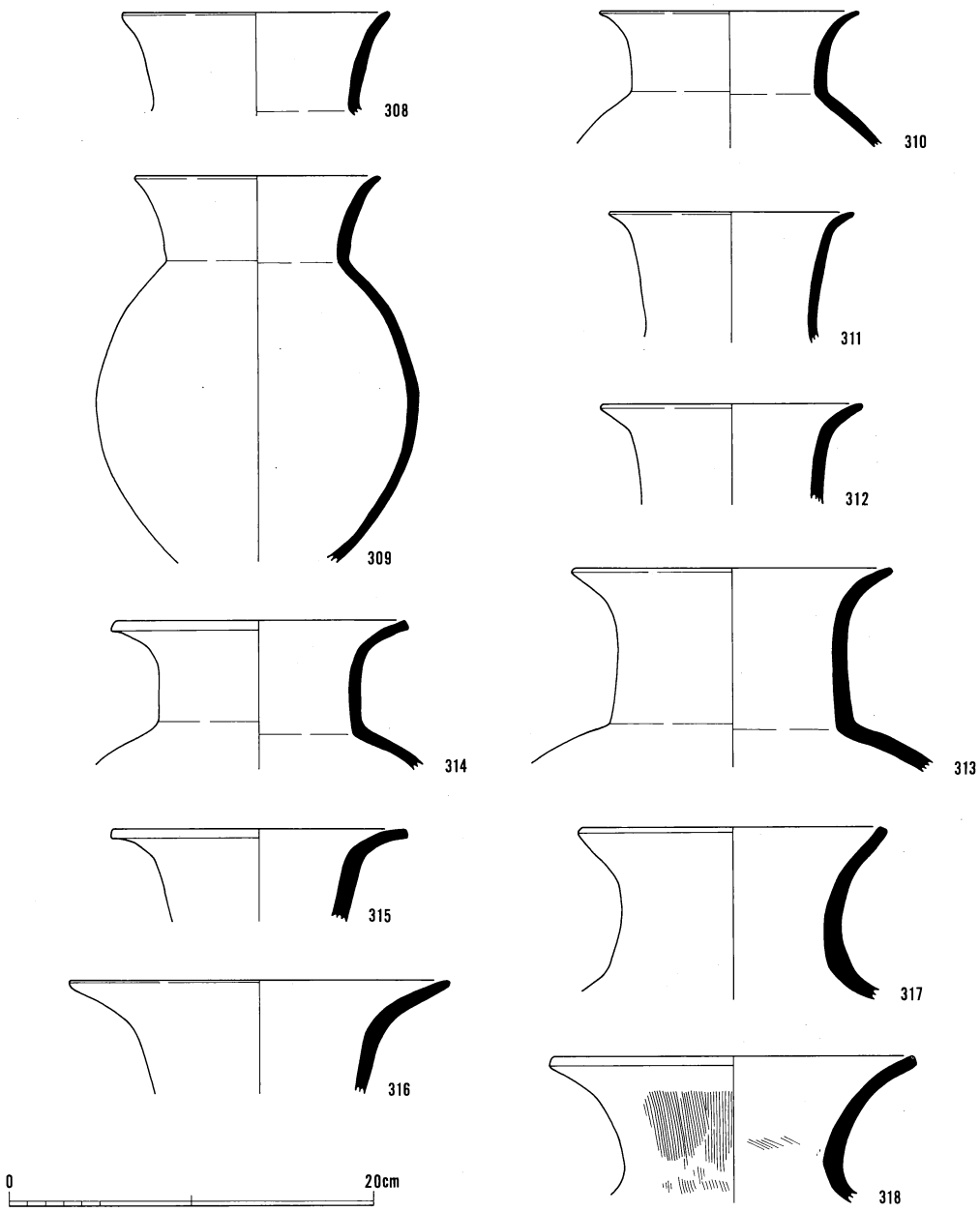
器台は3点、A (283)・B (284)・C (285) 類が見られ、いずれも1点づつの出土である。(283) は大形で口縁部内面にも波状文を施す。(284) は高杯状の脚部を持つものと思われる。(286) は器台の筒部の破片で、A類の脚になるものと思われる。

製塩土器は6点が出土しており、ともに脚台が付くもので、(501) はA1類に、(520・523・526) はA2類に、(509) はA3類に分類される。

iii) **上層出土土器** (第60～70・74・98図、図版第二十～二十二・三十三下)

壷類はA2類が3点 (314・318・320)・A3類が6点 (321・324・325・329・330・335)・A4類1点 (322)・A6類2点 (317・361)・C1類3点 (315・316・319)・C3類2点 (331・332)・D1類8点 (336～338・340～344)・D2類4点 (345・353・354・362)・D3類1点 (346)・D4類2点 (355・356)・F1類2点 (347・348)・F3類2点 (351・352)・G3類3点 (311～313)・G4類1点 (372)・G5類3点 (360・370・371)・H類2点 (358・359)・I3類 (363・364)・I4類3点 (308～310)、I5類2点 (365・366)、I6類2点 (367・368) 等が出土している。下層のものと比較すると、B類の壷が見あたらず、下層では見られなかったA6・D1・D2・D3・D4・F1・F3・G3・G4・G5・H・I3・I4・I5・I6類が見られ、量的にもA・C類より、D・F・G・I類が多くなっている。この他、小片のため不明な点もあるが、(321・324・325・329・330・335) の6点はA3類に含まれ、(327・328・334) もこの類に含まれるものと思われる。(326・333) もこの類に属する可能性はあるが、破片が小さく、器種がはっきりしない。

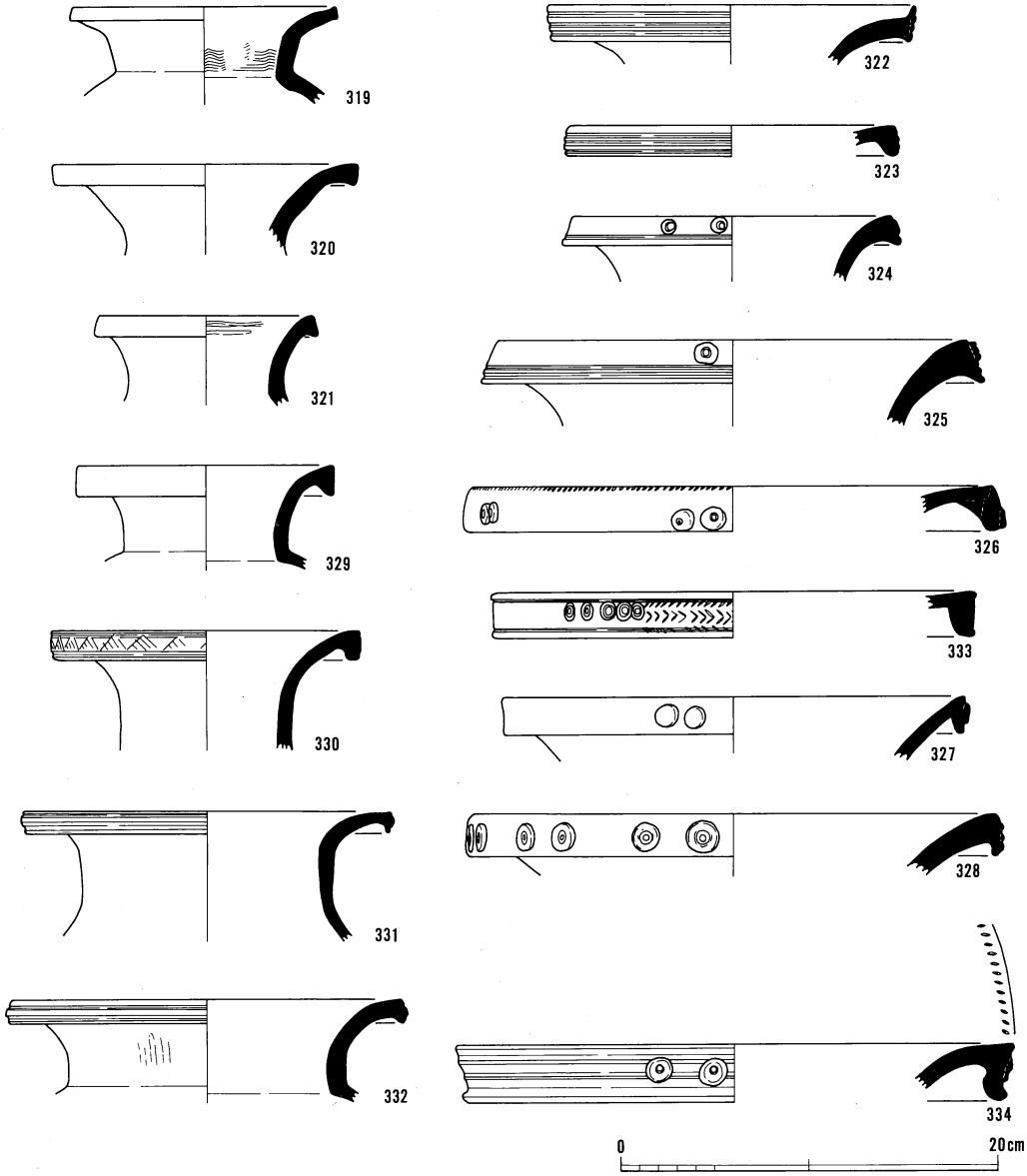
調整は全体に不明なものが多いが、A2・I6類の (318・367・368) は粗い刷毛調整、D1類の調整は刷毛調整ないしヨコナデ調整、C1・C2・D2・D3・G4・G5・H類の一



第60図　包含層上層出土土器（1）

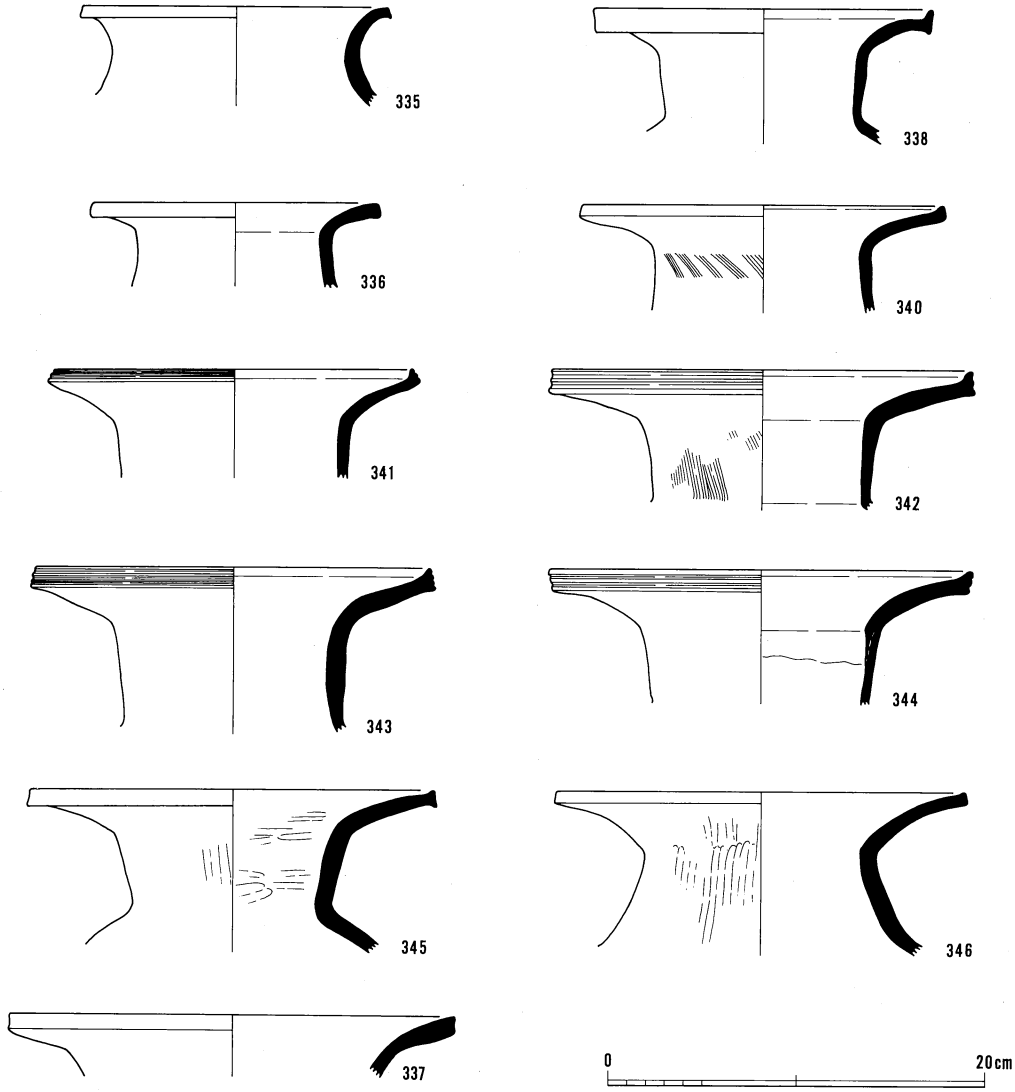
部には篦磨きの痕跡を残すものがある。

Ａ３・Ｄ１・Ｆ１・Ｆ２類の口縁部は文様で飾られたものが多く、凹線（323・331・332・341～344）、凹線＋竹管円形浮文（324・325・334）、凹線＋竹管円形浮文＋篦刺突による綾杉



第61図　包含層上層出土土器（2）

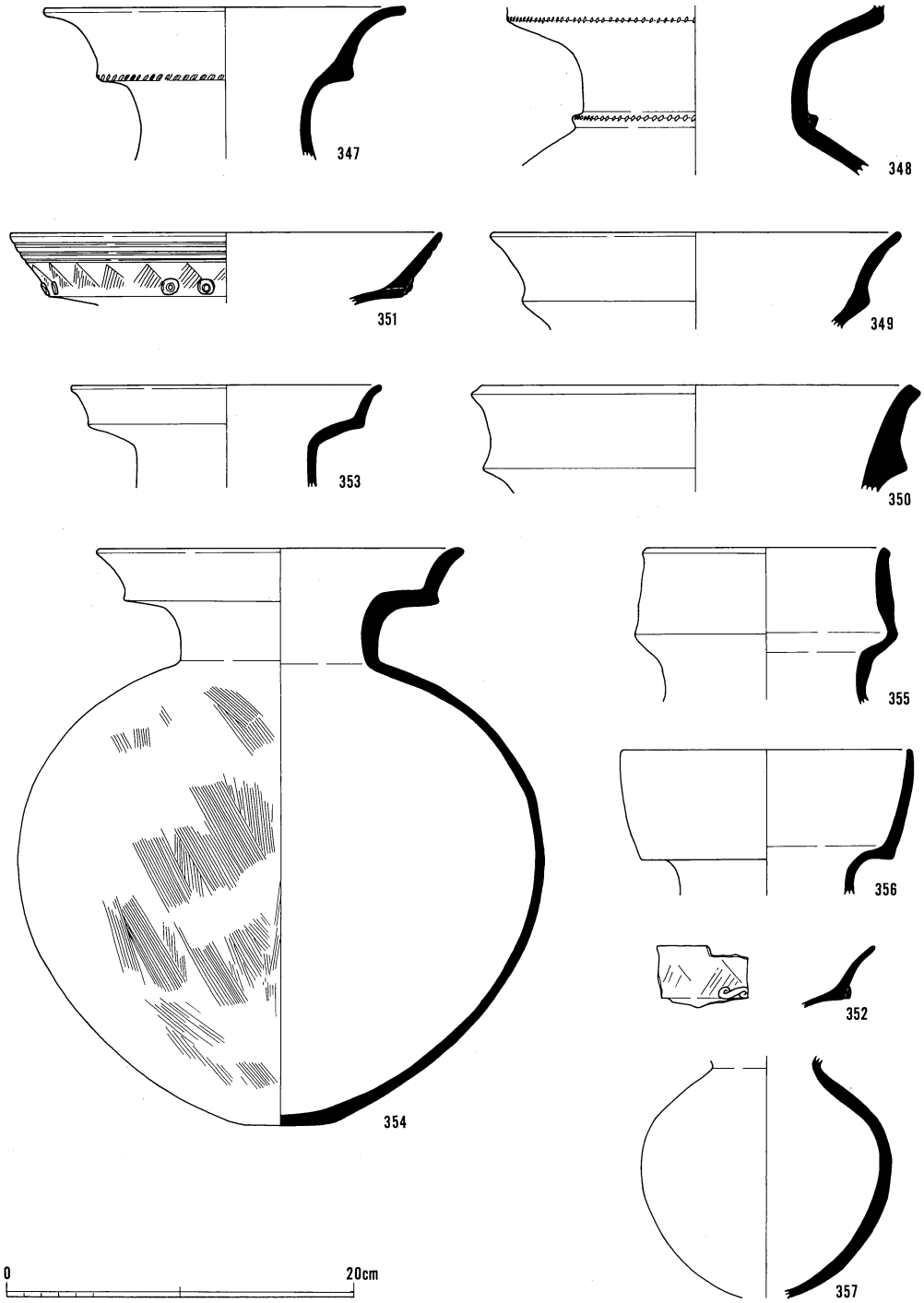
状の列点文（333）、凹線＋鋸歯文（330）、凹線＋鋸歯文＋竹管円形浮文（351）、竹管円形浮文（328）、円形浮文（327）で装飾されている。（327）には浮文の下に波状文の痕跡が残り、（320）には竹管文の痕跡が認められる。（340）は頸部外面にも刷毛状工具の刺突による列点文が施されている。（347・348）には口縁の屈曲部外面に列点文が施され、（348）の頸部外面には凸帯が巡らされている。（352）の口縁部外面には鋸歯文とS字状浮文が装飾されているが、S字状



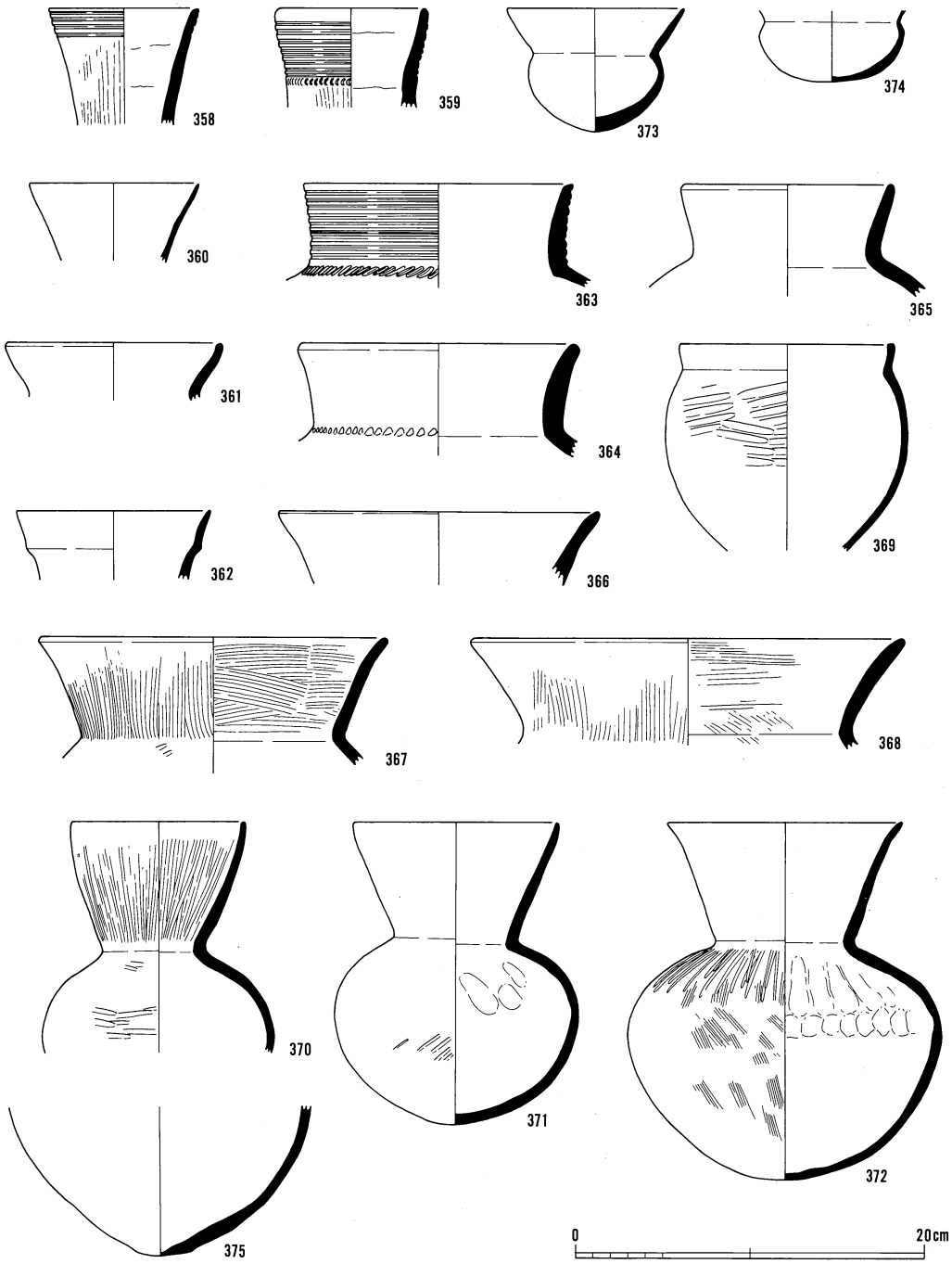
第62図　包含層上層出土土器（3）

浮文は退化した形態となっている。(354) はほぼ完形で出土したものであるが、体部の器壁が薄く、体部の細かい刷毛調整で、色調等は壷G類 (372) と酷似する。

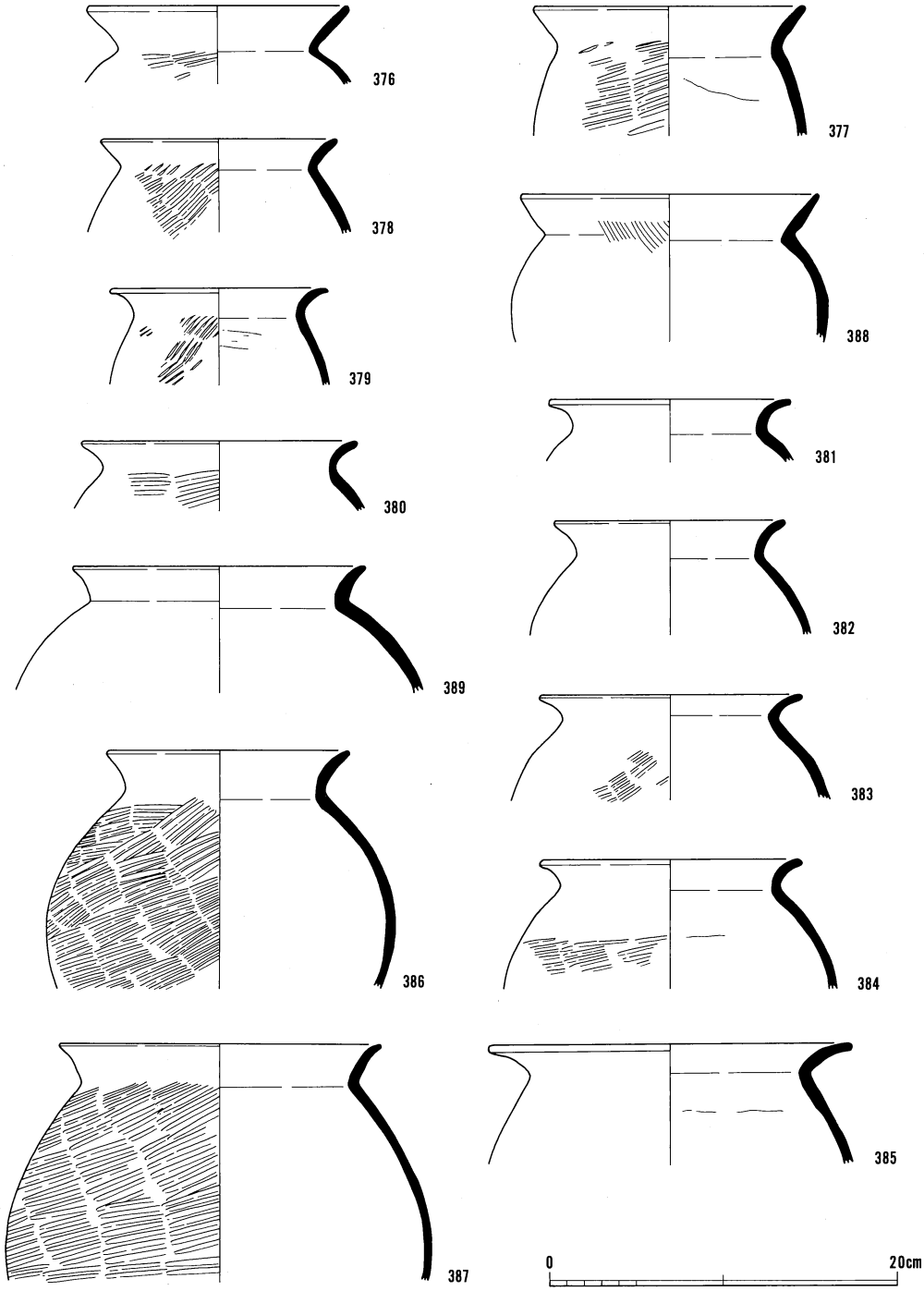
甕類にはA2・B1・C1・D1・D2・E1・E2・F1・F2・F3・G1・H1・H2・I・J類が見られ、下層ではほとんど見られなかったE・F・G・H類の甕が多数出土している。甕類の中では古く位置付けられる甕A2は (391) の1点が見られるだけで、B1も (390・393) の2点が見られるだけである。D1・2類も (377・395) の2点で、(395) の外面の刷毛調整は口縁部から肩部付近までに留まり、(377) は叩きを残したままとなっている。



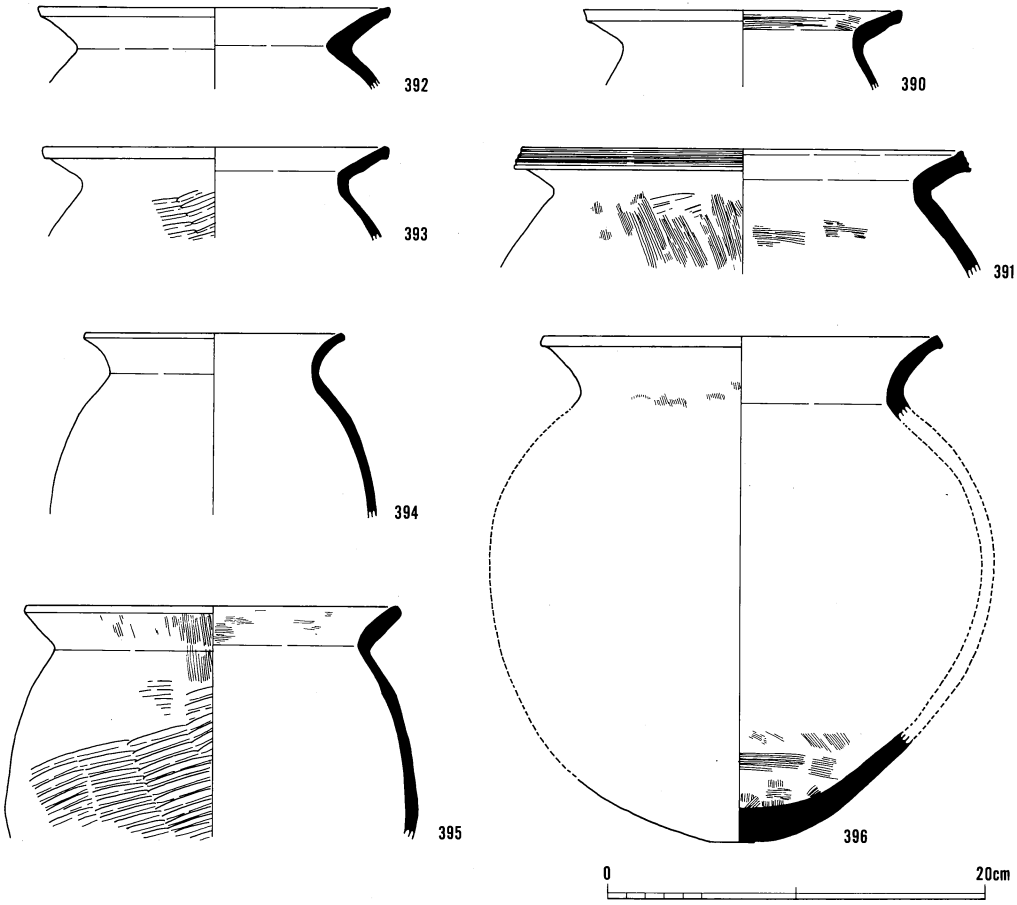
第63図　包含層上層出土土器（4）



第64図　包含層上層出土土器（5）



第65図　包含層上層出土土器（6）

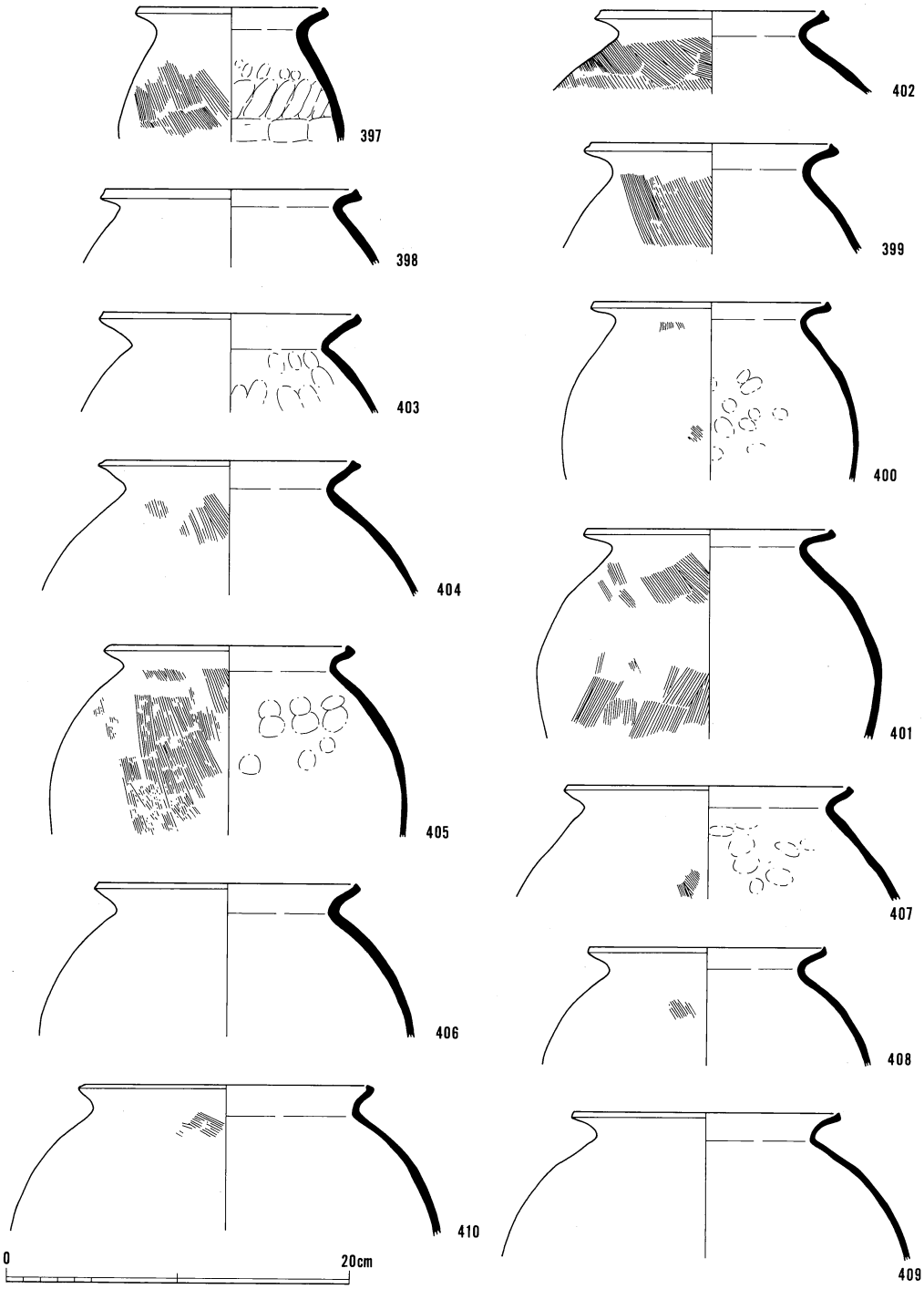


第66図　包含層上層出土土器（7）

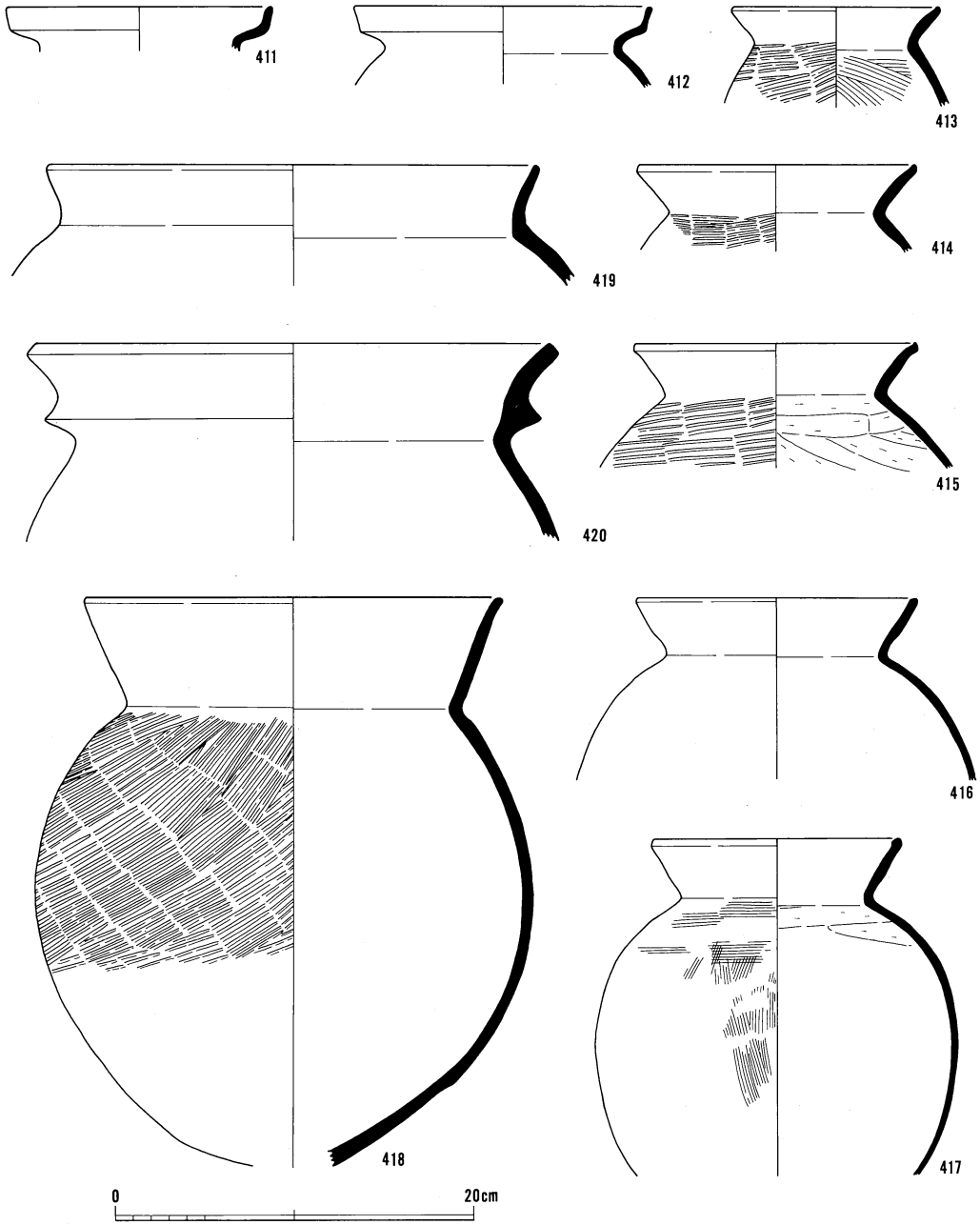
上層の甕類の主流を占めるのはＥ１・Ｅ２・Ｇ１類で、Ｅ１・Ｅ２類は13点が見られる。口縁端部は丸く納めるものが多いが、(381) は端部に小さな面を持ち、(396) の口縁端部は下方に拡張された面を持つ。(396) は口縁部片、体部片、底部片があるが、それぞれ接合できなかった。(396) の胎土、色調とも他のＥ２類とは異なる。

Ｆ類の甕はＦ１ (392) ・Ｆ２ (413～415) ・Ｆ３ (416・417) の６点が見られ、Ｆ２類の (414・415) は所謂庄内型の甕で、(413) は内面を刷毛調整している点が庄内型甕とは異なる。Ｆ３の (416・417) は所謂布留式の甕である。ただ (416) の口縁端部は僅かに肥厚が見られる程度である。

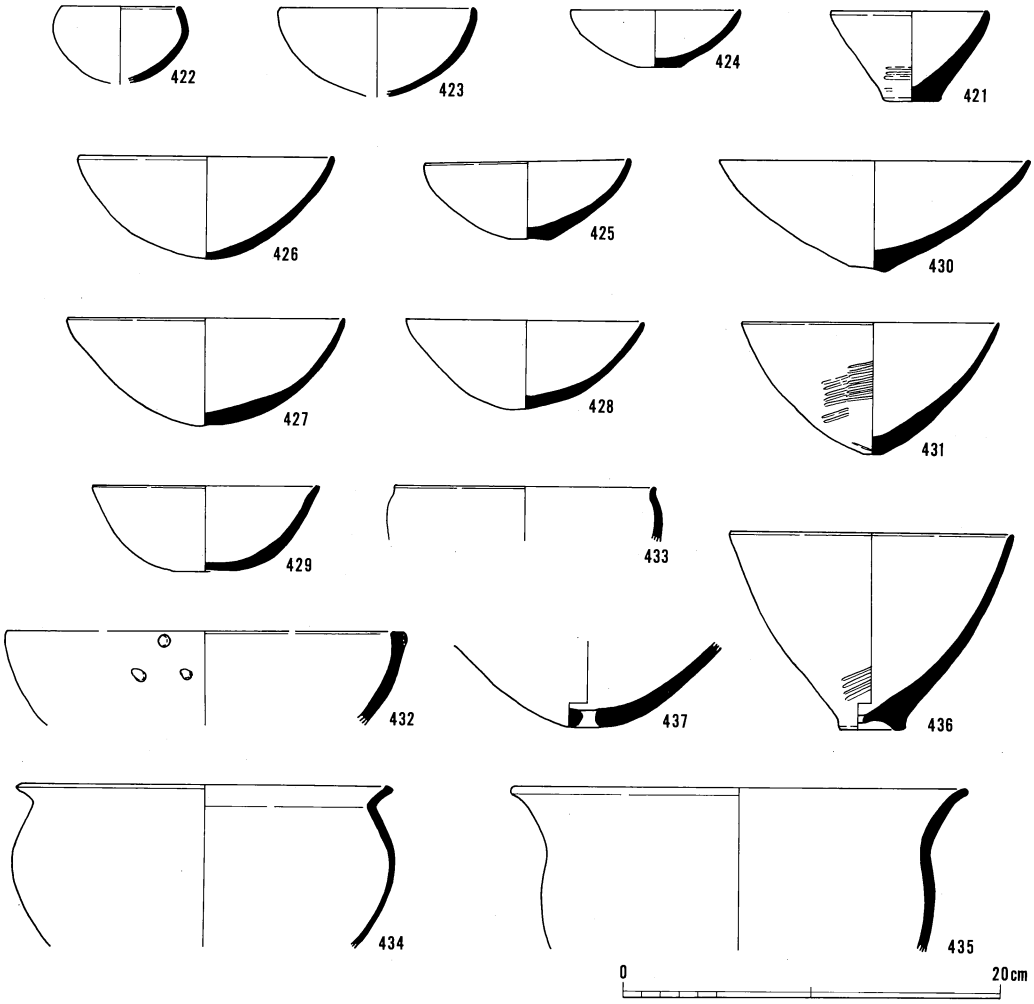
Ｇ１類は14点あるが、Ｇ１類としたものも口縁部が横上方に開くもの (398・400・401) と、外上方に開くもの (397・399・405～410) が見られる。また肩部がなだらかな形状となるもの (397～400) と、肩部が張って体部が球形に近くなると思われるもの (401・402・405～410)



第67図　包含層上層出土土器（8）



第68図　包含層上層出土土器（9）



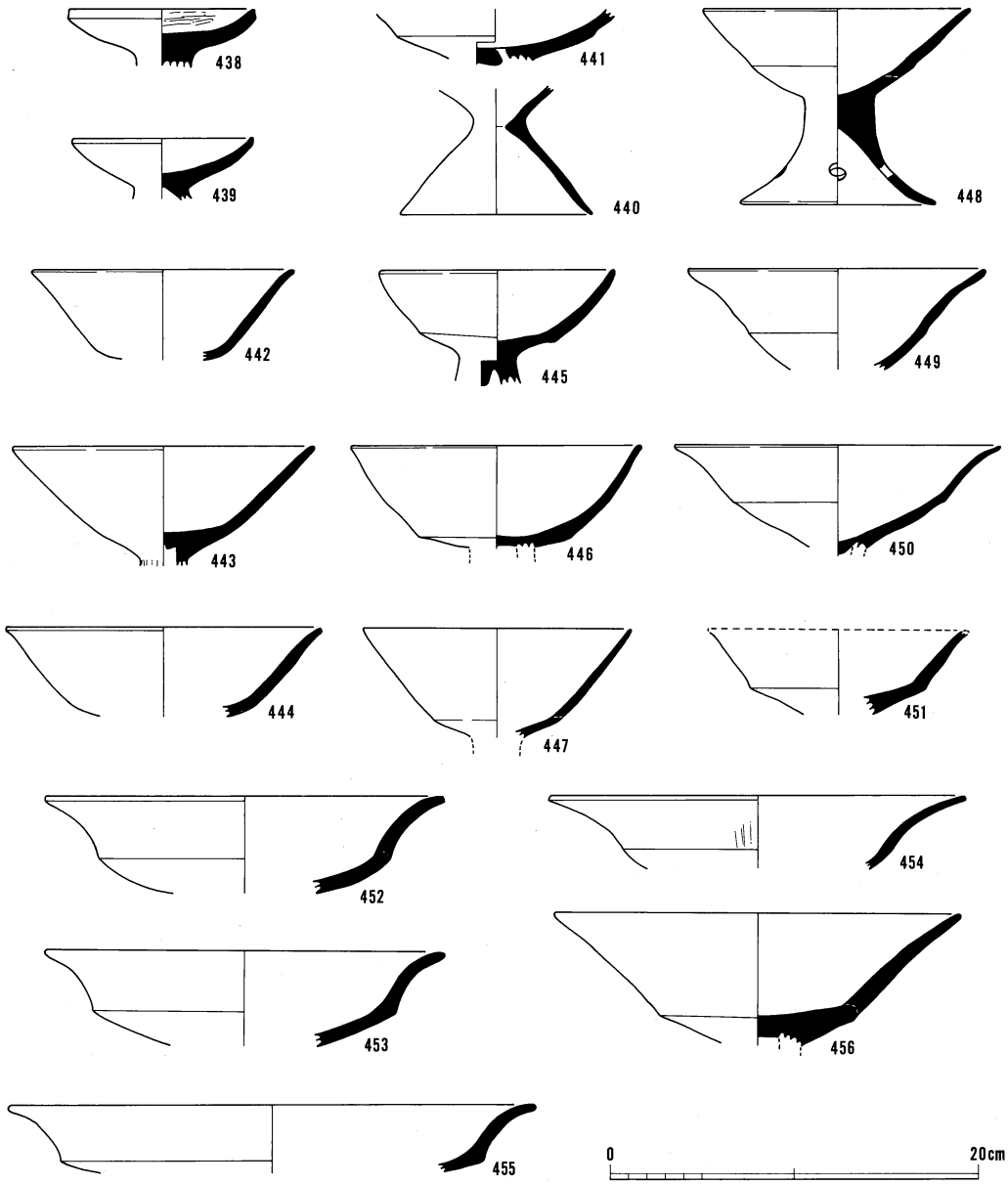
第69図　包含層上層出土土器（10）

が見られる。調整の分かるものは少ないが、体部外面は細かい刷毛、肩部の内面には指押さえの痕跡を残す。（397）の体部内面の下半は篦削りしている。

H類の甕はH１（411・412）・H２（350・420）があり、（411・412）は口縁部外面に櫛描直線文の痕跡を残し、酒津式の甕になるものと思われる。（420）は口縁屈曲部に稜を持つ大形の甕で、山陰地方の甕に類似する。

J類の（418）は特異な大形の甕で、他にあまり類例を見ない。底部を欠損しているが、下端が僅かに外反していることから、平底になる可能性が強い。

鉢類にはA２（435）・A４（434）・B１（431）・B２（421）・C１（430）・C２（424～428）・C３（423・429）・C４（422）・D（433）類があり、A２類の（435）は下層のA



第70図　包含層上層出土土器（11）

2類から見ると型式的には退化したものとなっている。A 4（434）は器壁が薄く、口縁部の形状は甕G 1類に似る。小形の鉢B類の内、（421）は底部外面に木の葉圧痕が残り、（431）の底部は尖底気味の平底で、B 1類ではもっとも新しい型式になるものと思われる。（425）は小さな平底を残し、外面をナデ調整している。C 2類の鉢の内、（426～428）は小さな平底を残

し、C 3類の（423）は丸底、（429）は中央が窪んだ底部となる。調整は不明なものが多いが、篦磨きをするものは無く、ナデ調整している。（432）の鉢は内彎する口縁部で、端部に面を持ち、口縁下部に円形浮文を3個、三角形状に貼り付けている。胎土から見て河内方面からの搬入品と思われる。

高杯にはA 1類（455）1点・A 2類（452・453）2点・A 3類（450・454）2点・A 4類（448・449）2点・B 1類（451・456）2点・B 2類（445・446）2点・C類（442～444・447）4点があるが、A 2類の内、（452）は体部の先端が内彎し、（453）の体部は直線的に伸びている。（454）は口縁部の形状から見て、A 3類に属する可能性が高い。A 4類の脚部は太い脚柱部から裾部が外反して開く。調整は不明なものばかりであり、杯部と脚部の接合も（450）が円板充填法をとる以外不明である。B 1類の（451）には篦磨きの痕跡が残る。B 2類の（446）は口縁端部が外反し、（445）とは若干形態差がある。（445）の体部外面には刷毛調整の痕跡が残る。高杯C類は4点の内、（442～444）は口縁端部が外反し、（447）の口縁部は直線的に伸びる。（443）は体部が小さく、杯底部外面に小孔が見られ、棒状工具の刺突痕跡と思われる。

器台にはD 1類（438・439）・E類（440）・F類（441）の4点がある。D 1類の（438）は器壁が厚く、受け部は横上方に開いた後内彎する。（439）は体部が内彎しながら伸びておりやや後出のものである可能性が高い。E類に属する（440）はくびれ部に鋭い稜を持つが、脚部の形状から、上下逆の可能性もある。F類（441）は高杯B 1類の杯底部に穿孔をしたもので、極めて特殊なものである。

有孔土器（436・437）があり、（436）は上げ底の底部を、（437）は丸底の底部を、穿孔したものである。（436）は鉢形で体部に叩き目を残し、（437）も鉢になるものと思われる。

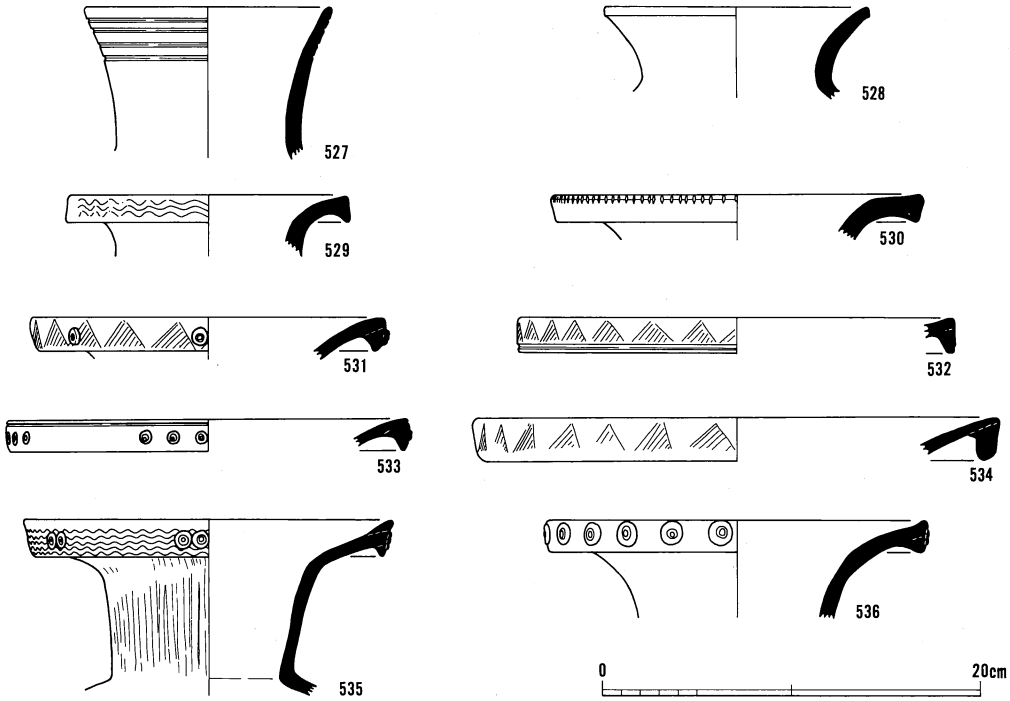
この他、製塩土器が19点出土している。いずれも底部に脚台が付くもので、A 2類（516・517・521・524）と、A 3類（503・511）、A 4類（506・510・512・513・515）、A 5類（504・505・507）があり、口縁部は（500）がB類に、（499）はD 1類に分類される。

他に、紡錘車（第98図1・2・4）が3点出土している。（1）は紡錘車として制作された大形のもので、中央の孔の部分が厚く、縁辺が薄くなる。（2・4）は土器片を利用している。

その他の包含層出土土器（第71～73・98図）

台地南側地区以外の包含層から出土した土器をここで扱った。壷・甕・鉢・高杯・器台・小形丸底壷・有孔土器・製塩土器等がある。

壷にはA 2（528）・A 4（536）・A 5（545）・C 1（537・538）・C 3（529）・C 4（535）・D 1（539）・E 2（544）・F 2（540～543）・I 2（527・546）・I 5（547）・I 6（548）類が見られ、C 1類の（538）とI 2類の（546）に篦磨きの痕跡が残り、D 1類の（539）・I 6類の（548）には刷毛目が残る。（543）の口縁部外面には鋸歯文が施され、（544）の口縁部には3段の櫛描波状文が施され、さらに上下端に竹管円形浮文を貼り付ける。



第71図　その他の包含層出土土器（1）

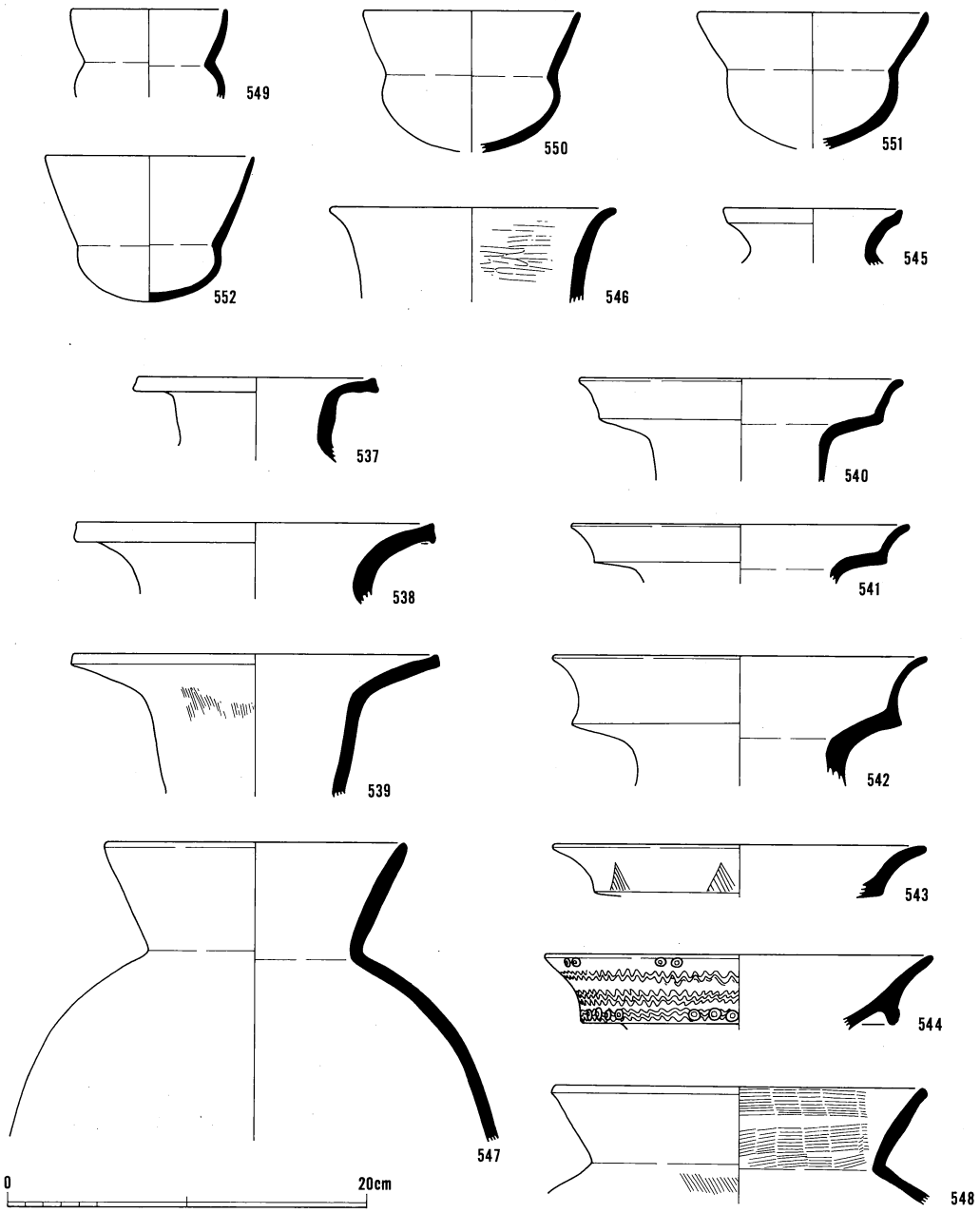
甕にはA２（553）・D１（557）・E１（554・555）・F１（556）・G１（558）類が見られ、（553）の口縁部には凹線が、（557）には刻み目が施されている。（556・558）の外面に刷毛調整痕が残り、（555）の外面に叩き目の痕跡が残る。

鉢は（559）の１点で、C２類に属する。高杯も（560）の１点であり、B１類に分類される。器台は（561）がC類に、（562）がF類に分類され、（562）は脚部の内面側から杯底部の器壁を欠いて薄くした後、穿孔されている。

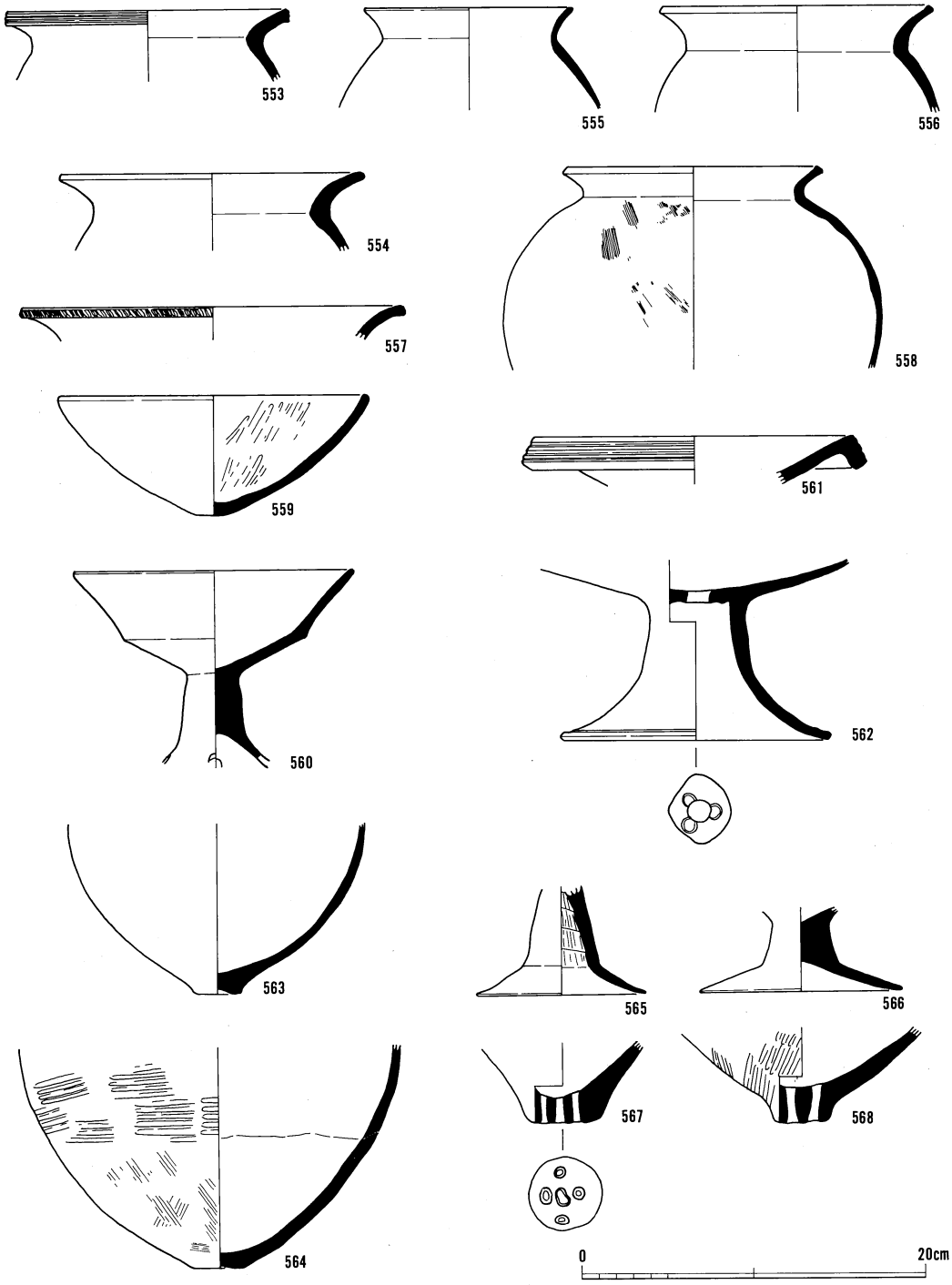
（564）は甕の体部から底部にかけての破片であり、分割成形されている。（565・566）は高杯の脚部で、有孔土器は（567）が５孔、（568）が４孔と多孔である。

製塩土器はA２（518）とA６（502）に分類される２点がある。

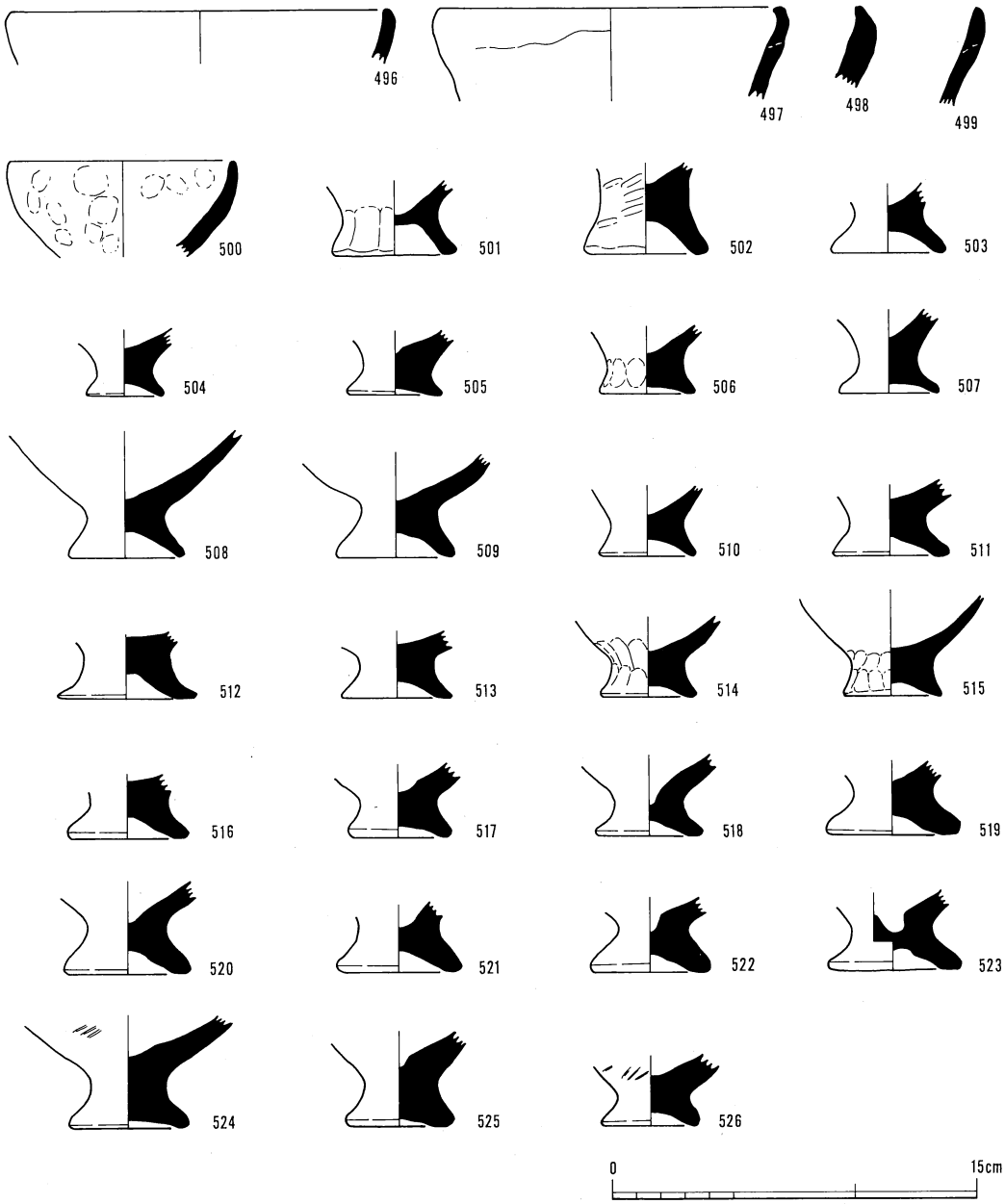
この他、壷体部と思われる土器片を利用した紡錘車が１点出土している（第98図３）。



第72図　その他の包含層出土土器（2）



第73図　その他の包含層出土土器（3）


496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
0
15cm

第74図　製塩土器

3．古墳時代後期～平安時代前半の土器

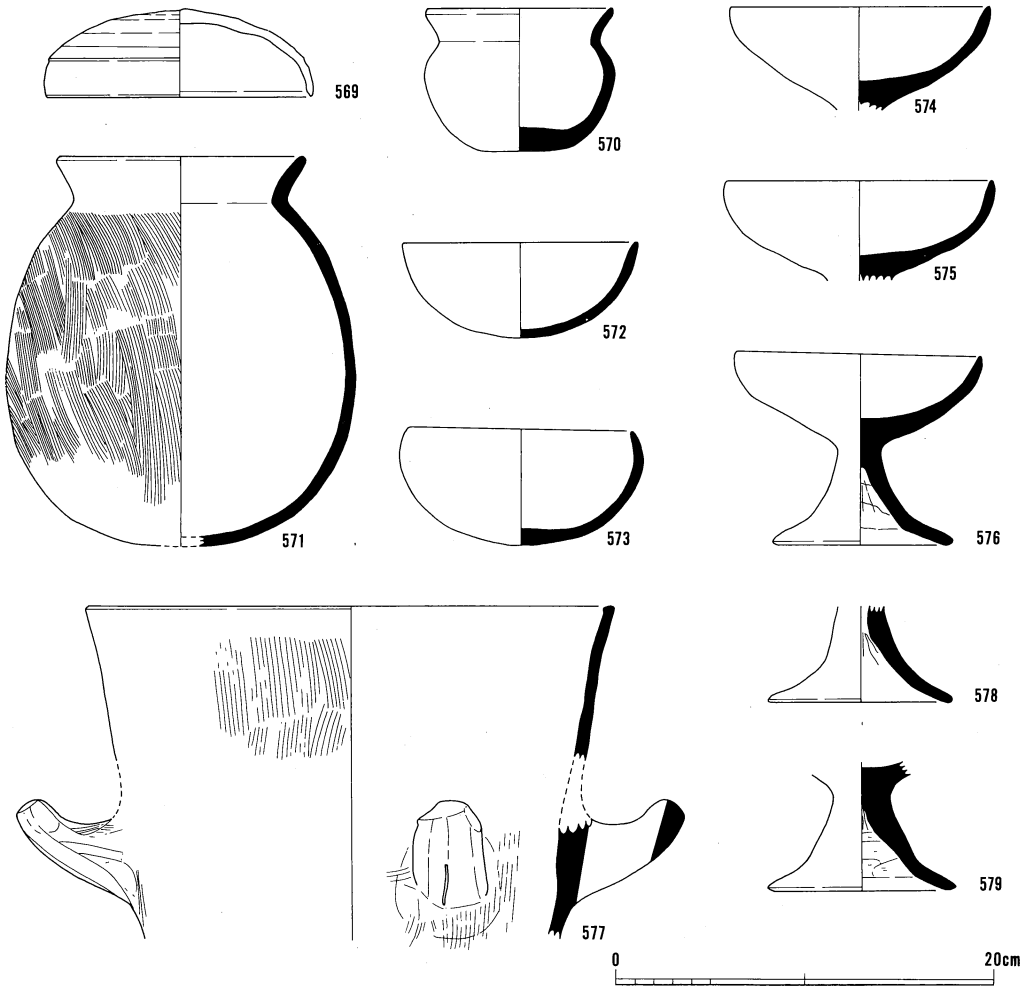
住居址７出土遺物（第75図、図版第二十三）

床面上から土師器類と須恵器が出土し、須恵器は杯蓋１点が図化できた。杯蓋（569）はD２に分類され、口径14.0cmと大きく、口縁端部内面の段は形骸化している。

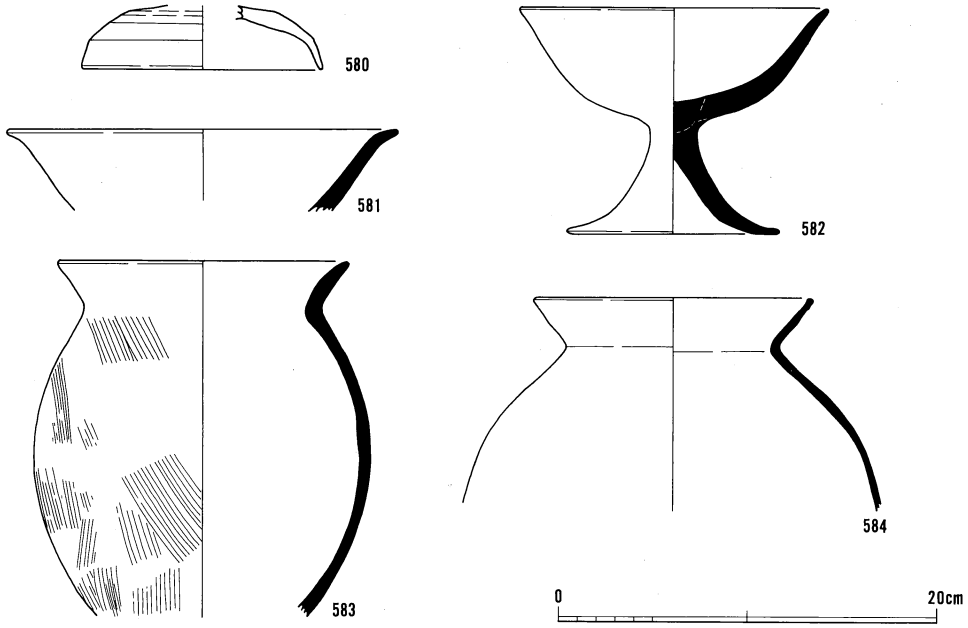
土師器類には壷B・甕B・椀A・椀B・高杯B・甑が見られ、（570）は小型の壷Bで、底部は平底となっている。口縁部は端部を僅かに上方に摘み上げている。

（571）の甕Bは、下膨れの体部を持ち、口縁端部は丸い。体部の外面は縦方向の刷毛調整し、体部内面はナデ調整する。

（572・573）は椀類で、（573）は椀A、（572）は椀Bである。（572）の調整は不明であるが、



第75図　住居址７出土土器



第76図　溝41出土土器

(573) は底部内面に暗文状に篦磨きの痕跡が残る。

(574～576) は高杯で、(578・579) も高杯の脚部と思われる。(574～576) はともに高杯Bで、口縁部が外上方に開くもの (574・576) と、ほぼ直立するもの (575) がある。脚部を知り得るのは (576) だけで、脚柱部は細く、裾部は脚柱部から屈曲して開く。(578・579) も高杯の脚部と思われ、(578) の裾部は脚柱部から外反し、(579) の裾部は脚柱部から屈曲して開く。ともに脚柱部は中空で、(579) の内面は篦削りされている。

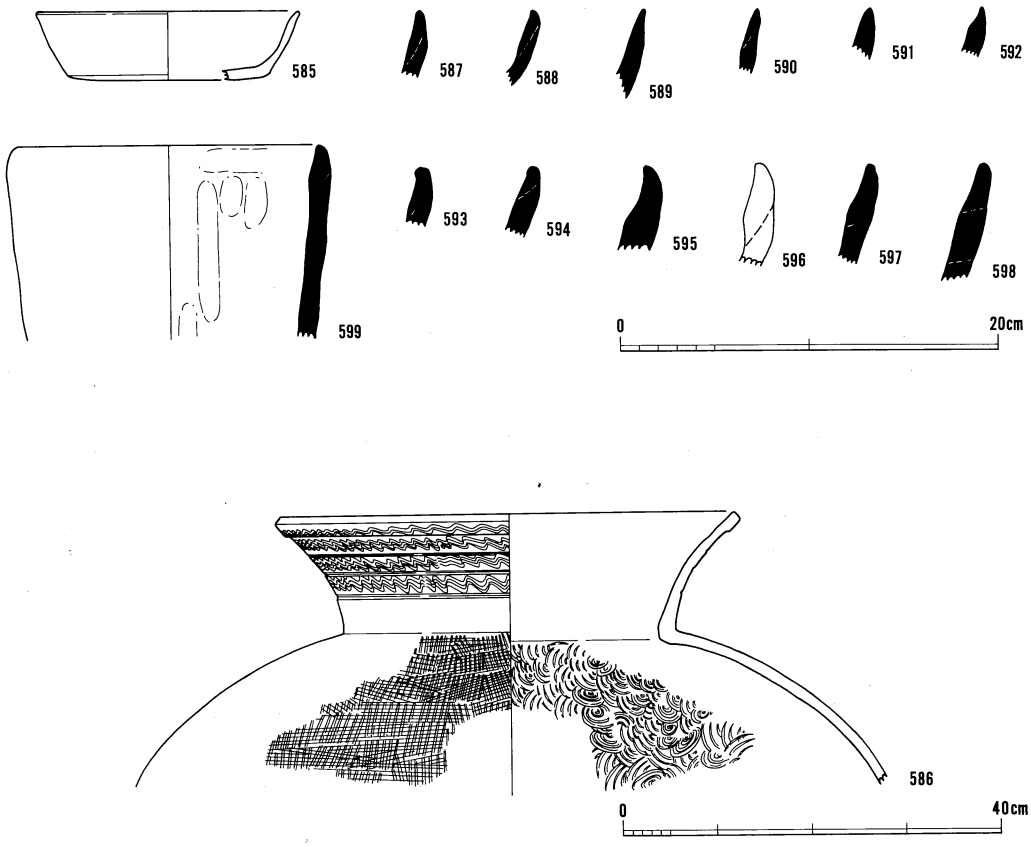
(577) の甑は口縁端部がやや内側に突出し、体部に2方向から角状の把手が付くものと思われる。把手は篦削り後ナデ調整され、上方から篦によって貫通する切り込みが施されている。

溝41出土土器 (第76図)

須恵器蓋D2、土師器高杯B、甕がある。(580) は蓋D2類で、溝の埋土上層から出土し、(581～584) の土師器類は埋土下層から出土している。したがって須恵器と土師器には時間的な差があるものと思われる。

(581・582) は土師器の高杯Bで、(581) の口縁部は屈曲して短く開き、(582) は外反して開く口縁部を持つ。(582) は「ハ」の字状に開く脚柱部から外反して広がる裾部を持つ。

(583・584) は土師器の甕で、(583) は細長い体部から屈曲して開く口縁部を持ち、(584) は強く張った体部から屈曲して外上方に伸びる口縁部を持つ。(584) の口縁端部は僅かに内側に肥厚する。(583) は外面が刷毛調整で、内面はナデ、(584) は内面に指押さえの痕跡が残る。



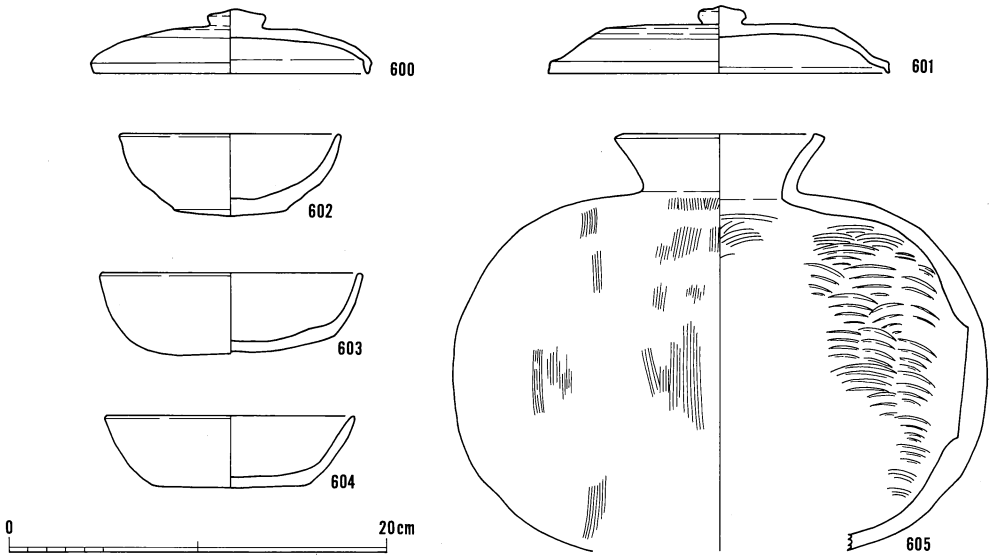
第77図　溝47出土土器

溝47出土土器（第77図）

須恵器杯Ab1・甕A、製塩土器が出土している。(585) は底部は平らになり、体部と底部の境は稜を持って屈曲しており、杯Ab1の中では新しくなる傾向がある。甕A (586) は大形で、口縁部の断面形は長方形を呈する。頸部に3条の凹線を施し、口頸部を4段の櫛描波状文で飾る。体部は外面が格子目の叩き後にカキ目調整、内面に青海波文を残す。

製塩土器は13点が図化できたが、(599) 以外は口縁部の小片である。(599) は口径約16.8cmを測り、G2類に分類できる。口縁部内面を横方向の指ナデ、体部内面は縦方向の指ナデをしている。胎土に砂粒等はほとんど含まれないが、スサが混入されている。

(587～598) は口縁部の破片で、全体の形状を知り得ないが、(588・590) は薄手の造りで、椀ないし杯形のC類に、(587・589・591～598) は厚手の造りで、(595・596) は口縁部が内彎することからF類に、(597・598) はG類になるものと思われる。(587・589・591～594) ははっきりしないが、E・F類になるものと思われる。



第78図　旧河道出土土器（確認調査時）

旧河道出土土器

旧河道からは前項で記した弥生土器（191～199）、古式土師器（189・190）の他、須恵器、土師器、製塩土器等が出土している。河道は大きく3層に分けられ、下層の河底近くからは（606～625）が、中層の礫は上層近く以外はほとんど遺物の出土は無く、上層から（626～744）が出土している。上層はさらに細かく分層が可能であったが、土層が薄いため、土層ごとに遺物の取り上げをすることはできなかった。

a）下層出土土器（第79・88図、図版第二十四・三十四）

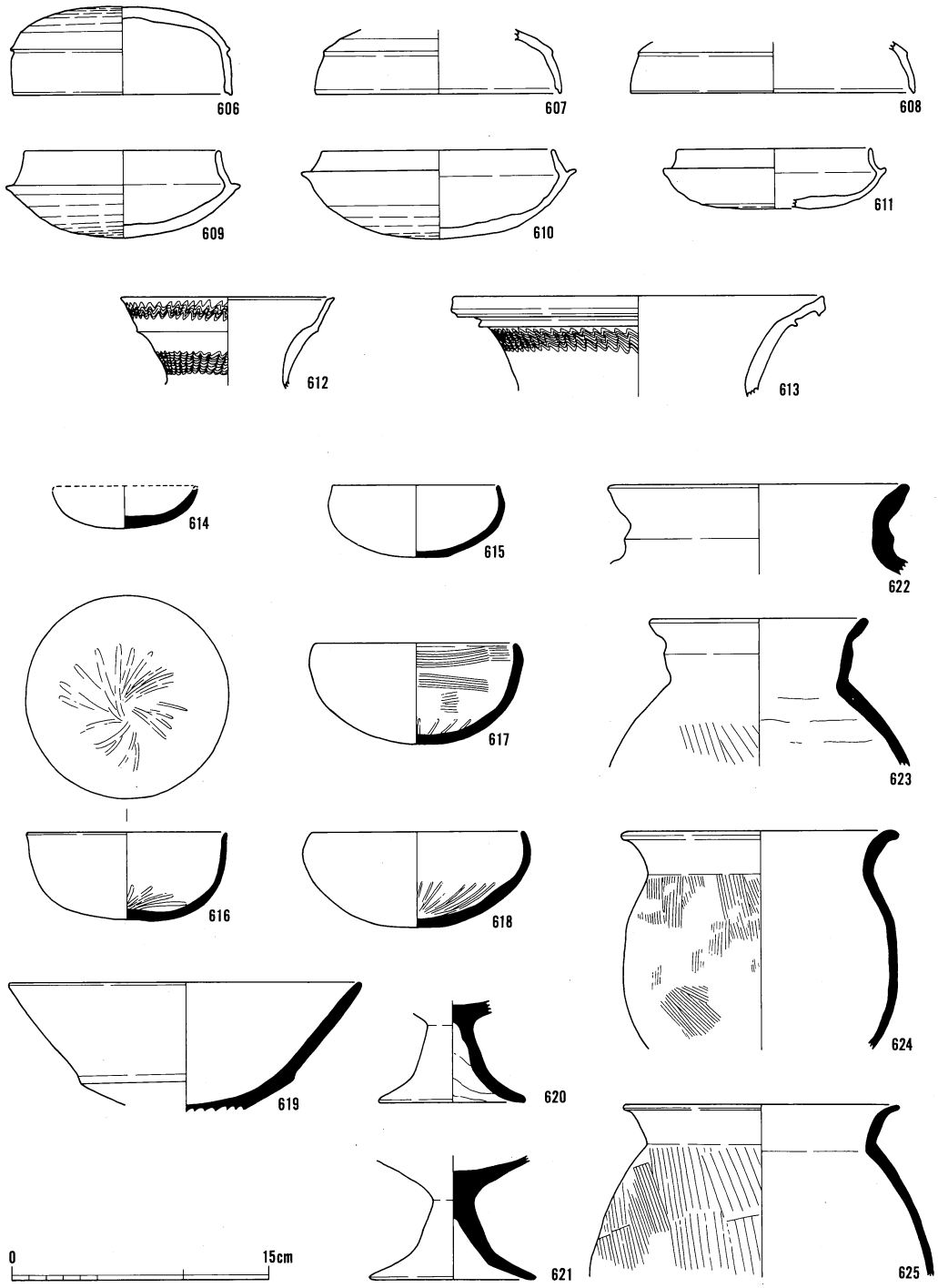
須恵器蓋D1・D2・杯C・瑕・甕Aと土師器椀A・椀B・壷A・甕A・甕B・高杯Aがあり、須恵器杯蓋（606）・杯身（609）と土師器杯（615～618）・壷（623）・甕（625）・高杯（619）は一括して出土している。

須恵器　蓋は（606～608）の3点が見られ、（606）はD1に、（607・608）はD2に分類される。（607・608）は口縁端部内面に面を持つが退化し、鈍くなっている。

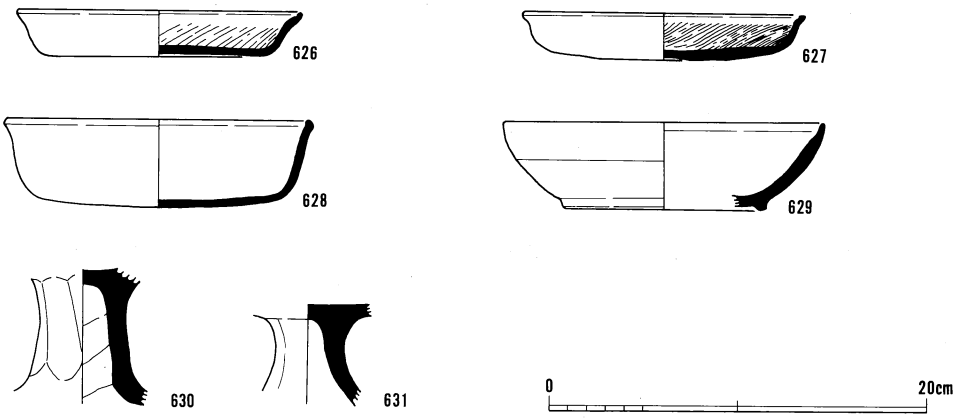
（609～611）は杯C2に分類され、（609）の口縁部はやや内傾するが、立ち上がりは高く、体部の篦削りもほぼ体部全体に及んでいる。ただ口径はやや大きくなっている。（610）の口縁部は内傾して立ち上がりも短い。（611）は小型化して口縁部の立ち上がりも短く、体部の篦削りは底部周辺だけとなっている。

（612）の瑕は口縁部と頸部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部は短く外側に突出する。口縁部と頸部の外面には櫛描の波状文が施されている。

（613）は甕Aで、口縁端部直下と口縁部と頸部の境に凸帯が巡らされ、頸部上半の外面には



第79図　旧河道出土土器（1）



第80図　旧河道出土土器（2）

櫛描の波状文が施されている。

土師器　(614) は小型で浅く、皿状の器形を呈している。(615～618) は椀で、(615・617・618) は椀A、(616) は椀Bに分類され、(615) は口縁端部に面を持つ。(616～618) は底部内面に正放射状の暗文が施され、(617) の口縁部内面は刷毛調整されている。

(622・623) は頸部に稜を持つ壷Aで、稜は頸部と口縁部の境を強くヨコナデすることによって頸部に作り出している。(623) の外面は粗い刷毛調整、(622) はヨコナデ調整である。

(624・625) は甕で、ともに口縁端部は短く外反している。(624) は底部を欠くが甕Aに、(625) も体部下半を欠いているが、甕B類に分類される。ただ他の甕B類に比べ、体部は中位が張る。外面の調整はともに刷毛調整で、(625) の刷毛は粗い。(624) の内面はナデ、(625) の内面には横方向の粗い刷毛が残る。

この他、製塩土器 (690～692・743・744) が出土している。(743・744) はA1に、(690・692) は口径に大小があり、器形も異なっているが、大きくC類に分類されるものである。

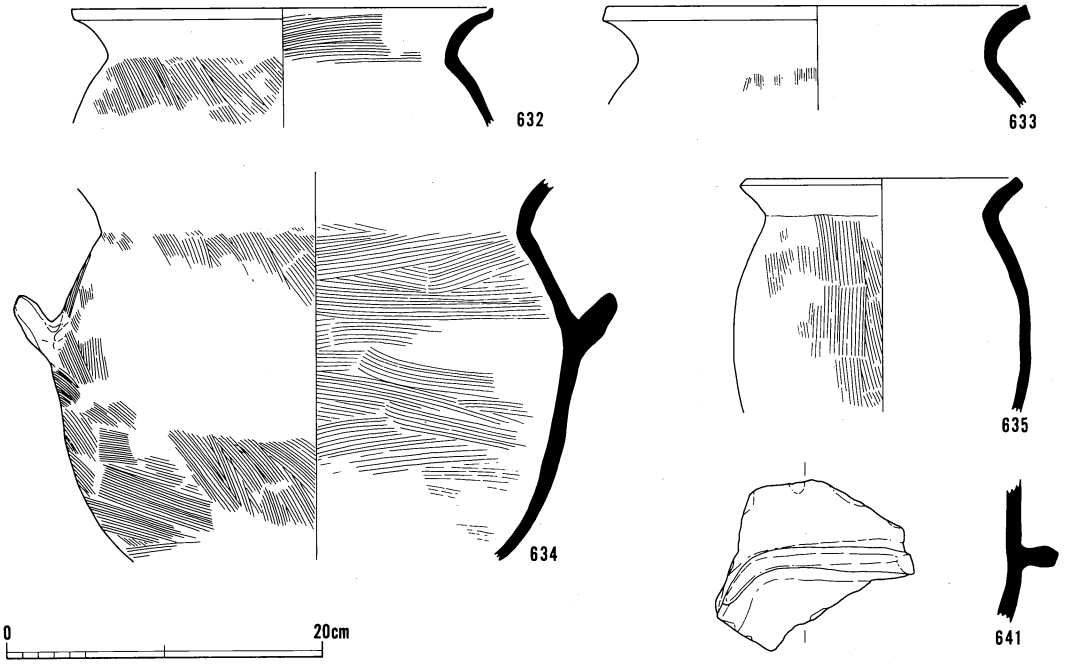
b）上層出土土器（第78・80～85・88・89図、図版第二十五・二十六・三十四・三十六）

上層からは須恵器蓋B・蓋C・杯Aa1・杯Aa2・杯Ba・杯Bb・壷A・壷B・壷C・甕A・甕B・横瓶・甑、土師器杯・皿・甕A・甕B・甕C・高杯・竈、製塩土器が出土している。なお確認調査時に旧河道から出土した土器類は出土層位が不明であるが、今回の上層出土土器と差異が無いため、ここでまとめて扱った。

土師器　杯・椀・皿・高杯・甕・竈類が出土している。

(628) は杯Aで、口縁部下半がやや内彎し、口縁部上半が僅かに外反するが、外傾度は少ない。口縁端部は内側に巻き込まれて終わる。調整は底部外面を篦削りし、口縁部は内外面ともヨコナデしている。口縁部内面にかすかに斜放射の暗文の痕跡が残る。

(629) は杯Bで、口縁部全体が内彎する弧を描く形態を持つ。口縁端部内面を強くナデるこ



第81図　旧河道出土土器（3）

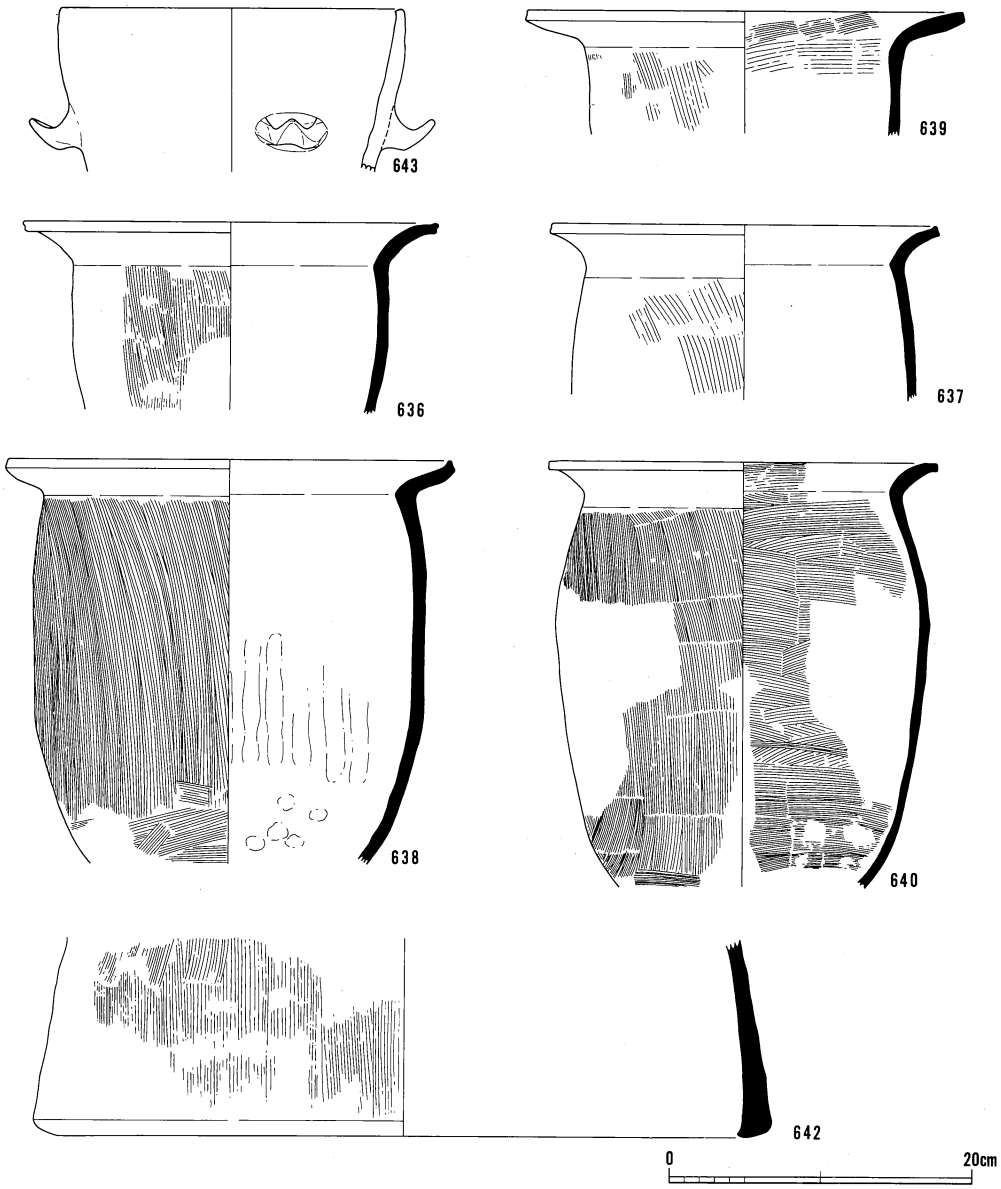
とによって、端部を肥厚させた状態に似た形態を作っている。調整は口縁部下半を篦削りし、上半をヨコナデしている。

皿（626・627）の2点が出土している。ともに口径15cm前後、器高2.5cmで、口縁部内面には斜放射に暗文を施している。調整は、（627）は遺存状態が悪く不明な点が多いが、（626）の底部は指押さえ後に篦削り、口縁部は内外面ともヨコナデする。ただ（626）の底部周囲は非常に丁寧に調整しているが、底部中央は雑で、指押さえの凹凸を残している。

高杯は脚柱部が2点（630・631）出土している。ともに中空の短い脚柱部で、（630）は9方向、（631）は8方向から篦削りし、面取りをしている。（630）は脚柱部の下端が屈曲し、（631）は外反している。調整は内面をナデ調整しているが、粘土紐の接合痕を残す。

甕（632～640）にはA・B・Cの3タイプが見られ、（635）は小形で体部から屈曲して開く口縁を持つ甕Aである。口縁端部は面を持ち、体部外面は縦方向の刷毛、内面はナデ調整する。

（636～640）は長い体部から屈曲して開く口縁を持つ甕Bである。口縁部が、外反しながら開き端部を上方に摘み上げたもの（636・637）、口縁部が外反しながら開くもの（640）、横上方に開くもの（639）、いったん横上方に開いた口縁がやや内彎し、端部を上方に摘み上げたもの（638）が見られる。体部外面の調整は全て縦方向の刷毛調整しているが、（638）は頸部から底部付近まで一気に刷毛を引いている。（638・640）は体部と底部の境は横方向の刷毛となっている。体部の内面は刷毛調整するもの（640）、ナデ調整するもの（636～639）がある。口



第82図　旧河道出土土器（4）

縁部の外面は全てヨコナデ調整しているが、内面は（639・640）が刷毛調整、（636・638）がヨコナデ、（637）は刷毛後にヨコナデ調整している。

甕C（634）は丸い体部に把手を持つもので、口縁部は、端部を欠くが、体部から屈曲して、外反しながら外上方に開く。把手は貼り付け式のもので、わずかに上方に反るが、ほぼ直線的に外上方に伸びる。（632・633）も肩部から下を欠くが、口縁部・肩部の形状から見て、甕C

になるものと思われる。(632・633) の口縁部は端部を僅かに摘み上げている。(634) の調整は体部外面が縦方向の刷毛、底部と体部の境付近が横方向の刷毛、内面は横方向の刷毛となっている。(632) は口縁部の内面も刷毛調整している。(634) の体部下半にススが付着している。

竈 (641・642) は2点を図化したが、他にも数点出土している。(641) は庇の左上コーナー部分で、外面はナデ、内面は横方向に刷毛調整し、内面にはススが付着している。(642) は径約46cmの円筒形の土器で、底端部は内側に突出し、底端面には木あるいは草のような、繊維質を持ったものの圧痕が残っている。調整は外面が縦方向の刷毛、内面はナデである。径から考えて竈の類として扱ったが、内面にスス等の付着は認められず、外面に二次的な焼成を受けている。したがって他の円筒形を呈する土器となる可能性もある。

須恵器 (600・601・644～650) は杯蓋で、蓋Cの (644・645) は、ともにカエリは口縁より下方に突出しないが、(644) は比較的小形で、カエリと口縁部とがほぼ同じ位置となっている。(645) は大形で、天井部は偏平となり、つまみも偏平なものである。ともに天井部は篦削りしている。(644) は杯Aの蓋になる可能性もあるが、口径が合致するものは見当たらず、不明である。(645) は杯Ｂａタイプの蓋になる可能性が高い。(600・646) は天井部からなだらかに内彎して口縁部となる蓋Bで、天井部は偏平となっている。(600) の天井部には中央が膨らんだ偏平なつまみが付いている。調整は天井部が篦削り、その他はナデ調整である。口径から見て杯Ｂａの蓋になるものと思われる。

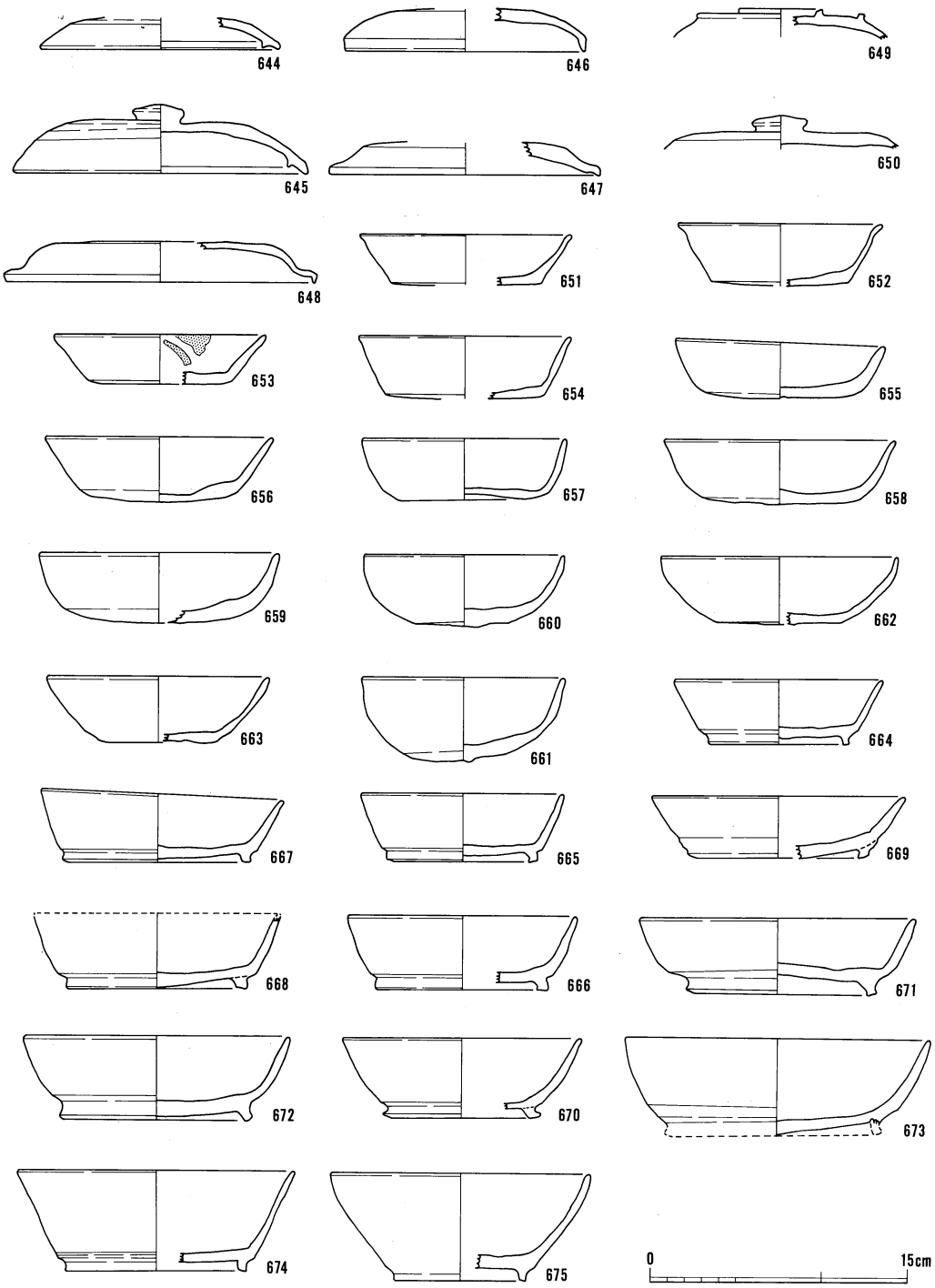
(601・647・648) は屈曲する口縁を持つ蓋Aで、(649・650) はそのつまみになるものと思われる。(601・648) は大形で、口縁端部は下方に突出し、天井部は高く平らである。(647) は全体に厚手の造りで、口縁端部は僅かに突出する程度である。(649) はリング状のつまみの他に、口縁部と天井部の境にも凸帯が巡らされる。(650) は偏平であるが、中央の膨らんだ宝珠形のつまみを持つ。(647～650) の調整は、天井部は篦削りされ、その他は回転ナデである。

(602～604・651～663) は杯Aで、底部から緩く内彎して口縁部となるａタイプ (602・603・655・657～662) と、底部から屈曲して口縁部となり、底部と口縁部の境が明瞭なｂタイプ (604・651～654・656・663) が見られる。

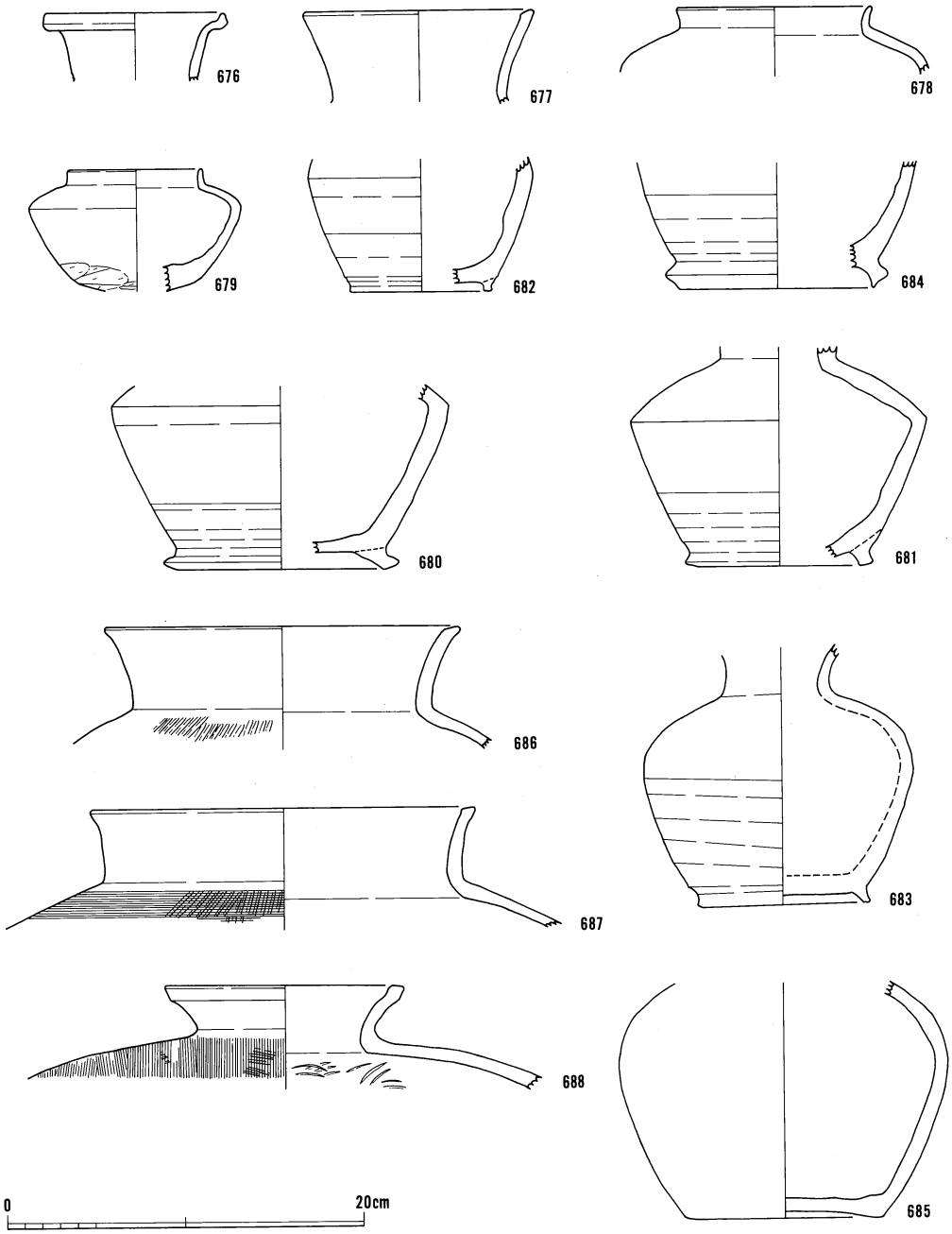
Ａａタイプにはa1 (602・660・661)、a2 (603・655・657～659) ・a3 (662) が見られ、a1タイプは口径約11.5cm前後、器高約4.3～5.0cmと、口径に対し器高が高く、特に (661) は器高が高い。したがって (661) は椀になる可能性もある。調整は、底部は篦切り未調整か篦切り後ナデ調整で、他は回転ナデである。

Aa3 (662) は本遺跡では1点だけが出土しているにすぎないが、鈩田遺跡では多く見られる器形である。口径は13.6cm、器高4.0cmで、調整は底部外面が篦切り後未調整で、この器形は蓋になる可能性も残されているが、見合う杯が見当たらないため、杯として扱った。

(603・655・657～659) はAa2に分類でき、調整は底部外面が篦切り後ナデ調整、他は回転



第83図　旧河道出土土器（５）



第84図　旧河道出土土器（6）

ナデである。(655・658・659) は器高に対し深さが浅く、口縁部の外傾度が大きいことから新しい様相を持つ。

底部から屈曲して立ち上がる体部を持つbタイプの杯Aには、b1・b2・b3タイプが見られ、b1タイプのものは (604・656) が出土している。(656) は他のb1タイプのものに比べ口縁部の外傾度が大きく、新しい様相を持っている。

(651～654・663) はb2に属し、口縁部が短く外反する (651・652)、口径に対し、器高が比較的高い (652・654)、器高が低い (651・653) が見られる。(663) は底部が小さく、体部が比較的深い椀に近い形態を持ち、底部は篦切りのままである。胎土も粗く、おそらく新しい様相を示しているものと思われる。(653) の口縁部内面には漆が付着している。

高台を持つ杯Bは体部と底部の境が内彎して丸みを持つaタイプと、屈曲するbタイプが見られる。aタイプ (670～673) の内、(670) は体部が内彎し、口縁部は短く外反する。底部中央を欠くが、底部の厚さは薄くなっている。(672・673) は底部中央が外側に膨れ、体部は内彎気味となっている。(673) は高台が剝離し、その形状は判らないが、(672) の高台は比較的高く、外側に踏ん張っている。調整は (670・672・673) の体部下半が篦削り、(671) は体部下端が篦削りされている。(672・673) はともに焼成が甘く、色調も灰白色で似通っており、同一産地の可能性がある。

Bbには、(665～668) のように高台が底部外周囲より内側に付き、形状もしっかりしたものと、(664・674) のように細い高台が底部周囲に付くもの、(669) のようにくずれた高台が体部と底部の境に付くものがある。また口縁部が内彎するもの (675) も見られる。口径に大小が認められ、器高にもばらつきがあり、おそらく時期差を示しているものと思われる。

壷類は (676～685) の10点が図化できたが、口縁部の形状を知り得るものは (676～679) の4点にすぎない。(676) は長頸壷の口縁部片と思われるもので、頸部から屈曲して開いた後外反し、端部を上方に摘み上げている。胎土は粗く、調整も雑である。

(677) は頸部から外上方に開き、口縁端部は内傾する面を持つ。直口壷の口縁部と思われるものであるが、横瓶・平瓶の可能性もある。

(678・679) は壷Cで、(678) は比較的大形、(679) は小形である。(679) は肩部が屈曲し、底部は不定方向に篦削りしている。

(680～685) は壷の体部で、肩部が張って稜を持つ壷A (680～682) と、肩部は張るが丸く、稜を持たない壷B (683・685) が見られる。肩部に稜を持つ (680・681) は体部下半を篦削りし、高台は外方に踏ん張る。特に (680) は大きく踏ん張った形状となっている。肩部から頸部にかけての成形には、段構成は認められない。この2点の他 (684) も高台の形状から見て、肩部に稜を持つ可能性が高い。

壷B (683) の高台は壷Aに比べると細い上に小さく、外側の踏ん張りも弱い。(683) は肩

部以下を篦削りしている。(685) は高台を持たず、底部は中央が僅かに内側に窪んだ平底で、調整は体部外面全体に自然釉がかかり不明な点が多いが、底部外面はナデ調整し、体部下端を篦削りしている。

(686・687) は甕Bで、ともに口縁端部は内傾する面を持つ。体部は下方に大きく開く。(687) は体部を叩きの後、カキ目調整するが、(686) は叩きをそのまま残している。

(688) は横瓶で、頸部は外上方に開き、口縁部は頸部から屈曲して上方に立ち上がる。口縁端部はわずかに外傾する面を持つ。調整は外面が叩きの後カキ目、内面には同心円文を残す。

製塩土器　薄手のC・D・I類と、厚手のE・F・G・H類が出土しているが、破片が大きく、(697・701・713) のように完形に近い形で出土したものも見られる。また須恵質のものと土師質のものが見られる。

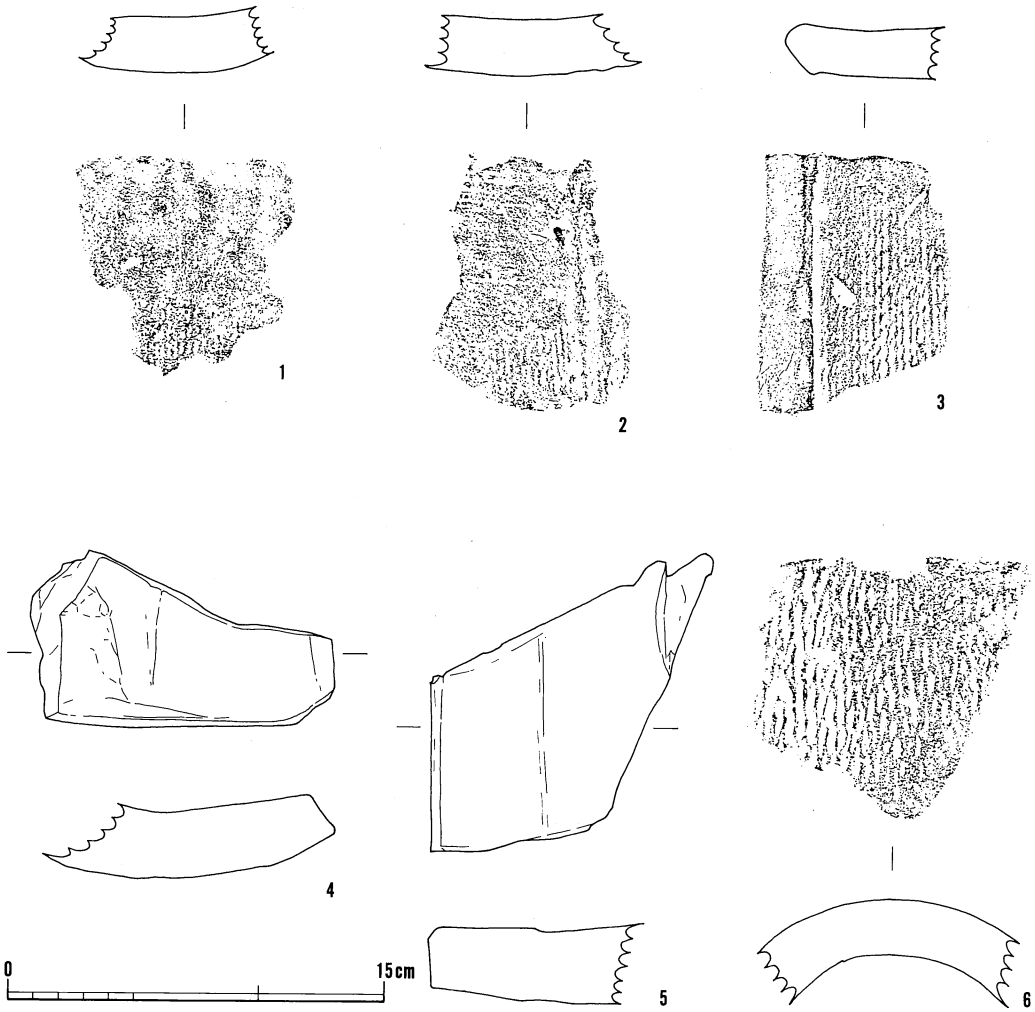
椀・杯形の製塩土器C類には、C4・C5が見られる。C4 (693～695・699・722・729～733) は破片ばかりの出土であったが、薄手の造りで、口縁部内面に横方向の指ナデによる凹凸が見られ、口縁端部は薄く尖る。外面も指ナデ調整である。胎土に石粒を多く含み、(729) は二次焼成を受けている。C5は (718・719) の2点がある。端部が尖り、内面は横方向のナデ、外面もナデ調整である。

D2類は (698・721・724・725) の4点があり、内外面ともナデ調整で、胎土に砂粒を多く含む。(696・697・700～717・734・738～741) は極めて厚手の造りで、E・F・G・H・I類に分類できるものである。(696・697) はE類で、(696) は口径も小さくE1類に分類できる。(697) は完形で出土しており、E2類に分類される、須恵質の大形品である。調整は口縁部から底部周囲内面まで横方向のナデ、底部内面はナデ調整である。外面は指押さえ後にナデ調整している。口縁部の破片の内 (720・723・734・737) は調整からこの類に属するものと思われる。(720・737) は土師質、(723・733・734) は須恵質である。

(708～713) は砲弾形を呈するF類に分類され、(708～710) はF1類に、(711～713) はF2類に分類される。完形に近い (713) は口縁部が内彎し、底部は尖底気味の丸底となっている。(713) の調整は底部から体部の内外面は指押さえ後に縦方向の指ナデ、口縁部は内外面とも横方向の指ナデ調整で、外面の調整に比べ内面の調整は丁寧である。調整方法から見て、(739～741) の口縁部片もこの類に含まれると考えられる。(708・711) は須恵質である。

G類はG1 (702・703・714) と、G2 (715～717) がある。底部まで知り得るものはないが、(717) は下端が内彎しており、おそらく底部は丸底になるものと思われる。基本的な調整はF類の調整方法と変わらないが、(714) のように内面を丁寧にナデて、平滑に仕上げるものと、(717) のように、内面に凹凸を残すものがある。(717) の体部下端は指押さえのままである。

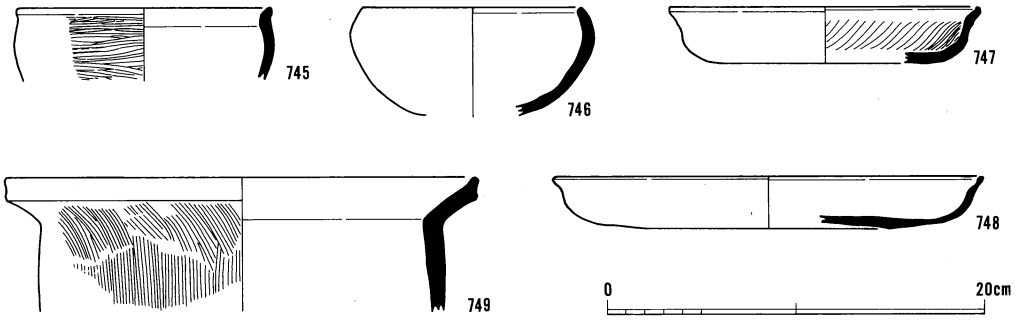
(704～707) のH類は体部から口縁部にかけての形状はG類と大差ないが、口縁端部に面を



第85図　旧河道出土瓦

持つ。調整は丁寧で、胎土も石粒等は見られない。(704・705) は内面に布目痕を持ち、(704) の布目は縦約1㎜・横約3㎜、(705) は4㎜前後で粗く、一方の糸が見られない部分もある。また (705) は布目が見られない部分もある。(707) には布目は見られないが、丁寧なナデ・指ナデで平滑に仕上げ、外面にも粘土紐の接合痕が見られない。(704・705・707) は指押さえによる凹凸を残すが、ナデ調整している。(705) の胎土はスサが混入されている。

(701・735・736) は製塩土器Ⅰ類で、(701) は体部中位が張り、底部は丸底である。外面には体部下半に指押さえの凹凸を残し、体部から口縁部にかけては横方向のナデ、内面全体はナデ調整している。(735・736) は体部から外反する口縁部片で、他にこうした口縁部を持つものがないことからこの類として扱った。(736) は口縁部が短く、須恵質である。



第86図　包含層出土土器（1）

瓦類　6点出土している。（1～5）は平瓦、（6）は丸瓦の破片であり、（1・2・4）は端縁部の、（3）は側縁部の破片である。（1～3）は凸面側に側面とほぼ並行する縄目叩きが残るが、（1・2）の端縁部は撫で消されている。（4）の凸面は縄目叩きの後、刷毛調整されている。（3）の凸面は左縒りの縄目叩きで、側面は篦切りである。（5）は凹面・凸面ともナデ調整で、凹面・凸面の区別が付かないほど、凹面・凸面とも平坦に仕上げられている。（6）は丸瓦で側縁・端縁とも欠くが、凹面はナデ調整、凸面は縄目の叩きをそのまま残す。

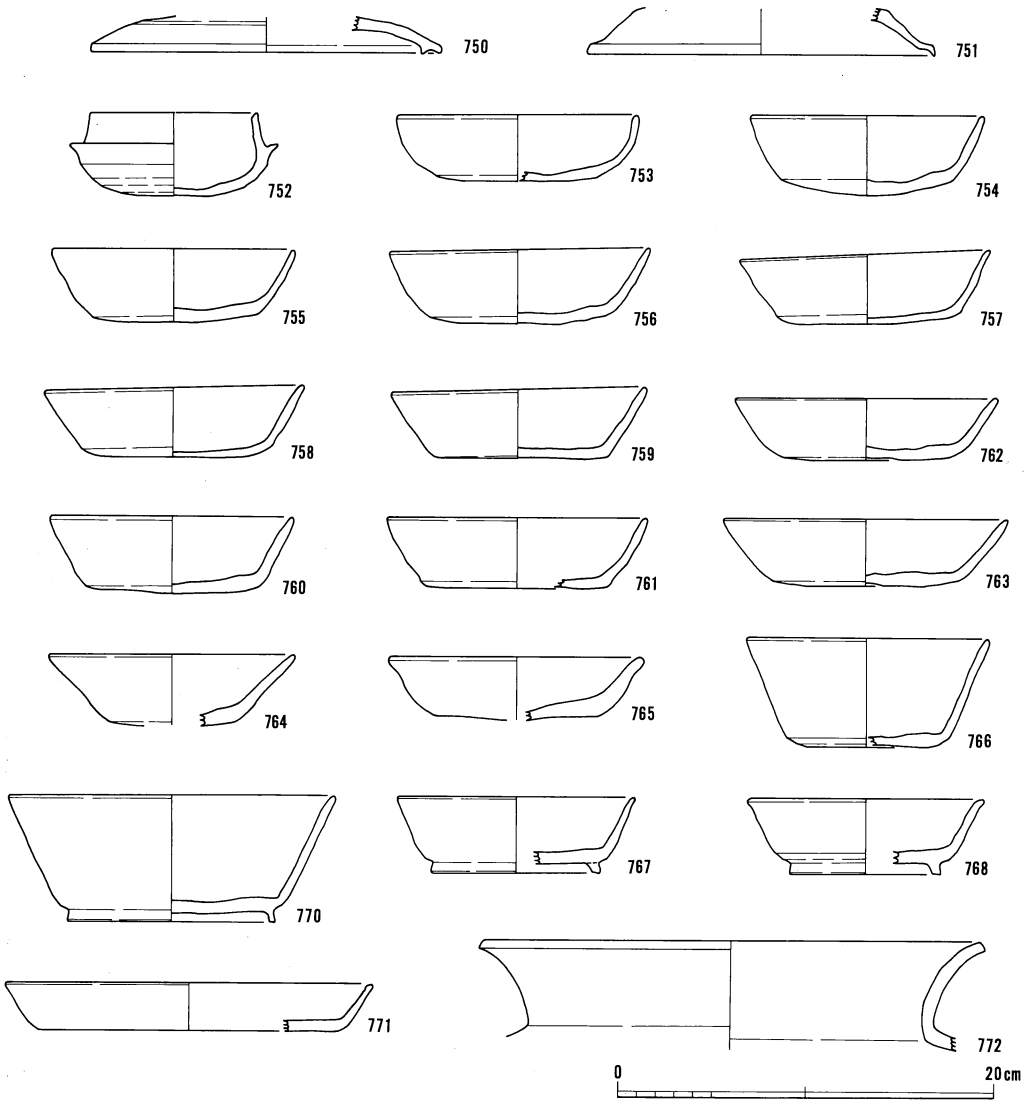
墨書土器（図版第三十六）　1点だけが出土している。杯Bの底部外面に墨書されているが、判読はできない。

包含層出土土器（第86・87・98図、図版第二十七・三十三上）

須恵器・土師器・製塩土器・土錘・紡錘車等が出土している。

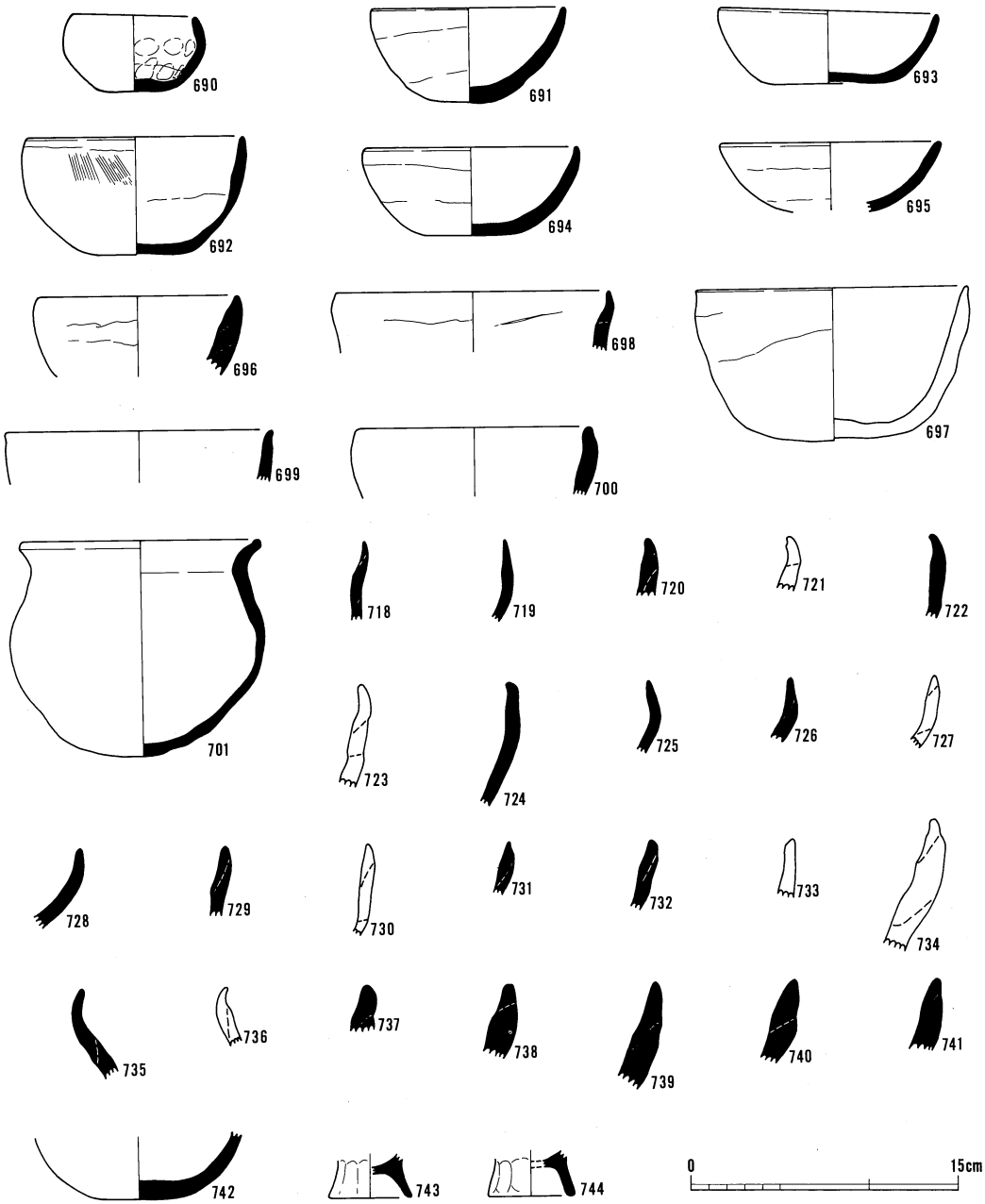
土師器　椀A（746）・椀B（745）・杯A（747）・皿（748）・甕B（749）が出土しており、椀A（745）は丁寧な造りで、外面篦磨き、内面篦削りしている。杯A（747）は内彎する体部に、外反する口縁部を持つもので、口縁端部は内側に肥厚する。内面に斜放射状の暗文が施され、底部外面は篦削り後にナデ、体部外面はナデ調整する。（748）の皿は口縁部内面を強く凹線状にナデし、口縁端部が内側に肥厚したような形状を作り出している。（749）の甕はB類に分類されるもので、口縁端部を上方に摘み上げている。

須恵器　杯蓋A・C、杯A・B・C、皿、甕が見られる。杯蓋（751）は比較的高い天井部から屈曲する口縁を持つもので、杯蓋A1に分類されるものである。杯蓋C（750）は内面のカエリが口縁とほぼ同じ高さとなっている。杯Aはa2（753）・b1（754～761）・b2（762～766）があり、b1には口縁端部が内彎気味になるもの（754～756）と、口縁端部が短く外反するもの（757～761）が見られる。杯Bはb2（767・768）・b3（770）があり、（768）は体部下端を篦削りしている。杯C（752）は口縁端部に面を持ち、体部の篦削りは2/3に及んでいる。皿（771）は僅かに内側に肥厚し、端部は面を持つ。甕（772）は外反して開く口縁を持つもので、端部には面を持っている。

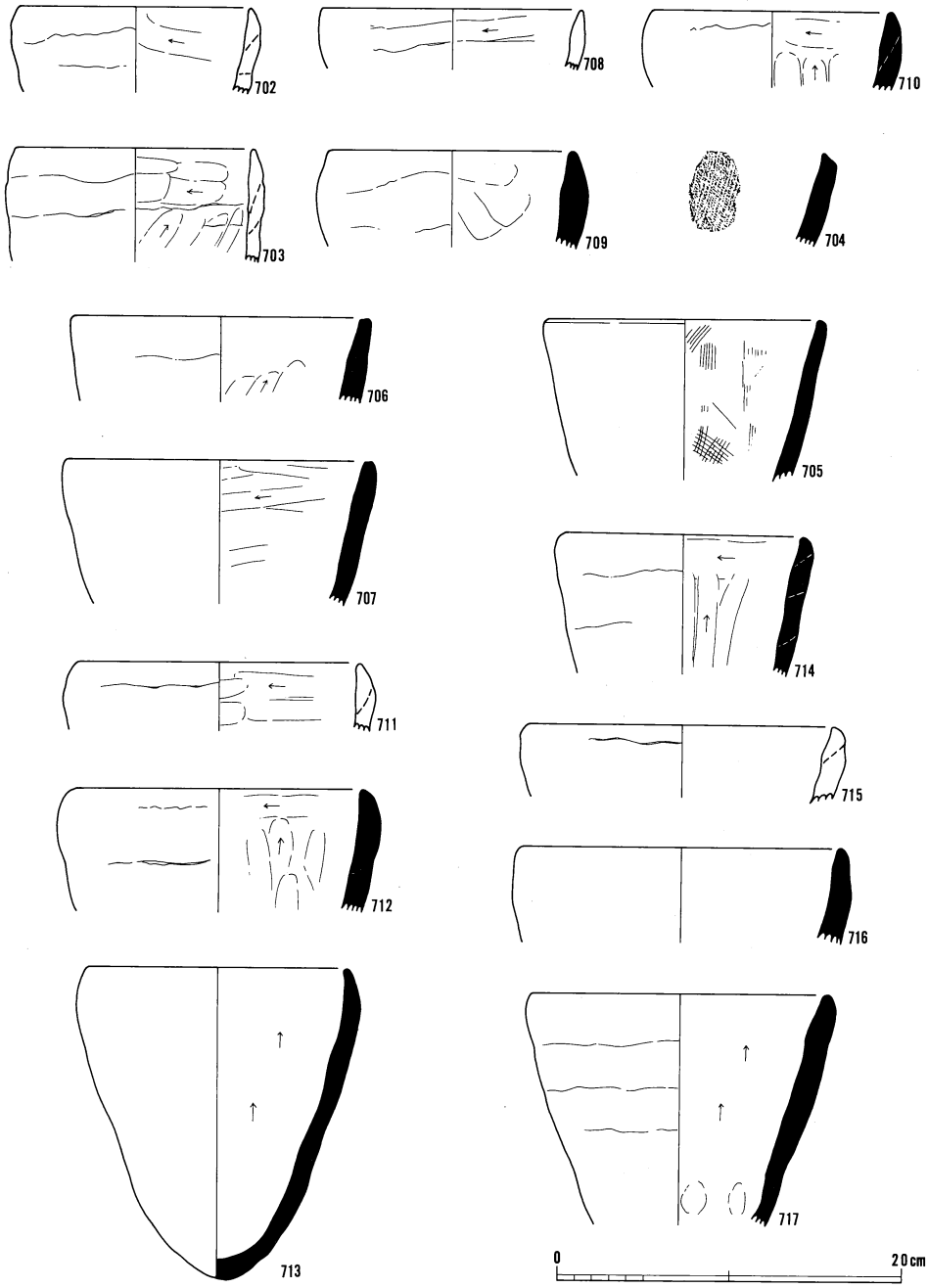


第87図　包含層出土土器（2）

土器類の他、土錘が5点（2・4・5・7・8）出土している。（2）のように長さ約3cmの小形のものから、（8）のように長さ約7.5cm・径4.5cmのものまで見られる。（7）は短冊形のもので、時期的には中世まで下がるものかもしれない。


690
691
693
692
694
695
696
698
697
699
700
701
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
0
15cm

第88図　製塩土器（2）


702
708
710
703
709
704
706
705
707
714
711
715
712
716
713
717
0
20cm

第89図　製塩土器（3）

4．平安時代末～室町時代の土器

中世の遺物は北地区の土壙・柱穴を中心に、調査区全域からコンテナ約10箱分の遺物が出土している。土壙24で比較的まとまって完形品が出土している以外は大半が細片である。遺物の時期は12～16世紀に及ぶと考えられるが、その大半を14～15世紀の遺物で占めている。

a）北地区出土土器

建物址1出土土器（第90図）

土師器椀・皿、常滑焼があり、(773) は灰白色の色調をする土師器の椀である。(774) は椀ＩＢ１に、(775) はＡ類の椀底部であろう。(776) は体部の立ち上がりから、皿と考えられる。(778) は常滑焼の甕底部と思われるが、極めて大形の製品の底部である。

建物址4出土土器（第90図、図版第二十八・三十二下）

土師器小皿・椀、須恵器椀、輸入磁器があり、(779) は土師器小皿ＩＣ１に分類される。(780～782) の椀類は、(780) は椀ＩＢ２に、(781) は椀ＩＣ１に分類される。椀類の３点はともに水漉した胎土を持つ精製品である。

(783) は須恵器の椀Ａに分類され、(784) は白磁で、高台の削り出しは浅い。見込み部に沈線が施され、玉縁の口縁部を持つ碗になるものと思われる。

建物址5出土土器（第90図、図版第三十二上）

土師器皿Ａ、須恵器椀Ａ・小皿Ａ、瓦器皿がある。土師器は皿Ａ２の (785) １点だけの出土であるが、(785) は右回転のロクロを利用して製作されている。

須恵器は椀Ａに分類される (788)、小皿Ａに分類される (786) の他、底部片のため分類が不可能な (787) がある。(788・786) とも口縁部に重焼きの痕跡が残り、器壁の薄い造りで、底部外面は右回転糸切りしている。

瓦器皿は (789) の１点であり、内面には乱れた暗文が施されている。

建物址6出土土器（第90図）

(792・793) の２点があり、(792) は土師器椀ⅡＣ２に分類でき、底体部境の内面は段状（圏線状）を呈し、堅い焼成の精製品である。(793) は備前焼の擂鉢片である。

建物址7出土土器（第90図）

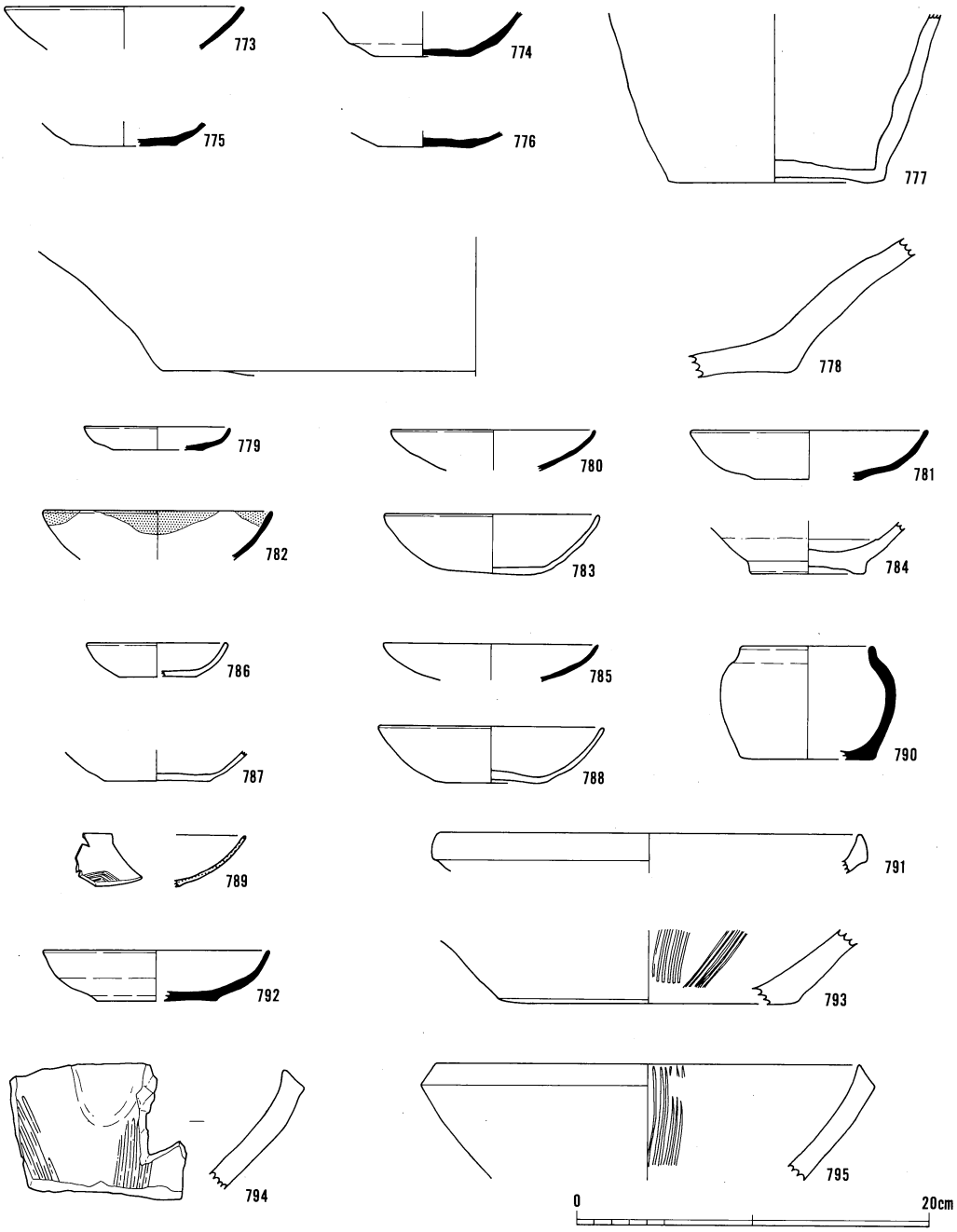
(794・795) はともに備前焼の擂鉢である。口縁端部は篦切りによる面を持ち、内面に櫛状工具による６条の擂目が施される。(794) は片口部を持つ。

建物址8出土土器（第90図、図版第三十一上）

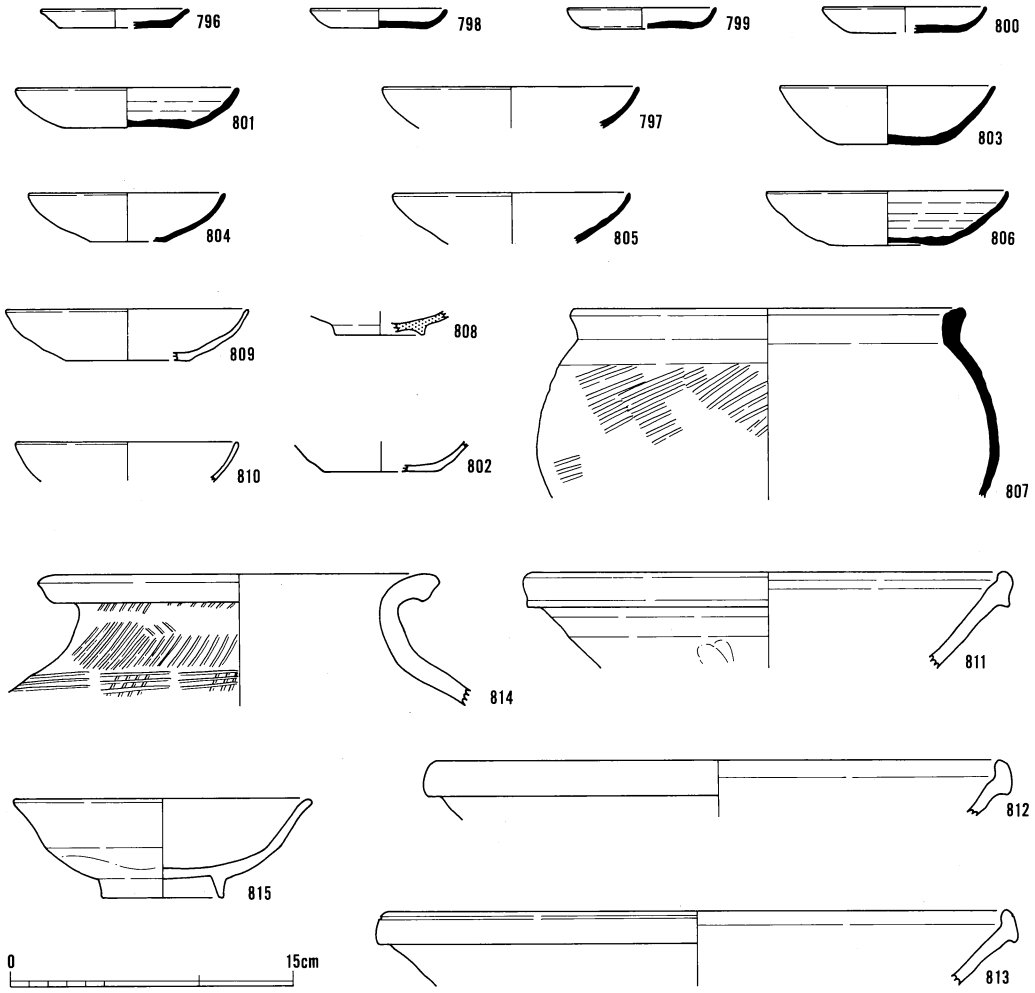
(790・791) は土師器小壺 (790) と須恵器捏鉢Ａ類 (791) である。(790) は胎土に雲母を含む製品で、底部は静止糸切りと思われる。

その他の柱穴出土土器（第91図、図版第三十一下・三十二下）

(796・797) は柱穴 (243) から出土したもので、土師器の小皿ＩＡ３と椀ＩＣ１に分類でき



第90図　北地区建物址出土土器



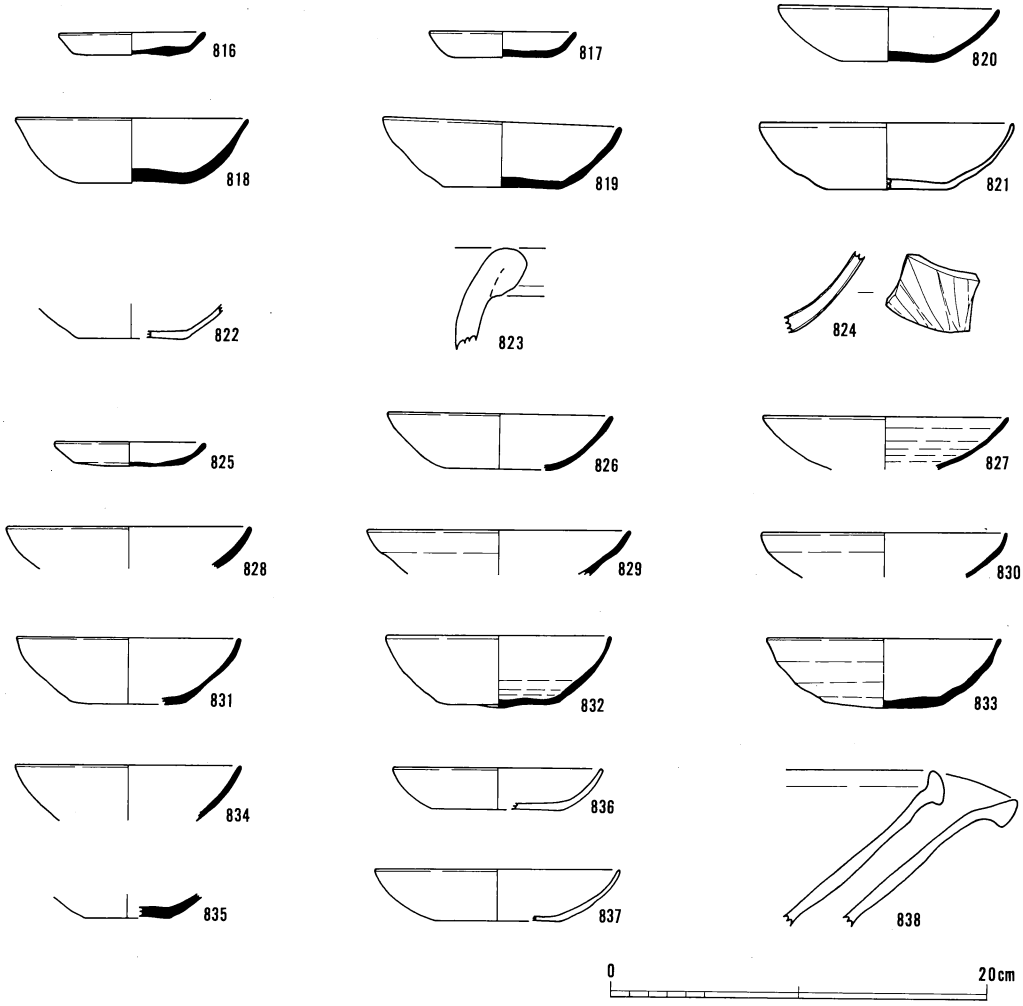
第91図　北地区柱穴内出土土器

る。(797) は薄い造りで、精製の土器である。

(801・802) は柱穴 (170) から出土した土師器皿Ｂ２と須恵器の底部で、(801) は精製品である。内面にロクロ目が顕著に残り、底部はやや上げ底気味となる。

(806～808) は柱穴 (247) から出土した土師器の椀ＩＢ２ (806) ・土堝Ａ１ (807)、瓦器椀の底部 (808) で、土堝は体部下位が張り下膨れの器形となる。(808) の瓦器底部内面には暗文の痕跡が残るが、詳細は不明である。

その他は１点ずつの出土であり、まとめてあつかう。(798～800・803～805) は土師器類で、(798～800) の３点は小皿ＩＡ２に分類される。(799・800) の２点は胎土・焼成・技法が似ており、同一産地の可能性がある。(803・805) は椀で、(803) は椀ＩＢ１に分類される。底部



第92図　北地区土壙出土土器

は回転糸切り後に、板状工具による調整がされている。

（809～814）は須恵器椀・捏鉢・甕で、（809・810）の椀類の内、（809）は椀Bに分類される。（811～813）の捏鉢はD類に分類されるものである。（814）の甕は口縁部を下方に拡張し、器表は燻されたように、黒灰色に変化している。

（815）は陶器椀で、体部下半はロクロ削りされている。体部外面の上半から内面に釉がかかり、体部下半と底部は露胎である。胎土に差異が感じられるが、唐津焼であろう。

土壙19出土土器（第92図、図版第二十八）

（816～819）の土師器小皿と椀があり、（816・817）は小皿ＩＡ３に分類される。（817）は

底部外面に板目状圧痕が残る。(818・819) は椀類で、(818) は椀ⅡＢ１に分類されるが、この類の他の土器と比較すると、口縁部は体部に比べて薄くなり、体部の器壁は厚い。(819) は椀ⅡＣ１に分類され、体部は底部から屈曲して開き、口縁部は内彎する。(818) の外面にはロクロ目が残り、(819) の底部内面には仕上げナデが顕著に残る。

土壙20出土土器（第92図、図版第二十八・三十二上）

土師器 (825～835) と須恵器 (836～838) があり、土師器は小皿ⅠＡ３ (825) ・椀Ⅰ (827) ・椀ⅠＢ１ (826) ・椀ⅡＡ１ (831・832・834) ・椀ⅡＣ２ (833) の他、小片で分類が不能な (828～830) がある。小皿の (825) は薄い造りで、底部内面にはロクロ目が顕著に残る。椀Ⅰとした (827) は底部が不明のため、それ以上の分類は不可能であった。椀ⅡＡ１の (831・832) ともロ縁部は内彎気味に立ち上がり、(832) の底部内面には仕上げナデが施され、内面の下半にはロクロ目が残る。椀ⅡＣ２の (833) は全体に丸みを帯びた器形で、ロ縁部は強くナデられて、外反気味となり、体部に比べ、ロ縁部の器壁が薄い。また焼成が須恵器に近く、ロ縁部に重焼きの痕跡が残る。(825・830・834) は精製の土器であり、(832・834) は底部を左回転糸切りしている。椀ⅡＡ１ (831) と小片で分類が不能であった (829・830) はロ縁部が体部から屈曲気味に立ち上がる。

須恵器には皿Ａに分類される (836・837) の２点と、捏鉢Ｄ類の (838) １点がある。皿Ａの (836・837) は体部が内彎しながら立ち上がる。

その他の土壙出土土器（第92図、図版第二十八・三十二下）

土壙10・11・13・14・22から遺物が出土しているが、少量であることからまとめて扱った。(820) は土壙10から出土した土師器で、椀ⅠＢ１に分類される。堅緻な焼成で、精製品である。(821) は土壙14から出土した須恵器椀で、Ｂ類に分類されるが、底部の周囲外面は強くナデられて、屈曲する。底部は左回転糸切りで、地元産であろう。(823) は土壙11より出土した備前焼の玉縁ロ縁を持つ甕である。(824) は土壙22より出土した青磁碗の体部片で、外面に明瞭な鎬蓮弁文が削り出されている。

溝46出土遺物（第93図、図版第二十八・三十一）

(839) は貼り付け高台を持つ皿Ｅで、関東での「足高高台杯」の範疇に捉えられるものである。ロ縁部は外反してほぼ水平に開く。(840・841) は貼り付け高台を持つ土師器椀Ｅで、(841) は内面に横方向の篦磨きが施される。

(842) は深い器形の瓦器椀で、体部外面は全面に指押さえ痕が残り、部分的に横方向の暗文が見られる。体部内面上半には横方向、内面下半は縦方向の暗文を施している。

溝１出土土器（第93図、図版第二十八・三十二上）

土師器小皿 (843～845) ・椀 (846)、須恵器椀 (847・848)、青白磁合子 (849) がある。土師器小皿は小皿ⅠＢ１に分類される (843・844) と、小皿ⅠＡ２に分類される (845) があり、

Ｂ１の２点は堅緻焼成であり、焼成・調整・胎土が似ることから、同一産地のものである可能性が高い。

須恵器椀の内、(847) は椀Ｂに分類されるが、(848) は小片のため分類は不可能である。(847) は左回転ロクロで整形されており、特徴的である。

青白磁の壷形合子（849）は景徳鎮窯系の製品と思われるもので、器壁は薄く、口縁部内面から底部内面までと、底部の外面は露胎である。

溝２出土土器（第93図、図版第二十八・三十一）

土師器椀（850）・甕（851）、須恵器捏鉢（853・854）、瓦器小皿（852）が出土している。(850) は椀ⅡＢ１に分類され、全体に薄い造りである。（851）の甕は溝24からも一部の破片が出土している。体部は肩部が張らず、長胴の器形になると思われる。体部はナデ調整で仕上げられ、口縁部だけがヨコナデされている。

須恵器捏鉢の内、（853）はＥ類に、（854）はＦ類に分類される。

瓦器小皿（852）は指押さえによる成形後に、口縁部に左回りのヨコナデが施されている。

溝９出土土器（第93図）

土師器小皿・椀があり、小皿（855）は小皿ＩＡ３に分類される。底部は薄く仕上げられ、内面にロクロ目が残る。椀（856・857）はⅡＡ２に分類され、ともに底部内面に仕上げナデが施されている。焼成・胎土・調整が似ることから、３点とも同一産地の可能性が高い。

溝13出土土器（第93図、図版第二十八）

土師器小皿・椀があり、小皿（858）は小皿ＩＢ１に分類され、口径に対しやや浅い器形で、左回転ロクロによる整形である。椀の内、ＩＡ２の（860）は底部に糸切り後、篦状工具による押さえが施され、ⅡＢ１の（859）は、底部に糸切り後、周縁をナデ調整している。

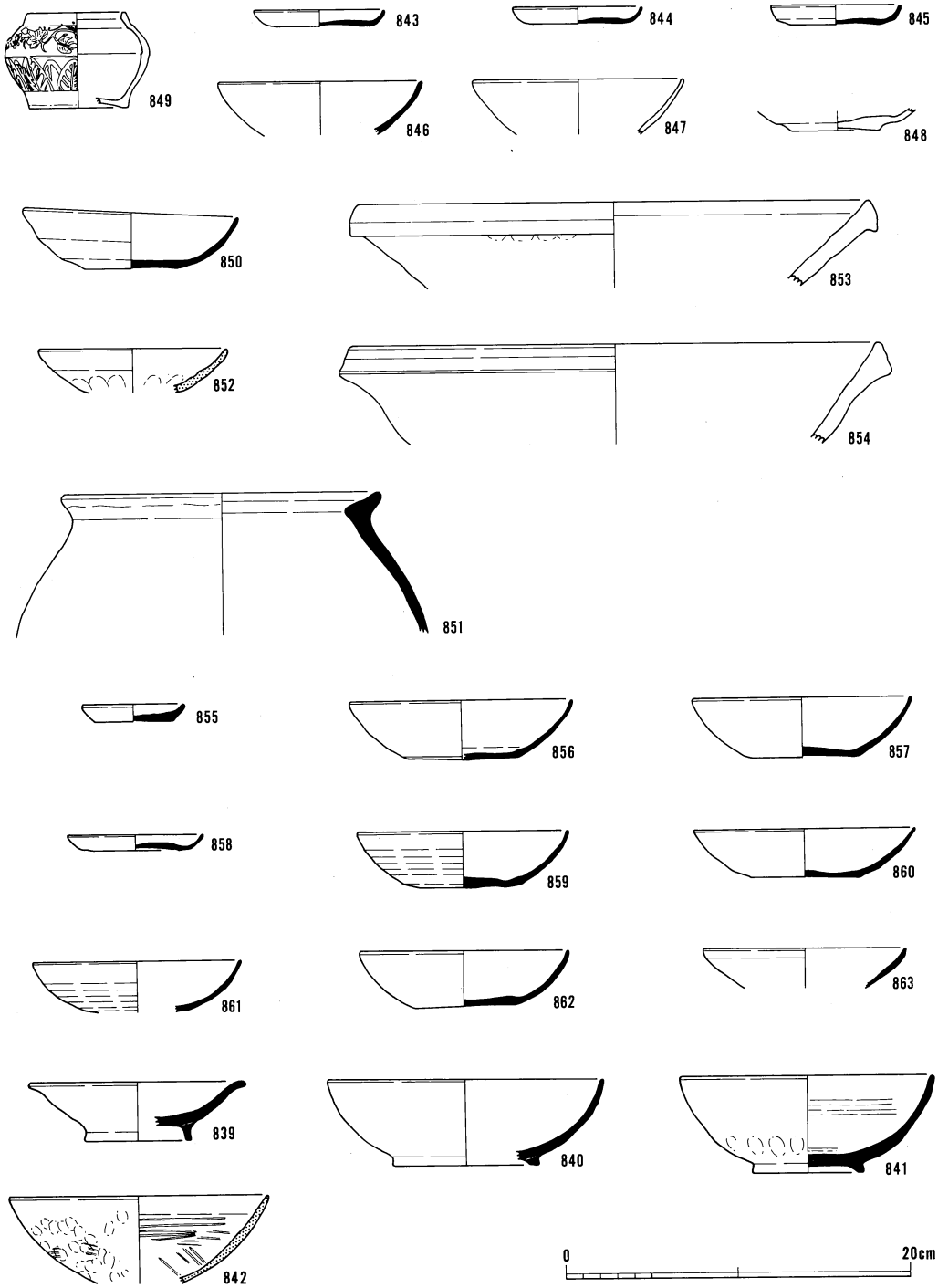
溝23出土土器（第94図、図版第二十九・三十一）

土師器小皿・皿・椀・土堝・羽釜、須恵器捏鉢等がある。土師器小皿（864）はＩＤ類に分類され、底部は篦切りである。皿（865）はＡ１に、（867）はＢ１に分類される。椀ＩＢ１の（866・868）は内外面にロクロ目を残す。（869）の椀Ｅは磨滅が著しく、調整は不明瞭である。土堝（871）はＡ１類に分類され、（907）と同様の器形を持つ。羽釜（870）は内傾する短い口縁部に、鍔が水平に付く。体部は張らず、ほぼ直立している。

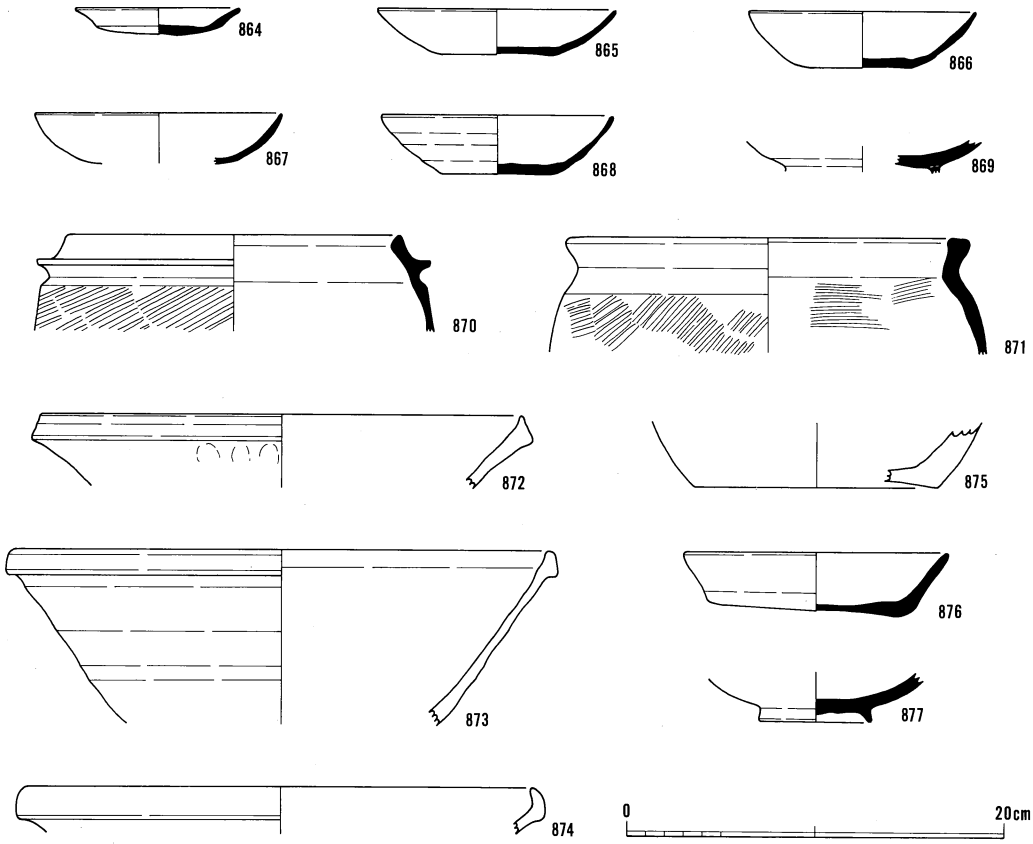
須恵器の捏鉢は、（872）がＦ類に、（873）がＤ類に、（874）がＣ類に分類される。(875) の底部は壺か瓶子類になるものと思われる。

その他の溝出土土器（第93・94図、図版第二十九・三十一）

溝10から（861）が、溝15から（862）、溝17から（863）が、溝24から（876・877）が出土しているが、いずれも少量であり、まとめて扱った。(861・862) は椀ＩＢ１に分類され、(861) は外面に、(862) は内面にロクロ目が残る。(863) は椀ＩＢ２に分類され、これも内面にロク



第93図　北地区溝出土土器（1）



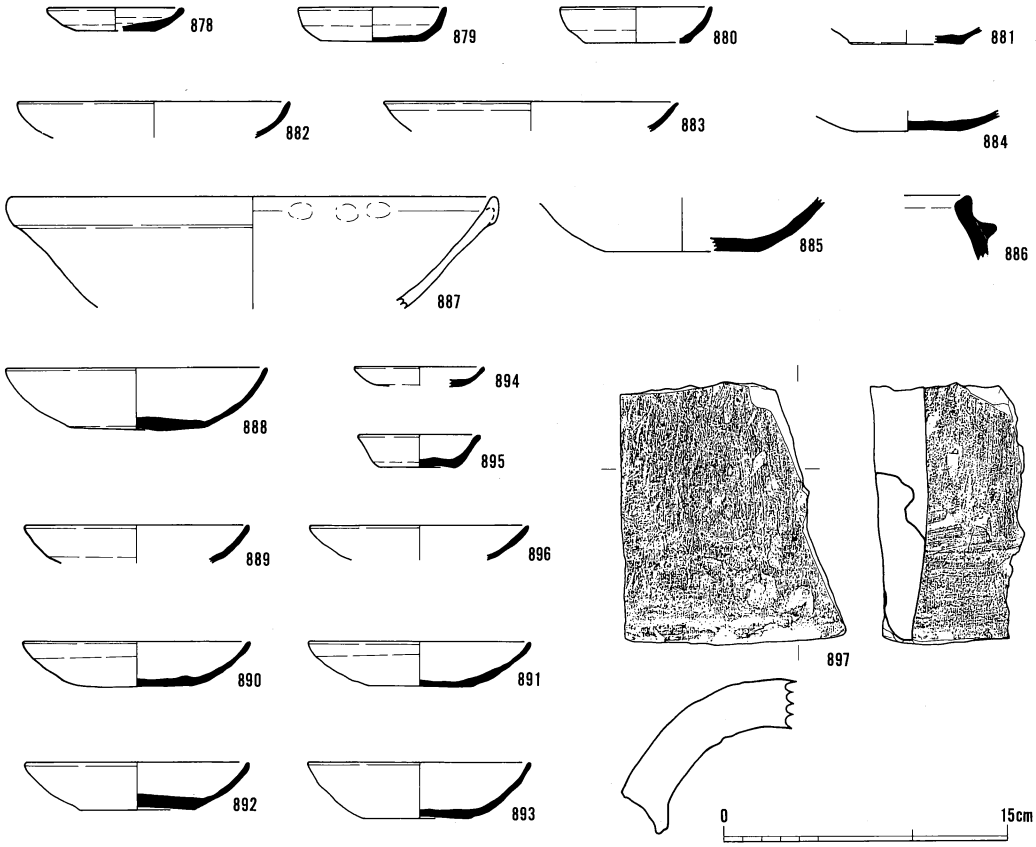
第94図　北地区溝出土土器（2）

口目を残す。(876) は杯Dに分類され、やや厚手の器壁を持つ。口径に比べ底部の大きな器形で、底部外面はナデ調整であり、古くなる可能性を持つ。(877) は貼り付け高台を持つ底部で、体部の外面は指押さえで整形した後、ナデ調整する。底部には粘土紐の接合痕が残る。

包含層出土土器（第97図、図版第三十・三十一・三十二）

(910～928) の土師器・須恵器・黒色土器・陶器・磁器・石製品があり、土師器には小皿ⅡA1 (910)・皿 (912)・椀ⅠA2 (913)・椀ⅡA2 (914)・椀E (915)・土堝A1 (917)・託 (911)・壺 (922)・脚部 (918) がある。皿 (912) は厚手の造りで、底部周囲を指押さえしている。椀E (915) は貼り付け高台を持つもので、内面に篦磨きが3分割に施される。(911) の託は薄い貼り付け高台が皿部に付く。(917) の土堝は口縁部が肥厚する。(922) の壺は底部は糸切りで、肩部は屈曲して鈍い稜を持つ。体部の内面には粘土紐の接合痕が残る。

須恵器類には椀B (919)・捏鉢C (920・921) がある。(919) の椀Bは口縁部に重焼きの痕跡が残り、薄い造りである。捏鉢Cはともに口縁部を上方に拡張したもので、(920) の外面にはロクロ目が顕著に残る。



第95図　東地区出土土器

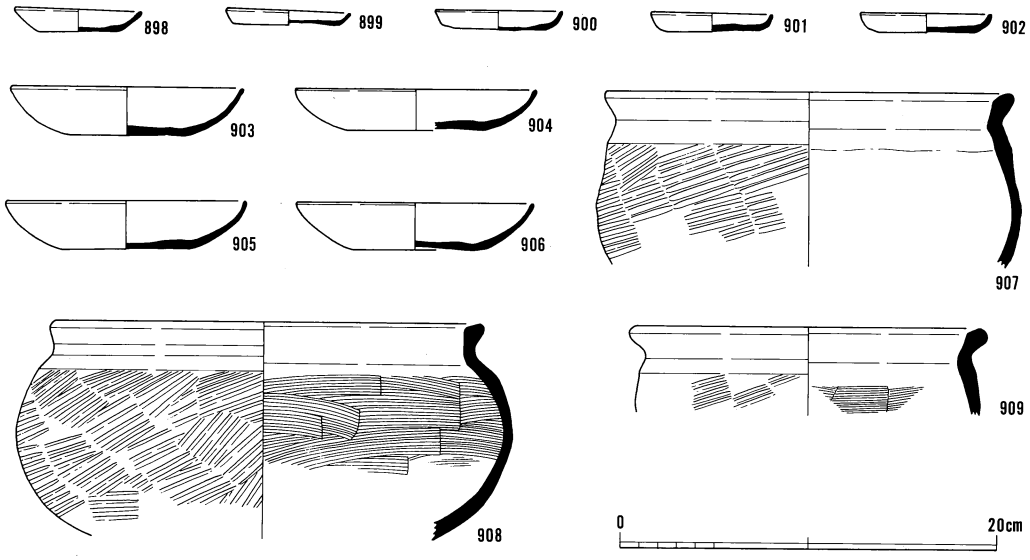
黒色土器椀（916）は内面に篦磨きが２分割に施され、胎土には砂粒を多く含むものである。

（924～927）の磁器は（926）が青磁無文碗、（925）が鎬蓮弁文碗で、蓮弁文は削り出されている。（926）は見込み部に圏線が巡らされている。（926・927）とも底部は削り出しであるが、（926）は削りが浅く、底部は肉厚となっている。（923）は釉のかかった陶器で、瀬戸・美濃系の天目椀である。（928）は滑石製の石鍋で、断面にススが付着しており、温石等に再利用したものと思われる。

b）東地区出土土器

建物址10出土土器（第95図、図版第二十九）

土師器皿・椀類が出土している。皿（890～892）には、Ｂ２類に分類される（890・891）と、皿Ｃ１類に分類される（892）があり、ともに口縁部は内彎気味になる。（892）は底部が僅かに突出した形状を呈する。椀はＩＢ１類に分類される（893）がある。底部周囲の外面が強くナデられ、底部は僅かに突出する部分が見られる。皿Ｂ２の（890・891）は薄い造りで、胎土が似通り、皿Ｃ１の（892）と椀ＩＢ１の（893）とは胎土が似る。



第96図　南地区土壙24出土土器

建物址11出土土器（第95図）

土師器小皿（894・895）・皿（896）、丸瓦（897）があり、小皿にはⅠＢ２に分類される（894）と、ⅡＡ３に分類される（895）がある。（895）は精製品で、底部内面にロクロ目が残る。皿（896）はＢ１に分類されるが、口縁端部は尖り気味になる。（897）は丸瓦で、凸面を縄目の叩き後に、縦横のナデ調整している。凹面は布目痕が残るが、端面は板状工具によってナデ調整している。側面は未調整で、割り取ったままの状態となっている。

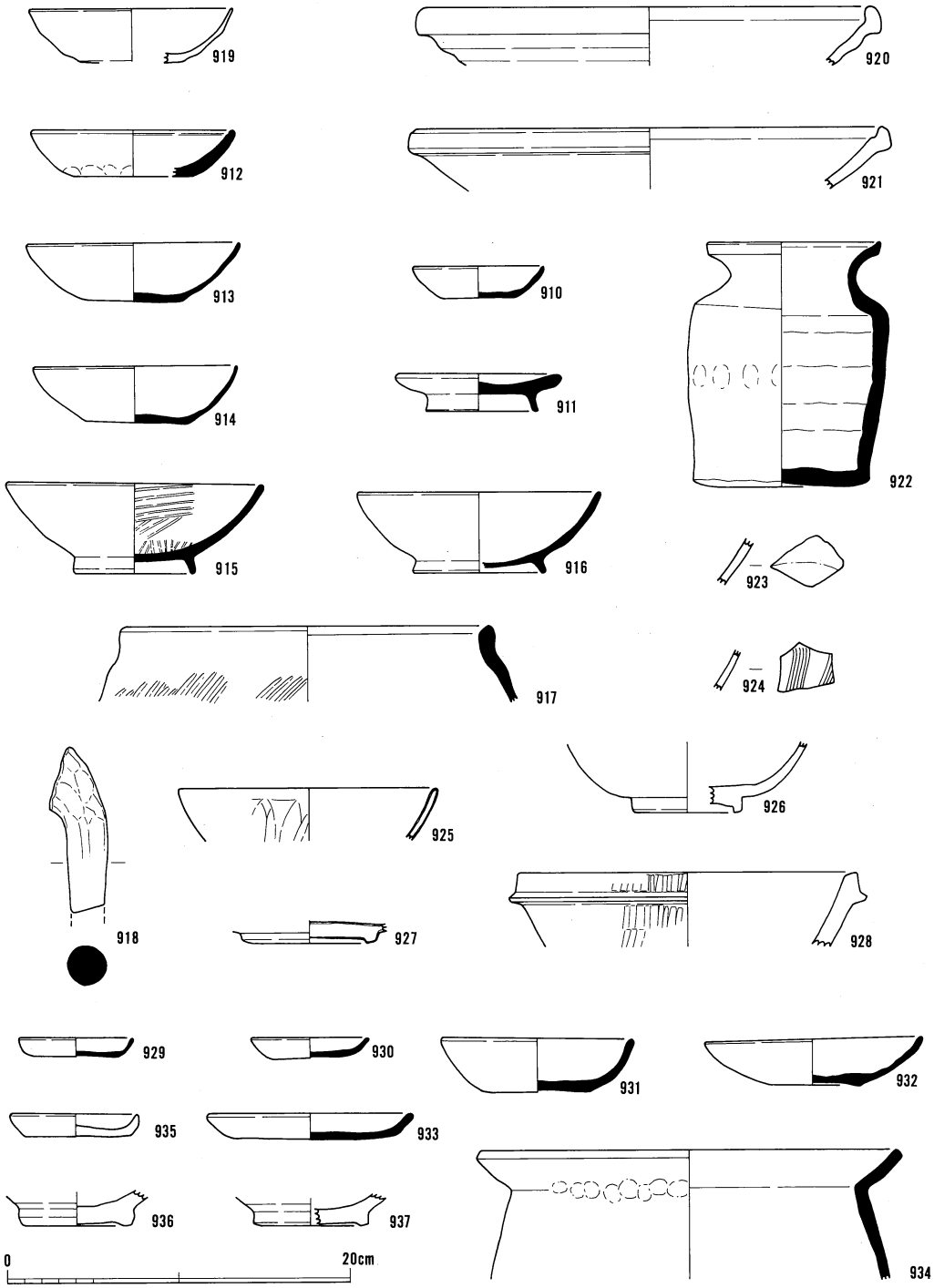
建物址９出土土器（第95図）

（888）の土師器椀１点が出土している。椀ⅡＡ２に分類されるもので、底部外面は糸切り後、板状工具による調整を施している。底部内面の周縁は強くナデられ、凹線状となっている。

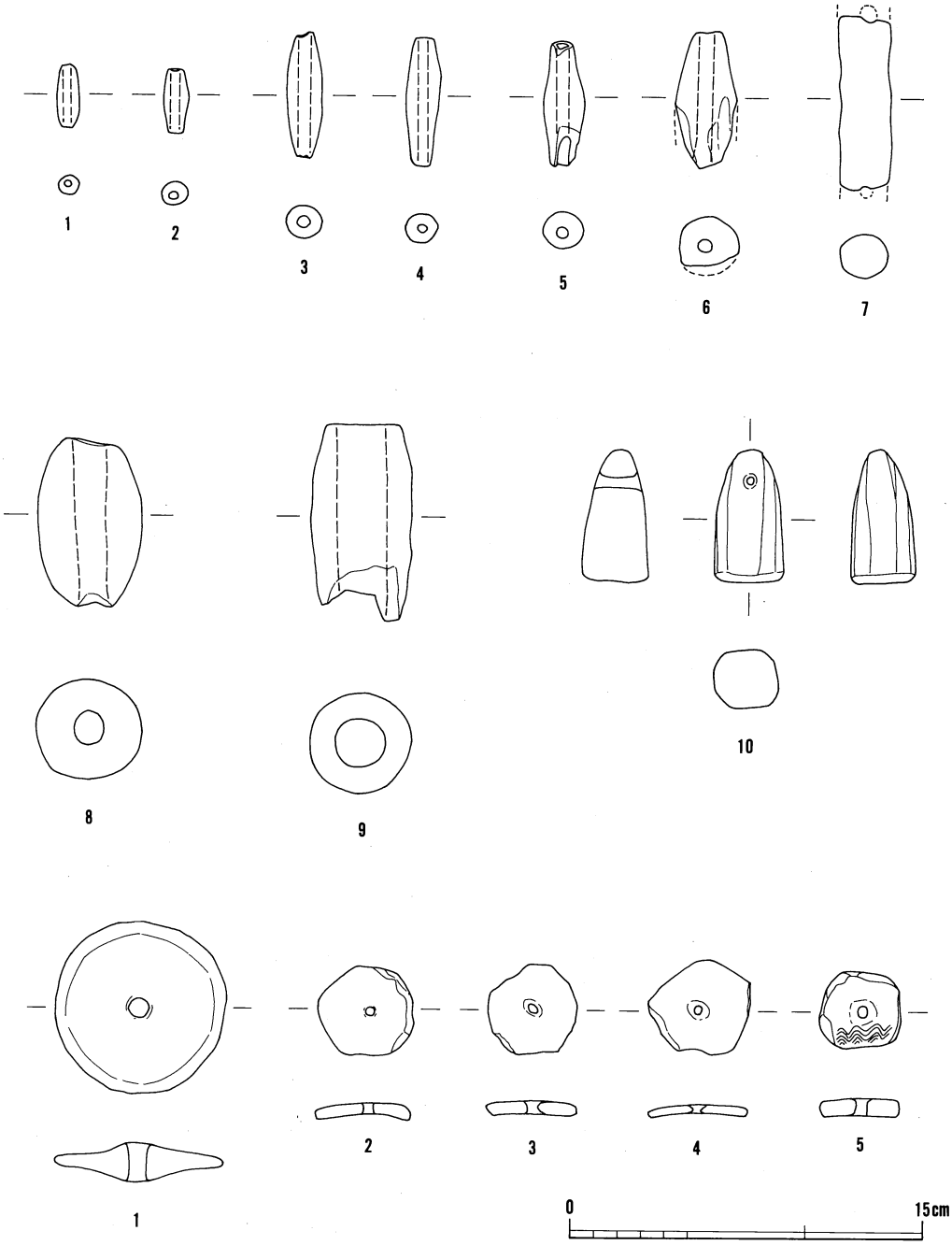
その他の柱穴出土土器（第95図、図版第三十一上）

柱穴（52）から（884・885）の２点が出土している以外、１点づつの出土であるため、ここでまとめて扱った。土師器には小皿Ｂ２、皿Ｂ２があるが、他に小片のため分類できなかった（881・883～885）がある。Ｂ２類の小皿（878）は、底部外面に糸切り後、板状工具によるナデ調整を施す。Ｂ２類の皿（882）は薄い造りのものである。分類できなかった（881・884・885）は左回転糸切りで、（883）は左回転のロクロを使用している。胎土・色調・調整から（883～885）は同一産地の可能性が高い。（886）は羽釜で、内傾する口縁部に短く、断面が三角形を呈する鍔が付く。体部に刷毛の痕跡が残り、口縁部はヨコナデしている。

須恵器は（887）の１点があり、捏鉢Ｂに分類される。



第97図　包含層出土土器



第98図　土錘・紡錘車

c）南地区出土土器

土壙24出土土器（第96図、図版第二十九・三十一下）

土師器小皿ＩＡ１・小皿ＩＢ１・小皿ＩＢ２・皿Ｂ１・土堝Ａ１・土堝Ａ２・土堝Ａ３が出土しており、須恵器類は見られない。小皿ＩＡ１は（902）１点があり、左回転ロクロを利用した整形で、底部外面を回転糸切りした後、板ナデしている。小皿ＩＢ１は（899～901）の３点があり、（900・901）は直口気味の口縁部を持ち、左回転のロクロを使用している。小皿ＩＢ２に分類される（898）は右回転ロクロを用いている。

皿Ｂ１は（903～906）の４点がある。（903・904）の２点は左回転のロクロを使用し、（903・905）は底部を回転糸切り後、板ナデしている。（906）は右回転糸切りで、整形は粗い。

土堝Ａ１（908）は体部が強く張って、最大径を体部に持つ。Ａ２類（907）の口縁部は外傾して肥厚し、体部は肩部が張らず偏平である。Ａ３類の（909）は体部が下方に下がり、最大径を口縁部に持つ器形である。３点とも口縁部はヨコナデ調整で、体部外面は右上がりの叩きが残り、（908・909）の内面は横方向の刷毛調整されている。（907）の内面はナデ調整されている。また３点の外面にはススが付着している。

包含層出土土器（第97図、図版第三十・三十一下・三十二上・下）

土師器・須恵器・輸入磁器類がある。土師器には小皿ＩＡ３（930）・小皿ＩＢ（929）・皿Ａ２（932）・皿Ｅ（933）・椀ＩＢ１（931）・土堝Ｂ（934）があり、（934）は口縁部を「く」の字状に屈曲させている。

須恵器は小皿Ｂの（935）１点があり、比較的厚手の造りで、底部は静止糸切りである。

輸入磁器は底部片２点（936・937）があり、いずれも白磁の玉縁口縁を持つ碗になるものと思われる。ともに底部の削り出しは浅く、肉厚の底部で、外面は露胎である。

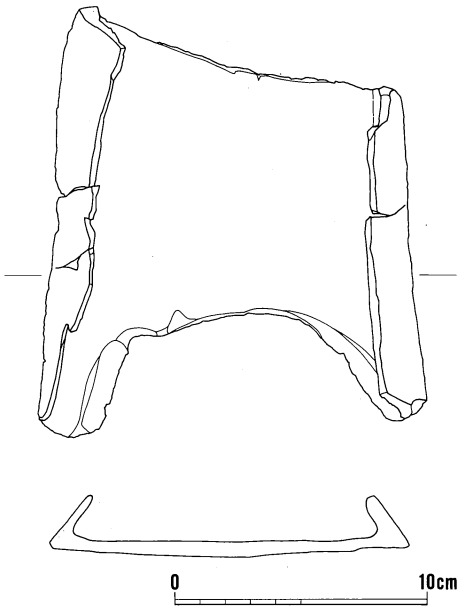
表７　銅銭一覧

No.	銭　種	初鋳年	出土地点	No.	銭　種	初鋳年	出土地点	No.	銭　種	初鋳年	出土地点
1	紹聖元宝	紹聖元年	遺構面上	11	元祐通宝	元祐元年	柱穴（P-190）	20	元豊通宝	元豊元年	柱穴（P-176）
2	淳祐元宝	淳祐元年	柱穴（P-190）	12	元祐通宝		調査区南西隅	21	元豊通宝		遺構面上
3	嘉祐通宝	嘉祐元年	暗茶褐色土上	13	元祐通宝		柱穴（P-190）	22	元豊通宝		柱穴（P-190）
4	景徳元宝	景徳元年	柱穴（P-190）	14	祥符元宝	祥符元年	柱穴（P-190）	23	元豊通宝		柱穴（P-190）
5	宋通元宝	建隆元年	柱穴（P-190）	15	祥符元宝		柱穴（P-190）	24	元豊通宝		柱穴（P-190）
6	天聖元宝	天聖元年	暗茶褐色土上	16	祥符元宝		土壙15	25	元豊通宝		柱穴（P-190）
7	治平元宝	治平元年	柱穴（P-190）	17	聖宋元宝	建中靖国元年	柱穴（P-190）	26	天聖元宝	天聖元年	柱穴（P-190）
8	開通元宝	武徳元年	柱穴（P-190）	18	聖宋元宝		柱穴（P-190）	27	元豊通宝	元豊元年	柱穴（P-190）
9	皇宋通宝	宝元2年	柱穴（P-190）	19	聖宋元宝		暗茶褐色土	28	元豊通宝		柱穴（P-190）
10	皇宋通宝		柱穴（P-190）								

第 2 節　金属製品

鉄製鋤先（第99図、図版第三十六）

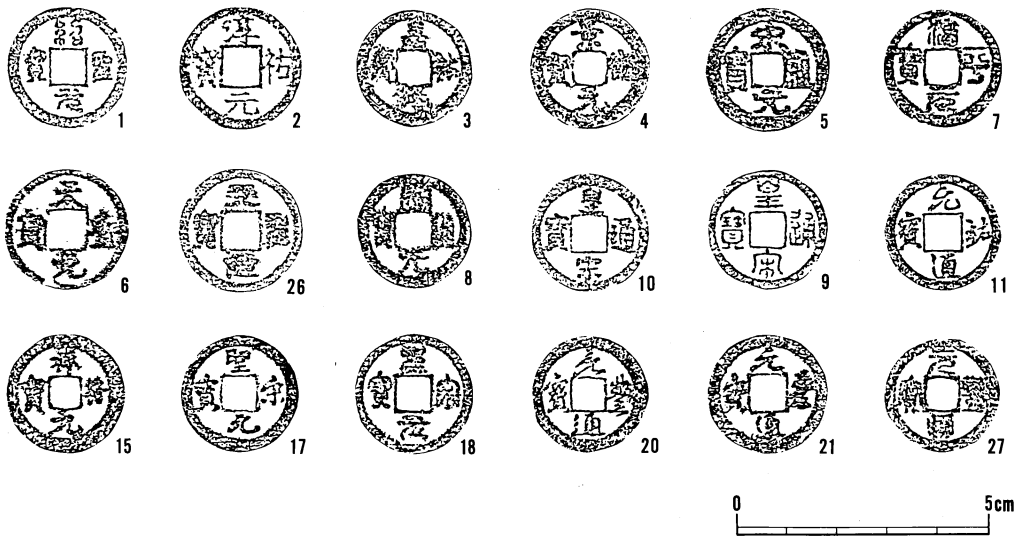
土壙15より出土した鋳鉄製品である。袋穂部分から先端にかけてと基部を欠失しており、台形の鉄板の両側辺を内側に折り返したような形状で遺存している。残存長約17cm、基部付近での幅15.5cm、先端部付近での幅約13.5cmを測り、砲弾形を呈するような唐鋤先ではなく、長方形、もしくは舌状形の先端を有する踏み鋤先であると考えられる。



第99図　鉄製品

銅銭（第100図・図版第三十六）

29枚が出土し、そのうち判読可能なものは13種・28枚である。遺構から出土したものは、柱穴（P-190）の20枚を含め、柱穴・土壙を中心に23枚である。開通元宝は唐銭、淳祐元宝は南宋銭であり、他は北宋銭である。



第100図　銅銭

第 3 節　石器

縄文時代・弥生時代・古墳時代に属する石器類が出土している。石鏃・石針・石錐・石匙、削器、楔形石器、石斧、敲石、浮子が定型的なものとして上げられ、その他に砥石・台石多数がある。またサヌカイトの原石、石核、剥片、未製品も大量に認められる。原石は転磨が激しく真球状を呈するものがあり、海岸部での転石を利用していることが知れる。

浮子と砥石・台石を除いた石器類は、少数の縄文土器包含層出土例はあるものの、ほとんどが弥生土器包含層から出土したが、形態的には弥生土器包含層中にも縄文時代の石器の混入が認められ、石器の正確な時代別分離は困難である。ここでは砥石と台石を除いた特徴的な石器を器種別に記述する。

石鏃（第101図、図版第三十七）

抉りの深い凹基式の側縁が二等辺三角形状を呈するものが多い。（3）が縄文土器包含層出土であり、これらのほとんどは縄文時代の産物であろう。（7～9）は平基式石鏃で、前者と比べて厚手粗製で風化が浅く、弥生時代の可能性が考えられる。すべてサヌカイト製である。

石針（第101図、図版第三十七）

（11）はブーメラン状に調整された小形石器である。きわめて繊細に調整され、単独使用に耐えうるものではなく、石錐とは考え難い。組合せて釣り針として利用されたものである可能性が高い。サヌカイト製である。

石錐（第101図）

（12）は上下2端に錐部を調整した揉み錐である。縄文土器包含層中から出土している。サヌカイト製である。

石匙（第101図、図版第三十七）

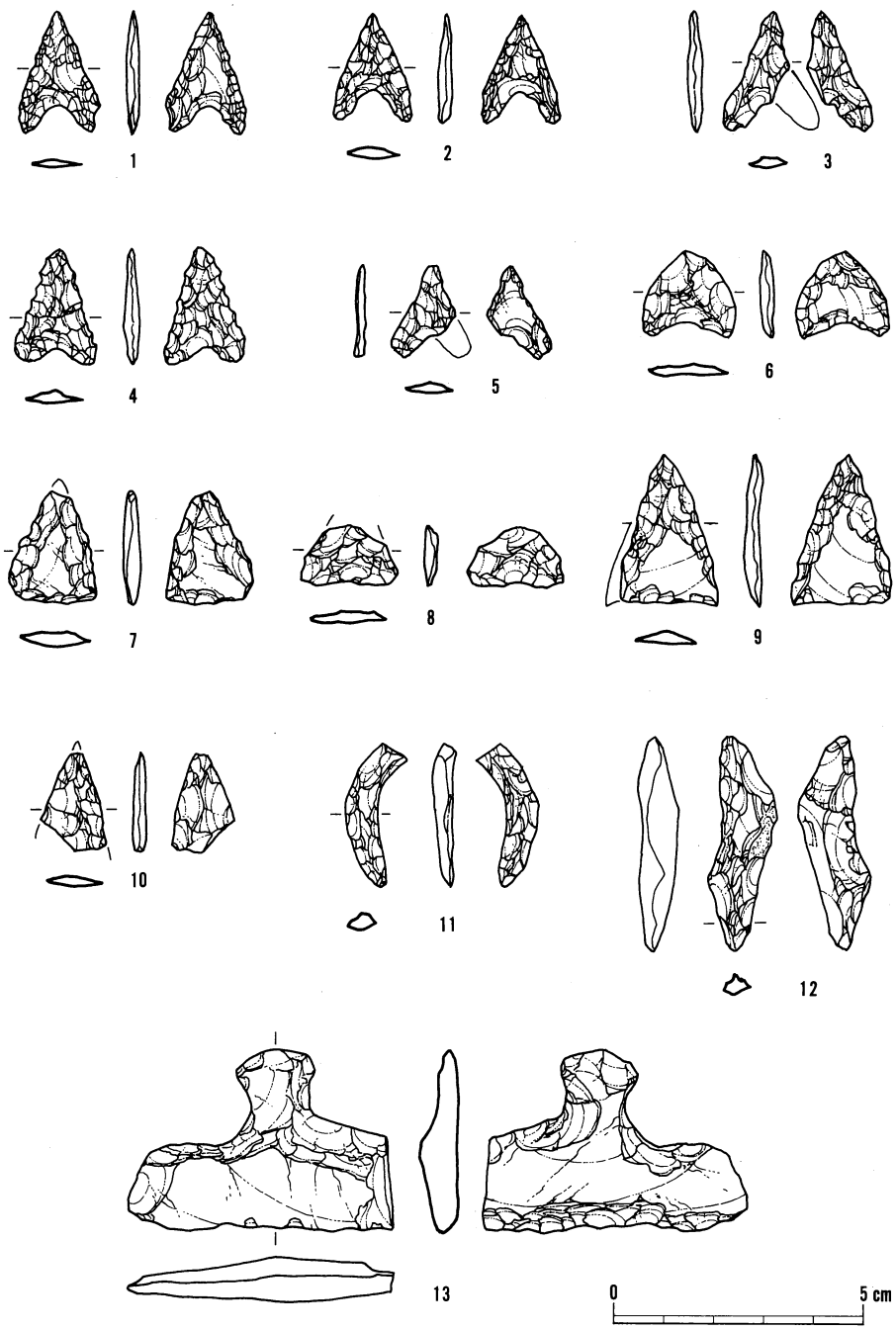
（13）は摘み部を上端中央に作り出した石匙であり、縄文時代所属であろう。摘み部の調整は表裏両面、刃部は裏面のみの調整である。風化が特に強く、剥離面の観察には困難がある。サヌカイト製である。

削器（第102・103図、図版第三十七）

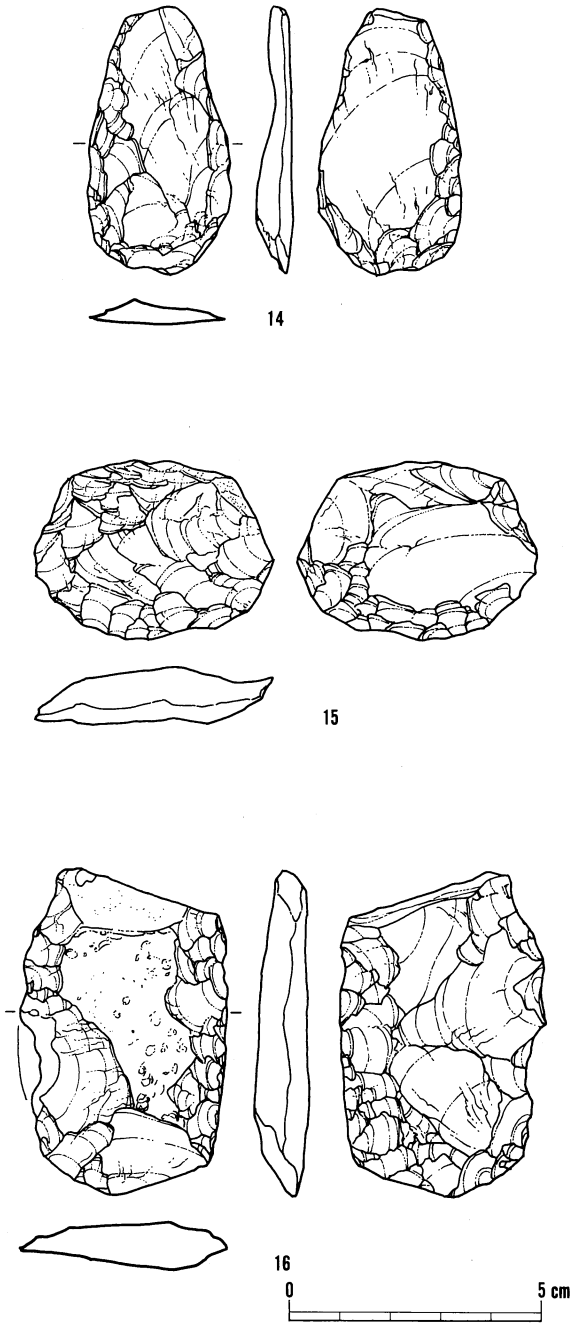
（14）は薄手の剥片素材の2側縁に調整を施したもので、石鏃等の未製品である可能性がある。（17）は不定形剥片の末端部表裏に浅い調整を施したもので、打面部裏面からの調整で除去している。いずれもサヌカイト製である。

楔形石器（第102図・103図、図版第三十七）

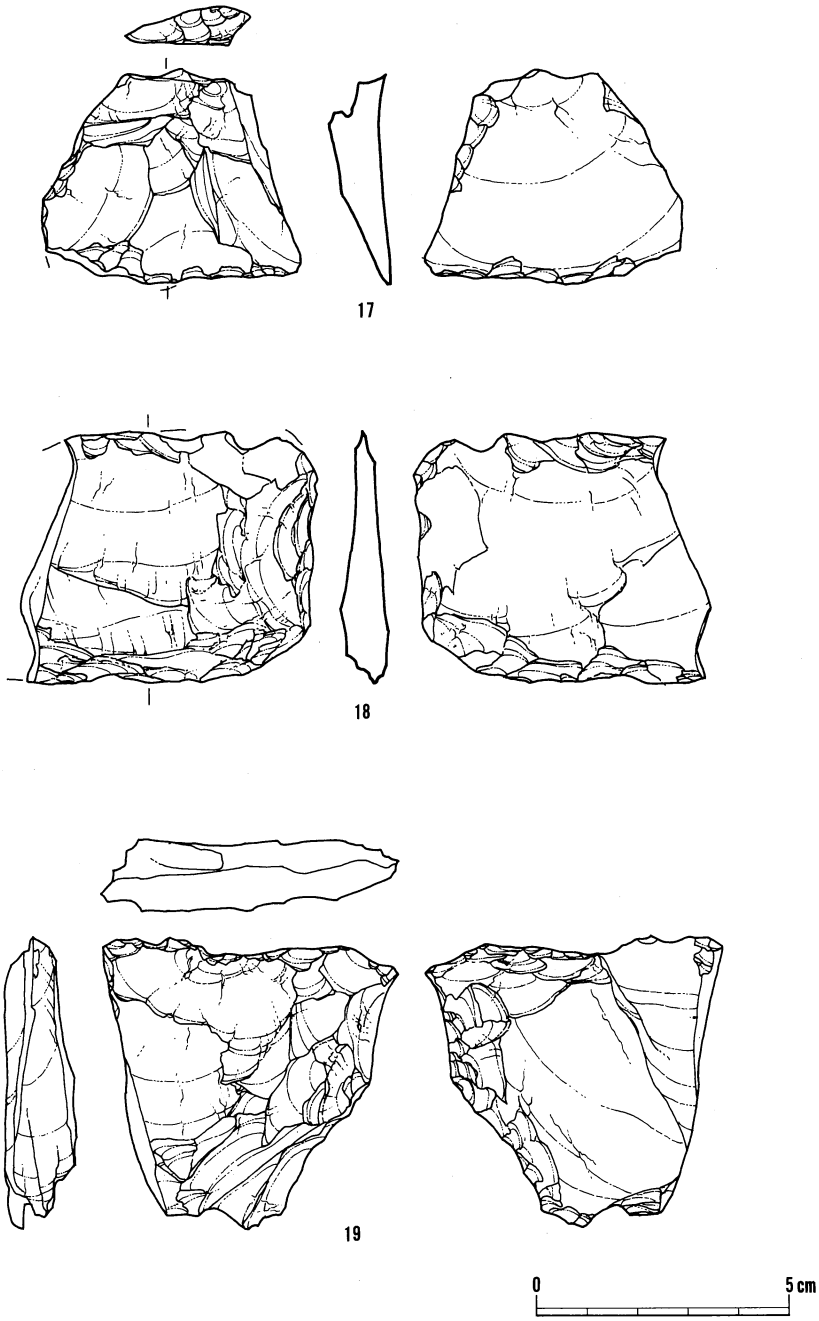
（15）は厚手の剥片素材で一端を表裏両面の調整によって鋭く整形している。裁断面の形成は行われていない。（16）は片面に表皮が残存する楔形石器で、表裏両面を丁寧な調整で整形している。一端が欠損しているが、裁断面の形成はない。（18）は薄い剥片の周縁に浅く整形



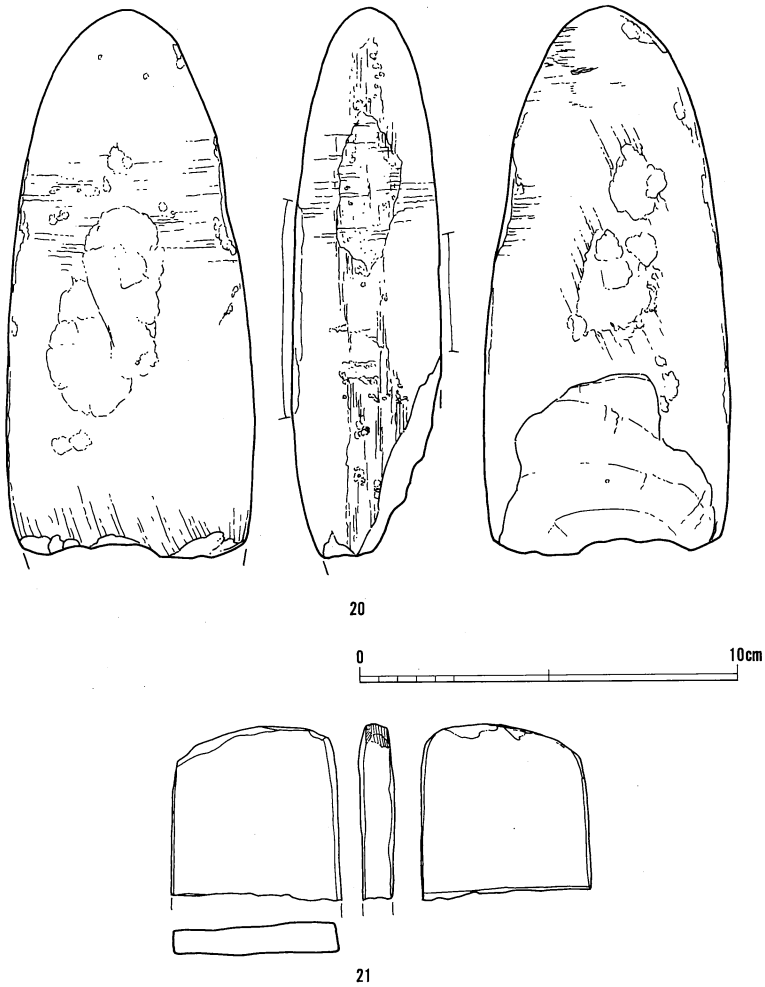
第101図　石器（1）



第102図　石器（2）



第103図　石器（3）



第104図　石器（4）

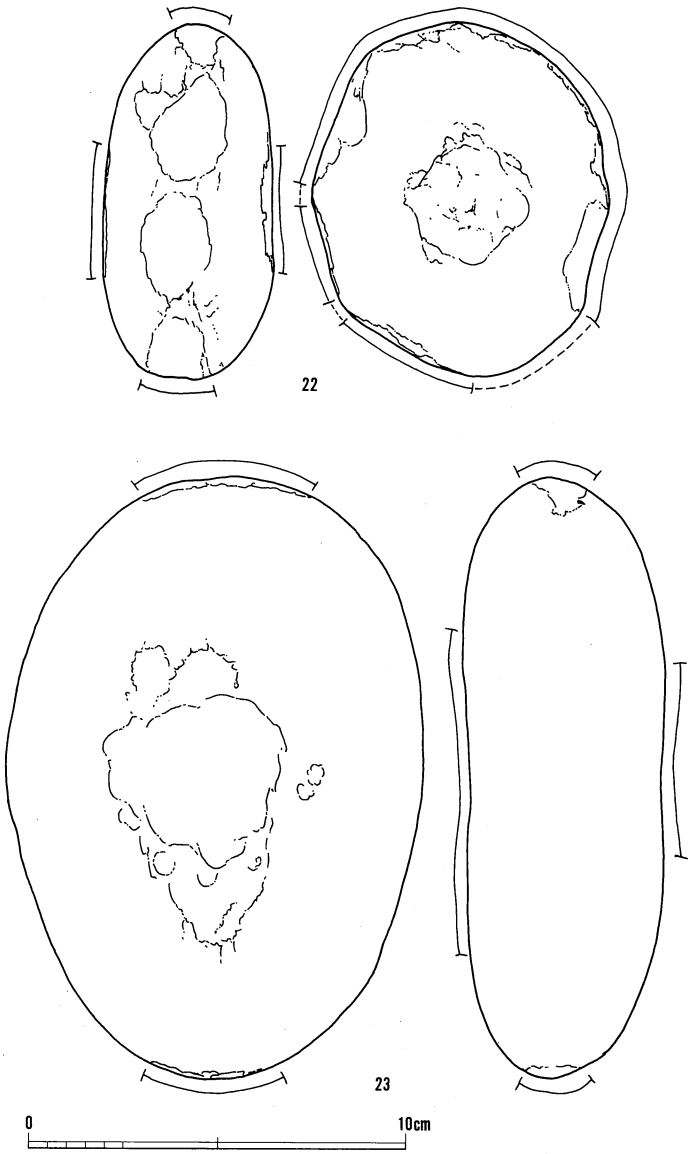
加工したもので、裁断面の形成は認められない。(19) は剝片素材の一端に鈍い調整縁を準備し、その縁部に加撃を加えた楔形石器で、左縁部に裁断面が認められる。いずれも風化が浅く、弥生時代の所産と推定できる。サヌカイト製である。

石斧（第104図、、図版第三十七）

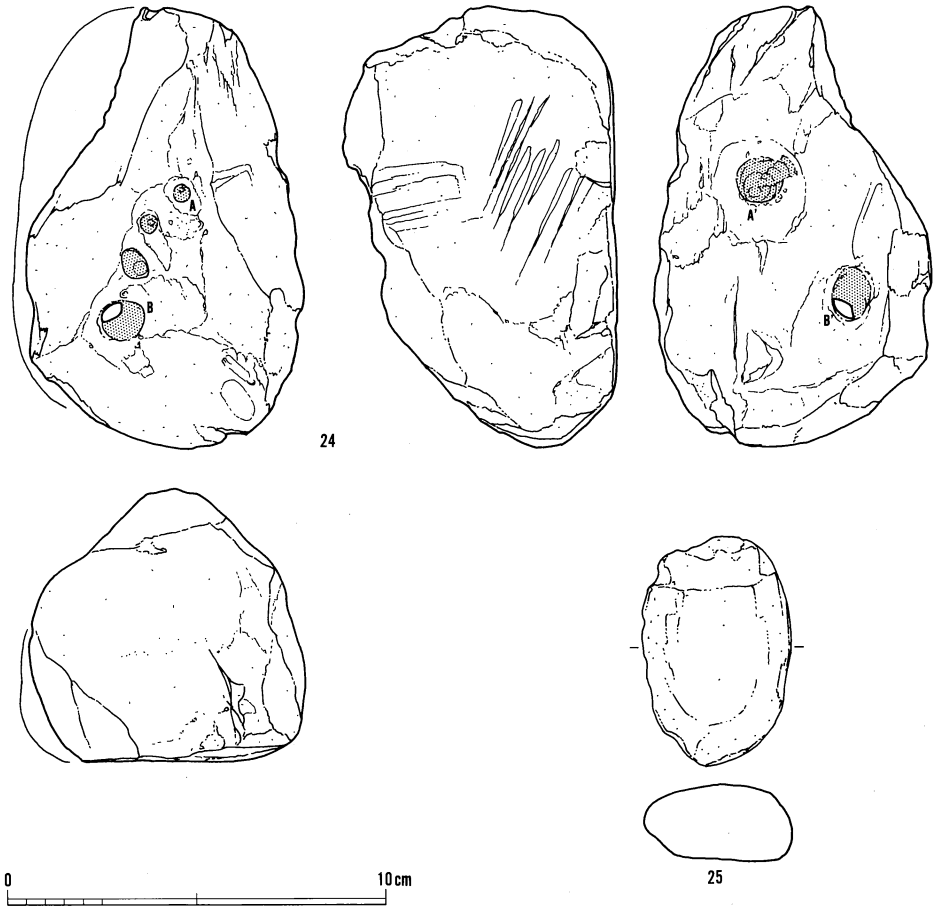
(20) は蛤刃型石斧で、刃部を欠損し、胴部上半に着柄の際の磨耗が環状に認められる。おそらく欠損後に敲石に転用され、表裏に敲打痕が残る。閃緑岩製である。(21) は扁平石斧で、刃部を欠損する。形状からおそらく片刃石斧であると考えられる。砂岩製である。

敲石（第105図、図版第三十七）

(22) は表裏両面に窪み部を有し、全周囲に敲打痕を有する敲石である。凝灰質砂岩製であ



第105図　石器（5）



第106図　石器（6）

る。(23) は表裏両面に窪み部を有し、上下2端に敲打痕を有する敲石である。砂岩製である。

浮子（第106図）

(24) は大形の軽石製浮子で上下2端に縄掛用の溝を有し、中央には2つの穿孔がある。穿孔Aは2㎜直径の細い錐で表裏両方向から刺突して貫通させた後、裏面側の開口部を広げたもので中央で屈折している。穿孔Bは穴の拡張が完了している。表面には盲貫となった穿孔が2穴あり、どちらも2㎜ほどの錐によって穿孔されている。古墳時代の遺構である住居址1に流入した形で出土しており、同様の状態で出土した土器から古墳時代前期のものであると思われる。

(25) はアスカリ状軽石で、穿孔・溝などは認められない。浮子の可能性が高い。軽石は本来火山噴出物であることから、産地は限定されたものと推定されるが、淡路島内には軽石を産出した火山は今のところ知られていない。(24) の軽石は極めて大形であることから、招来品として注目されよう。

第 4 章　まとめ

第 1 節　鎌倉時代～室町時代の遺構

1．遺構の時期区分と変遷

遺構は調査区の3箇所に分かれて検出されており、各遺構群および各遺構についてはそれぞれに概述を行ってきた。北地区の遺構群では9棟の建物址を棟行方位から3群に分けることが可能であったが、東・南地区の掘立柱建物址の棟行方位、各地区の土壙・溝の切り合い、出土遺物による時期等から、遺構の先後関係をある程度追うことができ、Ⅰ～Ⅵ期の時期区分を行った。ただし、Ⅱ～Ⅵの時期区分は、建物群の出現順によって機械的に区分したものである。建物址の配置等から、切り合わない建物は同時存在している可能性が高いと考えている。

Ⅰ期－11～13世紀代。溝46・土壙22がこの時期の遺構である。溝46は微高地の周縁を走っており、建物址等の遺構は、調査区外の微高地上に存在している可能性がある。

Ⅱ期－14世紀中葉。確実な遺構は土壙20だけであるが、溝9・10・13が存在していた可能性がある。また北・東地区のピットにこの時期のものがあり、建物址が調査区内に存在していた可能性が高い。

Ⅲ期－14世紀後葉～15世紀初め。北地区遺構群の中核となる①群の建物址が出現する（建物址3～6及び溝4とした建物址）。建物群の北・西側は溝1・2によって画され、遺構群を囲む溝23・溝24は建物址3～6と方位を合わせていること、また出土遺物からみてもこの時期より掘られていたと考えられる。ただ溝23の南北走行する部分は方位が異なっていることから、この時期にはまだ設けられておらず、遺構群の西側は旧河道等を利用して画していた可能性がある。

建物址3～6は同時期に存在していると考えられるが、建物址6は建物址4の建て増しによって廃棄される。また溝4とした建物址は建物址3に建て替わる。溝9・10・13は土壙20との切り合いが確認できずⅡ期の可能性も持つが、遺物の面からはⅢ期の様相を持っている。これらの溝は少なくともⅢ期の前半まで（建物址4が建つ以前）機能していたと考えられる。

Ⅳ期－15世紀前葉～中葉。北地区の屋敷地が最も盛行する時期で、東地区に建物址が出現する時期である。北地区には建物方位をＮ9°Ｅ前後に置く、②群の建物址が出現する。溝23の南北走行する部分はこの段階に整備されたと考えられ、溝23の南北走行する部分に沿って、小溝による区画を持つ建物址1と畑地として使用されていた東端に建物址7が建てられる。また東地区で建物址9が建てられるが、建物址1・7と方位を同じくしていることから、北地区屋敷地の影響下にあるものと考えられる。建物址1・7はⅢ期の建物と切り合わず、場所的には端

の方を占めることから、Ⅲ期の建物がこの時点でも存在しており、屋敷地内で建物を増やしていったと考えられる。

更に建物方位をN26°E前後に置く、③群の建物址（建物址２・８）も建物址１・７と相前後して出現したと考えられる。建物址２は建物址３と重なり合って検出されていることから、北地区の遺構群内では建て替えが行われたものと考えられる。溝23に囲まれた屋敷地内にはこの時点で７棟～９棟前後の建物が建っていたものと推測される。

建物址７・溝２および溝23の多くの遺物は15世紀の前半から中頃に集まり、この時期に溝23が整備され、屋敷地の区画が固まって、建物址群が揃い、屋敷地が活発に機能していたものと考えられる。

Ⅴ期－15世紀中葉～後葉。南地区で建物址12～14が建てられ、土壙24が掘られる。北地区ではこの時期の遺構はほとんど見られなくなり、遺物も非常に少なくなる。屋敷地の活動は15世紀前半をピークに、15世紀後半に入ると急速に衰退に向かったものと考えられ、屋敷地が盛行した期間は極めて短かったものと思われる。それは建物址の建て替えの少なさからも裏付けられる。

Ⅵ期－15世紀後葉～16世紀前葉。建物方位をN45°E前後に置く建物址（建物址10・11）が東地区に出現する一方で、北地区の屋敷地は廃絶する。

江戸時代以降の遺物が溝・柱穴等から出土しているが、建物址・土壙等の明確な遺構は検出されていない。したがって、16世紀前葉から余り時間を経ずして、３地区は集落としての活動を終熄したものと考えられる。

２．遺構の性格について

室町時代の遺構は３つの遺構群に分かれることが判明したが、北地区の遺構群が最も大きく、その中核を成すものである。北地区の遺構は、溝によって大きく区画された内に、規模の大きな主屋と見なせる建物とそれに伴う幾つかの小規模な建物、さらに畑地や作業空間と考えられる遺構の希薄な部分によって構成されていることが判明した。

北地区の遺構群を画している溝23・溝24は調査区外へ伸び、区画の全貌が明らかに出来なかった。ただ溝23・溝24は現水田の水路と重複して存在しており、現在の区画は当時の区画を継承したものと考えられ、北地区遺構群の区画は南北約45ｍ・東西約73ｍの方形区画が想定できる。こうした区画を持つ北地区遺構群は一個の屋敷地として捉えられるものである。

室町時代の集落址の発掘調査を行った例としては群馬県新田郡東田遺跡[註1]、大阪府高槻市安満遺跡[註2]・上牧遺跡[註3]・宮田遺跡[註2]、同和泉市和気遺跡[註4]、和歌山県和歌山市西庄遺跡[註5]、山口県防府市下右田遺跡[註6]、同山口市吉田岡畠遺跡[註7]、福岡県筑紫郡井手の原遺跡[註8]等が上げられる。これらの遺跡はいずれも溝・柵による区画内に、大規模な建物址と複数の小規模な建物址で構成されている。東田遺跡では、幅１ｍ前後の溝によって約40ｍ方画に区切られた屋敷地（約1600㎡）に７棟前

後の建物があったとされる。主屋とする規模の大きな建物は6間×4間（約45㎡）を測る。安満遺跡A群は溝による明確な方画の区画はないが、一辺50ｍ（約2500㎡）程度の敷地に7棟前後の建物があったとされる。主屋とする規模の大きな建物は5間×2間（約57.6㎡）を測る。西の庄遺跡B区では、一辺約50ｍの方画を検出している。全域が調査されていないため、敷地面積を確定できないが、正方形と考えた場合約2500㎡となる。下右田遺跡では、溝によって長方形に画された室町時代の屋敷地を7例検出している。約560～1000㎡程度の敷地面積である。主屋とする規模の大きな建物は4間×3間（約38.5㎡）を測る。吉田岡畠遺跡では1ｍ前後の幅の溝によって、約25ｍの方形に区切られた屋敷地（約625㎡）に主屋（3間×2間－約38.5㎡）と長屋（屋内作業場県倉庫）を検出している。井手の原遺跡では、一辺約65.5ｍの方画を検出している。全域を調査している訳でなく、敷地面積を確定できないが、正方形と考えた場合約4300㎡となる。各遺跡の報告者は、いずれも屋敷地の主に名主もしくは名主が成長した侍衆といった郷村指導者層をあてている。

伊藤鄭爾氏[註9]・奥野義雄氏[註10]の成果に拠るならば、中世の有力な農民＝名主層は一定の区画の中に、名主自身の住む規模の大きな建物と、被官百姓・下人の住居・倉庫といった小規模の建物による、複数棟によって構成される屋敷構えを持っていたと考えられる。中世農家の様子については、『洛中・洛外図屏風』・『一遍聖絵[註11]』といった絵図によっても窺える。溝に囲まれた屋敷内に複数棟の建物が存在する描写があり、両氏の論考は的を射たものと言えよう。

本遺跡の屋敷地の場合、面積が約3400㎡、主屋と考えられる建物址4の規模が最小に見積もっても2間×5間（約35㎡）を測り、規模的には東田遺跡・安満遺跡A群・井手の原遺跡と遜色はない。建物址の配置状況についても、上記の調査例や絵図の描写と類似している。北地区遺構群の主を、被官百姓・下人を抱えた有力名主や名主が成長した侍衆といった、郷村指導者層と考えて良いものと思われる。

北地区の遺構群を郷村指導者層クラスの屋敷地と推定し、その観点から、屋敷地内の配置について触れてみたい。まず北地区建物址で中心となる建物址1と4の規模は、上屋部分でともに2×5間である。建物址4はⅢ期の建物群の中では最大規模を持ち、本屋すなわち名主の住居と考えられる。建物址4の上屋部分は柱の配置によって桁行き北2間と南3間に分けられる。上屋内を大きく2分する平面プランは、中世民家では箱木千年家[註12]や古井家[註13]でも採用されている。箱木千年家では上屋部分が板間と土間に分かれており、板間部分は更に対外的な室としての『デエ』と就寝のための空間『ナンド』の2間に区切られている[註14]。伊藤鄭爾氏はこの『デエ』を持つ間取りを名主・地侍層の住居の特徴として捉えている[註15]。建物址4の間取りも、箱木千年家や古井家と同様に、『デエ』と『ナンド』に分かれた板間と土間によって構成されていた可能性が高い。

建物址1もまた、建物址4と大差のない規模を持っている。建物の周囲に溝をめぐらせる例

は、日置庄遺跡[註16]・西庄遺跡で検出されているが、いずれも集落内の中核的な建物として捉えられている。しかし建物址1の場合、同時期に建物址4が残っている可能性が強く、建物の持つ構造からも、建物址4が『デエ』を持つ可能性が高い構造を採るのに対し、建物址1は下屋は持つものの間仕切りのない建物であり、有力名主層の主屋として捉えることには躊躇せざるを得ない。被官百姓の住居もしくは倉庫と考えるべきであろう。

建物址4に近接する建物址5・6は、被官百姓の住居、倉庫もしくは物置であろう。建物址5と同形態の建物址は東田遺跡においても検出されている[註17]。

建物址2・3については、屋敷地の中央を占めるが、規模が小さく、作業棟か厨屋ではないかと考えられる。しかも建物址2・3では建て上げ前（土壙15）と廃絶時（柱穴190）に丁寧な地鎮を行っている可能性がある。土壙15は建物址3に先行して掘られており、鉄製鋤先と銅銭1枚が出土している。鉄製鋤先は銅銭の上面に、折り返し面を下に向けてほぼ水平の状態で検出されている[註18]。柱穴（190）は建物址2の柱痕内より20枚に及ぶ銅銭が出土している。数枚は重なって出土しており、柱根抜き取り時に縒のまま埋納した可能性が強い。このような地鎮の性格が強い行為を行っている建物址2・3は、屋敷地の中で何らかの特殊な位置を占めていた棟である可能性も残る。

溝4は溝に壁を建て廻す簡易な構造の建物が推測でき、神奈川県千葉地東遺跡[註19]等では方形竪穴に板を建て廻し、土台となる角材を据えた住居址遺構が検出されている[註20]。溝4とした建物址もまた、これらと大差のない建物であったと考えられる。下右田遺跡・東田遺跡では屋敷地内に竪穴住居址が検出されている。東田遺跡ではその屋敷内での配置から、下人の住居と考えられているが、下右田遺跡では鍛冶工房として使用された竪穴住居址の例が指摘されている[註21]。溝4も溝内や周辺で焼土と鉄滓が出土しており、鍛冶工房になる可能性がある。また建物址2・3と妻を接するほど接近しており、建物址2・3と同時に存在したとは考え難い。先行して建っていたもので、建物址3に建て替わった可能性がある。

建物址7・8は屋敷地の端に位置し、その規模から見て、被官百姓の住居と考えられる。

屋敷地東半の溝が集まる部分は、建物址7・8の以前に建物が建っていた形跡はない。幾つかの鋤跡が残る事から畑地であったと思われる。

屋敷地の入口は溝23が北地区遺構群の南東隅で途切れることから、この部分に比定できる。建物址4・5・6の南面が比較的ピットも少ないことから作業空間と見なせ、中世遺跡の調査例では前面に作業空間を持ち、主屋が奥にある例が多いことからも[註22]、屋敷地の入口は、溝23の途切れる南東隅であったと推測される[註23]。

北地区遺構群を郷村指導者層クラスの屋敷地と想定した場合、Ⅳ・Ⅴ期に出現する南・東地区の遺構群は建物址の規模から見て、被官百姓か、そこから成長した小百姓の住居と考えられる。これに対し、Ⅵ期に出現する東地区遺構群中の建物址11は、北地区遺構群の建物址4と規

模的に遜色がなく、建物方位も全く異なることから、北地区の屋敷地から独立した存在であった可能性が高い。

以上、遺構の時期を検討し、性格付けを行ってきた。本遺跡の中世遺構の理解は、一言でいえば有力名主層クラスの屋敷地の発展と廃絶、それに伴う小百姓や被官百姓の成長と捉えることができよう。遺構の変遷からは、小規模な建物群の出現（Ⅱ期～Ⅲ期）、屋敷地の整備（Ⅳ期）、屋敷地外への遺構の拡大と屋敷地の活動の衰退（Ⅴ期）、屋敷地の影響を受けない建物の出現（Ⅵ期）、集落全体の廃絶（Ⅵ期より以降）という5画期を捉えることができた。

調査では屋敷地の発展期の遺構の状況については、比較的よく追うことができたと考えられるが、建物群の出現当初の状況については、不明確な部分を多く残している。石神怡氏は、集落を5タイプに分け、AからBの発展形を示唆しているが[註4]、おそらく北地区遺構群はこの経路を辿り、発展拡大していったものと思われる。出現当初の建物址等の遺構は多数の柱穴に埋没し、把握することができなかったが、溝4の南側に集まる柱穴群には溝4とした建物址・建物址5と同じ方向に並ぶ柱穴が多く、ここに当初の主屋があった可能性を考えておきたい。

屋敷地外への遺構の拡大の点では、東地区遺構群の柱穴群で多数の柱穴が建物復元不可能なままとなっており検討課題を残している。出土遺物から見て、おそらく東地区の遺構群は北半の屋敷地と同じくⅡ期には出現している。北地区の屋敷地はⅢ・Ⅳ期を通じて発展するのに対し、東地区の遺構群はその影響下にあるものと考えられる。Ⅳ期の建物址9は屋状の建物址として検出しているため、これをもって被官百姓や小百姓の住居とはし難い。しかし、土壙群を持ち、一つの完結した遺構群を形成しながらも遺構群自体の規模が小さく、また北地区の建物と方位を同じくするといった側面は、屋敷地と東地区遺構群の関係を示すものであろう。

南地区の遺構群は屋敷地の活動が衰退するⅤ期になって出現し、遺構の密度は薄く、建物址に伴う土壙も少なく、建物址も建て替えはあるものの、規模は小さく、極く短期間に廃絶している。北・東地区の遺構群とは明らかに異った様相を持つものであり、こうした様相の違いは、当時の農村集落内の階層差といったものを具現しているのかもしれない。

註1　須田　茂「有力農民の屋敷－新田荘・東田遺跡」『よみがえる中世5』平凡社　1989年

註2　橋本久和「中世村落の考古学的研究－高槻市における二・三の遺跡調査から」『大阪文化誌』第1巻2号　1974年

註3　橋本久和『上牧遺跡発掘調査概要』高槻市教育委員会　1973年

註4　尾野幸雄・石神怡他『和気－和気遺跡発掘調査報告書』和気遺跡調査会　1979年

註5　久貝　健『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』和歌山県教育委員会・（社）和歌山県文化財研究会　1978年

註6　『下右田遺跡　第4次調査概報・総括』山口県教育委員会　1980年

註7　渡辺　亨・小野忠熙『山口市吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡』山口県教育委員会　1973年

註８　靏久嗣郎他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第２集』福岡県教育委員会　1976年

註９　伊藤鄭爾『中世住居史』東京大学出版会　1958年

註10　奥野義雄「中世集落と住居形態の前提をめぐって－史料からみた10、11Ｃの村落実態究明の基礎的分析」『大阪文化誌』第２巻３号　1977年

註11　「一遍聖人絵伝」『日本の絵巻』20　中央公論社　1988年

註12　註10に同じ及び川島宙次『滅び行く民家－間取り・構造・内部』主婦と生活社　1973年

註13　『重要文化財　古井家住宅修理工事報告書』重要文化財古井家住宅（千年家）保存修理委員会　1971年

註14　箱木千年家は建築当初の姿に解体復元されている。
宮本長二郎「民家と町並み　近畿」『日本の美術』第287号　至文堂　1990年

註15　伊藤鄭爾「第四章平面形式」『中世住居史』　東京大学出版会　1958年

註16　日置荘遺跡の建物址は10世紀後半である。
岡本健一『日置荘遺跡その３』大阪府教育委員会　1988年

註17　註１に同じ。12掘立

註18　楠葉東遺跡では乾元大宝６枚の他、数枚の銅銭を入れた須恵器水瓶とともに鋤先を直立させた遺構が発見されており、10世紀末の開村に伴う地鎮祭遺構と見られている。
瀬川芳則「スキをたてる祭り」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ刊行会　1985年

註19　服部実喜『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10　1986年

註20　清水　擴『民家と町並み　関東・中部』日本の美術第287号　1990年

註21　註６に同じ。竪穴建物ＣＤ－1

註22　下右田遺跡・井手の原遺跡等で指摘されている。また、『洛中・洛外図屏風』・『一遍聖絵』といった絵図に似た配置が描写されている。

註23　宮田遺跡Ａ群に近い配置が考えられる。

第 2 節　弥生時代後期～古墳時代前半の土器

今回の調査では弥生土器・古式土師器が多量に出土している。ただ包含層からの出土が多く、まとまった形で出土したのは、土壙１・Ｃ－７土器群だけである。そのため破片が多く、遺存状況が悪いため、調整も不明なものが多い。したがって器種・器形を特定できないものがあることから、弥生土器と古式土師器をまとめて扱い、記載の都合上から以下に分類した。

壷類　体部の形状まで判るものは少ないため、口頸部の形態から分類した。まず頸部から外反する口縁を持つＡ類、頸部が外上方に直線的に開くＢ類、頸部から屈曲して外上方に開く口縁部を持つＣ類、頸部から屈折して横上方に開く口縁部を持つＤ類、頸部から外反して内彎気味に開く口縁部を下方に拡張したＥ類、屈曲する口縁部を持つＦ類（二重口縁）、頸部が長く伸びたＧ類（長頸壷）、口縁部が上方に直線的に立ち上がるＨ類、口縁部が外上方に直線的に立ち上がるＩ類がある。

壷Ａは弥生時代を通じて一般的に見られる器形で、頸部から外反して開く口縁部を持つもので、口縁端部を拡張しないＡ１、口縁端部を下方に拡張するＡ２、口縁端部を上下に拡張したＡ３、口縁端部を上方に拡張したＡ４、口縁部が内彎するＡ５に分類できる。

壷Ｂ類も口縁端部を拡張しないＢ１、口縁端部を下方に拡張したＢ２類に分類できる。

壷Ｃ類は四国系の土器の影響下にある土器と思われもので、口縁端部を拡張しないＣ１、ほぼ水平に開く口縁の端部を下方に拡張したＣ２、横上方に開く口縁の端部を下方に拡張したＣ３、口縁端部を上下に拡張したＣ４がある。

壷Ｄ類は四国系の土器で、頸部が直立するＤ１、頸部が外傾するＤ２、頸部が内傾するＤ３に分類できるが、Ｄ１類は口縁端部の形状からさらに細分することが可能である。Ｄ１は黒川Ⅲ式[註1]の影響を受けたもので、胎土等から直接四国から搬入されたものも認められる。

壷Ｅ類は淡路の弥生時代後期後半には多く見られる土器で、口縁の端部直下を下方に拡張するＥ１、端部から下がった位置を下方に拡張するＥ２に分類できる。

壷Ｆ類は所謂二重口縁を持つ壷で、頸部から外反して屈曲し、さらに外反する口縁を持つＦ１、頸部から水平に開いた後屈曲し、外反する口縁を持つＦ２、口縁が屈曲部から直線的に開くＦ３、口縁部が屈曲部から大きく立ち上がるＦ４、屈曲部が内彎した形状となるＦ５、口縁部が頸部から外反した後屈折して、内上方に立ち上がるＦ６に分類できる。大まかにＦ１類は畿内系の弥生時代後期後半の土器に、Ｆ２・Ｆ３は四国系の弥生時代後期末から布留式併行期の土器に、Ｆ４は西部瀬戸内系、Ｆ５は紀伊系の弥生時代後期末から庄内併行期に、Ｆ６類は西部瀬戸内の吹越式[註2]の影響を受けたもので、弥生時代後期末に位置付けられる。

壷Ｇ類は所謂長頸壷で、口縁端部を下方に拡張したＧ１、頸部から外反する口縁を持つＧ２、底部が丸底で口縁部が外反するＧ３、底部は丸底であるが、口縁部が内彎するＧ４がある。Ｇ

1には中期的な特徴が見られ、G2は長頸壷でも退化したものである。G3・4はさらに退化し、底部は丸底であり、庄内式から布留式に位置付けられる。

壷Hは直口壷で、口縁部下に凹線を施す等、中期的様相を残すものである。

壷Iは頸部が太いI1、頸部から外反する口縁を持つI2、口頸部が上方に立ち上がるI3、口頸部が外上方に立ち上がるI4、太い頸部が外上方に短く立ち、甕に似た形状を持つI5に分類できる。

甕類　全体の形態を知り得るものが少ないため、口縁部の形状から分類した。出土した甕は頸部から屈曲して開く口縁部が巾広の面を持つA類、頸部から屈曲して開く口縁の端部に巾狭の面を持つB類、頸部から屈曲して開く口縁の端部に小さな面を持つC類、頸部から屈曲して外上方に伸びる口縁部を持つD類、口縁部から屈曲して外反する口縁を持つE類、口縁部が長く伸び、端部が肥厚ないし摘み上げられたF類、短い口縁の端部が上方に摘み上げられたG類、屈曲する口縁を持つH類、内彎気味に直立する口縁を持つI類、極めて大形の甕で、口縁部が外上方に直線的に伸びるJ類に分類できる

甕Aは口縁端部を上方に拡張したA1、上下に拡張したA2に分類され、中期的様相を持つ。

甕Bは口縁が内彎気味で、端部を上下に拡張したB1、口縁端部は下方に拡張されるが、肩部の張らないB2、口縁端部は下方に拡張され、肩部の張ったB3に分類される。

甕Cは口縁部が横上方に開くC1、肥厚した口縁部が外上方に開くC2、口縁部が肥厚せず、外上方に開くC3に分類され、C3類は大形のものである。

甕Dは口縁部が肥厚して、端部に面を持つD1、肥厚せず端部が丸いD2に分類できる。

甕Eは体部から屈曲して外反しながら開く口縁を持つE1、口縁部が外上方に直線的に開くE2、口縁部が内彎気味に外上方に開くE3に分類できる。

甕Fは外反して開く口縁部の端部を摘み上げたF1、外上方に直線的に伸びる口縁端部を摘み上げたF2、内彎しながら開く口縁端部を内側に肥厚させたF3に分類できる。F2は所謂庄内型甕で、F3は布留式甕として捉えられるものである。F1はこれらの影響下に淡路で成立した器形と思われる。

甕Gは所謂讃岐型の甕で、四国地方の影響下に成立したものである。胎土に結晶片岩を含むものがあり、四国地方からの搬入品と思われるものもある。口縁部が横上方に開くG1と、斜め上方に直線的に伸びるG2がある。

甕Hは所謂二重口縁を持つものであるが、屈曲して直立する口縁を持つH1、屈曲部に稜を持つH2がある。H1は所謂酒津式の範疇に、H2は山陰の影響を受けたものと思われる。

甕Iには四国地方の影響と、山陰と瀬戸内東部の影響を合わせ持ったものが見られる。

甕Jは大形で極めて特徴的な器形で、器形的には紀伊地方に類似例[註3]が見られる以外、他地方にあまり例が無く、紀伊地方の影響を受けたものか、淡路で独自に成立した器形であろう。

鉢類　壷・甕類に比べると遺存状況が良く、全体の器形を知り得るものも少なくない。体部から屈曲して開く口縁を持つA類、体部がそのまま口縁部となるものの内、小形のB類、中形のC類、口縁部が屈曲するD類、体部から内彎する口縁部を持つE類に分けることができる。

鉢Aは直線的に伸びる口縁を持つA１、外反しながら開く口縁を持つA２、内彎気味の口縁を持つA３、口縁端部を摘み上げたA４に分類でき、A４は甕Gに似た口縁形状となっている。

鉢Bは体部が直線的に伸びて口縁部となるB１、体部が直線的に伸びた後内彎して口縁部となるB２、体部が内彎しながら伸び口縁部となるB３、体部が横上方に伸びた後内彎して口縁部となるB４に分類される。

鉢Cは体部が横上方に開いた後内彎して口縁部となるC１、体部が内彎しながら伸び口縁部となるC２、口縁端部を内側に肥厚させたC３、口縁部が内彎するC４に分類できる。

鉢Dは体部と口縁部の形状は山陰地方の影響を受けたものと思われるが、口縁部、肩部の文様は瀬戸内東部の影響を受けている。

鉢Eには河内地方からの搬入品と思われるものが含まれている。

高杯　全体の形状を知り得るものは少なく、杯体部が大きく、横上方に伸びた後屈曲して口縁部となるA類、杯体部が小さく横外方に伸び屈曲するB類、杯体部が小さくほぼ水平に開き屈曲部が内彎するC類、杯体部が内彎してそのまま口縁部となるD類分類できる。

高杯A類は口縁部の形状から、さらに細分でき、口縁部が屈曲部から直立した後外反するA１、口縁部が屈曲部から小さく外反するA２、口縁部が屈曲部から大きく外反するA３、杯体部が縮小傾向にあるA４に細分できる。A４は所謂酒津式の範疇で捉えられるものであろう。またA４には脚部から杯体部まで一度に作り上げるものが見られる。

B類は内外面とも明瞭に屈曲するB１、内面は内彎するだけとなるB２に細分される。

C類は屈曲部が内彎するだけとなり、B類の退化型式として捉えられる。

D類は弥生時代を通じて見られる器形で、紀伊地方の影響を受けたものが認められる。

器台　量的には少ないが、横上方に開く受け部を持つA類、受け部が内彎気味に開くB類、受け部が外反するC類、受け部が皿状となるD類、受け部が外上方に開き、所謂鼓型となるE類、高杯を転用したF類に分類できる。この内、D類はさらに受け部が横上方に開いた後内彎するD１と、受け部が直線的に外上方に開くD２に細分できる。A・B類はほぼ弥生時代の範疇に、D・E類は庄内式から布留式の段階に捉えられるものと思われる。

以上が弥生時代後期から古墳時代前期の段階に捉えられる土器の分類であるが、時期的には弥生時代後期前半から布留式段階までに位置付けられ、型式的には編年することも可能である。しかし土壙１・C－７土器群以外には一括して出土したものがなく、ここでは土壙１・C－７土器群の土器を位置付けをすることとし、そうした作業は今後に譲りたい。

土壙１から小形丸底壷B・D、甕E２・E４・G１・F１、鉢A３・C１、高杯A４・B１、

器台Ｄ２が一括して出土している。小形丸底壷Ｂは精製されたものであり、庄内式の新しい段階から布留式古段階に捉えられるものである。また甕Ｇ１も体部が強く張り、徳島県庄・鮎喰遺跡出土土器[註4]と類似しており、讃岐系の甕でも新しい段階（庄内から布留式古段階）に捉えられるものである。こうした他地方の例から、土壙１出土の土器を庄内から布留式古段階に捉えておきたい。

Ｃ－７土器群は甕Ｅ２・Ｅ３・Ｆ３、高杯Ｃ・器台Ｅ類等で構成されており、明らかに布留式の範疇で捉えられる甕Ｆ３が含まれている。高杯Ｃ類もＢ類の退化型式であり、布留式の土器と伴うものである。したがってこの土器群の土器は布留式土器の盛行期（布留ⅠないしⅡ段階）に位置付けられるものであり、土壙１出土の土器に後続するものであろう。。

註１菅原康夫『黒谷川郡頭Ⅰ』徳島県教育委員会　1986年

註２山本一郎『吹越遺跡－第２次調査概報』平生町教育委員会　山口県教育委員会　1972年

註３渋谷高秀『田殿・尾中遺跡』吉備町教育委員会　1982年

註４松永住美『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会　1985年

［参考文献］

小林行雄　杉原荘介『弥生土器集成　本編』1964年

小林行雄　杉原荘介『弥生土器集成　資料編』1956年

佐原真編『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社　1983年

正岡睦夫「雄町遺跡」『埋蔵文化財調査報告』岡山県教育委員会　1972年

富加見泰彦「紀の川流域における古式土師器の細分」『鳴神地区発掘調査報告』和歌山県教育委員会　1984年

石野博信他『纏向』橿原考古学研究所　1976年

藤井利章『発志院遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1980年

寺沢　薫『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1980年

松下　勝他『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会　1987年

第 3 節　古墳時代後期～平安時代前半の土器

淡路に須恵器が出現してから以後を古墳時代後期として扱った。弥生土器・古式土師器に次いで量的には多く、住居址７・旧河道等から出土している。

a）須恵器

杯蓋　杯・杯蓋・皿・壷・甕・横瓶・瑕・甑等が出土している。杯蓋は屈曲する口縁を持つA類、天井部から緩やかに口縁部に移行するB類、口縁部内面にカエリを持つC類、天井部と口縁部の境に稜を持つD類に分類される。

A類は天井部が高いＡ１、天井部が低いＡ２に細分でき、D類も突出した稜を持つＤ１と、稜が退化して突出せず、屈曲するだけとなるＤ２に細分できる。C類にはカエリが口縁部と同じ高さまで下がるものと、カエリが短く、口縁部の内側で納まるものが見られる。

杯　杯類には高台を持たないA類、高台を持つB類、受け部を持つC類があり、A類は底部から内彎して体部となるＡａ、底部から屈曲して体部となるＡｂに分類され、Ａａ類はさらに、口径に対し器高が高く椀状の器形となるＡａ１、体部から口縁部への移行がスムーズなＡａ２、体部から屈曲して口縁部となるＡａ３に分類される。Ａｂ類も口縁部の外傾度が小さいＡｂ１、大きく外傾するＡｂ２に細分できる。

杯B類は底部から内彎して体部に移行するＢａと、底部から屈曲して体部に移行するＢｂに分類できる。Ｂａ類は体部下半を篦削りしており、高台も外下方に踏ん張る形状を採る。

Ｂｂ類は口縁部の形状、高台の貼り付け位置、高台の形状等から、さらに細分が可能と思われるが、個体数が少ないため行わなかった。中でも（664・674・770）は高台が細く、底部周囲に貼り付けられており、新しい様相を持つ。さらに（675）は体部が内彎して口縁部となる椀状を呈し、杯B類の中では最も新しい時期に位置付けられるものと思われる。

C類は小形で口縁端部に面を持つもの（752）、大形で口縁端部が丸いもの（609・610）、小形で口縁部の立ち上がりが短いもの（611）が見られ、明らかに時期差が認められる。

壷　肩部に稜を持つA類、肩部が丸いB類、偏平な体部に短い口縁部を持つC類、外上方に直線的に開く口縁を持つD類に分類される。

A類は高台が付き、高台が大きく開いて踏ん張るもの（680）と、斜め下方に開くもの（681）、細く直立したもの（682）が見られ、（682）の高台は杯Ｂｂ類の（664）と似た形状となっている。こうした高台の形状の違いは時期的な違いによると思われ、記述の順に変化するものと思われる。

壷B類には高台が付くもの（683）と、高台が付かない（685）があり、別に分類されるべきものかもしれない。（683）の高台の形状も細く、踏ん張らないもので、新しい様相を持つ。

壷C類は所謂短頸壷で、（679）の底部は篦削りしている。古く位置付けられるものであろう。

甕　口縁部が外反するA類、口縁部が直立するB類があり、A類には口縁部と頸部の境に稜を持つもの（613）と、口頸部が凹線で区画されるものが（586）が見られる。B類には口縁端部を内側に肥厚させたもの（687）と、口縁端部が外側に短く突出したもの（686）がある。A類の（613）が古く、（586）、（686・687）の順に変化するものであろう。

b）土師器

杯　杯・椀・皿・高杯・壷・甕・甑がある。杯類には高台を持つB類と、持たないA類があり、A類には器高が高い（628）と、器高が低く皿との区別が困難な（747）がある。（628・747）の内面には暗文が認められる。B類の杯は（629）1点で、体部下半は篦削りされている。

皿　いずれも高台が付かないA類である。3点とも体部内面に暗文が見られるが、底部の調整はナデだけのもの（627）と、篦削り後ナデするもの（626）がある。

椀　口縁部が体部から内彎するA類と、口縁部が体部から外反するB類がある。A類には内外面ナデ調整（573・746）、外面篦磨き、内面刷毛（617）、内外面篦磨き（618）するものがあり、B類には内外面篦磨き（616）、外面篦磨き、内面篦削り（745）するものが認められる。（616～618・746）の内面には正放射状に暗文が見られる。

高杯　屈曲する杯部を持つA類、内彎する杯部に直立する口縁部を持つB類、内彎する杯部に短く外反する口縁部を持つC類に分類できる。他に脚柱部に面取りを施したもの（630・631）も出土しているが、杯部を欠いているため、分類からは除外した。

壷　口頸部境が強くヨコナデされ、頸部に稜を持つA（622・623）と小形の壷B（570）がある。（622・623）は二重口縁壷の最も退化したものと思われる。

甕　小形で外反する口縁を持つA類と、長く伸びた体部から外反する口縁を持つB類、丸い体部から外反する口縁を持つC類、内彎気味に伸びる口縁端部を僅かに肥厚させたD類に分類できる。A類には口縁端部を摘み上げたもの（635）、短く外反させたもの（624）があり、B類は体部が張るB1（571）、口縁端部を短く外反させたB2（625）、体部が張らず筒状となるB3がある。B3にはまた外反する口縁の端部を摘みあげたもの（636・637）、横上方に直線的開く口縁の端部を摘み上げたもの（638）、口縁端部を摘み上げない（639・640）がある。C類の内（634）は口縁端部を欠くが、体部に把手が付く。

以上のように須恵器・土師器類は分類できるが、旧河道B-16区の下層からは須恵器杯蓋D1と、土師器椀A・壷A・甕A・高杯Aが共伴しており、これらの土器は須恵器の示すMT－15の古い段階に位置付けられる[註1]。また住居址7の床面上からは須恵器杯蓋D2と土師器壷B・甕B・椀A・椀B・高杯B・甑等が出土しており、これらの土器は須恵器杯蓋の示すMT－15からTK－10段階に位置付けられる。その他一括遺物ではないが、須恵器杯Aa・杯Ba・杯蓋B・C・壷A（680）、土師器杯・皿類は藤原期から奈良時代前半に[註2]、須恵器杯Ab・杯Bb・壷A（682）は奈良時代後半から平安時代初めに位置付けられるものであろう。

第 4 節　製塩土器

今回出土したものは脚台が付くA類、薄手の造りで内彎する体部がそのまま口縁部となるB類、薄手の造りで底部が平底となるC類、薄手で大形のD類、厚手の造りで平底の底部を持つE類、厚手の造りで砲弾形の形状を持つF類、厚手の造りで体部が直線的となり口縁端部が内彎するG類、厚手の造りで口縁端部に面を持つH類、薄手の造りで甕形のＩ類に分類できる。

A類は脚台部の形状等から、底部が薄く、内面から埋め込んで底部を成形するＡ１、全体に厚い造りのＡ２、脚台部の端部が尖り気味になるＡ３、底部が厚く、脚台部内面の抉りが少ないＡ４、脚台部が小さく、内面の抉りも浅いＡ５、脚台部が中実の柱部を持ち、体部が開かないＡ６に分類でき、Ａ２類はさらに脚柱部を持つものと持たないものに細分できる。

B類は１点だけの出土であり、形態からＡ４類ないしＡ５類の口縁部となるものであろう。

C類は口縁部が内傾するＣ１、体部中位で内彎し、口縁部が直立するＣ２、内彎しながら伸びる体部で、器高が高く椀形となるＣ３、内彎しながら伸びる体部を持つもので、器高が低く杯形となるＣ４、に分類できる。

D類は口縁端部が丸いＤ１、口縁端部が内側に突出するＤ２に分類できる。

E類は口縁端部が丸く小形のＥ１、口縁端部が僅かに内彎気味となる大形のＥ２に分類できる。Ｅ２の（697）はほぼ完形に近い形に復元でき、体部内面は横方向のナデ調整される。

F類は口径に大小がみられ、小形のものをＦ１、大形のものをＦ２に分類した。この類の調整は口縁部内面が１～２段の横方向のナデ、以下は縦方向のナデで、外面は指押さえのままか、指押さえの後ナデ調整するものが見られる。内面の調整は特徴的である。

G類も口径から小形のＧ１、大形のＧ２に分類でき、調整はＦ類と変化ない。

H類は内面に布目痕を残すＨ１、丁寧なナデ仕上げのＨ２に分類できる。

以上のように分類できるが、成形はＡ２類の（524）とＡ６類に叩きを使用しているが、それ以外は粘土紐を指押さえしただけのものが多い。また調整もH類以外の、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｉ類は内面をナデ調整するだけで、外面に粘土紐の接合痕を残すものが多い。H類は丁寧に調整されており、今回出土した製塩土器では特殊な存在である。

A類の内、Ａ１には瀬戸内地方の、Ａ２～Ａ６類には紀伊地方の影響が見られ、淡路でも製塩遺跡からの出土が知られている。またE類は田村G類[註1]とされたものに近い形状を持つ。ただ田村G類は７世紀前半とされているのに対し、本遺跡のE類は藤原期以後であり、新しく見ると平安時代前半に見ることもでき、時期的には下がるものである。Ｆ・Ｇ・H類については淡路では初見の例で、比較資料がないが、長岡京[註2]や平安京右京一条三坊九・十町のＳＸ191等[註3]に類例を求めることができる。本遺跡では旧河道から奈良時代後半から平安時代初めの須恵器杯Ｂｂ類を伴い、製塩土器E類とともに出土しており、長岡京等の示す年代と矛盾しない。ただ

今回の調査ではE類との関係については把握できていない。しかし隣接する鈩田遺跡では藤原期から平城段階の製塩土器が出土しているが、E類は認められず、E類もまたF・G・H類とともに奈良時代後半に位置付けられる可能性がある。

(第3節の註と参考文献)

註1　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966年

註2　西　弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥藤原発掘調査報告Ⅱ』
奈良国立文化財研究所　1978年
稲田孝司他『平城京発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所　1978年

[参考文献]

小笠原好彦・西　弘海『平城京発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976年

浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』淡路考古学研究会　1980年

(第4節の註と参考文献)

註1　田村昭治「淡路の製塩土器について」『山下町居屋敷遺跡調査報告』
洲本市教育委員会　1977年

註2　山口　博「長岡京跡右京第83次・105次」『京都府遺跡調査概報』京都府埋蔵文化財調査研究センター
1984年

註3　村川俊明他「平安京跡右京一条三坊九・十町」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1984年

[参考文献]

近藤義朗『土器製塩の研究』青木書店　1984年

岩本正二「7～9世紀の製塩土器」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983年

日本塩業体系編集委員会『日本塩業体系史料編　考古』日本塩業研究会　1978年

『海の生産用具』埋蔵文化財研究会第19会資料　1986年

第 5 節　中世の土器

1．土師器

皿・杯・椀

皿類は高台付と無高台のものに分けられ、無高台のものについては口径が径6～9㎝のものを小皿とし、径11～14㎝、器高2.5㎝前後のものを皿とした。小皿は器高が1㎝前後の低いものを小皿Ⅰ、2㎝前後の高いものを小皿Ⅱとした。椀類[註1]も高台付と無高台のものに分けられ、無高台のものは11～14㎝の口径を持ち、さらに器高3㎝前後のものを椀Ⅰ、器高3.5㎝以上のものを椀Ⅱに分類した。外上方へ真っ直ぐ立ち上がる器形のものは杯とした。

土師器椀・皿は底部の調整・整形技法からA・B・C・D・E類に分類した。また、無高台の椀・皿については、底部の調整技法や形態が共通していることから、分類については、同一の組上で扱った。

A類　底部を回転糸切り後、底部外側面に再度ロクロナデ[註2]を施すものである。このため、底部と体部の境は比較的明確に稜を持って分かれ、ロクロナデによって底部がやや突出する形状に見えるものがある。体部が直線的に立ち上がり、口縁部が直口気味になるA1、内湾して立ち上がり口縁部に至るA2、平底で外上方へ直線的に立ち上がるA3に分類できる。いずれも器壁の薄い堅緻な焼成の製品である。胎土は砂粒がやや多く、内面にロクロナデによって砂粒が長く尾を引く個体がある。色調は原則的に灰白色である。須恵器を模倣し、高温で焼成できる窯によって造られた製品であろう。椀A1類は淡路島島内では、森遺跡ピット出土遺物[註3]に類例を見ることができる。A1類に類似した器形は、中・四国で杯と分類されるものに見られる[註4]。

A類の内、A1類は土壙20に限って出土しており、Ⅲ期には消える。A2類はⅢ期を経てⅣ期まで残るが、全体の傾向として15世紀には衰退すると見るべきであろう。椀Ⅱについては、Ⅴ期の建物址9おいて検出されているが、焼成の悪いかなり粗雑なものとなっている。これはB・C類についても同様の事がいえ、Ⅳ・Ⅴ期を境にいずれも焼成が甘く、須恵器に近い製品が姿を消している。また、Ⅱ期のA1・2類がかなり直線的な体部を持つのに対して、Ⅱ～Ⅲ期とした溝13出土の個体では器高指数を減じつつかなり内彎している。Ⅲ期の土壙10出土の椀では底径が小さく外へ開き、明らかに須恵器椀を模倣した形態となっている。

B類　底部を糸切り後、底体部境をロクロナデするものである。そのため底部と体部の境は明確でなく、全体に丸みを持つ器形となっている。体部が内湾しながら立ち上がるB1、口縁端部を摘み上げるB2がある。B1類は外面にロクロ目を残し、胎土には砂粒を含み、やや厚手で、灰白色を呈する。B2類は内面にロクロ目を残し、胎土には砂粒が少なく器壁の薄い堅緻な焼成の精製品である。色調は灰白から浅黄橙を呈する。

B類の土師器はⅢ期に現れ、Ⅴ期に入るまで存続する。B1類の内、椀Ⅱ（859）は、須恵

器椀B（821）と形状が良く似ており、須恵器椀を模倣していると考えられる。B１類の椀は当初灰白色の比較的堅緻な製品であったものが、Ⅴ期・Ⅵ期においては全体に赤色調の焼成の甘い製品になっている。器形はほとんど変化しないが、器高はⅣ期でやや減じており、Ⅴ期では椀Ⅰ・Ⅱの区別はなくなっていると考えられる。皿は、全体に形態変化は少ない。溝23の（865）は器高指数は土壙24に比べてさらに小さく、土壙24の皿に後出するものであろう。B２類はⅢ期に入ると出現するが椀・皿ともに灰白色で、非常に須恵器に近い焼成を持った精製品である。須恵器工人か須恵器工人に近い技術をもった工人と窯によって造られたものであろう。Ⅴ期以降A類・B１類と同様に赤く発色し、Ⅵ期に至っては焼成もかなり甘くなっている。

椀ⅠB１類の内、溝10出土の（861）は森遺跡出土土器の中に類例が見られ、柱穴247の（806）は寺中遺跡土壙6[註5]に類例が見られる。土壙24出土の皿B１類も、森遺跡ピット５、寺中遺跡土壙６と溝15に類例がある。皿B２類は森遺跡ピット５に類例があり、寺中遺跡土壙６・溝15にも類似例がある。森遺跡ピット５では備前焼編年ⅣA期の壺が共伴しており、15世紀代に位置付けできる。

C類　回転糸切り後、底部外側面の調整を行わないものである。形態的には僅かに突出する厚手の底部から内彎する体部、上方へ直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持たないC１と持つC２に分かれる。胎土は良く、還元炎で焼かれ、須恵器と変らない製品である。須恵器工人か須恵器工人に近い技術をもった工人と窯によって造られたものであろう。C１類の椀Ⅱは土壙20で出土しているが、特に須恵器に近い。椀Ⅰは建物址４（Ⅲ期）で出土しており、近い形態を持つものとして大森谷遺跡溝５出土例がある[註6]。皿C１類は建物址10より出土した。C類はⅡ期に出現し、Ⅵ期まで続くが、Ⅲ期に集中して出現している。Ⅱ期の（833）は重焼きの痕跡が残り、非常に須恵器に近い製品であるが、Ⅲ期の製品には重焼き痕が見られない。Ⅵ期に残る（801）はA類・B類と同様に赤い発色をみせている。

D類　篦切りの底部をもつものである。皿類に限って見られ、口縁部は外反する。

E類　高台を持つものである。皿・椀に存在する。溝46の出土遺物の内、（839）は関東で「足高高台杯」と呼ばれるもの[註7]で、近い形態を持つものとして、大和川今池遺跡SK04の例[註8]が上げられ、11世紀中頃と考えられる。（840・841）は、早島式土器の範疇に入るもので、12世紀代に位置付けられるものであろう。

堝

堝は、短く立ち上がる口縁部に右上がりの平行叩きを施すA類、「く」の字に屈曲する口縁部を持ち、外面調整を撫で消すB類に分類できる。更にA類は最大径を胴部に持つA１類、口縁部と胴部が同じ径のA２類、最大径を口縁部に持つA３類に分けることができる。

A１・２類は芝崎遺跡[註9]及び寺中遺跡土壙４・７に類例を求めることができる。これらに該当する時期を芝崎遺跡では15世紀代と考えており、山仲進氏も同遺跡の土堝を15世紀代に位置付

けている[註10]。また寺中遺跡土壙４・７も15世紀前半～中頃と考えられる。

２．須恵器

皿・椀

皿類は、口径８㎝前後の小皿、口径11㎝前後と口径13㎝弱の２種の皿が出土している。平底から緩やかに内湾し直口する口縁部を持つ皿Ａと、肉厚で短い口縁部が直口する皿Ｂに分けられる。皿Ｂは小皿に限って見られ、底部は静止糸切りを施す。皿Ａは土壙20から出土している（Ⅲ期）。

椀類は口径12～13㎝で３㎝前後の器高を持つ。丸みを帯びた平底から体部・口縁部が外上方へ伸びる椀Ａと、心持ち突出する底部を持ち内湾する体部に外反気味に直口する口縁部を持つ椀Ｂがある。椀Ａは土師器椀Ｂ類と、椀Ｂは土師器椀Ｃ１類と形態が類似し、椀Ａは建物址４・５から出土している（Ⅲ期）。椀Ｂは土壙14から出土している。

捏鉢

捏鉢は口縁部の形態から、口縁部を上方に摘み上げ、外側に面を持つＡ類、口縁部を上方に摘み上げるが、端面とその上端に丸みを持つＢ類、口縁部を上方に拡張し、端部は丸みを持つＣ類、口縁部が上下に拡張するＤ類、口縁部下端の肥厚が顕著なＥ類、口縁部は上下に拡張するが、口縁部が全体に肉厚で矩形を呈するＦ類に分類できる。

Ａ～Ｅ類については、東播系須恵器の中に位置付けられ、時期を与えることが可能である。宇野氏の編年[註12]に添うならば、Ａ類は13世紀中頃、Ｂ類は13世紀末頃、Ｃ類は14世紀前葉、Ｄ類は14世紀中葉、Ｅ類は14世紀末葉の年代が与えられる。

３．遺構・遺物の時期について

Ⅱ期の土壙20からは口縁部の肥厚したＤ類の須恵器捏鉢が出土しており、土壙20の時期を14世紀中葉～後葉前後に考えることができる。

Ⅲ期の遺構の内、建物址６からは備前焼編年Ⅲ～Ⅳ期[註12]の擂鉢が出土している。建物址４は土壙20に後出することから、上限を14世紀後葉にとり、15世紀前葉に入る時期が考えられる。

Ⅳ期の遺構の内、溝２からはＥ類の須恵器捏ね鉢が出土おり、14世紀末の年代が与えられる。建物址７の柱穴からは備前Ａ期の擂鉢が出土している。建物址３・８からは、明確に時期を決定できる遺物の出土がないが、建物址３は土壙10・11との切り合い関係から見て、備前焼ⅢＢ期の甕が出土する土壙11より後出することから、14世紀後葉を上限に考えられる。またⅢ期の遺構よりも後出することから、Ⅳ期の遺構の時期を15世紀前葉から15世紀中葉に求められる。

Ⅴ期の遺構である土壙24の出土遺物は、15世紀中葉から後葉に位置づけられる。

Ⅵ期の遺物の内、皿Ｂ２類の（890・891）は寺中遺跡土壙[註14]６・森遺跡ピット５の皿に近い形状を持つが、底径が更に小さく、外側へ開き気味の器形を持つことから、森・寺中遺跡出土のものやⅣ期の土壙24より若干後出するものであろう。下限を16世紀の頭頃に考えたい。

Ⅱ～Ⅳ期は14世紀中頃～15世紀一杯に納まるものと考えられることから、Ⅱ期-14世紀中葉、Ⅲ期-14世紀後葉～15世紀初め、Ⅳ期-15世紀前葉～15世紀中葉、Ⅴ期-15世紀中葉～後葉、Ⅵ期-15世紀末～16世紀前葉に各時期の年代を想定することができる。

4．土師器椀皿類の動向

今回出土した土師器椀皿の大半はロクロによって成形・調整を行っている。これらの椀皿類には、須恵器と変わらぬ技術によって造られた極く還元炎焼成に近い製品（Ｂ２類・Ｃ類）、須恵器制作の技術を模倣し窯で高温で焼成するが、還元炎焼成ではなく明確に土師器と認識できる製品（Ａ類）、ロクロ技術は使用するが低温の酸化炎で焼成している製品（Ｂ１類）がある。それは、水漉した精良な胎土を持つ硬質の精製品、薄い造りで砂粒をほとんど含まない精良な胎土をもつ精製品、クサリ礫等の砂粒を多く含む汎製品と言い換えることが出来る。土師器椀皿の消長は、大まかにはⅢ期に生産されていたＡ類・Ｂ２類・Ｃ類がⅣ期に入って消えて行く動きと捉えられる。汎製品であるＢ１類もⅢ期以前は比較的高温で焼かれていたが、Ⅳ期には低温で焼成するようになる。即ち、硬質の精製品や精製品といった『須恵器に近い土師器』は15世紀代に入って大半が姿を消し、残るものも汎製品かあるいは薄手で堅い焼きではあるが酸化炎によって焼かれた単なる『ロクロ土師器』[註15]になってしまうのである。明確な画期と理由を提示することはできないが、Ⅳ期以降の遺構からは須恵器椀皿類は出土しておらず、島内で須恵器生産は行われなくなったことが理由の一つとして考えられる。Ⅳ・Ⅴ期間での土師器椀皿の質的変化の理由に技術・形態両面の模倣対象がなくなったことを挙げられよう。

土師器椀皿類の器種の消長・形態の変化は土師器椀皿類の個体数も少なく、系譜的には追えなかった。ただ器種の消長の大まかな流れとして、14世紀の小皿・皿の２種の皿と浅・深２種の椀のセットから15世紀代には２種の皿と浅い椀１種のセットへの変化が考えられる。形態の変化は大まかには14世紀中葉の直線的に立ち上がる形態から14世紀後葉～15世紀前葉代の上方へ内湾気味に立ち上がる形態、更に15世紀後葉での外上方へ緩やかに内湾して立ち上がる形態への変化が見られる。これらの器形が外方へ徐々に開く変化は皿類に特に顕著に現れるが、口径・器高の変化には余り現れず、底径の縮小傾向によって起こる傾向が強い。

またⅣ期に入って島内での、土師器形態の均一化の可能性が考えられる。15世紀代の遺跡としては寺中遺跡・森遺跡・大森谷遺跡が上げられるが、本遺跡の土師器椀皿と比較した場合、15世紀前半では形態に明瞭な違いが見られる。寺中遺跡土壙４で出土している底部が突出した形態の皿は、本遺跡では包含層から出土した１点が見られるだけである。ところが15世紀後半代の寺中遺跡土壙６出土の皿と同形態の土師器皿は、本遺跡でもＢ１類としてⅤ期の遺物の大半を占めている。島内で土師器皿椀はⅤ期に形態が均一化してくるものと思われる。

註１　器種のうち、須恵器・土師器の椀皿類の名称については、原則として器高３㎝以下のものを皿、３㎝以上のものを椀として扱った。今回報告を行った土師器皿・椀類は底部篦切りのＤ類を除き、いわゆる須恵器系土師器・ロクロ土師器の範疇に入り、中世の須恵器椀の系譜上にあると認識している。但し、Ａ１類の系譜は中世の須恵器椀ではなく、古代からの伝統的な須恵器杯Ｂの模倣に求めるべきかも知れない。

註２　中世遺物の調整等の記述については以下の用語を使用している。「ロクロナデ」はロクロもしくはロクロに近い回転力を持つ製作台の回転力によってなされたナデ調整をさす。「ナデ」はロクロ等の機械力を主体とした回転力によるものではなく人の手の動きによるナデ調整をさす。「ヨコナデ」はナデ調整のうち製作台の可動によって横方向へ連続して施すもの（製作台の回転力を主体としたものはロクロナデに含める）。板目状圧痕は板状工具による土師器底部の粘土の削り取りによってついた痕跡を呼ぶこととした。また、土師質・須恵質の用語は全て土師器・須恵器に統一して使用している。

註３　吉識雅仁『森遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』兵庫県教育委員会　1988年
以下、森遺跡についての記述は全てこの報告書を参照する。

註４　野中寛文「大門遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊』
香川県教育委員会　1987年
宮本一夫『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989年
河村吉行他『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅱ』山口大学埋蔵文化財資料館　1985年
『田治部氏屋敷址－岡山県埋蔵文化財発掘調査報告67』岡山県教育委員会　1988年
松下正司他　『草戸千軒町遺跡　第18～20次発掘調査概要』草戸千軒町遺跡調査研究所　1976年
田治部氏屋敷址や草戸千軒町遺跡の土師器坏Ａ１類は底部切り離しは篦切りであるが
形態的には類似している。いずれも13～14世紀に編年されるものである。

註５　拙　稿「第３章第３節３　土壙６の出土遺物」『寺中遺跡』兵庫県教育委員会　1990年

註６　別府洋二他『大森谷遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』兵庫県教育委員会1985年

註７　鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会1988年

註８　宮野淳一『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会　1985年

註９　藤田　淳『芝崎遺跡―一般国道175号線拡幅工事に伴う発掘調査』兵庫県教育委員会　1988年

註10　山中　進「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出1986－神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』
妙見山麓遺跡調査会　1989年

註11　宇野隆夫「後半期の須恵器」『史林』第67巻第６号　1984年

註12　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報』１・２・５号　1966～1968年

註13　溝23の遺物にはⅣ・Ⅴ期の遺物が混在する。（866～868）の土師器椀皿と須恵器捏鉢はⅣ期、（865）の土師器皿・（871）の土堝はⅤ期である。

註14　寺中遺跡土壙６の白色系土師器皿は宇野編年中世京都Ⅳ期にあたる。
宇野隆夫「白河殿北辺の土器・陶磁器」『白河殿北辺の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ1981年

註15　『ロクロ土師器』の用語の是非については論議がなされているが、本稿では、『ロクロもしくはロクロに

近い回転力をもつ製作台によって成形・調整され、基本的には酸化炎焼成された土師器』と定義して使用する。

福田健司他「第6回　中世土器研究集会討論記録」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』

日本中世土器研究会1988年

表8　縄文土器観察表

No.	器　種	出土地区 出土層位	技　法　の　特　徴	備　考
1	有文a類 口縁部	(E-6・7トレンチ) 黒褐	縄文原体RLを横位回転押捺する。	長石多
2	同上		篦状工具による沈線を施す。	長石多、石英・角閃石少
3	同上		半截竹管状工具による沈線を施す。外面に僅かに条痕が残る。	長石多、石英・雲母少
4	同上	(XⅧ区)	半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多、石英・クサリ礫少
5	同上	(D-6) 縄文包含層	半截竹管状工具による沈線を施す。	石英・長石多
6	同上	(A-10) 縄文包含層	口縁の波頂を中心に円弧状の沈線が展開する。	長石多、クサリ礫少
7	同上	(A-10) 縄文包含層	口縁部に半截竹管状工具による沈線を施した後に、縄文原体RLを横位回転押捺する。	長石・石英多
8	同上	縄文落ち込み	口縁部に縄文原体RLを横位回転押捺した後に沈線。	長石多、石英少
9	同上	(D-6) 縄文落ち込み	斜行の条線を外面に施す。	長石多、チャート稀
10	同上	(A-10) 縄文包含層	口縁部に縄文原体RLを横位回転押捺した後に沈線。	長石・石英多
11	同上	(D-9) 灰褐	口縁部をしっかり面取りしている。半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多、石英少 口径20.0cm
12	同上	(A-11) 土壙5	外面に肥厚させた口縁部を穿孔する。	長石・石英多
13	同上	(C-10) 黒褐 暗灰褐	半截竹管状工具によって弧状の沈線を施す。内外面より刺突する。	長石・石英多
14	有文b類 口縁部	(A-10) 縄文包含層	若干肥厚した口縁部内面に半截竹管状工具で弧状の沈線を施す。	長石・石英多、クサリ礫少
15	同上	(B-10) 溝内下層	外面に縦方向の条線を施す。	長石多、石英・角閃石・クサリ礫少
16	同上	(C-8・9) 弥生遺構面上	外面に約15mm幅の条線を施す。内面は半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多、石英・雲母少、クサリ礫稀
17	同上	(A-11) 土壙5	外面には縦方向の沈線を施す。内面には口縁に沿って沈線を施す。	石英・長石多、角閃石少
18	同上	(D-6) 縄文落ち込み	内面にやや幅広の沈線を施す。	長石・石英多、雲母少
19	同上	(D-6) 縄文落ち込み	外面に幅14～15mmの縦方向の条線を施す。内面には弧状の沈線を施す。	長石多、クサリ礫少

No.	器　種	出土地区 出土層位	技　法　の　特　徴	備　考
20	有文ｂ類 口縁部	(D－6) 縄文落ち込み	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石・石英多
21	有文ｃ類 口縁部	(D－6) 縄文包含層	外面に幅14～15mmの縦方向の条線を施す。屈曲した内面に縄文原体ＲＬを横位回転押捺する。	長石・石英多
22	同上	(B－9) 遺構面直上	外面にやや右傾する縦方向の条線を施す。内面には半截竹管状工具による沈線を施す。	長石・クサリ礫多
23	同上	(E-6・7) 縄文包含層	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石・クサリ礫多
24	同上	(A-11) 土壙５	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多、雲母・クサリ礫少
25	同上		内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	石英・長石多
26	同上	(A-9・10) 北壁断面	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	石英・長石多、クサリ礫少
27	同上	(E-6・7) 縄文包含層	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多
28	同上	(D－6) 溝47	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多
29	同上	(A-11) 土壙５	内面に半截竹管状工具による弧状の沈線を施す。	長石多、クサリ礫少
30	同上	(D－6) 縄文包含層	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	石英・長石多、クサリ礫少
31	同上		内面に半截竹管状工具による沈線を施した後に縄文原体ＬＲを横位回転押捺する。	石英・長石多、クサリ礫少
32	同上	(A-9・10)	内面に凹点を２個施す。	石英・長石多、クサリ礫少
33	同上	(A-11) 土壙５	内面に半截竹管状工具による沈線を施す。	石英・長石多、クサリ礫少
34	同上	(B-11) 黒褐	外面に縦方向の条線を施す。口縁端面に半截竹管状工具による沈線を施す。	長石多、石英・クサリ礫少
35	同上	(B-10) 溝内下層	外面に縦方向の条線を施す。内面のやや肥厚した部分に、縄文原体ＲＬを横位回転押捺した後、沈線を２条施す。	長石多、雲母・石英少
36	同上		内面が屈曲し、やや肥厚した部分に沈線を施した後、縄文原体ＬＲを横位回転押捺する。	長石・石英多
37	同上		内面の屈曲した部分に半截竹管状工具による沈線を施す。弧状の単位文様の中心を穿孔している。	長石多、石英・クサリ礫少 口径23.0cm
38	有文ｄ類 口縁部		内外面に半截竹管状工具による沈線を施す。口縁に付く半円形の突起の中心を穿孔する。	長石・石英多
39	同上	(H～K-22～25) 中世遺構面上	肥厚した口縁端部の外側に半截竹管状工具による刻み目を施す。	長石・石英多

No.	器　種	出土地区 出土層位	技　法　の　特　徴	備　考
40	有文ｄ類 口縁部	(D－6) 縄文落ち込み	口縁端部を軽く刻む。	長石・石英多、クサリ礫少
41	同上	(F・Ｊトレンチ) 黒褐色シルト	縄文原体ＲＬを横位回転押捺した後に、半截竹管状工具により沈線を施す。	長石・石英多、雲母少 口径22.0cm
42	条線文 土器 口縁部	(A-11) 土壙５	外面に幅17～18mmの条線を施す。内面を若干肥厚させている。	長石・石英多、雲母少
43	同上	(A-11) 土壙5	緩い曲線を描く縦方向の条線を施す。	長石多、石英少
44	無文 口縁部			長石・石英多 口径27.0cm
45	同上	(B－9) 最下層	外面を丁寧にナデている。	長石・石英多、雲母少
46	同上	(A-10) 縄文包含層	外面に巻貝条痕を横方向に施す。	長石・石英多、クサリ礫少
47	同上	(A-10) 縄文包含層	外面は板状工具によって横方向に削った後、ナデている。	長石・石英多、チャート稀
48	同上	(A-10) 縄文包含層	外面は削りに近いナデを施す。	長石・石英多、雲母少
49	有文 胴部	(A-11) 土壙５	外面に半截竹管状工具による斜行沈線を施す。	長石・雲母多
50	同上	(A-11) 土壙5	外面に半截竹管状工具による斜行沈線を施す。	長石多、雲母少
51	同上	(A-11) 土壙5	幅21～22mmの弧状の条線を施す。	長石・石英多
52	同上	(A-9・10) 暗黒褐	幅約20mmの条線を縦方向に施す。	長石・石英多、雲母少
53	同上	(A-10) 縄文包含層	外面に若干右傾する縦方向の条線を施す。内面に横方向の巻貝条痕？を施す。	長石・石英多
54	同上	(A-10) 縄文包含層	同心円状の単位文様を沈線で施す。	長石多、石英・クサリ礫少
55	同上	(E－6) 縄文包含層	やや右傾する条線を施す。	長石多、石英少
56	同上	(B－9)	縦方向の条線を施す。	長石・石英多、クサリ礫少
57	同上		縦方向の条線を施す。	長石・石英多
58	同上	(A-11)	左傾する巻貝条痕の上に縦方向の条線を施す。	長石多、雲母・クサリ礫少
59	同上	(A-10) 縄文包含層	右傾する条線を施す。	長石・石英多
60	同上	(A-11) 土壙５	縄文原体ＬＲを横位回転押捺する。	長石・石英多、腹径37.0cm

No.	器　種	出土地区 出土層位	技　法　の　特　徴	備　考
61	有文 胴部	(A-10) 縄文包含層	縄文原体ＲＬを横位回転押捺する。	長石多、雲母少
62	底部	(E-7) 縄文包含層	脚を有する。	長石多、底径6.4cm
63	同上	(A-11) 縄文包含層	平底である。	長石多、底径9.4cm
64	同上	(A-10) 縄文包含層	平底であるが、若干窪む？底部中央が欠損している。	長石・石英多、底径10.0cm
65	同上	(A-11) 土壙５	凹底である。内面に粘土を充填しているようである。	長石・石英多、底径8.0cm
66	同上	(A-11) 土壙５	凹底である。底径8.0cm。	長石多、クサリ礫少
67	同上	(B-9) 暗灰褐	凹底である。	長石・石英多、底径8.0cm
68	同上	(B-9～C-9)畦畔下層	凹底である。底径7.2cm。	長石多、石英・クサリ礫少

表９　弥生時代～古墳時代前期の土器観察表

(以下法量欄はcm単位)

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
69	壺Ｃ１	溝42	口径 12.4	内外面とも磨滅のため調整不明。	
70	壺Ａ３	溝42	口径 16.6	内外面とも磨滅のため調整不明。	
71	壺Ａ２	溝42	口径 20.6	内外面とも磨滅により調整不明。	
72	壺Ｅ１	溝42	口径 19.0	内面は横方向の篦磨き。外面の調整は磨滅のため不明。 口縁端面には４条の凹線文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	
73	壺Ａ３？	溝42	口径 18.6	内面は横方向の篦磨き。外面はヨコナデ調整。端面の上下端にそれぞれ１条の凹線を施し、その間に篦描きの鋸歯文を施す。	
74	壺Ａ３？	溝42	口径 27.2	内面は横方向の篦磨き。外面の調整は不明。端面には篦描きの鋸歯文を施す。	
75	壺Ａ３？	溝42	口径 28.4	内外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面の上下端に刻み目を施し、その間に２個１組の竹管円形浮文を貼り付ける。	
76	壺	溝42	口径(13.0) 腹径 23.6 底径　4.6 器高(23.6)	体部外面は叩き後、ナデ調整。内面は体部下半が板状工具によるナデ、体部上半から頸部内面はナデ。	
77	底部	溝42	底径　7.3	内外面とも調整不明。	
78	底部	溝42	底径　7.2	内面は板状工具によるナデ。外面刷毛後に篦磨きか。	底部から体部外面にかけて黒斑

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
79	底部	溝42	底径 13.0	体部の外面は叩き後に刷毛調整。内面は板状工具によるナデ。底部は輪台技法。	
80	甕Ｂ３	溝42	口径 15.8	体部外面には左上がりの叩きが僅かに残る。内面は調整不明。	
81	甕Ｅ３	溝42	口径 14.9	外面は体部がやや右上がりの叩き、口縁部が縦方向のナデ。内面は体部が横方向の刷毛、口縁部も横方向の刷毛調整。	
82	甕Ｆ１	溝42　上層	口径(19.4)	外面は体部が右下がりの刷毛、口縁部がヨコナデ調整。内面は口縁部がヨコナデ、体部がナデ調整。	内面は口縁部外面にス付着
83	鉢Ｂ１	溝42　下層	口径　8.5 底径　3.0 器高　3.9	体部外面は縦方向の刷毛調整、内面はナデ調整。	
84	鉢Ｂ１	溝42	口径 10.8 底径　2.7 器高　5.4	体部外面は一部に縦方向の刷毛が残る。内面は刷毛調整。	
85	鉢Ｂ３	溝42　下層	口径　9.7 底径　2.1 器高　6.1	内外面ともナデ調整。	
86	高杯Ａ２	溝42	口径 22.6 底径 16.5 器高 16.7	杯部は内外面とも調整不明。脚部の外面には縦方向の篦磨きの痕跡が残り、脚柱部の内面には絞り痕が残る。	
87	高杯Ａ１	溝42	口径 26.6	外面は口縁部が工具によるヨコナデ、体部が縦方向の篦磨き。内面は口縁部が横方向の篦磨き、体部が縦方向の篦磨き。	
88	器台 脚部	溝42	底径(16.6)	脚部外面は縦方向の篦磨き、内面は脚柱部が絞り後ナデ調整、裾部は篦磨き。体部は内外面とも調整不明。脚柱部上端には５条の沈線を巡らし、裾部には透し孔を４ヵ所に施す。	
89	底部	溝42	底径　6.0	体部外面は縦方向の刷毛、内面の調整は不明。	
90	底部	溝42	底径　5.3	底面はナデ、底部周囲外面に指押さえの痕跡が残る	
91	底部	溝42	底径　3.0	体部外面は右上がりの叩き、底部外面は指ナデ調整。体部内面は工具によるナデ、底部内面は指押さえ。	
92	壷Ｄ１	溝43	口径 17.6	内外面とも磨滅のため調整不明。	
93	壷Ｉ３	溝43	口径 11.7	口縁部は内外面ともナデ調整。体部は磨滅のため調整不明。	
94	甕Ｃ？	溝43	底径　6.0 腹径 12.0	底部周囲の外面は工具による縦方向のナデ、底面はナデ。体部内面は板状工具によるナデ、底部内面に板状工具のあたりが残る。体部外面は調整不明。最大胴部内面に接合痕あり。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
95	脚部	溝43	底径 18.0	外面は脚柱部から裾部付近まで縦方向の篦磨き、裾端部はヨコナデ。裾部内面はナデ調整。脚柱部内面は絞り痕をナデ消している。脚柱部から裾部が外反する部分の内側は板状工具によるナデ。裾端部に1条の凹線を施す。透し孔は5方向。	
96	壷Ａ２	溝40　上層	口径 16.8	磨滅のため調整不明。	
97	壷Ｉ２	溝40	口径 13.6	外面はナデ、内面の調整は不明。口縁部外面に5条の凹線を施し、体部と頸部の境に1条の凸帯を貼り付ける。	
98	壷Ｉ２	溝40	口径 14.8	外面は縦方向の刷毛調整（22本/2.2cm）。内面は横方向の刷毛調整。	
99	壷Ｉ１	溝40	口径 19.8	外面の一部に刷毛が残るが、他は磨滅のため調整不明。	
100	壷Ａ５	溝40	口径 18.7	内外面とも磨滅のため調整不明。	
101	壷Ａ４	溝40	口径 24.4	内面は横方向の篦磨き。外面の調整は不明。端面に5条の凹線を施した後、2個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	内面に黒斑あり
102	壷Ａ３？	溝40	口径 12.8	内外面とも磨滅のため調整不明。	
103	壷Ａ３？	溝40	口径 16.4	内外面とも磨滅のため調整不明。端面に3条単位の櫛描波状文を施す。	
104	壷Ａ３	溝40	口径 20.2	頸部外面は縦方向の篦磨き、口縁部外面はヨコナデ。口縁部内面は横方向の篦磨き、頸部内面は調整不明。口縁端面には竹管円形浮文を貼り付け、頸部と体部の境には1条の凸帯を貼り付け、その下位に貝殻圧痕を施す。	
105	壷Ａ３？	溝40	口径 23.6	内外面とも調整不明。口縁端面は下端に1条の凹線、上端に篦状工具による綾杉状の刺突文を施し、その間を篦描きの鋸歯文と3個1組の竹管円形浮文で加飾する。	
106	壷Ａ３？	溝40	口径 18.0	磨滅のため調整不明。	
107	壷Ａ４	溝40	口径 15.8	磨滅のため調整不明。	
108	壷Ｆ６	溝40	口径 21.7	外面の一部には横方向の刷毛が残る以外、調整不明。	西部瀬戸内系
109	壷Ｆ６	溝40	口径 27.4	内外面とも調整不明。口縁端面には鋸歯文を施す。	西部瀬戸内系
110	小形 丸底壷 Ｄ	溝40　上層	口径 12.8 腹径 11.4 器高（8.0）	体部外面の下半は縦方向の篦磨き、内面も篦磨きする。体部上半から口縁部外面にかけては調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
111	甕Ａ１	溝40	口径 11.7	体部外面には刷毛が僅かに残り、体部内面は指押さえの後、ナデ調整。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。口縁端面には２条の凹線を施す。	
112	甕Ｂ１	溝40	口径 17.8	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部内面はナデ調整。端面には２条の凹線を施す。	
113	甕Ｂ１	溝40　上層	口径 17.8	体部は外面に叩きの痕跡が残り、内面は横方向の篦削り。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。	
114	甕Ｂ１	溝40	口径 17.8	内外面とも調整不明。	
115	甕Ｂ２	溝40	口径 15.8	外面は磨滅のため調整不明。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はナデ。	
116	甕Ａ１	溝40	口径 14.2	内外面ともヨコナデ調整。口縁端面には刻み目を施す。	紀伊系？
117	甕Ｅ２	溝40	口径 13.8	内外面とも調整不明。	
118	甕Ｆ１	溝40	口径 27.2	口縁部外面は縦方向の刷毛（13条/cm）。内面の調整は不明。	
119	鉢Ｂ３	溝40	口径　9.7 底径　2.0 器高　5.2	内外面とも磨滅のため調整不明。底部内面には板状工具のあたりが残る。	
120	器台Ｄ２	溝40	口径　9.9	内外面とも磨滅のため調整不明。	
121	器台Ｂ	溝40	口径 19.8	外面の調整は磨滅のため不明。内面は僅かに篦磨きの痕跡が残る。	
122	高杯Ａ３ or 4	溝40	口径 16.8	外面の調整は不明。内面はヨコナデ調整。	
123	高杯 Ａ４？	溝40　上層	底径 12.6	内外面とも磨滅のため調整ははっきりしないが、裾部内面はナデか？	二次焼成のためか赤変
124	脚部	溝40　上層	底径 10.5	内外面とも磨滅のため調整不明。	
125	脚部 （高杯）	溝40　上層	底径 11.0	内外面とも磨滅のため調整不明だが、脚柱部内面は絞り痕の上からナデか？	
126	脚部 （高杯）	溝40		外面には僅かに縦方向の篦磨きの痕跡が残る。内面はナデ調整。脚柱部上端部に５条の沈線を施す。	
127	底部	溝40　上層	底径　5.3	磨滅のため調整不明。	
128	底部	溝40	腹径 21.8	体部の外面は右上がりの叩き後にナデ調整。内面はナデ調整	
129	底部	溝40　上層	底径　5.6	体部外面は縦方向の刷毛調整（10本/1.5cm）。底部周囲外面には指押さえの痕跡が残る。体部内面はナデ調整。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
130	底部	溝40　上層	底径　3.8	体部外面には叩きの痕跡が残り、内面はナデ調整。底面もナデ調整。	
131	壷A 5	住居址 4	口径 16.0	頸部の外面は縦方向の篦磨き。口縁部外面はヨコナデ。内面は篦磨きか。	
132	壷C 2	住居址 4	口径 11.0	頸部外面の一部に縦方向の篦磨きが残る。他は調整不明。口縁端面には篦描きの鋸歯文と、半截竹管文を向い合わせに刺突した円形浮文を貼り付ける。	
133	壷A 3	住居址4	口径 18.2	内外面とも磨滅のため調整不明。	
134	壷	住居址 4	頸部径 15.2	内外面とも磨滅のため調整不明。頸部と肩部の境に竹管文を刺突する。	
135	高杯A 1	住居址 4	口径 23.0	口縁部内面は横方向の篦磨き、外面にも篦磨きの痕跡が残る。	
136	底部	住居址 4	底径 12.8	外面は右上がりの叩き（6条/2.2cm）、内面の調整は不明。	
137	鉢C 1	住居址 1	口径 17.4 底径　2.3 器高　5.6	体部外面は右上がりの叩き（5条/2cm）後に、雑なナデ調整。体部内面は板状工具によるナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。底部は周囲外面を篦削りすることによって作り出している。	
138	体部 (壷)	住居址 1	腹径 17.0 底径　1.9	内外面とも調整不明。	体部中位に黒斑あり
139	鉢B 1	住居址 2	口径 11.0 底径　2.6 器高　5.9	外面は叩き後にナデ、内面は板状工具によるナデ。体部下位の外面に絞りの痕跡を残す。	
140	甕G 1	住居址 2	口径 12.4	体部外面は縦方向の細かい刷毛（11本/1.4cm）調整。内面は肩部が指押さえの後ナデ、以下縦方向の篦削り。口縁部内外面ヨコナデ調整。	四国系
141	壷A 2	住居址 5	口径 16.8	体部外面は刷毛調整、頸部外面は篦磨きか。内面は部分的に横方向の篦磨きの痕跡が残る。	
142	底部	住居址 5	底径　4.3	調整は磨滅のため不明。	
143	壷A 1	住居址 6	口径 18.6 腹径 24.0	体部は外面が叩き後ナデ調整、内面がナデ調整。口縁部は内外面ともナデ調整か。	
144	高杯A 3	住居址 6	口径 18.0	体部外面は篦磨きの痕跡が残る。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は調整不明。	
145	底部	住居址 6	底径　2.8	体部外面は縦方向の篦磨き。底部周囲の外面は指押さえ。底面はナデ調整。	
146	小形 丸底壷 B	土壙 1	口径　9.7 腹径　7.2 器高　8.2	口縁部内面と体部の外面には部分的に篦磨きが残る。他は調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
147	小形 丸底壷 B	土壙1	口径 10.6 腹径　7.0 器高　7.0	外面は横方向の篦磨き。体部内面は縦方向の篦磨き。口縁部内面は横方向の篦磨き。精製の土器である。	
148	小形 丸底壷 D	土壙1	口径 11.4 腹径　8.2 器高　6.9	内外面とも磨滅のため調整不明。	
149	鉢C 1	土壙1	口径 16.6 底径　3.6 器高　6.0	体部外面は下半が水平方向、中位が右下がりの叩き。口縁部付近は水平方向の叩き（7条/1.8cm）。内面はナデ調整。	
150	小形 丸底壷 D	土壙1	口径 11.4 器高　8.2	体部外面は叩き後ナデ調整し、底部外面は篦削りする。体部内面はナデ調整。底部に焼成後の穿孔。	
151	鉢A 3	土壙1	口径 20.3 底径（4.2） 器高（8.5）	体部外面は篦磨きの痕跡が残る。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は調整不明。	
152	高杯	土壙1	口径 16.4	外面ヨコナデ調整。内面の調整は不明。	
153	高杯	土壙1	口径 19.0	口縁部内面に縦方向の篦磨きが一部残る以外、調整不明。	
154	高杯	土壙1	口径 21.0	外面は横方向の篦磨き。内面も篦磨きか。	
155	高杯B 1	土壙1	口径 13.8	杯部内外面、脚部外面は磨滅のため調整不明。脚柱部内面はナデ調整しているが、粘土紐接合痕、絞り痕が明瞭に残る。	
156	器台D 2	土壙1	口径　7.0 底径 10.0 器高　9.8	内外面とも調整不明。透し孔は4方向。	
157	脚部	土壙1	底径 10.2	脚柱部内面はナデ調整しているが、絞り痕、粘土紐接合痕が残る。外面の調整は不明。	
158	脚部	土壙1	底径　7.0	脚部外面は縦方向の篦磨き、裾部外面は右下がりの篦磨き。内面はナデ調整。透し孔は3方向。	
159	壷	土壙1	腹径 14.1	内外面とも器表剥離のため調整不明。	
160	甕H 1	土壙1	口径 14.8	体部外面は刷毛（9本/cm）、内面は横方向の篦削り。口縁部はヨコナデ調整。	酒津系
161	甕E 2	土壙1	口径 11.8	体部外面は右上がりの叩き後にナデ、内面はナデ調整。口縁部外面は刷毛調整。	
162	甕E 2	土壙1	口径 15.2	体部外面は右上がりの叩き、内面はナデ調整。口縁部は調整不明。口縁叩き出し技法。	
163	甕E 2	土壙1	口径 15.2	体部外面に右上がりの叩きが残る以外、調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
164	甕F 1	土壙 1	口径 11.8	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整。体部外面に刷毛目遺存。	
165	甕E 3	土壙 1	口径 16.0	体部外面は刷毛目の痕跡が残り、内面は横方向の篦削り。口縁部内外面はヨコナデ調整。	
166	甕G 1	土壙 1	口径 12.6	体部外面は縦方向の細かい刷毛（10本/cm）調整。体部内面は上半が指押さえの後刷毛か。下半の調整は不明。口縁部から体部上端にかけての内外面はヨコナデ調整。	讃岐系
167	甕G 1	土壙 1	口径 12.6	体部外面は刷毛（8本/cm）調整。体部内面は上半が指押さえ、下半は左上がりの篦削りか。頸部内面は篦削り後ヨコナデ、口縁部内外面と肩部上端の内外面はヨコナデ調整。	讃岐系
168	甕G 1	土壙 1	口径 14.0	体部外面は細かい刷毛（7本/cm）調整。内面は指押さえ後ナデ調整。口縁部から肩部にかけては内外面ともヨコナデ調整。	讃岐系
169	甕G 1	土壙 1	口径 14.2	体部は外面が細かい刷毛（10本/cm）調整。内面は指押さえ後、ナデ調整。口縁部から体部上端の内外面はヨコナデ調整。	讃岐系
170	甕G 1	土壙 1	口径 17.4	体部外面は刷毛の痕跡が残り、内面は指押さえ。口縁部内外面はヨコナデ調整。	讃岐系
171	甕G 2	土壙 1	口径 15.2	体部外面に刷毛調整の痕跡、内面に指押さえの痕跡が残る。他は調整不明。	
172	小形 丸底壷 C	土壙 6	腹径 12.4 腹径 9.9 器高 8.3	内外面とも調整不明。	
173	壷	土壙 6	腹径 17.0	内外面とも調整不明。	
174	甕G 1	土壙 6	口径 14.6 腹径 22.6	体部外面に叩きの痕跡が残り、内面には指押さえの痕跡が残る。他は調整不明。	讃岐系
175	甕E 2 ?	土壙 6	底径 3.2	体部外面は肩部と体部下半は右上がりの叩き（5条/cm）、体部中位も右上がりの粗い叩き（2条/cm）。内面はナデ調整。	
176	甕E 1	土壙 4	口径 14.7	体部外面は右上がりの叩き（3条/cm）。口縁部外面ナデ調整。	
177	壷B 2	土壙 7	口径 13.8	口頸部外面は縦方向、口縁部内面は横方向の篦磨き。体部内面はナデ調整。体部外面は調整不明。	
178	甕E 2	C−7 土器群	口径 12.0 腹径 17.2	体部外面は叩き後ナデ、内面は板状工具によるナデ。口縁部は内外面ともナデ調整。	
179	甕F 3	C−7 土器群	口径 12.0	内外面とも器表剥離のため調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
180	甕F 3	C−7 土器群	口径 12.0	体部外面は上半が横方向、下半が右上がりの刷毛(15本/3㎝)。内面は上半が横方向、下半が左上がりの篦削りをしているが、単位は不明。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。	
181	鉢C 1	C−7 土器群	口径 13.4 器高 4.3	口縁部外面にヨコナデの痕跡が残る以外、調整不明。	
182	鉢C 1	C−7 土器群	口径 13.6 器高 4.9	口縁部の内外面はヨコナデ調整。底部周囲の外面は縦方向、体部外面は横方向の篦磨き。内面は縦方向の篦磨き。体部外面の一部に叩きが残る。	底部から体部にかけての外面の一部に黒斑
183	鉢C 3	C−7 土器群	口径 13.8	体部内外面に縦方向の篦磨きの痕跡が残る。口縁部の内外面はヨコナデ。	体部外面の一部に黒斑
184	高杯A 4	C−7 土器群	口径 13.2	体部と口縁部の外面、口縁部内面にはヨコナデ後の横方向の篦磨きの痕跡が残る。	
185	高杯C 1	C−7 土器群	口径 15.7 底径 11.7 器高 14.1	体部外面は篦削りし、口縁部外面はヨコナデ。脚柱部外面は横方向の刷毛調整、裾部への屈曲部外面は縦方向の篦磨きの痕跡が残る。脚柱部内面はナデ調整。	
186	高杯C 2	C−7 土器群	口径 15.7 底径 11.7 器高 14.1	全体に器表剥離し調整は不明であるが、裾部外面と口縁部内面の一部に篦磨きの痕跡が残る。	
187	脚部	C−7 土器群	底径 10.0	脚柱部内面はナデ調整しているが、粘土紐接合痕と絞り痕が残る。他は調整不明。	
188	器台E	C−7 土器群	口径 9.7 底径 10.9 器高 8.1	内外面とも器表剥離し調整不明。	
189	甕H 1	旧河道下層	口径 11.6	内外面とも調整不明。	
190	壺F 3	旧河道	口径 17.4	内外面とも調整不明。口縁端面には5条の凹線を施し、下半に竹管円形浮文を貼り付ける。凹線上に櫛描波状文の痕跡。	
191	壺B 2	旧河道礫層	口径 11.8	頸部外面は縦方向の篦磨きが僅かに残り、内面には横方向の篦磨きの痕跡が残る。口縁端面には4条の凹線文を施し、口縁端部内面にも4条単位の櫛描波状文を施す。	
192	壺A 3	旧河道	口径 14.4	頸部外面には縦方向の篦磨き、内面は横方向の篦磨きの痕跡が残る。	
193	壺A 3	旧河道	口径 22.6	内外面とも調整不明。口縁端面には4条の凹線文を施す。	
194	壺C 1	旧河道	口径 20.0	内外面とも調整不明。	
195	壺A 3	旧河道礫層	口径 17.6	内外面とも調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
196	壷D 1	旧河道礫層及濃灰色シルト	口径 21.8	内外面とも調整不明。口縁端面には3条の凹線文が施され、頸部と体部の境には1条の貼り付け凸帯を巡らす。	
197	高杯D	旧河道	口径 25.0	外面は下半が縦方向、上半が横方向の篦磨き。内面は刷毛（7本/cm）調整。	
198	脚部	旧河道礫層	底径 10.1	内外面とも調整不明。	
199	蓋？	旧河道		体部外面は叩き（2条/cm）、内面は板ナデ調整。	
204	壷	(B・C−9間畦畔) 包含層 礫層	口径 11.2	外面は刷毛（14本/1.5cm）調整後、口縁部だけをナデ調整する。内面は体部が縦方向の指ナデ、口頸部がナデ調整。頸部から肩部の外面には7本単位の櫛描直線文を3段に施し、その下位に櫛描波状文、簾状文を施している。	第Ⅱ様式
205	壷	包含層	口径 23.2	内外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面には篦による列点文を綾杉状に施す。頸部には竹管状工具による刻み目を施した貼り付け凸帯を巡らす。	第Ⅲ様式
206	壷	(A−11) 包含層	口径 29.2	内外面とも調整不明。口縁端面に櫛で綾杉状に列点文を施した後、円形浮文を貼り付ける。口縁部内面には注ぎ口状に貼り付け凸帯を巡らす。	第Ⅲ様式
207	壷	(B−12) 包含層		外面は横方向の篦磨き。篦描き沈線文を施しており、4条まで確認される。	第Ⅰ様式
208	壷	(B−8) 包含層		外面は篦磨き調整した後、7本単位の櫛描直線文を5段に施しているが、一部焼成以前に器表剝離のためか消失している。	第Ⅱ様式
209	甕	(確認T−1) 包含層		内外面ナデ調整。口縁部下の外面には9本単位の櫛描き斜線文を施した後、その上下に櫛描直線文を施す。	第Ⅱ様式
210	壷	(B−10) 包含層	腹径 38.4	頸部外面は調整不明、体部外面は一部篦磨きの痕跡が残る。内面は体部・頸部ともナデ調整か。頸部と体部の境には篦による刻み目を施した凸帯を1条巡らす。	胎土に雲母・角閃石 河内産
211	壷C 1	(E−6・7) 包含層	口径 14.2	口縁部内面に横方向の篦磨きの痕跡が残る以外調整不明。口縁端面には2条の凹線文を施す。	
212	壷C 1	(確認D−17) 包含層	口径 17.8	頸部外面ヨコナデ。他は調整不明。	
213	壷C 3	包含層	口径 14.4	頸部外面は縦方向の篦磨き。他は調整不明。口縁端面には2個1組の竹管円形浮文を貼り付け、下端には篦による刻み目を施す。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
214	壷C 2	(B-10) 包含層	口径 12.0	頸部から体部外面には縦方向の篦磨きが残る。体部内面は指押さえしているが、口頸部内面は調整不明。口縁端面に3条の凹線、頸部下半から肩部にかけて、2段に半截竹管文を施し、その下位に7条単位の櫛描波状文、さらに櫛の刺突による列点文を施す。	
215	壷C 2	(確認T-6) 包含層	口径 16.4	内外面とも調整不明。口縁端面には2段の半截竹管文を施した後、6方向に竹管円形浮文を貼り付ける。	
216	壷A 3	包含層	口径 16.8	内外面とも調整不明。口縁端面に浮文の剝離痕。	
217	壷C 3	(確認D-17) 包含層	口径 16.4	頸部外面には一部縦方向の篦磨きが残り、内面にも横方向の篦磨きの痕跡が残る。口縁端面には3条の擬凹線文を施した後、3個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	
218	壷C 3	(B-9) 包含層	口径 15.8	頸部下端にヨコナデが残る以外、外面は調整不明。口縁部内面には横方向の篦磨きが残る。口縁端面には上端に1条の擬凹線文が施され、下端にも擬凹線文の痕跡が残る。さらにその間を鋸歯文と竹管円形浮文を交互に施す。	
219	壷A 3	包含層	口径 16.1	外面は、頸部が縦方向の刷毛後に同方向の雑な篦磨き、口縁部が刷毛後にヨコナデ調整。内面は横方向の刷毛調整。口縁端面には2条の擬凹線文を施す。	
220	壷A 3	(B-8) 包含層	口径 22.0	内外面とも調整不明。口縁端面に3条の凹線を施した後、2個1組の竹管文を刺突する。	胎土に微細な雲母を含む
221	壷C 3	(C-11～14間畦畔)包含層	口径 16.4	口頸部外面は縦方向の篦磨き、頸部内面はナデ調整、口縁部内面は横方向の篦磨き。	
222	壷A 3	(E・F-7) 包含層	口径 14.7	外面は刷毛後、縦方向の篦磨き。内面は刷毛後、横方向の篦磨き。口縁端面には下端に1条の凹線文を施し、上半には竹管文を刺突する。	
223	壷C 3	(B-8) 包含層	口径 18.4	外面は口縁部がヨコナデ、頸部の調整は不明。内面は口縁部に横方向の篦磨きの痕跡、頸部も篦磨きの痕跡が残る。頸部下端に篦の刺突による列点文を施す。	
224	壷C 3	(E-6・7) 包含層	口径 18.4	頸部外面に縦方向の篦磨きの痕跡が残る以外、調整不明。口縁端面には3条の凹線文を施した後、篦による列点文を施す。頸部下端に1条の凸帯文を巡らし、その下位にも篦による列点文を施す。	
225	壷A 3	(B-10) 包含層	口径 21.8	外面は、頸部に縦方向の刷毛(14本/cm)が残り、口縁部はヨコナデ調整。内面は頸部に縦方向の篦磨きの痕跡が残る。口縁端部には上下端にそれぞれ1条の凹線文を施し、その間を6条単位の櫛描波状文で加飾する。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
226	壷C１？	(F－4) 包含層	口径 16.7	外面は縦方向、内面は横方向の篦磨き。口縁端面には５条の凹線文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。口縁端部内面にも５条単位の櫛描波状文を施す。	
227	壷C１？	(B－8) 包含層	口径 19.6	内外面ともヨコナデ後の、篦磨きの痕跡が残る。口縁端面には９条単位の櫛描波状文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。口縁端部内面にも９条単位の櫛描波状文を施す。	
228	壷C２	(B-10) 包含層	口径 16.6	内外面とも調整不明。口縁端面には篦描きの鋸歯文と竹管円形浮文を交互に施す。	
229	壷A２	(確認D－5) 包含層	口径 19.2	頸部外面は縦方向の篦磨き。口縁部内面は横方向の篦磨き。他は不明。口縁端面には３条の凹線文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	
230	壷A３？	(B－9) 包含層	口径 20.4	内面は横方向の篦磨き。外面の調整は不明。口縁端面には４本単位の櫛描波状文を施す。	
231	壷A４	(D-10・11間) 包含層	口径 21.0	内外面とも調整不明。口縁端面には径２㎜前後の竹管文を施す。	
232	壷C３	包含層	口径 18.6	内外面とも調整不明。口縁端面には４条の凹線を施す。	
233	壷C３	(確認T－6) 包含層	口径 24.1	外面は刷毛（９本/㎝）後篦磨き、他は器表剥離のため調整不明。端面には２条の凹線を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	
234	壷A３	(D-11) 包含層	口径 26.0	外面は刷毛調整後ナデ、内面の調整は不明。口縁端面には３条の凹線文を施した後、２個１組の円形浮文を貼り付ける。	
235	壷A３	(B-10) 包含層	口径 22.2	外面は刷毛後、縦方向の篦磨き。内面は横方向の篦磨き。口縁端面には２個１組の円形浮文を貼り付ける。	内面に黒斑
236	壷A３	(B－5) 包含層	口径 22.8	外面に刷毛後の篦磨きの痕跡が僅かに残る。内面は口縁部がヨコナデ後に横方向の篦磨き、他は横方向の篦磨き。口縁端面には４条の凹線文を施す。	内面に黒斑
237	壷A２	(B－6) 包含層	口径 16.2	頸部外面に縦方向の篦磨きが残る以外、調整不明。	
238	壷A１	(C-10・11間) 包含層	口径 14.8	外面には縦方向の刷毛（11本/㎝）が、内面には横方向の刷毛が残る。	
239	壷B１	(B～C－9) 包含層	口径 11.4	内外面ともヨコナデ後、雑に横方向の篦磨き。	
240	壷B１	(B－9) 包含層	口径 10.8	口縁部は内外面ともヨコナデ後、雑な横方向の篦磨き。頸部内面は板状工具によるナデ後ヨコナデ。体部内面は板状工具によるヨコナデ。	239と同一個体か

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
241	壷A 5	(D・E−5) 包含層	口径 20.0	内外面とも調整不明。口縁端面には2個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	
242	壷A 4	(D・E−5) 包含層	口径 19.8	外面は刷毛後、縦方向の篦磨き。内面は器表剝離のため調整不明。	
243	壷A 4	(C−10) 包含層	口径 18.6	外面は刷毛後、縦方向の篦磨き。内面は頸部に横方向の篦磨きの痕跡が僅かに残る以外、調整不明。	
244	壷	(E−5) 包含層	底径 3.5 腹径 10.0	体部下半の外面は縦方向の篦磨き。他は器表剝離のため調整不明。	
245	壷	(B−9) 包含層	口径 19.6	外面はヨコナデ、内面は横方向の篦磨き。口縁端面には7本単位の櫛描波状文を施し、3個1組の円形浮文を貼り付ける。	
246	壷	(C−10・11間畦畔) 包含層	口径 23.3	外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後横方向の篦磨き。口縁端面には上下端にそれぞれ1条の凹線文を施し、その間に櫛の刺突による列点文を施す。	
247	壷A 1	(C−10) 包含層	口径 19.4	頸部外面は縦方向の篦磨き、内面はナデ調整か。口縁部内面に僅かに篦磨きの痕跡が残る。口縁端部には4条の凹線文を施した後、5個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	
248	壷	(B−15〜17畦畔) 包含層	口径 27.8	内外面とも調整不明。口縁端面には4条の凹線文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	胎土に雲母・角閃石を多く含む。河内産？
249	壷	(A−9) 包含層	口径 31.7	内外面とも調整不明。口縁端面には下半に2条の凹線文を施した後、円形浮文を貼り付ける。	胎土に少量の雲母・角閃石を含む
250	鉢D	(C・D−5) 下層	口径 8.8	内外面とも調整不明。口頸部外面には4条の凹線文。	
251	鉢D	(B−10) 下層	口径 11.2	外面は器表剝離のため調整不明。内面はナデ。口頸部外面には3条の凹線文が施され、肩部外面には篦の刺突による列点文が施される。	
252	壷I 2	(F〜G−5) 下層	口径 13.9	内外面とも調整不明。口頸部外面には13条の凹線文。	
253	壷F 5	(確認T−6) 下層	口径 17.4	外面の調整は不明。内面には横方向の篦磨きの痕跡が残る。端面に3条の凹線を施す。	
254	壷G 2	(D・E−5) 下層	口径 12.8	外面に縦方向の篦磨きの痕跡が残る以外、調整不明。	
255	壷G 2	(B−5) 下層	口径 17.9	外面は口縁部がヨコナデ後に、頸部が縦方向の刷毛後に、縦方向の篦磨きを施した痕跡が残る。内面は調整不明。	
256	壷G 1	(A−9) 下層	口径 21.0	頸部下半の内面に指頭圧痕が残る以外、調整不明。口縁端面には竹管円形浮文を貼り付け、頸部下端には2条の凹線文。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
257	壷Ｉ１	（Ｃ・Ｄ−５） 下層	口径 20.8	口頸部外面は縦方向の篦磨き、口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はナデ。口縁端面に３条の凹線を施す。	
258	甕Ｄ１	（Ｃ−10）下層	口径 15.0	体部外面は右上がりの叩き（２条/cm）、口縁部外面は縦方向の板状工具によるナデ。	
259	甕Ｄ１	（Ｂ−10）下層	口径 19.2	体部外面は水平方向の叩き後、縦方向の刷毛（12本/cm）調整。内面の調整不明。	
260	甕Ｄ１	（Ｃ−10）下層	口径 13.2 腹径 12.1 底径　4.0 器高 15.5	器表剝離が甚だしく調整は不明であるが、内外面ともナデ調整か。	
261	甕Ｃ１	（Ｂ−10）下層	口径 19.0 腹径 17.3 底径　4.4 器高 19.0	体部外面は上半が右上がりの叩き（３条/cm）後ナデ、下半は縦方向の篦削り。底部外面周囲は指ナデ。内面はナデ調整。	
262	甕Ｃ２	（Ｂ−７〜９） 下層	口径 37.5 腹径 39.6 底径　7.8 器高(42.0)	体部外面は肩部以下が右上がりの叩き（７条/3.5cm）。肩部より上は叩き後に刷毛調整し、その後さらに口縁部外面までナデ調整する。底部周囲から体部下端にかけての外面は叩き後に刷毛調整。体部内面は板状工具によるナデ調整、口縁部内面は横方向の刷毛調整。	図上復元
263	甕Ｂ２	（Ｂ−10）下層	口径 17.0	内外面とも調整不明。	
264	甕Ｂ１	（Ｂ−10）下層	口径 18.4	体部外面に叩きの痕跡が残る。内面は口縁部がヨコナデ、体部が板状工具による横方向のナデ。	
265	甕Ｄ１	（Ｃ−11〜14間畦畔）下層	口径 18.4	体部外面はほぼ水平方向の叩きが残り、一部叩きの上に刷毛目が残る。内面の調整は不明。	
266	甕Ｂ２	（Ｂ−10）下層	口径 18.6	体部外面は叩き後に刷毛調整。内面の調整は不明。	
267	甕Ｄ１	（Ｂ−９）下層	口径 20.2	体部外面は叩き後刷毛調整の痕跡が残り、体部内面は篦削り。	
268	甕Ｄ１	（Ｂ−10）下層	口径 22.0	体部外面は叩き（３条/cm）後、刷毛（10本/cm）調整。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛調整の痕跡が残る。	
269	甕Ｂ１	（Ｂ−10）下層	口径 15.0	体部外面は縦方向の刷毛調整。他は調整不明。	
270	甕Ｂ２	（Ｃ−10）下層	口径 18.2	体部外面は縦方向の刷毛（８本/cm）調整。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は指ナデ。	
271	甕Ｂ２	（Ｂ−10）下層	口径 17.2	体部外面は叩き後、縦方向の刷毛（22本/cm）調整。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は下半が刷毛、上半が指ナデ調整。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
272	甕A 1	(B-10) 下層	口径 16.0	体部外面は縦方向の刷毛（9本/cm）の痕跡が残り、内面には篦削りの痕跡が残る。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。口縁端面には2条の凹線文を施す。	
273	甕A 1	(B-10) 下層	口径 16.0	体部外面には刷毛目（7本/cm）が残る。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整か。口縁端面には2条の凹線文。	
274	甕A 1	(C-10) 下層	口径 23.8	外面はヨコナデ調整。内面の調整は不明。口縁端面には3条の凹線文を施す。	
275	甕A 1	(C-10) 下層	口径 28.4	口縁部外面はヨコナデ、他は不明。口縁端面に2条の凹線文。	
276	甕B 2	(C-10) 下層	口径 32.4	体部外面は左上がりの叩き後に刷毛（6本/cm）調整。口縁部内面は刷毛調整の痕跡が残る。他は不明。	
277	甕D 1	(B-7) 下層	口径 13.8	体部外面は粗い叩き（2条/cm)。口縁部外面はヨコナデ調整。内面の調整は不明。口縁端面に刻み目を施す。	
278	高杯A 1	(C-10) 下層	口径 18.1	杯部内面は縦方向の篦磨きの痕跡が残る以外、調整は不明。脚部外面は縦方向の篦磨き、内面に絞り痕が残る。	
279	高杯A1	(A-9) 下層	口径 29.0 底径 15.0 器高 19.3	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は篦磨きか。脚部は外面が縦方向の篦磨き、内面はナデか。脚柱部上端に8条の篦描き沈線、裾端部に1条の凹線を施す。透し孔は4方向。	
280	高杯A 1	(B-10) 下層	口径 26.7 器高(19.1)	体部は内外面とも篦磨きの痕跡が残るが、口縁部の調整は内外面とも不明。脚部外面は縦方向の篦磨き、内面は調整不明。	
281	高杯D	(B-9～11) 下層	口径(16.7)	体部は内外面とも篦磨きの痕跡が残る。脚部は外面が縦方向の篦磨き。内面はナデ調整。口縁端部には1条の凹線を巡らす。脚部に透し孔が見られるが個数不明。	
282	脚部 (高杯)	(B-4) 下層	底径 16.4	体部に横方向の篦磨きの痕跡が残る以外、外面の調整は不明。脚柱部内面に絞り痕が残る。脚柱部が裾部へ移行する内面には粘土紐の接合痕が残る。円板充填法。裾端部には3条の凹線文が巡る。	
283	器台A	(B-9) 下層	口径 22.0	外面は縦方向、内面は横方向の篦磨きの痕跡が残る。口縁端面には3条の凹線文を施した後、2個1組の竹管円形浮文を20方向から貼り付ける。口縁端部内面にも8本単位の櫛描波状文を施す。	
284	器台B	(C-10・11) 下層	口径 17.6	外面は縦方向の篦磨き。内面の調整は不明。口縁端面には2条の凹線文を施す。	
285	器台C	(B・C-9畦) 下層	口径 14.8	外面は縦方向の篦磨き。内面の調整は不明。口縁端面には竹管文を刺突する。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
286	脚部 （器台）	（C-11～14畦畔） 下層		内面はナデ、外面の調整は不明。透し孔は6方向。	
287	脚部 （高杯）	（C-10）下層		外面は縦方向の篦磨き。脚柱部内面は絞り痕が残り、裾部内面は横方向のナデ調整。脚上端に8条の篦描き沈線と、その下位に篦の刺突による列点文を施す。	
288	鉢C 1	（確認T－5） 下層	口径 11.4 底径　1.9 器高　5.2	内外面とも調整不明。	
289	鉢C 2	（B・C－9） 下層	口径 16.0 底径　3.4 器高　6.6	内面は縦方向の篦磨き、外面はナデか篦磨きの痕跡が残る。底部周囲外面には板状工具によるナデが残る。	
290	鉢E	（B－9）下層	口径(29.8)	外面は縦方向の篦磨き、内面も篦磨きか。口縁部外面には1条の沈線を施し、その上位に鋸歯文を飾る。口縁端部に刻み目を施す	
291	鉢A 3	（B－1）下層	口径 14.2	内外面とも調整不明。	
292	鉢A 3	下層	口径 20.6	体部外面は横方向の篦磨き、内面も篦磨きか。口縁部内面は横方向の篦磨き。	体部から口縁部にかけて黒斑
293	鉢A 3	（C-10）下層	口径 22.0	内外面とも調整不明だが、内面は篦磨きか。	
294	鉢A 2	下層	口径 18.6 底径　3.6 器高　8.2	内外面とも調整不明。	
295	鉢A 2	（C－9・10間畦畔）下層	口径 28.6	口縁部外面は縦方向の、口縁部内面は横方向の篦磨き。体部外面には横方向の篦磨きの痕跡が残る。体部内面はナデ調整。	
296	鉢A 2	（B－9）下層	口径 27.8	内外面とも調整不明。	
297	鉢A 2	（確認D-17） 下層	口径 32.0	内外面とも調整不明。	
298	鉢A 1	（C-10）下層	口径　8.5	内外面ともナデ調整で、外面は縦方向のナデ調整。	
299	鉢B 1	（B-10）上層 第2層	口径　7.0 底径　4.3 器高　4.1	底面はナデ調整。体部は内外面とも調整不明。体部は指押さえと思われる凹凸が残る。	体部外面に黒斑
300	ミニチュア	（A-10）下層		手づくね土器。	
301	ミニチュア	（C-10）下層	腹径　4.7 底径　1.6	手づくね土器。	外面ほぼ全体に黒斑
302	ミニチュア	（A－9）上層	腹径　5.1 底径　2.8	内外面ともナデ調整。底部周囲外面指ナデ痕。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
303	ミニチュア鉢	(B－9) 上層	口径　4.7 器高　3.6	鉢形を呈する手づくね土器。	
304	ミニチュア壷	(B－8) 下層	腹径　6.7 底径　2.0	内外面ともナデ調整。	
305	ミニチュア	(Ⅲ区) 上層	底径　3.4	手づくね土器。	
306	ミニチュア壷	(D－5)	腹径　8.4	内外面ともナデ調整。	底部に黒斑
307	ミニチュア	(B－8) 上層	腹径　7.5	体部外面はナデ、内面は指押さえ後にナデ調整。	
308	壷Ⅰ4	(B－4) 上層	口径 14.6	内外面とも調整不明。	
309	壷Ⅰ4	(C－9) 上層	口径 13.4 腹径 17.8	内外面とも調整不明。	
310	壷Ⅰ4	(C－9) 上層	口径 14.1	内外面とも調整不明。	
311	壷G3	(B－4) 上層	口径 13.4	内外面とも調整不明。	
312	壷G3	(C-10) 上層	口径 10.3	内外面とも調整不明。	
313	壷G3	(C-10) 上層	口径 17.4	内外面とも調整不明だが、頸部外面は篦磨きか。	
314	壷A2	(B－7) 上層	口径 15.8	内外面とも調整不明。	
315	壷C1	(B－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 16.2	器表が剝離しており、調整ははっきりしないが、外面と口縁部内面は篦磨き、頸部内面は横方向の刷毛か。	
316	壷C1	(C－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 20.6	内外面とも調整不明。	胎土に緑泥片岩を含む 四国系か
317	壷A6	(C-12) 上層 黒褐	口径 16.6	内外面とも調整不明。	頸部と口縁端部に黒斑
318	壷A2	(B-10) 上層	口径 19.8	口縁部は内外面とも刷毛後にヨコナデし、頸部は内面が刷毛後ナデ、外面は刷毛 (14本/1.4cm)。	
319	壷C1	(C－6) 上層 第2層 暗青灰	口径 14.0	外面は口縁部がヨコナデ、頸部が縦方向の刷毛後、同方向の篦磨き、内面は口縁部が横方向の刷毛後同方向の篦磨き、頸部が横方向の刷毛 (8本/1cm) 調整。	
320	壷A2	(B－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 16.2	内外面とも器表が剝離し、調整不明。口縁端面に竹管文の痕跡が残る。	
321	壷A3	(B－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 11.4	外面は頸部に縦方向の篦磨き痕跡が残り、口縁部はヨコナデ調整。内面は口縁部が横方向の篦磨き、頸部がナデ調整。	頸部に黒斑あり

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
322	壺Ａ４	（C−10）上層 黒灰の下	口径 19.6	内外面とも器表剝離のため調整不明。口縁端面には３条の凹線文を施す。	
323	壺	（C−10）上層 黒灰の下	口径 17.2	内外面とも器表剝離のため調整不明。口縁端面には３条の凹線文を施す。	
324	壺A3	（Ｃ−９・10間畦畔）上層	口径 17.0	内外面とも器表剝離のため調整不明。口縁端面には下端に１条の凹線文を施した後、２個１組の竹管円形浮文を貼り付ける。	
325	壺Ａ３	（C−11）上層 黒褐	口径 25.0	内外面とも器表剝離のため調整不明。口縁端面には下半に２条の凹線文を施した後、上半に竹管円形浮文を貼り付ける。	
326	壺	（C−11）上層	口径 27.8	内外面とも調整不明。口縁端面に２個１組の竹管円形浮文を貼り付け、口唇部にも刻み目を施す。	
327	壺	（A−12）上層 黒褐	口径 24.6	口縁部内面には篦磨きの痕跡が残り、外面は刷毛後に篦磨きか。口縁端面には２個１組の円形浮文。	
328	壺Ａ３？	（B−10）上層 黒褐	口径 27.6	内外面とも調整不明。口縁端面には２個１組の竹管円形浮文を貼り付ける。	河内産？
329	壺Ａ３	（B−９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 13.6	内面は篦磨きか。外面は不明。	
330	壺Ａ３	（Ｃ10・11間畦畔）上層 黒灰　黒灰の下	口径 16.4	内外面とも器表剝離し、調整不明。口縁端面には上下端に凹線文を施し、その間を鋸歯文で加飾する。	
331	壺Ｃ３	（C−８）上層 黒灰	口径 19.6	内外面とも調整不明。口縁端面には２条の凹線文を施す。	
332	壺Ｃ３	（C−10・11間畦畔）上層 暗灰	口径 20.8	外面は縦方向の篦磨き、内面は横方向の篦磨き。口縁端面には２条の凹線文を施す。	
333	壺	（B−９他）上層 暗灰褐Ⅱ	口径 26.0	調整は不明。口縁端面の上下端にそれぞれ１条の凹線文を施し、その間に綾杉状の篦刺突文を施した後、５個１組の竹管文を施す。	
334	壺Ａ３？	（C−10）上層 暗灰褐、黒褐	口径 30.0	調整不明。口縁端面には３条の凹線文を施し、その上から２個１組の竹管円形浮文を貼り付ける。口縁端部内面にも篦で刺突した列点文を施す。	
335	壺Ａ３	（B−12）上層	口径 16.2	調整不明。	
336	壺Ｄ１	（C−10）上層 暗灰褐 黒褐上面	口径 18.0	内外面とも調整不明。	
337	壺Ｄ１	（C−10）上層 黒灰	口径 23.8	内外面とも調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
338	壺Ｄ１	（B－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 18.0	内外面とも調整不明。	
340	壺Ｄ１	（B－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 19.3	外面は口頸部ともヨコナデ調整。口縁部内面もヨコナデ調整。頸部外面にはヨコナデ以前に、刷毛を使用した文様を施す。	
341	壺Ｄ１	（B－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 19.0	内外面とも調整不明。口縁端面には２条の凹線文を施す。	
342	壺Ｄ１	（C-12）上層 黒褐	口径 22.4	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部は外面が縦方向の刷毛、内面がナデ調整。口縁端面には２条の凹線を施す。	
343	壺Ｄ１	（B－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 21.0	内外面ともヨコナデ調整。口縁端面には３条の凹線文を施す。	
344	壺Ｄ１	（B－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 22.4	頸部内面に横方向の刷毛目が残る以外、調整不明。口縁端面には２条の凹線を施す。	胎土にクサリ礫と結晶片岩を含む
345	壺Ｄ２	（B・C-9）上層 黒灰	口径 21.4	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部は外面が縦方向の、内面が横方向の篦磨き。口縁端面には２条の凹線を施す。	
346	壺Ｄ３	（C・B－９）	口径 21.8	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部外面は縦方向の刷毛後に、縦方向の篦磨き。内面の調整は不明。	
347	壺Ｆ１	（C－９）上層 黒灰	口径 20.7	外面篦磨きか。内面の調整は不明。口縁の屈曲部外面に、篦による刻み目を施す。	
348	壺Ｆ１	（B-10）上層 暗灰茶褐Ⅱ	頸部径 14.0	内外面とも調整不明。体部と頸部の境に篦による刻み目を施した凸帯を貼り付け、口縁の屈曲部外面にも篦による刻み目を施す。	
349	甕Ｈ２	（C－９）上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 23.4	内面はヨコナデ、外面は調整不明。	
350	甕Ｈ２	（B－８）上層 第３層	口径 24.8	内外面とも器表剥離し、調整不明。	
351	壺Ｆ３	（B－８）上層 黒灰の下	口径 25.0	器表剥離のため調整不明。口縁部外面の上半に３条の凹線文を施し、下半には鋸歯文を施した後、２個１組の竹管円形浮文を貼り付ける。	胎土に砂粒含む
352	壺Ｆ３	（B-12）上層 黒褐		器表剥離のため調整不明。口縁部外面は鋸歯文を施した後、「Ｓ」字状浮文で加飾する。	
353	壺Ｄ２	（B－５）上層 黒灰の下 第１層　暗茶褐	口径 17.8	内外面とも調整不明。	
354	壺Ｄ２	（B-11）	口径 21.4 腹径 30.6 器高 33.4	体部は器壁が薄く、外面は縦方向の細かい刷毛（17本/1.8cm）調整。内面は剥離のため調整不明。口頸部は器壁が厚く、内外面とも篦状工具によるヨコナデ。	胎土にクサリ礫と少量の結晶片岩含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
355	壷D 4	(C－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 13.6	口縁部内外面と頸部内面はヨコナデ。	
356	壷D 4	(B－7) 上層 第4層	口径 16.6	内外面とも調整不明。	
357	壷	(C・D-11) 砂混じり黒灰		体部外面はナデ調整するが、頸部付近はヨコナデ調整。体部内面は下半が板状工具によるナデ、上半も板状工具によるナデか。	
358	壷H	(B－7) 上層 黒灰の下	口径 8.4	外面は縦方向の篦磨き、内面はナデ調整。口縁部外面に4条の凹線を施す。	
359	壷H	(B－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 8.2	頸部外面は縦方向の篦磨き。内面はヨコナデ調整。口縁部外面に8条の凹線文を施し、その下に半截竹管による刺突文を施す。	
360	壷G 5	(C－9・10)上層 暗灰	口径 9.7	内外面とも調整不明。	
361	壷A 6	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 12.2	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫、砂粒
362	壷D 2	(B・C－9間)	口径 11.2	内外面ともヨコナデ調整。	
363	壷Ⅰ 3	(B・C－9間)	口径 15.4	内外面とも調整不明。口頸部外面には9条の凹線文を施す。頸部と体部の境に篦刺突による列点文を施す	
364	壷Ⅰ 3	(確認T－5) 上層	口径 15.6	内外面とも調整不明。体部と頸部の境には篦の刺突による列点文が施される。	
365	壷Ⅰ 5	(C－9・10間畦畔) 上層 黒灰	口径 12.0	内外面とも調整不明。	
366	壷Ⅰ 5	(B－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 18.4	剝離のため調整不明。	
367	壷Ⅰ 6	(C-10) 上層 黒灰の下 暗灰	口径 19.8	頸部は外面が縦方向の刷毛、内面は横方向の刷毛(8本/1.7cm) 調整。口縁部は刷毛調整後にヨコナデする。体部外面は叩き目が残り、内面はナデ調整。	胎土にクサリ礫を含む
368	壷Ⅰ 6	(B・C-9間畦畔) 暗灰	口径 24.8	頸部外面は縦方向の刷毛、内面は横方向の刷毛が残り、口縁部は内外面とも刷毛後にヨコナデする。	胎土にクサリ礫含む
369	甕Ⅰ	(C－9・10間畦畔) 上層 暗灰	口径 12.2	体部外面には粗い叩き目が残り、口頸部内面には指押さえが残る。	胎土にクサリ礫含む
370	壷G 5	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 9.9	口縁端部は内外面ともヨコナデ調整し、頸部は内外面とも縦方向の篦磨き。体部は外面に横方向の篦磨きが残り、内面は横方向のナデ調整。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
371	壺G 5	(C・D-10畦畔) 上層 黒灰	口径 11.8 腹径 14.1 器高 17.4	体部外面は下半が縦方向の篦削り後にナデ、中位は叩き後にナデ、上半はナデか。体部内面は上半が指押さえ、中位は刷毛、下半はナデ調整。頸部内面は横方向の篦磨き。他は不明。	
372	壺G 4	(C・D-10畦畔) 暗灰	口径 13.6 腹径 18.2 器高 20.6	体部は外面を細かい刷毛調整した後、上半を縦方向に篦磨きし、下半はナデ調整する。内面は底部付近が指押さえ、下半がナデ、中位が指押さえ、上半が縦方向の指ナデ調整。口頸部は外面に篦磨きの痕跡が残る。	
373	小形 丸底壺 B	(C-8) 上層 黒灰	口径 10.2 腹径 7.8 器高 7.1	口縁部の内外面に横方向の篦磨きの痕跡が残る以外、調整不明。	
374	小形 丸底壺	(C-9) 上層 黒灰	腹径 7.8	体部は内外面ともナデか。	
375	底部 (壺)	(C-7) 上層 黒灰	底径 3.2	底部は体部成形後に粘土紐を貼り付け、内面から工具で押さえ込んでいる。体部は外面が叩き後にナデ、内面は板状工具によるナデか。	
376	甕E 2	(C-9) 上層 黒灰	口径 15.0	体部外面は叩き後にナデ、内面はナデ。口縁部内外面ともヨコナデか。	
377	甕D 2	(C-9) 上層 黒灰	口径 15.6	体部外面に右上がりの叩き (6条/2.5cm) が残る以外、調整不明。	
378	甕E 2	(B-7) 上層 第3層	口径 13.4	体部は外面が右上がりの叩き (7条/2.4cm)、内面はナデ調整。口縁部は外面が叩き後にナデ、内面はナデ。	
379	甕E 1	(B-4) 上層 黒灰	口径 12.6	体部は外面が右上がりの比較的細かな叩き (4条/cm)、内面は篦削りか。口縁部は内外面ともヨコナデ。	
380	甕E 1	(C-9) 上層 黒灰	口径 15.8	体部外面は右上がりの叩き (2.5条/cm)、他は調整不明。	胎土にクサリ礫・結晶片岩含む
381	甕E 1	(B-9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 14.0	体部外面は叩き後にナデ、体部と口縁部の境の外面には指押さえ痕が残る。	
382	甕E 1	(B-7) 上層 黒灰の下	口径 13.3	内外面とも調整不明。	
383	甕E 1	(C-9・10畦畔) 上層　暗灰	口径 14.9	体部外面は右上がりの叩き後にナデ。内面はナデ。口縁部外面には指押さえ痕が残る。	胎土にクサリ礫含む
384	甕E 1	(B-8) 上層 黒灰の下	口径 14.6	体部は肩部外面がナデ、以下は右上がりの叩き(2条/cm)。他は調整不明。	
385	甕C 1	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 21.0	内外面とも調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
386	甕E 2	(F－6)	口径 13.6 腹径 19.8	体部外面は右上がりの叩き（5条/2㎝)。口縁部は内外面ともヨコナデ。	
387	甕E 2	(C-10) 上層 黒灰	口径 18.6 腹径 24.6	体部外面は粗い叩き（7条/3㎝)、他は調整不明。	胎土にクサリ礫を含む
388	甕E 2	(B－8) 上層 黒灰の下 暗灰茶褐Ⅱ	口径 17.1	体部は外面が叩き後にナデ、内面が板状工具によるナデ。口縁部は内面ヨコナデ、外面は刷毛後にヨコナデ。	
389	甕E 2	(B-12) 上層 黒褐	口径 16.8	体部外面は板状工具によるナデ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデし、外面には指押さえが残る。	胎土にクサリ礫を含む
390	甕B 1	(B－5) 上層 黒灰の下	口径 16.6	口縁部は外面がヨコナデ、内面は横方向の刷毛調整（9本/㎝)。体部は縦方向の板状工具によるナデ、内面は縦方向の指ナデ。	
391	甕A 2	(B－9) 上層 黒灰の下 暗灰茶褐Ⅱ	口径 23.2	体部は外面が叩き後に縦方向の刷毛（14本/1.6㎝)、内面が横方向の刷毛調整。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。口縁端部には3条の凹線文を施す。	
392	甕F 1	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 18.4	内外面とも調整不明。	
393	甕B 1	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 18.0	体部外面に右上がりの叩き（3条/㎝）を残す以外、調整不明。	
394	甕E 3	(C－9) 暗灰茶褐Ⅱ	口径 13.6	体部外面には横方向の刷毛目（8本/㎝）が残るが、ナデ調整か。内面の調整は不明。	胎土にクサリ礫を含む
395	甕D 1	(D・E-11) 上層 黒灰の下	口径 19.8	外面は体部に叩き（6条/2.9㎝）を施した後、口縁部から肩部まで縦方向の刷毛（12本/1.5㎝)。内面は体部がナデ、口縁部は横方向の刷毛調整。	胎土にクサリ礫含む
396	甕E 2	(B－8) 上層 第3・4層	口径 20.8 器高(27.0)	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面が叩き後に刷毛調整。体部下半から底部にかけては叩き後に板状工具によるナデ。内面は刷毛調整。	胎土に微細な雲母を含 四国系？
397	甕G 1	(B－9～11)	口径 10.8	体部は外面が細かい刷毛（19本/1.7㎝)、肩部内面は指押さえ、中位内面は横方向の篦削りか。口縁部は内外面ヨコナデ。	胎土にクサリ礫含む
398	甕G 1	(B－7)	口径 17.4	口縁部は内外面ともヨコナデ調整。体部は外面ナデ、内面指押さえの後、ナデ調整。	四国系
399	甕G 1	(B－8) 上層 第3・4層 黒灰の下	口径 14.1	体部外面は細かい刷毛（11本/1.3㎝）調整。内面は指押さえ後、ナデ調整。口縁部は内外面ともヨコナデ。篦状工具によるヨコナデ。	四国系
400	甕G 1	(B－8) 上層 黒灰の下	口径 13.8	体部外面には刷毛目が残り、内面には指押さえ痕が残る。口縁部は内外面ともヨコナデ。	四国系

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
401	甕G 1	(C－9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 14.4 腹径 21.0	体部外面は縦方向の細かい刷毛 (15本/2.1cm)。口縁部外面はヨコナデ、内面の調整は不明。	四国系
402	甕G 1	(B－8) 上層 第3層	口径 13.0	体部外面は刷毛 (8本/cm)、内面は指押さえの後ナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	四国系
403	甕G 1	(C－8) 上層 黒灰	口径 15.0	体部外面には細かい刷毛が残り、内面には指押さえ痕が残る。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。	四国系
404	甕G 1	(C－8) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 14.5	体部外面には刷毛目 (7本/cm) が残り、内面には指押さえの痕跡が残る。口縁部外面は内外面ともヨコナデ調整。	四国系
405	甕G 1	(確認T－6) 上層	口径 13.7	体部外面は細かい刷毛 (10本/1.2cm)、内面は肩部が指押さえ、下半はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデする。	四国系
406	甕G 1	(C－9・10畦畔) 上層　暗灰	口径 15.1	体部内面の下半に篦削り、肩部内面に指押さえの痕跡が残る。	胎土にクサリ礫 四国系
407	甕G 1	(B－9) 上層 黒灰	口径 16.5	体部外面には細かい刷毛目 (12本/cm) が残り、内面は指押さえ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。	四国系
408	甕G 1	(C-10) 上層 黒灰の下	口径 13.8	体部外面に細かい刷毛目が残り、内面には指押さえの痕跡。	四国系
409	甕G 1	(B－9) 上層 黒灰	口径 15.6	内外面とも調整不明。	四国系
410	甕G 1	(確認T－3) 上層　黒灰	口径 16.4	体部外面に刷毛目が残り、内面に指押さえの痕跡が残る。	四国系
411	甕H 1	(C－9・10畦畔) 上層　暗灰	口径 14.8	内外面とも調整不明。口縁部外面には櫛描直線文の痕跡。	酒津系
412	甕H 1	(B・C－9畦畔) 上層　暗灰	口径 16.6	口縁部は内外面ともヨコナデ。他は調整不明。口縁部外面には櫛描直線文の痕跡が残る。	酒津系
413	甕F 2	(B－9) 上層 黒灰	口径 11.4	体部は外面が細かい叩き (7条/2cm)、内面は粗い刷毛 (6本/1.2cm) 調整。口縁部は内外面ともヨコナデ。	
414	甕F 2	(B－9) 上層 黒灰	口径 15.8	体部外面は細かい叩き (5条/cm)。口縁部外面は細かい叩き後、ナデ。他は調整不明。	庄内系
415	甕F 2	(B－4) 上層 黒灰	口径 15.8	体部外面は細かい叩き (7条/cm)、内面は篦削り。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。	庄内系
416	甕F 3	(C－8) 上層 黒灰	口径 15.8	内外面とも調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
417	甕F 3	(C−9) 上層 暗灰茶褐Ⅱ	口径 15.8	体部外面は肩部が横方向、以下が縦方向の刷毛(11本/cm)、内面は肩部が横方向の篦削り、中位は横方向の篦削り後ナデ、下半がナデ調整。口縁部は内外面ともヨコナデ。	
418	甕J	(C−10) 上層 黒灰 黒褐	口径 23.6	体部は上半が右上がりの叩き（7条/2.8cm)、下半は叩き後ナデ。肩部外面も叩き後にナデか。口縁部内外面と体部内面は調整不明。	胎土に多量のクサリ礫
419	甕	(C−9) 上層 黒灰	口径 27.3	内外面とも調整不明。体部と口縁部の境に1条沈線状のものを施すが、詳細は不明。	胎土にクサリ礫含む
420	甕H 2	(確認T−6)	口径 28.5	内外面とも調整は不明。口縁部は擬口縁を作り、その上に外反する口縁を貼り付ける。	胎土にクサリ礫含む
421	鉢B 2	(B−8) 上層 第3層	口径 8.1 底径 2.9 器高 4.8	体部外面は叩き後にナデ、内面は板状工具によるナデ調整。底部外面に木の葉圧痕が残る。	
422	鉢C 4	(D−11)	口径 6.2 器高(4.2)	内外面とも調整不明。	底部に黒斑
423	鉢C 3	(B−10)	口径 10.2 器高(4.8)	調整不明。底部は丸底か？	
424	鉢C 2	(B−7) 上層 黒灰	口径 9.0 底径 2.3 器高 3.1	内外面とも調整不明。	
425	鉢C 2	(B−8) 上層 第3層	口径 10.9 底径 2.3 器高 4.3	内外面ともナデ調整。	
426	鉢C 2	(C−10) 上層 黒灰の下	口径 13.5 器高 5.5	内外面とも調整不明。	口縁部外面に黒斑
427	鉢C 2	(B−8) 上層 第4層 黒灰の下 暗灰茶褐Ⅱ	口径 14.7 底径 1.3 器高 5.8	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
428	鉢C 2	(C−9) 上層 黒灰	口径 12.3 器高 4.8	内外面とも調整不明。	
429	鉢C 3	(C−7) 上層 黒灰	口径 12.0 器高(4.5)	内外面とも磨滅しているが、ナデ調整か。	
430	鉢C 1	(Ⅸ区) 上層 暗灰 黒灰直下	口径 16.5 底径 2.0 器高 5.8	底部内面にナデの痕跡が残る以外、調整不明	
431	鉢B 1	(B−8) 上層 黒灰の下 暗灰茶褐Ⅱ	口径 13.6 器高 7.1	体部外面は右上がりの叩き（3条/cm）を施した後、ナデ調整し、底部周囲を篦削りして、底部を作り出している。内面は板状工具によるナデ。	底部から体部下半に黒斑

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
432	鉢	(B−7) 上層 黒灰の下	口径(21.0)	内外面とも調整不明。外面に円形浮文3個が、三角形を呈するように貼り付けられる。	胎土に雲母と角閃石含 河内産？
433	鉢D	(B−9) 上層 黒灰の下	口径 13.8	口縁は端部下の外面を板状工具でヨコナデし、内面もヨコナデ調整。体部内面は指押さえ。	
434	鉢A 4	(B−8) 上層 黒灰の下	口径 19.4	内面はナデ調整、外面の調整は不明。	胎土にクサリ礫を含む
435	鉢A 2	(B−12) 上層 黒褐	口径 23.8	内外面とも調整不明。	
436	鉢 (有孔)	(B−8) 上層 黒灰の下	口径 14.8 底径 3.0 器高 10.4	体部は外面に叩きの痕跡が残り、内面は板状工具によるナデ。底部はナデ調整。底部の穿孔は焼成前。	胎土にクサリ礫含む
437	底部 (有孔)	(B−7) 上層 第3層		調整不明。底部の穿孔は径約7㎜で、焼成前。	
438	器台D 1	(B−9) 上層 暗灰	口径 10.2	口縁部内面は横方向の篦磨き、体部内面も篦磨き。外面は僅かに篦磨きの痕跡が残る。口縁端部は工具によるヨコナデ。	胎土にクサリ礫含む
439	器台D 1	(B−7) 上層 黒灰	口径 9.8	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
440	器台E	(C−11) 上層 第3層下	底径 10.6	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
441	器台F	(E−15・16)上層 灰褐		内外面とも調整不明。底部に焼成後の穿孔が認められる。	
442	高杯C	(C−9) 上層 黒灰	口径 14.2	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫・砂粒
443	高杯C	(C−9) 上層 暗灰褐	口径 16.6	杯部、脚部とも外面は縦方向の篦磨き、内面の調整不明。	
444	高杯C	(D−11) 上層	口径 17.3	内外面とも調整不明。	
445	高杯B 2	(B−8) 上層	口径 12.8	体部外面に縦方向の刷毛が残る以外調整不明。	
446	高杯B 2	(B−2) 上層 灰	口径 15.7	内外面とも調整不明。体部外面に脚の剝離痕が残る。	内面にスス付着
447	高杯C		口径 14.7	口縁部外面は縦方向、内面は横方向の篦磨き。他は不明。	胎土にクサリ礫含む
448	高杯A 4	(C−10) 上層 黒灰の下	口径 14.8 底径 10.7 器高 10.7	内外面とも調整不明。脚部から体部まで成形し、口縁部を接合している。裾部の透し孔は4方向。	胎土にクサリ礫含む
449	高杯A 4	(確認T−6)	口径 16.0	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
450	高杯A 3	(B−8) 上層	口径 17.8	内外面とも調整不明。杯底部は円板充填法。	胎土にクサリ礫含む
451	高杯B 1	(C−9・10畦畔) 上層		口縁部内外面と体部内面は縦方向の篦磨き。体部外面にも篦磨きの痕跡が残る。	
452	高杯A 2	(C・D−10畦畔) 上層　黒灰	口径 21.8	外面に篦磨きの痕跡が残るが、内面の調整は不明。	胎土に多量のクサリ礫
453	高杯A 2	(C−9・10畦畔) 上層　暗灰	口径 22.0	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
454	高杯A 3	(C−9・10畦畔) 上層　黒灰	口径 23.8	口縁部外面は縦方向の篦磨きが残る以外、調整不明。	胎土にクサリ礫含む
455	高杯A 1	(C−9・10畦畔) 上層　暗灰	口径 28.6	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
456	高杯B 1	(C−12) 上層 黒褐	口径 22.2	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
527	壷I 2	(B−20〜25 トレンチ)	口径 13.0	内外面とも調整不明。口縁端部下に4条の凹線文を施す。	胎土にクサリ礫含む
528	壷A 2	(E−16) 遺構面上	口径 13.8	内外面とも調整不明。	胎土に雲母・角閃石 河内産
529	壷C 3	(E・F−21〜24) 上層遺構面上	口径 14.7	内外面とも調整不明。口縁端面には4条単位の櫛描波状文が施される。	
530	壷C 1		口径 19.6	口縁端部付近は内外面ともヨコナデ、他はナデ。口唇部に刻み目を施す。	
531	壷	(D・E−16)	口径 18.7	内外面とも調整不明。口縁端面には鋸歯文を施した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	
532	壷	(E・F−16) 灰	口径 23.0	内外面とも調整不明。口縁端面下端に1条の凹線文を施し、その上部に鋸歯文を施す。	
533	壷	(E・F−16)	口径 21.2	内外面とも調整不明。口縁端面に凹線1条と3個1組の竹管円形浮文を施す。	
534	壷	(Ⅶ区) 黒褐	口径 27.8	外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向の篦磨き。口縁端面に鋸歯文を施す。	胎土にクサリ礫含む
535	壷C 4		口径 19.5	外面は縦方向の篦磨き。内面の調整は不明。口縁端面には5条単位の櫛描波状文を施し、2個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	胎土に多量のクサリ礫
536	壷A 4	(E・F−21〜24) 上層遺構面上	口径 20.0	内外面とも調整不明。口縁端面に竹管円形浮文を施す。	胎土にクサリ礫含む
537	壷C 1	(Ⅶ区) 黒褐	口径 13.2	内外面とも調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
538	壺C 1	(E-15・16) 灰褐	口径 20.0	頸部外面は縦方向の篦磨き、口縁部外面はヨコナデ、内面は調整不明。	
539	壺D 1	(B-20～25 トレンチ)	口径 20.4	頸部上端に縦方向の刷毛が残る以外、調整不明。	胎土にクサリ礫含む
540	壺F 2	(確認D-30)	口径 17.8	内外面とも調整不明。	
541	壺F 2	(C-19) 黒灰	口径 18.8	内外面とも調整不明。	
542	壺F 2	(X区)	口径 20.7	内外面とも調整不明。	
543	壺F 2	(E・F-16) 黒褐	口径 21.0	内外面とも調整不明。口縁部外面には鋸歯文を施す。	
544	壺E 2	(E・F-16) 黒褐	口径 21.6	内外面とも調整不明。口縁部外面には3段に櫛描波状文を施し、上端に2個1組、下端に3個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。	胎土にクサリ礫含む
545	壺A 5	(B-5)	口径 9.8	口頸部外面はヨコナデ、他は調整不明。	
546	壺I 2	(確認T-2)	口径 15.5	内面は横方向の篦磨き、外面の調整は不明。	
547	壺I 5	(Ⅶ区)	口径 16.6	内外面とも調整不明。	
548	壺I 6	(C-19)	口径 20.6	口縁部外面は刷毛後ヨコナデ、内面は刷毛(11本/1.4cm)調整。体部外面にも刷毛の痕跡が残り、内面は板状工具によるナデ調整。	
549	小形 丸底壺C	(B・C-13)	口径 8.6 腹径 8.4	体部外面は横方向の篦磨き、内面はナデ調整。口縁部は内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
550	小形 丸底壺 C	(Ⅶ区) 黒褐	口径 12.0 腹径 10.0 器高(8.0)	口縁部は内外面ともヨコナデ、他は調整不明。	
551	小形 丸底壺 C		口径 12.7 腹径 9.6 器高(7.7)	内外面とも調整不明。	
552	小形 丸底壺 A	(E-14) 遺構面上	口径 11.7 腹径 8.1 器高 8.2	内外面とも調整不明。	外面の2ヵ所に黒斑
553	甕A 2	(E-16) 遺構面上	口径 16.3	内外面とも調整不明。口縁端面には2条の凹線を施す。	
554	甕E 1		口径 17.6	内外面とも調整不明。	
555	甕E 1	(確認T-2)	口径 12.0	体部外面に叩きの痕跡が残るが、調整不明。	
556	甕F 1	(E・F-17) 灰褐	口径 15.6	体部外面に刷毛の痕跡が残る以外、調整不明。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
557	甕D 1	(確認T－2) 暗褐	口径 22.0	内外面とも調整不明。口縁端面に刻み目を施す。	紀伊系？
558	甕G 1	(Ⅶ区) 黒褐	口径 14.6 腹径 12.0	体部外面は縦方向の細かい刷毛調整の痕跡が残り、内面は指押さえの後、ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整。	胎土にクサリ礫含む 四国系？
559	鉢C 2	(確認D-15)	口径 18.6 器高 7.0	体部内面は縦方向の篦磨き、口縁部内面もヨコナデ後に篦磨き。外面の調整は不明。	
560	高杯B 1	(Ⅳ区) 黒褐	口径 16.2	内外面とも調整不明。	
561	器台C	(Ⅳ・Ⅴ区) 暗茶褐	口径 18.7	内外面とも調整不明。口縁端面には3条の凹線を施す。	胎土にクサリ礫含む
562	脚部 (器台F)	(Ⅶ区) 黒褐	底径 15.4	内外面とも調整不明。脚柱部上端は円板充填法であるが、焼成後に下方から穿孔されている。裾端部上面に1条の凹線。	胎土にクサリ礫含む
563	底部 (壺)	(E-15・16) 灰褐	底径 2.8	内外面とも調整不明。	
564	底部	包含層	底径 2.8	体部外面中位はほぼ水平方向の叩き(2.5条/cm)、下半は叩き後に刷毛(5本/cm)調整。体部内面は刷毛調整後ナデか。	胎土に多量のクサリ礫
565	脚部 (高杯)	(E-14) 遺構面上	底径 9.9	脚柱部内面には絞り痕と粘土紐接合痕が残るが、内外面とも調整不明。	
566	脚部 (高杯)	(確認D-30)	底径 11.8	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
567	底部 (有孔)	(E・F-17) 黒褐	底径 4.2	内外面とも調整不明。底には5個の穿孔が認められる。	胎土にクサリ礫含む
568	底部 (有孔)	(C-18) 黒褐	底径 3.3	体部外面は右上がりの叩き(5条/2.1cm)。底部内面に工具のあたりが見られる以外、内面の調整は不明。底部の穿孔は4個。	

表10　古墳時代後期～平安時代前半の土器観察表

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
569	須恵器 杯蓋D 2	住居址7 床面上	口径 14.0 器高 4.7	天井部の回転篦削りは約3/4。天井部内面は仕上げナデが施され、他は回転ナデ。	
570	土師器 壺B	住居址7 床面上	口径 9.8 腹径 5.0 器高 7.7	体部内面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は調整不明。	
571	土師器 甕B	住居址7 床面上	口径 12.8 腹径 18.6 器高(21.0)	体部外面は縦方向の刷毛(12本/1.4cm)調整。体部内面はナデ調整し、口縁部は内外面ともヨコナデする。	黒斑有り

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
572	土師器 椀B	住居址7	口径 12.6 器高　5.1	内外面とも調整不明。	
573	土師器 椀A	住居址7 床面上	口径 12.0 器高　6.3	底部内面はナデ、口縁部と体部の内面はヨコナデ調整。底部内面には篦磨きの痕跡が残る。外面の調整は不明。	
574	土師器 高杯B	住居址7	口径 13.7	内外面とも調整不明。	
575	土師器 高杯B	住居址7 床面上	口径 14.2	内外面とも調整不明。	
576	土師器 高杯B	住居址7 床面上	口径 12.8 底径　9.8 器高 10.3	脚柱部内面に絞り痕と粘土紐接合痕を残すが、内外面とも調整不明。	
577	土師器 甑	住居址7 床面上	口径 27.6	把手は先端が上方に反り、上方から下方に貫通した切り込みが施される。把手は2方向。体部外面は縦方向の粗い刷毛（5本/cm）、内面は粗い刷毛後にナデ調整か。口縁部は内外面ヨコナデ、把手は篦削り後ナデ調整。	
578	土師器 脚部 （高杯）	住居址7	底径　9.5	脚柱部内面に絞り痕が残る以外、調整不明。	
579	土師器 脚部 （高杯）	住居址7	底径 10.0	脚柱部内面は横方向の篦削り。他は調整不明。脚柱部内面に絞り痕が残る。	
580	須恵器 杯蓋D 2	溝41	口径 12.8	天井部外面の約1/2に右回りの回転篦削りを施す。他は回転ナデ。	
581	土師器 高杯B	溝41	口径 20.8	口縁端部の内外面はヨコナデ、他は不明。	
582	土師器 高杯B	溝41	口径 16.4 底径 10.9 器高 12.1	内外面とも調整不明。	
583	土師器 甕	溝41 （C−4）	口径 15.0 腹径 18.0	体部外面は左上がりの刷毛（7本/2.1cm）、内面はナデ調整。口縁部内外面はヨコナデ調整。	
584	土師器 甕	溝41	口径 14.6	体部内面に指押さえ痕が残る以外、調整不明。	
585	須恵器 杯Ab1	溝47	口径 13.8	全体に磨滅しているが、体部は内外面とも回転ナデ、他は調整不明。	胎土に黒色粒含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
586	須恵器 甕A	溝47	口径 48.4	口縁端部は外側に肥厚して面を持ち、断面長方形となる。口頸部は内外面とも回転ナデし、体部は外面を平行叩き後に、不定方向のカキ目調整、内面には同心円状の当て具の痕跡をそのまま残す。口縁部外面には5条単位の櫛描波状文を施し、頸部外面には3条の凹線によって区画した後、区画内に6条単位の櫛描波状文を施す。	
600	須恵器 蓋B	旧河道 (確認T－8)	口径 14.5 器高 3.5	天井部は回転篦削り、天井部内面に仕上げナデ。	
601	須恵器 蓋A	旧河道 (確認T－6)	口径 18.0	天井部は回転篦削り後、ナデ調整し、内面全体に2方向の仕上げナデを施す。口縁部は内外面とも回転ナデ。	
602	須恵器 杯Aa1	旧河道 (確認T－8)	口径 11.5 底径 6.1 器高 4.4	底部外面は篦切り後ナデ、他は内外面とも回転ナデ。	
603	須恵器 杯Aa2	旧河道 (確認T－8)	口径 13.6 底径 10.2 器高 4.3	底部は回転篦削り、体部は内外面とも回転ナデ、底部内面は回転ナデ後、1方向に仕上げナデを施す。	
604	須恵器 杯Ab1	旧河道 (確認)	口径 13.2 底径 8.0 器高 3.9	底部外面は篦切り後にナデ調整、他は回転ナデ。底部内面に1方向の仕上げナデ。	
605	須恵器 横瓶	旧河道 (確認T－8)	口径 10.2 腹径 22.3 器高(23.0)	体部外面は叩き後にカキ目調整し、内面には同心円状の当て具の痕跡が残るが、その後に回転ナデを施す。口縁部は内外面とも回転ナデ。体部側面は粘土板で蓋をしている。	外面ほぼ全体に自然釉付着
606	須恵器 杯蓋D1	旧河道 青灰砂Ⅳ	口径 12.6 器高 5.2	全体を回転ナデした後、天井部外面の3/4に丁寧な右回転篦削りを施し、天井部内面に2方向の仕上げナデを施す。	胎土に黒色粒を含む
607	須恵器 杯蓋D2	旧河道 灰茶	口径 14.0	天井部外面は左回転篦削り、他は回転ナデ。	
608	須恵器 杯蓋D2	旧河道 灰茶	口径 16.4	内外面とも左回転ナデ。	
609	須恵器 杯身C2	旧河道 青灰砂 黒褐	口径 11.3 器高 5.1	全体を回転ナデした後、体部外面のほぼ全体を丁寧な左回転篦削りする。体部内面は回転ナデ後に2方向から仕上げナデを施す。	
610	須恵器 杯身C2	旧河道 (E-17)	口径 13.4 器高 5.2	全体を回転ナデした後、体部外面の約1/2を雑に右回転篦削りする。体部内面に1方向の仕上げナデを施すが、同心円文が残る。	
611	須恵器 杯身C2	旧河道 (D・E-13)灰茶	口径 11.2 器高 3.5	全体を回転ナデした後、体部外面の約1/2を雑に右回転篦削りする。体部内面に同心円文が残る。	
612	須恵器 瑕	旧河道 (E-12) 青灰Ⅱ	口径 12.3	口縁部と頸部の境の凸帯は鋭い。口縁部外面と頸部外面に櫛描波状文を施す。全体に回転ナデを施すが、ナデは左回りか。	外面の一部に器表の蒸発が見られる

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
613	須恵器 甕A	旧河道 灰茶	口径 21.6	口縁端部下と、口縁部と頸部の境に比較的鋭い凸帯を巡らし、頸部外面には櫛描波状文を施す。内外面とも左回転ナデ。	内面に自然釉を被る
614	土師器 皿	旧河道 (E・F-12) 砂礫Ⅳ	口径(8.4) 器高(2.3)	内外面とも調整不明。	
615	土師器 椀A	旧河道 (B-16) 青灰	口径　9.7 器高　4.3	内外面とも調整不明。	胎土にクサリ礫含む
616	土師器 椀B	旧河道 (B-17) 青灰	口径 11.6 器高　5.2	体部外面は横方向、底部外面は不定方向の篦磨き。内面は刷毛後にナデ調整し、底部中央から放射状に篦磨きする。	
617	土師器 椀A	旧河道 (B・C-16) 青灰砂Ⅲ	口径 11.8 器高　6.0	体部外面はナデ後に施したと思われる篦磨きの痕跡が残る。内面は横方向の刷毛後に、底部中央から放射状に篦磨きする。	胎土にクサリ礫含む
618	土師器 椀A	旧河道 (B-16) 青灰砂Ⅳ	口径 12.6 器高　5.6	外面は僅かに横方向の篦磨きの痕跡。口縁部と体部内面はヨコナデ後、横方向の篦磨き、底部内面は放射状の篦磨き。	胎土にクサリ礫を微量含む
619	土師器 高杯	旧河道 (B-16) 青灰砂Ⅴ	口径 20.6	内外面ともヨコナデ調整。	胎土にクサリ礫含む 椀類と胎土色調似る
620	土師器 脚部 (高杯)	旧河道 (E・F-13) 青灰砂	底径　8.4	内面はナデ調整するが、脚柱部内面は粘土紐接合痕が残る。外面は脚柱部が縦方向の篦削り後ナデ、裾部はヨコナデ調整。	
621	土師器 脚部 (高杯)	旧河道 (E-13) 青灰砂	底径　9.1	全体に磨滅が著しく調整は不明であるが、脚柱部内面は横方向の篦削り後ナデか。	
622	土師器 壺A	旧河道 (E-14) 灰茶	口径 16.8	頸部外面には凸帯状の稜を作り出している。内外面ともヨコナデ調整であるが、頸部の稜は上下を強くヨコナデすることによって作り出している。口縁端部も内外を強くヨコナデする。	胎土にクサリ礫含む
623	土師器 壺A	旧河道 (B・C-16) 青灰砂Ⅵ	口径 12.3	口頸部から肩部にかけてはヨコナデするが、体部と頸部、頸部と口縁部の境は強いナデのため、凹線状を呈する。体部外面は粗い刷毛（3本/cm）調整。内面は口縁部が粗い刷毛後ヨコナデ、体部が板状工具による横方向のナデ。	外面に黒斑あり。杯・高杯類と胎土・焼成が似る
624	土師器 甕A	旧河道 (D・E-13) 青灰Ⅲ	口径 15.2	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向の刷毛、内面はナデ。	黒斑あり
625	土師器 甕B	旧河道 (B-16) 青灰砂Ⅴ	口径 15.8	体部外面は縦方向の粗い刷毛（6本/2.5cm）、内面は横方向の粗い刷毛調整。口縁部は内外面とも粗い刷毛後、ヨコナデ。	外面にスス付着

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
626	土師器 皿	旧河道 （C−16） 濃灰褐及び礫	口径 15.2 底径 12.1 器高　2.5	口縁端部は内面を強くナデることによって、突出した形状を作り出している。底部外面は指押さえ後篦削りし、さらにナデ調整する。ただ縁辺は丁寧な調整を施すが、中央は粗く、指押さえ痕が残る。底部内面はナデ、底部縁辺から口縁部内外面はヨコナデ調整。口縁部内面の下半に斜放射文を1段施す。	
627	土師器 皿	旧河道 （C−17）	口径 14.9 底径 12.3 器高　2.5	口縁端部は内面を強くナデることによって、突出した形状を作り出している。底部外面は調整不明。底部内面はナデ、底部内面の縁辺から口縁部内外面はヨコナデ調整。口縁部内面の下半には斜放射文を1段施す。	
628	土師器 杯A	旧河道 （C・D−12） 黒灰、灰砂泥	口径 16.2 底径 13.2 器高　4.7	底部外面は篦削り後ナデ調整、口縁部は内外面ヨコナデか。口縁内面に斜放射文の痕跡が残る。	
629	土師器 杯B	旧河道 （C−16） 濃灰及礫	口径 17.0 底径 10.4 器高　4.6	口縁部外面は下半が篦削り、上半がヨコナデ、他は調整不明。	
630	土師器 高杯	旧河道 （C−17） 濃灰2−A		外面はヨコナデ後、9方向から篦削りして、面取りする。内面はナデ調整するが、粘土紐痕が残る。	
631	土師器 高杯	旧河道 （E−13）礫		外面は8方向から篦削りによって、面取りをする。内面はヨコナデ調整か。	
632	土師器 甕C	旧河道 （C・D−12） 黒灰　灰砂泥	口径 26.9	体部外面と口縁部内面は刷毛（13本/2.4cm）、口縁部外面はヨコナデ、体部内面は横方向のナデ。	胎土にクサリ礫含む
633	土師器 甕C	旧河道 （A−18）暗灰	口径 26.8	口縁部外面はヨコナデ、体部外面には縦方向の刷毛（8本/cm）が残る。	胎土に砂粒を多く含む
634	土師器 甕C	旧河道 （B−17）礫Ⅱ	腹径 33.8	体部の中位やや上の2ヵ所に把手が付く。体部外面は縦方向の刷毛（11本/1.8cm）、内面は横方向の刷毛、口縁部内面にも横方向の刷毛調整の痕跡が残る。口縁部外面は調整不明。	
635	土師器 甕A	旧河道 （B−18）濃灰Ⅱ	口径 17.3	体部外面は縦方向の刷毛（12本/1.6cm）、口縁部外面はヨコナデ調整。内面の調整は不明。	
636	土師器 甕B	旧河道 （Ⅱ区）礫	口径 27.5 腹径 12.6	口縁端部は面を持つが、強いヨコナデで、凹線を施した状態となっている。体部外面は縦方向の刷毛（12本/2.1cm）。体部内面はナデ調整。口縁部外面は刷毛後ヨコナデ、内面はヨコナデ。	
637	土師器 甕B	旧河道 （C−16）濃灰Ⅱ	口径 25.4	体部外面は粗い刷毛（6本/2.2cm）、内面はナデ。口縁部は内外とも刷毛後にヨコナデ調整。	
638	土師器 甕B	旧河道 （Ⅱ区）礫	口径 29.4 腹径 26.0	体部外面は縦方向の刷毛（16本/1.9cm）を施すが、底部周辺は横方向となる。内面は底部が指押さえ、中位が縦方向のナデ、上半が横ナデ調整。口縁部は外面が縦方向、内面が横方向の刷毛後ヨコナデ調整。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
639	土師器 甕B	旧河道 (C-16) 濃灰及び礫	口径 29.2	体部外面は縦方向の刷毛（8本/2.2cm)、内面はナデ調整。口縁部は外面がヨコナデ、内面が横方向の刷毛調整。	
640	土師器 甕B	旧河道 (D・E-13)	口径 26.0 腹径 25.0	体部外面は縦方向の刷毛（16本/2cm)、底部付近は横方向の刷毛。体部内面は横方向の刷毛。口縁部外面は刷毛後ヨコナデ、内面横方向の刷毛。	
643	須恵器 甑	旧河道 (Ⅱ区) 礫	口径 22.6	内外面とも回転ナデ、把手はナデ。	
644	須恵器 蓋C	旧河道 (B-17) 灰褐色	口径 13.7	天井部外面は回転篦削り、内面は口縁部まで回転ナデ。	外面に自然釉付着
645	須恵器 蓋C	旧河道 (E-13)青灰砂Ⅸ	口径 17.0 器高 4.1	天井部外面は左回転篦削り、天井部内面は回転ナデ後に仕上げナデ。他は回転ナデ。	
646	須恵器 蓋B	旧河道 (B-18) 青灰砂	口径 13.8	天井部の外面は回転篦削り、他は回転ナデ。	
647	須恵器 蓋A	旧河道 (C-17)	口径 15.7	内外面とも調整不明。	
648	須恵器 蓋A	旧河道 (B-18)濃灰以上	口径 18.0	頂部の篦削りは粗く、篦切り痕が残ったままである。他は回転ナデ。	
649	須恵器 蓋A	旧河道 (C・D-12)		頂部は回転篦削り、他は回転ナデ。つまみは篦削り後に貼り付ける。	
650	須恵器 蓋A	旧河道 (D-12) 青灰Ⅰ		頂部外面は回転篦削り、頂部内面は回転ナデ後、1方向の仕上げナデ、他は回転ナデ。	
651	須恵器 杯Ab2	旧河道 (C-15) 集石内	口径 12.4 底径 8.8 器高 2.9	底部外面は篦切り後、雑にナデ調整し、粘土紐接合痕が残る。口縁・体部の内外面は回転ナデ。	
652	須恵器 杯Ab2	旧河道 (B-17) 灰褐Ⅱ	口径 11.8 底径 8.0 器高 3.7	体部外面から内面全体は回転ナデ、底部外面は篦切り後、ナデ調整。	
653	須恵器 杯Ab2	旧河道 (C-17) 濃灰	口径 12.1 底径 6.8 器高 2.9	底部外面は篦切り後未調整。他は回転ナデ。	口縁部内面に漆付着
654	須恵器 杯Ab2	旧河道 (B-18) 濃灰Ⅱ	口径 12.2 底径 9.0 器高 3.7	底部外面は篦切り後丁寧にナデる。他は回転ナデ。	
655	須恵器 杯Aa2	旧河道 (D-11) 青灰Ⅱ、濃灰Ⅳ	口径 12.0 底径 9.1 器高 3.5	底部外面は篦切り後ナデ、底部内面は1方向に仕上げナデ。他は回転ナデ。器壁は厚い。	
656	須恵器 杯Ab1	旧河道 (C-17) 濃灰2-A	口径 13.2 底径 9.3 器高 3.9	底部外面は篦切り後ナデ、他は回転ナデ。	歪みが激しい

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
657	須恵器 杯Aa2	旧河道 (E-12) 灰茶	口径 11.7 底径 7.1 器高 3.7	底部外面篦切り後ナデているが、中央に篦切り痕を残す。底部内面に1方向の仕上げナデを施す。他は内外面とも回転ナデ。	
658	須恵器 杯Aa2	旧河道 (B-18) 濃灰2-A	口径 13.4 底径 9.3 器高 3.8	底部外面は篦切り後ナデ調整。他は回転ナデするが、底部内面はその後に1方向の仕上げナデ。器壁は厚い。	
659	須恵器 杯Aa2	旧河道 (C-16) 濃灰Ⅱ及び礫	口径 13.8 底径 11.0 器高 4.1	底部外面は篦切りするが、その後の調整は不明。体部外面から底部内面まで回転ナデ。	
660	須恵器 杯Aa1	旧河道 (C-17) 濃灰Ⅱ	口径 11.6 底径 5.8 器高 4.3	底部外面は篦切り後ナデ、他は回転ナデするが、底部内面はその後に1方向の仕上げナデ。	焼け歪む
661	須恵器 杯Aa1	旧河道 (C-17) 濃灰Ⅱ	口径 11.8 底径 7.0 器高 5.0	底部は篦切り後未調整。体部外面から底部内面は回転ナデであるが、底部内面には不定方向の仕上げナデ。	
662	須恵器 杯Aa3	旧河道 (C-16) 礫Ⅱ	口径 13.6 底径 7.2 器高 4.0	底部外面は篦切り後未調整。体部外面から底部内面まで回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデを施す。	
663	須恵器 杯Ab2	旧河道 (C-17) 灰褐及び濃灰	口径 12.7 底径 5.8 器高 4.1	底部外面は篦切り後未調整。口縁部外面から底部内面までは回転ナデ。	
664	須恵器 杯Bb	旧河道 (B-15)	口径 12.1 底径 8.0 器高 3.8	外面の調整は不明。内面は回転ナデし、底部内面に不定方向の仕上げナデを施す。	外面は焼成時に剥離
665	須恵器 杯Bb	旧河道 (B-18) 濃灰ⅡA	口径 11.7 底径 8.0 器高 4.0	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデする。底部内面は仕上げナデ。	
666	須恵器 杯Bb	旧河道 (B-16)	口径 13.2 底径 9.8 器高 4.4	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面までは回転ナデ。	
667	須恵器 杯Bb	旧河道 (D-12) 青灰Ⅰ	口径 14.1 底径 10.5 器高 4.3	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ。底部内面に仕上げナデ。	
668	須恵器 杯Bb	旧河道 (B・C-17) 濃灰Ⅱ	底径 10.2	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面は回転ナデ、底部内面に1方向の仕上げナデを施す。	
669	須恵器 杯Bb	旧河道 (E-14)	口径 14.6 底径 9.4 器高 3.7	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面までは回転ナデ。高台外側面を篦削りするが、不徹底に終わっている。	
670	須恵器 杯Ba	旧河道 (B-17) 礫Ⅱ	口径 13.9 底径 8.2 器高 4.7	体部下半を篦削りし、体部外面から底部内面までは回転ナデ。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
671	須恵器 杯Ba	旧河道 濃灰2	口径 16.0 底径 10.2 器高　4.6	体部下端を篦削りし、底部外面は篦切り後、ナデ調整。体部外面から底部内面までは回転ナデ。	
672	須恵器 杯Ba	旧河道 (D-11) 濃灰	口径 15.3 底径 10.9 器高　4.9	底部外面から体部下半までは回転篦削り後ナデ、体部から底部内面まで回転ナデ。ナデは左回り。	
673	須恵器 杯Ba	旧河道 (B-17)	口径 16.9	体部下半は篦削り、体部は内外面とも回転ナデ、底部内面はナデ。ナデは左回り。	
674	須恵器 杯Bb	旧河道 (C-17)	口径 16.0 底径 10.4 器高　5.9	底部外面は篦削り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ、底部内面は仕上げナデを施す。底部と体部の境は明瞭。	
675	須恵器 杯Bb	旧河道 (B-16) 濃灰及び暗褐	口径(15.0) 底径　7.5 器高　6.3	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面までは回転ナデ。	外面全体に灰被る
676	須恵器 壷	旧河道 (B-15) 暗褐	口径　9.9	内外面とも回転ナデ。頸部外面の下端に2条の沈線状のものが残る。	内面に自然釉付着
677	須恵器 壷or横瓶	旧河道 (B-17) 青灰Ⅰ濃灰Ⅱ	口径 13.0	内外面とも回転ナデ。	内面と外面の一部に自然釉付着
678	須恵器 壷C (短頸壷)	旧河道 (C-15)	口径 10.8	内外面とも回転ナデ。肩部に重焼きの痕跡。	外面に自然釉付着
679	須恵器 壷C (短頸壷)	旧河道 (C-17) 濃灰2-A	口径　7.4 腹径 12.0	体部外面上半から底部内面まで回転ナデ、体部下半は静止篦削り。	肩部外面に灰被る
680	須恵器 壷A (長頸壷)	旧河道 (Ⅱ区) 礫	腹径 19.0 底径 11.6	底部外面周囲から体部下半は回転篦削り後、回転ナデ。他は回転ナデするが、肩部の稜下は篦削りする。	肩部外面と底部内面に自然釉付着
681	須恵器 壷A (長頸壷)	旧河道 (B-18) 礫	腹径 12.3 底径　9.0	底部外面から体部下半は回転篦削り後、回転ナデ。内面は回転ナデ。体部と頸部の接合は2段構成。	肩部外面と底部内面に自然釉付着
682	須恵器 壷A	旧河道 (B-18) 濃灰Ⅰ下	腹径 12.6 底径　7.8	体部外面は肩部まで回転篦削り、肩部から底部内面まで回転ナデ。	
683	須恵器 壷B	旧河道 (C-17) 濃灰2-A	腹径 15.1 底径　8.9	体部は底部から肩部付近までの外面を回転篦削り、肩部から底部内面まで回転ナデ、底部外面はナデ調整。	底部内面に自然釉付着
684	須恵器 壷	旧河道 (B-18) 礫	底径 10.8	体部外面の下半は回転篦削り、内面は回転ナデ。	
685	須恵器 壷B	旧河道 (D-14) 青灰砂	腹径 18.4 底径 11.1	内面は全体を回転ナデするが、外面は自然釉が付着して、調整ははっきりしない。底部周囲の外面のみ回転篦削りか。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
686	須恵器 甕B	旧河道 （Ⅱ区）礫	口径 19.7	体部外面は平行叩き、口縁部は内外面とも回転ナデ、体部内面はナデ。	
687	須恵器 甕B	旧河道 （B-17）青灰砂Ⅰ	口径 21.4	体部外面は叩き後、カキ目調整。口縁部は内外面とも回転ナデ、体部内面はナデ。	
688	須恵器 横瓶	旧河道 （D-12）	口径 13.2	体部外面は平行叩き後、カキ目調整。口縁部から体部内面は回転ナデ。体部内面には同心円文が残る。	
745	土師器 椀B	（D-17） 包含層 遺構面上	口径 13.3	体部外面から口縁部内面までは篦磨き、体部内面は篦削り。	
746	土師器 椀A	（G-15） 包含層	口径 11.6	内外面とも調整不明。	
747	土師器 杯A	（A-33～36） 包含層	口径 16.3 器高（3.0）	底部外面は篦削り後ナデ、体部外面から底部内面の外端付近まではヨコナデ、底部内面はナデ。口縁部内面に斜放射の暗文が認められる。	
748	土師器 皿	（A-30～35） 黒褐	口径 22.4 器高 2.8	内外面とも調整不明。	
749	土師器 甕B		口径 25.0	外面は刷毛（8本/1.5cm）、内面は調整不明。	
750	須恵器 蓋C	（A-30～35）	口径 18.5	天井部外面は回転篦削り、他は回転ナデ。	
751	須恵器 蓋A1	調査区南端	口径 18.3	内外面とも調整不明。	
752	須恵器 杯C	（E-16） 遺構面上	口径 8.9 器高 4.4	体部外面はほぼ全体に回転篦削りし、受け部付近から底部内面までは回転ナデ。底部内面はその後に1方向から仕上げナデを施す。	
753	須恵器 杯Aa2	（A-30～35） 黒褐	口径 12.8 器高 4.8	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ。	口縁部に重焼きの痕跡
754	須恵器 杯Ab1		口径 12.1 底径 9.1 器高 4.2	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面までは回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデを施す。	
755	須恵器 杯Ab1		口径 12.9 底径 8.8 器高 3.9	底部外面は篦切り後にナデ、体部外面から、底部内面までは回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデを施す。	
756	須恵器 杯Ab1	調査区南端 包含層	口径 13.7 底径 9.3 器高 4.1	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデを施す。体部外面には回転ナデによる凹凸が顕著。	
757	須恵器 杯Ab1	調査区南端 包含層	口径 13.2 底径 8.8 器高 4.0	体部外面に回転ナデの痕跡が残る以外、調整不明。	体部外面に黒斑あり 焼成が甘い

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
758	須恵器 杯Ab1	調査区南端 包含層	口径 13.6 底径 10.1 器高　3.9	体部内外面の一部に回転ナデの痕跡が残る以外、調整不明。	体部外面に黒斑。全体に焼きが甘い
759	須恵器 杯Ab1	調査区南端 包含層	口径 13.5 底径　9.2 器高　3.8	底部外面は篦切り後ナデ、体部内外面は回転ナデ。底部内面は調整不明。	
760	須恵器 杯Ab1	(F-11) 包含層	口径 12.8 底径　9.2 器高　4.1	底部外面は篦切り後にナデ、体部外面から底部内面は回転ナデ。	
761	須恵器 杯Ab1		口径 13.8 底径　9.6 器高　3.8	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ。	
762	須恵器 杯Ab2	(A-33～36) 包含層	口径 13.7 底径　5.7 器高　3.3	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面まで回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデ。	内面全体と底部外面に漆付着
763	須恵器 杯Ab2	(D-9) 砂礫	口径 15.0 底径　9.7 器高　3.6	底部外面は篦切り後未調整。体部外面から底部内面まで回転ナデ。	内面にスス付着
764	須恵器 杯Ab2	(B-1) 砂礫	口径 13.2 底径　6.6 器高(3.8)	内面に回転ナデが残るが、外面の調整は不明。	
765	須恵器 杯Ab2	(B-4) 最上面	口径 13.4 底径　8.6 器高　3.3	内外面とも調整不明。	
766	須恵器 杯Ab2	(XⅦ区) 暗茶褐	口径 12.8 底径　7.6 器高　5.8	底部外面は篦切り後、周囲だけをナデ。体部外面から底部内面まで回転ナデ。	
767	須恵器 杯Bb2	(XⅥ・XⅦ区)	口径 12.6 底径　8.8 器高　4.1	体部外面から底部内面は回転ナデ、底部外面は篦切り後ナデ。	
768	須恵器 杯Bb2	(C～F-13～16)	口径 12.6 底径　8.0 器高　3.9	底部外面は篦切り後ナデ、体部下端は篦削り、体部外面から底部内面まで回転ナデ、底部内面はその後に仕上げナデを施す。	
770	須恵器 杯Bb3	(D・E-6)	口径 17.2 底径 10.9 器高　6.7	底部外面は篦切り後ナデ、体部外面から底部内面は回転ナデ。底部内面はその後に仕上げナデを施す。	
771	須恵器 皿	(A-30～35) 黒褐	口径 19.5 底径 14.7 器高　2.5	体部は内外面とも回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面は篦削りか。	
772	須恵器 甕	(A-33～36)	口径 26.6	口縁部は内外面とも回転ナデ、体部内面に同心円文が残る。	体部外面灰被る

表11　製塩土器観察表

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
496	製塩土器 D 1	(B-10)	口径 15.4	薄手の造りで、調整は不明。	外面赤変、胎土に石粒多い
497	製塩土器 D 2	(D-10)	口径 14.2	薄手の造りで、内面は横方向のナデ。外面はナデ。	胎土に石粒多く含む
498	製塩土器 D 1	(B-10)		内面は横方向のナデ、外面はナデ。	胎土に長石等の石粒多混じり込みか？
499	製塩土器 D 1	(B-9～C-9) 上層		口縁部は肥厚し、端部は尖り気味に丸い。薄手の造りで、外面はナデ、内面の調整は不明。	外面赤変、胎土にクサリ礫、長石等の石粒多
500	製塩土器 B	(B-9)	口径　9.3	薄手の造りで、内外面とも指押さえの凹凸が残る。	外面赤変、胎土にクサリ礫等の砂粒多い
501	製塩土器 A 1	(B-9～C-9) 下層	底径　5.2	台裾端部は面を持つ。底部外面は押さえ、他は調整不明。	外面赤変、胎土にクサリ礫等の砂粒多い
502	製塩土器 A 6	(A-18) 下層	底径　4.2	台の裾端部は面を持つ。外面は叩き後ナデ、内面はナデ。	胎土に砂粒多い
503	製塩土器 A 3	(C-8) 黒灰	底径　4.8	台裾端部は丸い。内外面とも調整不明。	外面赤変、胎土に砂粒多く含む
504	製塩土器 A 5		底径　2.2	体部は斜め上方に伸びる。外面は指押さえ。	外面赤変、胎土に砂粒
505	製塩土器 A 5	(C-8) 黒灰	底径　4.7	体部は斜め上方に伸び、底部内面に小穴が見られる。外面は指押さえ。	外面赤変、胎土に砂粒多く含む
506	製塩土器 A 4	(C-8) 黒灰	底径　4.0	体部は斜め上方に伸びる。外面は指押さえ、内面は調整不明。	外面赤変、胎土に砂粒多く含む
507	製塩土器 A 5	(C-8) 黒灰	底径　4.2	体部は外上方に伸びる。底部内面に板状工具の圧痕が残る。	外面赤変、胎土に砂粒多。こうらが付着
508	製塩土器 A 3	(Ⅶ区)	底径　4.6	体部は斜め上方に開き、底部内面が僅かに窪む。台部外面は指押さえ。他は調整不明。	外面赤変、胎土にクサリ礫等の砂粒多く含む
509	製塩土器 A 3	(B～C-9) 下層	底径　4.9	内外面とも調整不明。	台部内面から体部外面が赤変し、胎土クサリ礫等の砂粒多
510	製塩土器 A 4	(C-9～10) 黒灰	底径　4.0	台部外面は指押さえ。	胎土に長石等の石粒
511	製塩土器 A 3	(C-9～10) 黒灰	底径　4.8	底部内面は僅かに窪む。調整不明。	外面赤変し、胎土に砂粒多
512	製塩土器 A 4	(C-9～10) 黒灰	底径　5.8	底部内面は平らである。内外面とも調整不明。	内外面赤変し、胎土にクサリ礫等の砂粒多

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
513	製塩土器 A 4	(C－8) 黒灰色	底径　4.6	台部外面は指押さえ、他は調整不明。	胎土に砂粒多く含む
514	製塩土器 A 4	(C・D－5) 上層	底径　3.7	底部内面は僅かに窪む。体部下端から台部外面は指押さえ、台部内面はナデ。他は調整不明。	胎土に砂粒多く含む
515	製塩土器 A 4	(A－9) 上層		台部外面は指ナデ、他は調整不明。	外面赤変し、クサリ礫等の砂粒多く含む
516	製塩土器 A 2	(C－8) 黒灰	底径　4.6	台裾端部は丸い。調整不明。	外面赤変し、胎土に砂粒多。こうらが付着
517	製塩土器 A 2	(B－8) 第3層	底径　3.9	底部内面は窪む。台部外面は指ナデ、他は不明。	内外面赤変し、胎土に石粒、砂粒を多く含む
518	製塩土器 A 2	(A-18) 暗灰	底径　4.2	底部内面には小穴が見られる。台部外面は指ナデ、他は調整不明。	内外面とも赤変し、胎土に砂粒多く含む
519	製塩土器 A 2	(B・C－9) 下層	底径　5.6	底部内面は窪む。内外面調整不明。	内外面赤変し、胎土に砂粒多。こうら付着
520	製塩土器 A 2	(B－9) 暗灰茶褐	底径　5.4	底部内面には小穴が見られる。台部外面は指ナデ、他は調整不明。	内外面とも赤変し、胎土に砂粒多く含む。こうら付着
521	製塩土器 A 2	(C－8) 黒灰	底径　4.8	底部内面には小穴が見られる。台部外面は指ナデ、他は調整不明。	赤変し、胎土に砂粒多く含む
522	製塩土器 A 2		底径　4.7	底部内面には小穴が穿たれている。台部外面は指ナデ、他は調整不明。	内外面とも赤変し、胎土に砂粒多く含む
523	製塩土器 A 2	(B・C－9) 下層	底径　5.5	底部内面には小穴が穿たれている。台部外面は指ナデ、他は調整不明。	内外面とも赤変し、胎土に砂粒多く含む。こうら付着
524	製塩土器 A 2	(A－9) 上層	底径　5.0	底部内面は僅かに窪む。内外面指ナデ調整。	内外面赤変、胎土に砂粒多く含む
525	製塩土器 A 2		底径　4.0	底部内面には小穴が穿たれている。台部外面は指ナデ調整、他は不明。	内外面赤変、胎土に砂粒多く含む
526	製塩土器 A 2	(B－9) 暗灰茶褐	底径　4.1	底部内面は窪む。体部外面には叩き目が残り、台部外面と内面は指ナデ。	内外面赤変、胎土に砂粒多く含む
690	製塩土器 C 1	旧河道 (E-13) 青灰砂Ⅳ	口径　6.8 底径　4.2 器高　4.4	内面は指押さえ、外面は指ナデ。内面に粘土紐の接合痕残る。	胎土に砂粒多く含む
691	製塩土器 C 3	旧河道 (C-17) 灰茶	口径 10.8 底径　4.2 器高　5.4	内面に指押さえの痕跡が残る以外調整不明。	胎土に石粒・砂粒を多く含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
692	製塩土器 C 2	旧河道 (E・F-12) 青灰	口径 12.1 底径　5.3 器高　6.7	体部下半から底部外面は指押さえ後、雑な刷毛、口縁部外面はナデ後、刷毛調整。内面は底部周囲に刷毛状工具の圧痕が残り、体部から口縁部はヨコナデ調整。	外面の一部が赤変し、胎土に砂粒を多く含むが、他の製塩土器よりは少ない
693	製塩土器 C 4	旧河道 (B－17)	口径 12.3 底径　5.7 器高　4.2	底部と体部の境内面には板状工具の圧痕が見られ、口縁部は内外面とも横方向のナデ。	胎土にクサリ礫等の石粒を多く含む
694	製塩土器 C 4	旧河道 (B－17)	口径 11.9 底径　5.3 器高　5.0	内外面とも横方向のナデ。	胎土に石粒を多く含む
695	製塩土器 C 4	旧河道 (B－17)	口径 12.4 器高(3.9)	口縁部は内外面とも横方向のナデ。底部外面はナデ。	胎土に石粒を多く含む
696	製塩土器 E 1	(B－17)	口径(11.0)	厚手の造りで、内面は横方向のナデ、外面は不明。外面に粘土紐の接合痕が残る。	胎土に少量の石粒と多量の砂粒を含む
697	製塩土器 E 2	旧河道 (C-17)	口径 15.2 底径　9.0 器高　8.7	口縁端部は上方に突出した形状となる。内面は底部がナデ、口縁部が横方向のナデ、外面は底部がナデ、体部から口縁部にかけては横方向のナデ。	須恵質 胎土に石粒多く含み、外面はススける
698	製塩土器 D 2	旧河道 (C-17) 濃灰 2－A	口径 15.4	口縁端部は尖る。内面は横方向のナデ、外面は不明。	一部赤変し、胎土に石粒を多く含む
699	製塩土器 C 4	旧河道 (D・E－5)	口径(15.0)	口縁端部は短く外反する。内外面とも横方向のナデ。	胎土に石粒を多く含む
700	製塩土器 F 2	旧河道 (C-17) 灰茶	口径(13.0)	内彎する口縁部。端部は不整形で外側に突出する部分も見られるが、丸くなるものと思われる。内外面とも横方向のナデ。	胎土に石粒多く含む
701	製塩土器 I	旧河道 (B-18) 濃灰 2 黒褐	口径 13.2 器高 12.2	口縁端部は摘み上げられる。内外面とも指ナデ調整で、指押さえの底部外面には凹凸が残る。	胎土にクサリ礫等の石粒多く含む
702	製塩土器 G 1	旧河道 (B・C-17) 濃灰2・2－A	口径 13.6	内面は横方向のナデ、外面も指ナデしているが凹凸を残す。外面に粘土紐の接合痕が残る。	須恵質 胎土に長石等の石粒多く含む
703	製塩土器 G 1	旧河道 (C-17) 濃灰	口径 13.8	口縁部内面は横方向のナデ、以下は縦方向のナデ、外面はナデ。内外面に粘土紐の接合痕残す。	須恵質 胎土に長石等の石粒多く含む
704	製塩土器 H	旧河道 (B-17) 灰褐Ⅱ		外面はナデ調整。内面に布目圧痕が残る。	胎土は良い
705	製塩土器 H	旧河道 (A-18) 暗灰	口径 15.8	外面はナデ、内面には布目状の圧痕を残す。	胎土にチャート、長石等の石粒を少量含む
706	製塩土器 H	旧河道 (B-16) 集石内	口径 17.2	口縁部は内外面とも横方向のナデ、体部内面は縦方向のナデ。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
707	製塩土器 H	旧河道 （C−19）暗灰	口径 17.8	口縁端部は面を持つ。外面はナデ、内面は口縁部が横方向、体部が縦方向のナデ。比較的丁寧な造りである。	
708	製塩土器 F 1		口径(15.2)	厚手の造りで、内面は横方向のナデ、外面はナデ。外面に粘土紐の接合痕が残る。	須恵質 胎土に石粒を含む
709	製塩土器 F 1	旧河道	口径 14.0	口縁端部は面を持つ部分と、丸く終わる部分とがある。外面は横方向のナデ、内面は口縁部が横方向、以下が縦方向のナデ。	胎土に砂粒多く含む
710	製塩土器 F 1	旧河道 （B−17）暗灰	口径 14.0	外面から口縁部内面は横方向のナデ、体部内面は縦方向のナデ。	
711	製塩土器 F 2	旧河道 （C−17・B−18） 濃灰 2	口径 16.4	外面は横方向のナデ後に縦方向のナデ。内面は横方向のナデ。	須恵質 胎土に石粒を多く含む
712	製塩土器 F 2	旧河道	口径(16.8)	外面はナデ、口縁部内面は横方向のナデ、体部内面は縦方向のナデ。	口縁部の一部が内外面とも赤変し、胎土に石粒多く含む
713	製塩土器 F 2	旧河道 （B−17） 濃灰 2	口径 15.1 器高 18.2	底部は尖り気味に丸い。口縁部は内彎し、端部は尖り気味になるが丸い。調整は指押さえ後に、体部外面が縦方向の指ナデ、口縁部外面は横方向の指ナデ、内面は体部が縦方向の指ナデ、口縁部が横方向の指ナデ。	赤変し、一部ススける 胎土に石粒を多く含む
714	製塩土器 G 1	旧河道 （B・C−16）	口径 14.0	外面はナデ、内面は口縁部が横方向の指ナデ、体部が縦方向の指ナデ。外面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒はほとんど見られない
715	製塩土器 G 2	旧河道 （B−18） 暗灰褐	口径 18.0	口縁端部は内彎し、尖り気味に丸い。外面はナデ、内面は口縁部が横方向の指ナデ、以下は縦方向の指ナデ。	須恵質 胎土に砂粒等はほとんど含まない
716	製塩土器 G 2	旧河道 （B−18） 濃灰まで	口径 18.6	口縁端部は尖り気味に丸い。外面指押さえ後にナデ、口縁部内面は横方向のナデ、以下は縦方向のナデ。	内外面赤変し、胎土に石粒・砂粒多く含む
717	製塩土器 G 2	旧河道 （B−18） 濃灰まで	口径 17.4	外面は体部下半が指押さえ、上半から口縁部にかけては横方向のナデ、内面は口縁部が横方向のナデ、体部が縦方向のナデ、体部下半は指押さえ。外面に粘土紐の接合痕。	外面の一部赤変 外面に黒斑あり 胎土にスサ含み・石粒・砂粒は少ない
718	製塩土器 C 5	旧河道		薄手の造り。内外面とも調整不明。外面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒を含む
719	製塩土器 C 5	旧河道（C−17） 濃灰 2−A		薄手の造り。内面は横方向のナデ、内面は不明。	胎土に石粒多く含む
720	製塩土器	旧河道 （D・E−5）		内面は横方向のナデ、外面は不明。外面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒多く含む
721	製塩土器 D 2	旧河道 （B−17）濃灰 2		端部は不整形。内面は横方向のナデ、外面も横方向のナデ。	須恵質 胎土に石粒多く含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
722	製塩土器 C 4	旧河道 （B−17）青灰Ⅰ 濃灰 2		口縁端部は不整形で、内側に突出する部分と丸く納まる部分がある。内面は縦方向のナデ後、横方向のナデ。外面はナデ。	胎土に石粒多く含む
723	製塩土器 D	旧河道 （C−17） 濃灰 2 −A		口縁端部は尖り気味に丸い。口縁部内面は横方向、体部内面は縦方向のナデ、外面はナデ調整。外面に粘土紐の接合痕。	須恵質 胎土に石粒を多く含む
724	製塩土器 D 2	旧河道 （B−18） 濃灰 2 −A		口縁端部は内側に突出する。体部内面は縦方向の、口縁部内面は横方向のナデ。外面に粘土紐の接合痕が見られる。	外面の一部赤変 胎土に石粒を多く含む
725	製塩土器 D 2	旧河道（C−17） 濃灰 2 −A		薄手の造り。口縁端部は尖る。内面は横方向のナデ、外面はナデ。	外面赤変し、胎土に石粒を多く含む
726	製塩土器 C	旧河道 （E−7）		口縁端部は尖り気味に丸い。内面は横方向のナデ、外面もナデか。	胎土にチャート・クサリ礫等石粒多
727	製塩土器 C	旧河道（C−17） 濃灰 2 −A		薄手の造り。口縁端部は不整形。内面は横方向のナデ、外面はナデ。	須恵質 胎土に石粒多く含む
728	製塩土器 C	旧河道（C−17） 濃灰 2 −A		口縁部外面は横方向のナデ、体部外面に叩きの痕跡残る。内面はナデ。	胎土に石粒多く含む
729	製塩土器 C 4	旧河道（B−18） 濃灰 2 −A		内面は横方向のナデ、外面は調整不明。外面に粘土紐の接合痕。	二次焼成を受ける 胎土に石粒を多く含む
730	製塩土器 C 4	旧河道（C−17） 濃灰 2 −A		薄手の造り。内面は横方向のナデ、外面もナデ。外面に粘土紐の接合痕。	須恵質 胎土に石粒多く含む
731	製塩土器 C 4	旧河道 （D−17）		薄手の造り。内面は横方向のナデ、外面はナデ。内面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒多く含む 外面がススけている
732	製塩土器 C 4	旧河道 （B−17）濃灰 2		内面は横方向のナデ、外面はナデ。外面に粘土紐の接合痕。	外面一部赤変し、胎土に石粒多く含む
733	製塩土器 C 4	旧河道（C−17） 濃灰 2 −A		口縁端部は不整形で尖り気味となる。内面は横方向のナデ、外面は不明。	須恵質 胎土に石粒多く含む
734	製塩土器 D	旧河道 黒褐		口縁部内面は横方向のナデ、体部内面は縦方向のナデ、外面は指押さえ後、ナデ調整。外面に粘土紐の接合痕。	須恵質
735	製塩土器 Ⅰ	旧河道 （C−17）濃灰		体部内面から口縁部外面は横方向のナデ、体部外面はナデ。体部外面に粘土紐接合痕。	外面赤変 胎土に石粒を多く含む
736	製塩土器 Ⅰ	旧河道 （C−16）濃灰 2		内面から口縁部外面は横方向のナデ、体部外面はナデ。	須恵質 胎土に石粒多く含む
737	製塩土器	（D−10）		厚手の造り。内面は横方向のナデ、外面は不明。外面に粘土紐接合痕。	胎土に石粒等少ない
738	製塩土器 F	旧河道 （B−16）		厚手の造り。体部内面は縦、口縁部内面は横方向のナデ、外面はナデ。外面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒等ほとんど含まない

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
739	製塩土器 F	旧河道 (E-15)		厚手の造り。体部内面は縦、口縁部内面は横方向のナデ、外面はナデ。外面に粘土紐の接合痕。	胎土に石粒等を多く含む
740	製塩土器 F	旧河道 (B-16) 暗褐、濃灰		厚手の造り。口縁部内面は横、体部内面は縦方向のナデ。外面は指押さえ後ナデ。外面に粘土紐接合痕。	胎土に石粒は見られない
741	製塩土器 F	旧河道 (C-16)		厚手の造り。口縁部内外面は横、体部内面は縦方向のナデ。	胎土にクサリ礫含む
742	製塩土器 C 4	旧河道 (B-18) 暗灰砂		内外面ともナデ。	胎土に石粒を多く含む
743	製塩土器 A 1	旧河道 (C-19) 黒灰		台部の内外面、底部内面は指ナデ。	胎土に砂粒を多く含む 底部内面にこうら付着
744	製塩土器 A 1	旧河道 (C-19) 黒灰		台部外面は指ナデ、台部内面はナデ	胎土に砂粒を多く含む 底部内面にこうら付着

平安時代末～室町時代の土器観察表

a）北地区出土遺物

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
773	土師器 椀	建物址 1 (P-129)	口径(13.5)	薄い造り。内外面ともロクロナデ。ロクロは左回転。	
774	土師器 椀 I B 1	建物址 1 (P-129)	底径　5.3	硬質で薄い造りの精製品。内外面ともにロクロナデ。底部内面に仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。	
775	土師器 底部	建物址 1 (P-117)	底径　6.0	内外面ともにロクロナデ。底部内面に仕上げナデか。底部外面は右回転糸切り。	
776	土師器 底部	建物址 1 (P-113)	底径(5.2)	硬質で薄い造りの精製品。内外面ともにロクロナデした後、外面は乱方向のナデを一部に施す。内面のロクロ目顕著。底部内面に仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。底部は粘土紐巻き上げ成形か。	
777	須恵器 底部	建物址 1 (P-104)	底径 12.4	内面底体部境に指押さえによる接合痕。体部内外面ともにロクロナデ。内外面にロクロ目顕著。底部は右回転糸切り。	
778	陶器 底部	建物址 1 (P-125)	底径(36.0)	外面は体部下端をロクロナデし、体部を板状工具による縦方向へのナデ。内面はロクロナデ。	常滑焼 窯壁付着
779	土師器 小皿 I C 1	建物址 4 (P-327)	口径　8.3 器高　1.3 底径(5.0)	薄い造り。底部内面に成形時の指押さえが残る。体部外面から底部内面周縁はロクロナデ。底部内面中央はナデ。底部は右回転糸切り。	
780	土師器 椀 I B 2	建物址 4 (P-272)	口径(11.8)	硬質で薄い造り。内外面ともにロクロナデし、体部下半は内外面ともに乱方向のナデ。底部は右回転糸切り。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
781	土師器 椀Ⅰ C 1	建物址 4 (P-254)	口径 13.4 器高　2.8 底径　6.5	硬質で薄い造りの精製品。内外面ともにロクロナデし、外面体部下半は水付けによる縦方向へのナデ。底部内面は仕上げナデ。中央を一方向にナデ、更に周囲を左回りに八角形状にナデている。底部は回転糸切りか？　ロクロは右回転。	砂粒含まず
782	土師器 椀	建物址 4 (P-311)	口径 13.0	硬質で薄い造りの精製品。内外面ともにロクロナデした後、体部外面に一部斜め方向のナデ。ロクロは右回転。	口縁部内外面炭素吸着
783	須恵器 椀A	建物址 4 (P-311)	口径 12.2 器高　3.4 底径　4.9	薄い造り。底部内面中央を指押さえし、底部内面周縁から体部外面までをロクロナデする。底部は左回転糸切りの後指押さえ。	外面は焼成時に炭素吸着
784	白磁 底部 (碗)	建物址 4 (P-250)	底径　6.2	底部は厚く、高台の削り出しは浅い。見込み部に沈線がある。内面と体部下半部まで施釉される。高台畳付は平滑。	
785	土師器 皿A 2	建物址 5 (P-180)	口径(12.4)	薄い造り。内外面ロクロナデ。後体部下半に内外面とも乱方向のナデ。内面にロクロ目が残る。ロクロは右回転。	
786	須恵器 小皿A	建物址 5 (P-419)	口径　7.9 器高　2.0 底径　4.3	内外面ともにロクロナデ。底部内面に仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。口縁部に重焼きの痕跡。	口縁部割れ口に炭素吸着
787	須恵器 底部	建物址 5 (P-419)	底径(5.8)	内外面ともにロクロナデ。底部内面に仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。	内外面焼成時のスス付着
788	須恵器 椀A	建物址 5 (P-419)	口径(12.7) 器高　3.2 底径(6.4)	内外面ともロクロナデ。底部内面に仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。	口縁部に重焼きの痕跡
789	瓦器 皿	建物址 5 (P-289)	口径(12.7) 器高　3.0 底径(6.4)	薄い造り。口縁部内外面ともにヨコナデ。体部内面ヨコナデ。底部内面に暗文。	内面・口縁部外面に炭素吸着
790	土師器 小壺	建物址 8 (P-289)	口径(12.7) 器高　6.5 腹径(10.0) 底径(7.2)	口頸部の境を強くロクロナデし、弱い稜を作り出す。内外面ロクロナデ。底部は静止糸切りか？	雲母及び少量の長石・石英を含む
791	須恵器 捏鉢A	建物址 8 (P-417)	口径(24.0)	内外面ロクロナデ。	
792	土師器 椀Ⅱ C 2	建物址 6 (P-275)	口径(12.8) 器高　3.0 底径(6.8)	精製。硬質。体部中位に稜を持つ。内外面ともロクロナデし、底部内面に仕上げナデ。内面に段(圏線状)を持つ。右回転糸切りの後、指押さえ。	
793	陶器 擂鉢	建物址 6 (P-275)	底径(16.2)	体部外面はロクロナデ。櫛状工具による6条の擂り目を持つ。	備前焼
794	陶器 擂鉢	建物址 7 (P-283)	口径(24.2)	片口部は指押さえによって成形。体部外面ロクロナデ。櫛状工具による6条の擂り目を持つ。	795と同一個体？
795	陶器 擂鉢	建物址 7 (P-283)	口径 24.2	(794) と同一の形態・調整。	備前焼

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
796	土師器 小皿Ⅰ B	P-243	口径　8.0 器高　1.0 底径　6.0	内外面はロクロナデ。底部右回転糸切り。	
797	土師器 椀Ⅰ C 1	P-243	口径(13.6)	精製。内外面はロクロナデ。ロクロは右回転。	
798	土師器 小皿Ⅰ A 2	P-249	口径　7.2 器高　1.2 底径　5.0	底部内面周縁から体部外面まではロクロナデし、底部内面に仕上げナデを施す。底部は右回転糸切り。板状工具による撫で付け痕残る。	
799	土師器 小皿Ⅰ A 2	P-195	口径(7.2) 器高　1.1 底径(5.0)	内外面ロクロナデ。底部内面中央は指押さえが残る。底部は右回転糸切り。板状工具による撫で付け痕残る。	
800	土師器 小皿Ⅰ A 2	P-306	器高(7.8) 器高　1.1 底径(5.2)	内外面はロクロナデ。底部内面中央は指押さえが残る。底部は右回転糸切り。	
801	土師器 皿B 2	P-170	口径(11.8) 器高　2.1 底径　6.6	精製で硬質の造り。内外面ロクロナデし、底部内面に仕上げナデを施す。体部内面のロクロ目顕著。底部は右回転糸切り。	
802	須恵器 底部	P-170	底径(5.9)	内外面ともロクロナデした後、底部内面に指ナデを施す。底部外面は左回転糸切り。	体部外面は炭素吸着
803	土師器 椀Ⅰ B 1	P-292	口径(11.5) 器高　3.1 底径(5.1)	内外面ロクロナデ。底部外面は回転糸切りの後、板状工具による調整（板目状圧痕）。焼成時に外面剥離。	
804	土師器 皿A	P-191	口径(10.6) 器高　2.6 底径 (4.0)	薄い造り。内外面はロクロナデ。ロクロは右回転。	
805	土師器 椀	P-301	口径(12.6)	薄い造り。内外面ともにロクロナデ。内面にロクロ目が残る。ロクロは右回転。	
806	土師器 椀Ⅰ B 2	P-247	口径(12.8) 器高　2.9 底径　6.2	薄い造り。堅緻。内外面ロクロナデした後、体部下半は水付けによるロクロナデ。体部上半から口縁部は強いロクロナデ。内面ロクロ目顕著。底部外面は糸切り。板目状圧痕が残る。	口縁部焼成時のスス付着
807	土師器 土堝A1	P-247	口径(20.8) 腹径(24.8)	口縁部は内外面ともロクロナデ、体部外面は右上がりの平行叩き。内面は横方向の板ナデ。	外面全体にスス付着
808	瓦器椀	P-247	底径(4.5)	底部内面に暗文。体部外面下端は指押さえ。	
809	須恵器 椀B	P-312	口径(12.8) 器高　2.7 底径(6.6)	内外面ロクロナデした後、底部内面に1方向のナデを施す。外面は右回転糸切りか。	口縁部に重焼き痕
810	須恵器椀	P-150	口径(11.7)	内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転。	重焼き痕

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
811	須恵器 捏鉢D	P-314	口径(25.2)	内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転か。	
812	須恵器 捏鉢D	P-164	口径(30.1)	内外面ロクロナデ。	
813	須恵器 捏鉢D	P-410	口径(33.0)	(812)と同様の形態・調整。	
814	須恵器 甕	P-226	口径(19.4)	内面と口縁部外面はロクロナデ。外面は体部から頸部に平行叩きを羽状に施した後、頸部はロクロナデ、体部は横方向の叩きを重ねる。	
815	施釉陶器 椀	P-245	口径(15.6) 器高　5.3 底径　6.4	内面及び体部外面上半に施釉、下半以下は露胎、内面見込み部にめどめの痕跡。内面から体部外面上半はロクロナデした後、体部下半から底部外面まで篦削りする。	
816	土師器 小皿Ⅰ A 3	土壙19	口径　7.7 器高　2.2 底径　4.5	内外面ロクロナデを施すが、底部内面に粘土紐巻き上げ（右回り）痕顕著。底部外面は右回転糸切り後、周縁をナデ。	
817	土師器 小皿Ⅰ A 3	土壙19	口径　7.6 器高　1.4 底径　4.7	底部内面周縁から体部外面までロクロナデ後、底部内面をナデ。底部は右回転糸切りの後、板状工具による調整（板目状圧痕）。	外面にスス付着
818	土師器 椀Ⅱ B 1	土壙19	口径(12.2) 器高　3.4 底径　5.6	内外面ロクロナデ。外面にロクロ目が残る。底部外面を回転糸切りの後、底部内面周縁は水付けのロクロナデ。	
819	土師器 椀Ⅱ C 1	土壙19	口径 12.6 器高　3.4 底径　5.6	堅緻な焼成。底部は粘土板によって成形する。内外面ロクロナデ。外面底体部境周辺に水付けのロクロナデ。底部内面に一方向のナデ(複数の指か)。底部外面は回転糸切り。	
820	土師器 椀Ⅰ B 1	土壙10	口径 11.7 器高　2.9 底径(4.8)	精製で堅緻な焼成。内外面ロクロナデした後、底部内面に仕上げナデを施す。底部外面は右回転糸切り。	砂粒含まず
821	須恵器 椀B	土壙14	口径(13.4) 器高　2.9 底径(6.3)	内面の底部と体部の境は明瞭。内外面ロクロナデし、底部内面に2方向の仕上げナデ。底部外面は左回転糸切り。	口縁部に重焼き痕
822	須恵器 底部	土壙13	底径(5.4)	内外面ともにロクロナデ。底部内面に仕上げナデを施す。底部外面は右回転糸切り。	
823	陶器 甕	土壙11		内外面ともロクロナデ。口縁部は折り曲げ、偏平な玉縁とする。	備前焼
824	青磁 碗	土壙22		内外面とも施釉。外面に鎬の顕著な蓮弁文を削り出す。	
825	土師器 小皿Ⅰ A 3	土壙20	口径(7.8) 器高　1.2 底径(5.8)	精製で薄い造り。内外面ロクロナデ。底部内面に仕上げナデ。底部外面右回転糸切り。底部内面周縁にロクロ目が残る。	微量の砂粒含

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
826	土師器 椀Ⅰ B 1	土壙20	口径(11.8) 器高　3.0 底径(5.7)	内外面ともに右回転ロクロナデ。	
827	土師器 椀ⅠA	土壙20	口径(12.9)	内外面ともにロクロナデ。内面ロクロ目顕著。右回転ロクロ。	
828	土師器椀	土壙20	口径(12.9)	内外面ともにロクロナデ。右回転ロクロか？	
829	土師器椀	土壙20	口径(13.9)	内外面ともにロクロナデ。右回転ロクロか？	
830	土師器 椀	土壙20	口径(12.8)	精製で薄い造り。焼成は堅緻。内外面ともにロクロナデ。右回転ロクロ。	
831	土師器 椀Ⅱ A 1	土壙20	口径(11.8) 器高　3.5 底径(6.1)	薄い造り。内外面ともにロクロナデ。底部外面は右回転糸切り。	
832	土師器 椀Ⅱ A 1	土壙20	口径(11.8) 器高　3.7 底径(6.5)	薄い造り。内外面ロクロナデし、底部内面に仕上げナデ。体部内面下半はロクロ目顕著。底部外面は左回転糸切り。	
833	土師器 椀Ⅱ C 2	土壙20	口径 12.2 器高　3.7 底径　6.2	薄い造りで、堅緻な焼成。内外面ロクロナデし、底部内面に十字の仕上げナデ。体部外面はロクロ目の凹凸が激しい。底部は右回転糸切り。	口縁部に重焼き痕
834	土師器 椀ⅡA1	土壙20	口径(11.9)	精製。内外面ともロクロナデ。ロクロは左回転。	
835	土師器 底部	土壙20	底径(4.8)	堅緻な焼成。内外面ともにロクロナデし、底部内面に仕上げナデを施す。外面は右回転糸切り。	
836	須恵器 皿A 1	土壙20	口径 11.0 器高　2.2 底径　6.8	内外面ともにロクロナデし、底部内面に仕上げナデを施す。底部外面は右回転糸切り。	口縁部に重焼き痕
837	須恵器 皿A	土壙20	口径(12.9) 器高　2.8 底径(6.7)	内外面ロクロナデし、底部内面に乱方向の仕上げナデを施す。底部外面は右回転糸切り。	口縁部に重焼き痕
838	須恵器 捏鉢D	土壙20		内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転。	口縁部に灰被る
839	土師器 皿E	溝46	口径 12.2 器高　3.4 底径　6.0	底部内面はナデ、外面から体部内面までロクロナデ。	細砂が混じる
840	土師器 椀E	溝46	口径 15.8 器高　5.0 底径　8.3	体部外面は指押さえの後ナデ、内面口縁部周辺には横方向の暗文。	内面若干炭素吸着
841	土師器 椀E	溝46	口径 14.6 器高　5.7 底径　6.5	体部内面上半は指押さえの後ナデ、内面下半はナデか。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
842	瓦器 椀	溝46	口径 15.0	体部内面上半は横方向、体部下半は縦方向の暗文を施す。体部外面は全面に指押さえ、横方向の暗文を疎らに施す。	
843	土師器 小皿Ⅰ B 1	溝 1	口径　7.6 器高　1.0 底径　5.5	堅緻で薄い造り。内外面ロクロナデし、底部内面中央をナデる。体部下半のロクロナデは強く施す。底部は右回転糸切り。	外面に櫛目状の擦痕
844	土師器 小皿Ⅰ B 1	溝 1	口径(7.5) 器高　1.0 底径(5.0)	(843) と同様の形態・調整。	底部外面に櫛目状の擦痕
845	土師器 小皿Ⅰ A 2	溝 1	口径(7.4) 器高　1.1 底径(5.2)	薄い造り。内外面ロクロナデ。右回転糸切り。	焼成甘い
846	土師器 椀ⅡA2	溝 1	口径(11.8)	内外面ともにヨコナデ。ロクロは右回転。	
847	須恵器 椀B	溝 1	口径(12.2)	内外面ともにロクロナデ。外面はロクロナデ後、指による乱方向のナデ。ロクロは左回転。	口縁部外面に重焼きの痕跡
848	須恵器 椀底部	溝 1	底径　5.0	内外面ともにロクロナデし、底部内面に乱方向の仕上げナデ。底部内面周縁は強いロクロナデ。底部は右回転糸切り。	細砂が混じる
849	青白磁 合子	溝 1	口径　5.7 器高　5.5 腹径　8.4 底径　5.5	最大腹径部で文様帯を分け、体部上半には唐草文、体部下半には葉文を陽刻で巡らせる。釉は内外面ともに施されるが底部外面、口縁端部上面・内面は露胎である。	破片の一部は柱穴（P-101）から出土
850	土師器 椀Ⅱ B 1	溝 2	口径 12.4 器高　3.3 底径　5.1	薄い造り。内外面ともにロクロナデ。底部は右回転糸切り。	
851	土師器 甕	溝 2 溝24 遺構面上	口径(18.1)	外面には粘土紐の接合痕が残る。外面は指押さえによる成形の後、横方向のナデ調整。内面は口頸部を横方向のナデ調整。体部は板ナデの後、頸部付近については横方向のナデ調整。	一部にススが付着
852	瓦器 小皿	溝 2	口径(10.8) 器高　2.5 底径(5.0)	指押さえによる成形後、左方向のナデを施す。口縁部は強いナデが施される。	
853	須恵器 捏鉢E	溝 2	口径(29.6)	内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転。	口縁部のみ灰被り
854	須恵器 捏鉢F	溝 2	口径(30.4)	内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転。	胎土に長石を含む
855	土師器 小皿Ⅰ A 3	溝 9	口径(5.8) 器高　1.0 底径(4.5)	底部内面にロクロ目が残る。底部は糸切りの後ナデ消しか？ロクロは右回転。	クサリ礫を若干含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
856	土師器 椀Ⅱ A 2	溝 9	口径(12.8) 器高　3.5 底径(7.0)	内外面ともにロクロナデ。口縁部は丁寧なロクロナデ。底部内面周縁に強いロクロナデを施す。底部内面は3方向以上の仕上げナデ。底部外面は右回転糸切りの後、ナデ消す。	クサリ礫を若干含む
857	土師器 椀Ⅱ A 2	溝 9	口径(12.6) 器高　3.5 底径(6.8)	(856) と同様の形態・調整。	クサリ礫を若干含む
858	土師器 小皿Ⅰ B 1	溝13	口径(7.8) 器高　0.9 底径(5.0)	内外面ロクロナデ。内面に仕上げナデ。左回転糸切りか。	
859	土師器 椀Ⅱ B 1	溝13	口径(12.2) 器高　3.4 底径(5.1)	外面のロクロ目顕著。内外面ロクロナデ。口縁部は丁寧に施す。底部内面周縁に強く施す。底部内面に仕上げナデ。右回転糸切り後、底部外面周縁を更にロクロナデ。	クサリ礫・長石を若干含む
860	土師器 椀Ⅰ A 2	溝13	口径(12.9) 器高(2.9) 底径(6.4)	内面にロクロ目が残る。底部内面周縁から体部外面にかけてロクロナデ、底部内面はナデか。口縁部は丁寧なロクロナデを施す。底部内面に仕上げナデ。底面は右回転糸切りの後、中央部を篦状工具による押さえ、ナデによって調整。	胎土にクサリ礫を含む
861	土師器 椀Ⅰ B 1	溝10	口径(12.1) 器高　3.0 底径(4.5)	外面ロクロ目顕著。内外面ロクロナデ。口縁部は強いロクロナデを施す。底面は右回転糸切り。	
862	土師器 椀Ⅰ B 1	溝15	口径 12.2 器高　3.3 底径　5.4	内外面ロクロナデ。体部下半に一部乱方向のナデ。口縁部は強いロクロナデを施す。底部外面に指頭痕。底面は右回転糸切り。	クサリ礫を含む。長石・石英を若干含む
863	土師器 椀Ⅰ B 2	溝17	口径(11.8)	内面にロクロ目が残る。内外面ロクロナデ。口縁部は丁寧なロクロナデ。体部外面下半に一部乱方向のナデ。左回転ロクロか。	
864	土師器 小皿Ⅰ D	溝23	口径(8.6) 器高　1.4 底径(4.4)	内外面ともにロクロナデか。底部外面は篦切り。ロクロの回転は右回り。	胎土に少量の石英含む
865	土師器 皿A 1	溝23	口径(12.6) 器高　2.4 底径　6.2	内外面ともにロクロナデ。底部外面は右回転糸切りの後、ナデ消している。	胎土にクサリ礫含む
866	土師器 椀Ⅰ B 1	溝2 3	口径(12.6) 器高　3.5 底径(6.8)	内外面ともにロクロナデ。底部外面は右回転糸切りの後、ナデ消す？	胎土にクサリ礫含む
867	土師器 皿B 1	溝23	口径(13.1) 器高　2.7 底径(6.0)	内外面ともにロクロナデ。底部外面は糸切りによる切り離し後、更にロクロナデ。	胎土にクサリ礫を含む
868	土師器 椀Ⅰ B 1	溝23	口径 12.4 器高　3.2 底径　5.4	内外面はロクロナデ。体部外面のロクロ目顕著。底部は右回転の糸切りの後、一部指押さえによる調整。底部内面に仕上げナデか。	クサリ礫・長石と少量の石英含む

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
869	土師器 椀E	溝23	底径(8.0)	底部内面は篦磨きか。底部は篦切り後、高台を貼り付ける。高台際外面に指押さえが残る	長石、スサ？を含む
870	土師器 羽釜	溝23	口径(17.6)	口縁部は内外面ヨコナデ。体部外面は右上がりの平行叩き（3条/cm)。内面は横方向のナデ。	外面にスス付着 クサリ礫・長石含む
871	土師器 土堝A1	溝23	口径(19.5)	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は平行叩き（2.1条/cm)。内面は刷毛調整（10本/cm)。	外面にスス付着
872	須恵器 捏鉢F	溝23	口径(25.6)	内外面ロクロナデ。口縁部は強く施す。右回転ロクロ？	胎土に長石を微量含む
873	須恵器 捏鉢D	溝23	口径(28.5)	内外面ロクロナデ。	長石・チャート・石英を含む
874	須恵器 捏鉢C	溝23	口径(26.7)	内外面とも右回転のロクロナデ。	胎土に長石を含む
875	須恵器 底部	溝23	底径(13.0)	体部内外面ロクロナデ。外面底体部境・底部内面・底部外面にロクロナデ後の指押さえ痕。右回転ロクロ。	底部外面焼成時の気泡
876	土師器 杯D	溝24	口径(13.8) 器高　3.4 底径　9.3	内外面ロクロナデ。外面のロクロ目顕著。磨滅の為、底部切り離し技法は不明。外面底体部境及び底部外面に指押さえ痕が残る。ロクロは右回転。	胎土にクサリ礫を含む
877	土師器 底部	溝24	底径(5.8)	体部下半に指押さえ後、横方向のナデか。底部外面に粘土紐巻き上げ痕。	
910	土師器 小皿Ⅱ A 1	XⅥ・XⅦ区 暗灰茶褐	口径(7.6) 器高　1.9 底径　4.6	内外面ともにヨコナデ。底部内面は一方向の仕上げナデ。底部外面は右回転糸切りか。	
911	土師器 託	包含層 灰褐	口径(9.6) 器高　2.1 底径(6.6)	内外面ともにロクロナデか。輪高台の厚みは薄く（3㎜)、外側へ踏ん張り、器高の約1/2を占める。	胎土にクサリ礫多く含む
912	土師器 皿	遺構面上	口径(11.7) 器高　2.7 底径(6.7)	底部内面指押さえ後、内外面ヨコナデ。	
913	土師器 椀Ⅰ A 2	XⅥ・XⅦ区 暗灰茶褐	口径(12.3) 器高　3.4 底径(5.9)	内外面ともにロクロナデ。底部内面の全体に一方向の仕上げナデを施す。底部外面は右方向の回転糸切り後、板状工具による粘土の掻き取りを行う。	微量のクサリ礫、長石少量含む
914	土師器 椀Ⅱ A 2		口径 11.7 器高　3.4 底径　5.9	内外面ともにロクロナデ。底部内面には全面にわたって一方向の仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。	
915	土師器 椀E	包含層	口径 14.8 器高　5.3 底径　6.8	輪高台は外側へ踏ん張る形状を呈する。高台部から体部下半はヨコナデ、体部上半は不明。口縁部内面には横方向の篦磨き、体部は右上がりの篦磨き、底部内面には縦方向の篦磨きを施す。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
916	黒色土器 椀	確認調査 包含層	口径(14.7) 器高(4.7) 底径(7.6)	輪高台は粘土紐貼り付けによる。高台部から体部下半はヨコナデ、体部上半は不明。口縁部内面には横方向、底部内面には一方向の篦磨きが残る。	
917	土師器 土堝 A 1	XⅥ・XⅦ区 暗灰茶褐	口径 22.8	口縁端部は肥厚し面を持つ。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は平行叩き（3条/cm)、内面の調整は不明。	外面の一部にスス付着
918	土師器 脚	遺構面上		体部との接着面には板状工具による圧痕が残る。脚の外面はナデ。接着部に近い部分には、指押さえ痕が残る。	長石・雲母を含む
919	須恵器 椀B	灰色粘土層	口径 11.7 器高　3.2 底径　6.2	内外面ともにロクロナデした後、体部外面は乱方向のナデを施す。底部内面は一方向の仕上げナデ。外面は右回転糸切り。	口縁部に重焼き痕
920	須恵器 捏鉢C	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐	口径(26.1)	内外面ともにロクロナデ。体部外面はロクロによる凹凸が顕著。	
921	須恵器 捏鉢C	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐	口径(27.2)	内外面ともにロクロナデ。ロクロは右回転。	
922	土師器 壺	A－18 暗灰	口径　10.0 器高　14.2 最大径11.6 底径　10.2	内外面ともにナデ調整。全体に調整は粗く、内面の頸部以下に粘土紐の接合痕が顕著に残る。外面では胴部に指押さえ痕が残る。底部外面糸切り後の調整は不充分。	胎土にクサリ礫・石英・長石を含む
923	施釉陶器 椀	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐		内面及び外面上半に天目釉がかかる。外面下半は露胎。露胎部はロクロ削りの後ナデ。	瀬戸・美濃系天目
924	青磁 碗	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐		体部のみ残存する。内面に薄い釉がかかる。外面は露胎。6条の櫛描き文が施される。	
925	青磁 碗	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐	口径 14.8	内外面ともにロクロナデ。体部外面に篦描き蓮弁文。	
926	青磁 碗	包含層	底径(6.0)	濃緑色の釉は畳付きと高台裏を除き全体にかかる。左回転のロクロ削りが高台裏に見てとれる。内面見込み周縁には圏線が巡る。	全面に細かい貫入が見られる
927	青磁碗 底部	XⅥ・XⅦ区 暗茶褐	底径(6.6)	明緑灰色の釉は高台裏を除き全体にかかる。左回転のロクロ削りが高台裏に見てとれる。	
928	滑石製 鍋	E-21 暗茶褐	口径(19.8) 鍔径(21.0)	鍔先端部をノミ状工具で削り鈍角にしている。外面はノミ状工具で縦方向へ削り後、横方向へ磨く調整。内面は磨く。	内外面・断面にスス付着

b）東地区出土遺物

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
878	土師器 小皿 B 2	P-62	口径　7.1 器高　1.2 底径　4.2	内外面ロクロナデ。底部内面に成形時の指押さえ痕残る。底部外面は右回転糸切りの後、板状工具によるナデ。	焼成時内面にスス付着
879	黒色土器 小皿	P-3	口径　7.8 器高　1.9 底径　5.6	内面の底部と体部の境は明瞭。内外面ロクロナデ。口縁部外面強いナデが顕著。底部外面は右回転糸切りの後、更に糸切り。	
880	黒色土器 小皿	P-3	口径　8.0 器高　1.9 底径　5.4	(879) とほぼ同一の形態・調整。口縁部外面は強いナデ。	
881	土師器 底部	P-11	底径(5.8)	薄い造り。底部内面に一方向のナデの後、底部内面周縁から体部外面までをロクロナデ。底部は左回転糸切り。	
882	土師器 皿B 2	P-24	口径(14.4)	薄い造り。内外面ともロクロナデ	
883	土師器	P-55	口径(15.7)	精製で薄い造り。内外面左回転のロクロナデ。	
884	土師器 底部	P-52	底径　5.4	左？回転糸切りの後、板状工具（篦か？）によるナデ。内外面ともにロクロナデ。	
885	土師器 底部	P-52	底径(8.2)	左？回転糸切りの後、板状工具（篦か？）によるナデ。内外面ともにロクロナデ。	
886	土師器 羽釜	P-14		口縁部はヨコナデ、体部内面は横方向の刷毛。	
887	須恵器 捏鉢B	P-81	口径(25.8)	口縁部内面周辺に指押さえ痕残る。内外面右回転ロクロナデ。	
888	土師器 椀Ⅱ A 2	建物址 9 (P-9)	口径 13.8 器高　3.4 底径　7.3	内外面ともロクロナデ。底部外面は右回転糸切りの後、指押さえ及び板状工具（篦？）による調整。	
889	土師器 椀	建物址10 (P-38)	口径(12.0)	薄い造り。内外面ロクロナデ。内面にロクロ目が残る。体部下半は水付けによるナデ。ロクロは右回転。	
890	土師器 皿B 2	建物址10 (P-38)	口径 12.0 器高　2.5 底径　5.9	薄い造り。内外面ともにロクロナデ。内外面にロクロ目が残る。ロクロは右回転。	
891	土師器 皿B 2	建物址10 (P-38)	口径 11.8) 器高　2.4 底径　5.1	形態・調整等（890）と同じ。	
892	土師器 皿C 1	建物址10 (P-38)	口径(11.8) 器高　2.5 底径　6.1	薄い造り。硬質。内外面ともロクロナデ。内面、特に底部内面周縁にロクロ目が残る。体部下半のナデは水付けによる。底部内面に仕上げナデ。底部は右回転糸切り。	

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
893	土師器 椀Ⅰ B 1	建物址10 (P-45)	口径 11.7 器高　3.0 底径　5.6	内外面ともにロクロナデし、底部内面に仕上げナデを施す。底部は右回転糸切り。	
894	土師器 小皿Ⅰ B 2	建物址11 (P-44)	口径(6.9) 器高　1.0 底径　4.6	薄い造り。底部内面に成形時の指押さえ残る。底部内面周縁から体部外面まではロクロナデした後、底部内面中央にナデを施す。底部は右回転糸切り。	
895	土師器 小皿 A 3	建物址11 (P-34)	口径　6.4 器高　1.8 底径　4.0	精製で硬質の造り。内外面ロクロナデし、底部内面を仕上げナデする。底部内面周縁は強いロクロナデ。底部内面にロクロ目が残る。底部は右回転糸切り。	
896	土師器 皿B 1	建物址11 (P-15)	口径(11.6)	内外面ロクロナデ、内外面にロクロ目が残る。ロクロは右回転。	
897	丸　瓦	建物址11 (P-13)	器厚　2.5	凸面は縦方向の縄目叩きの後、縦横へのナデ。側面は未調整。凹面に布目痕。凹面側の前端縁と側縁は板状工具によるナデ。	

c）南地区出土遺物

No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
898	土師器 小皿Ⅰ B 2	土壙24	口径　6.8 器高　1.2 底径　4.0	内外面ともにロクロナデ。底部は右回転糸切り。	
899	土師器 小皿Ⅰ B 1	土壙24	口径　6.6 器高　0.8 底径　5.1	底部内外面とも器壁の剥離が激しく調整は不明。底部外面に板目状圧痕か。体部中位でロクロナデによる稜を持つ。底部は右回転糸切り。	
900	土師器 小皿Ⅰ B 1	土壙24	口径　6.8 器高　1.0 底径　5.0	内外面ロクロナデ。外面底部と体部の境にナデ。底部は左回転糸切り。	
901	土師器 小皿Ⅰ B 1	土壙24	口径　6.4 器高　1.0 底径　4.8	(900) と同一の形態・調整。	
902	土師器 小皿Ⅰ A 1	土壙24	口径　7.0 器高　1.0 底径　5.1	底部内面を指押さえ後にナデ、底部周縁から体部外面までロクロナデ。底部内面にロクロ目が残る。底部は左回転糸切り後、板状工具による調整を行う（板目状圧痕)。	
903	土師器 皿B 1	土壙24	口径(12.4) 器高　2.6 底径(6.1)	底部内面を指押さえ後にナデ、底部周縁から体部外面までロクロナデ。底部は左回転糸切りの後、板ナデを施す。	
904	土師器 皿B 1	土壙24	口径 12.3 器高　2.5 底径　6.0	底部を左回転糸切りする以外、内外面ともに調整不明。	

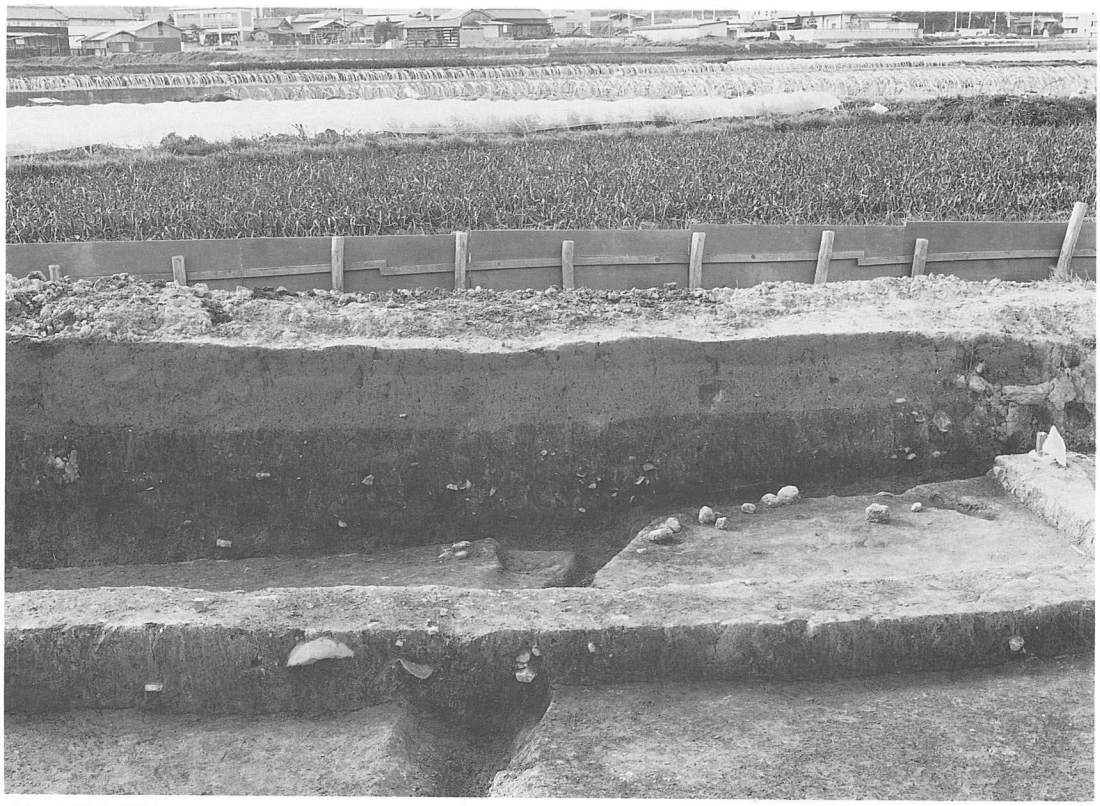
No.	器　種	出土地区 出土層位	法　量	技　法　の　特　徴	備　考
905	土師器 皿Ｂ１	土壙24	口径(12.8) 器高　2.2 底径(7.3)	内外面ロクロナデし、底部内面に仕上げナデか。底部は右回転糸切りの後、板状工具による調整を行う（板目状圧痕)。	
906	土師器 皿Ｂ１	土壙24	口径(12.5) 器高　2.5 底径　6.9	口縁部内外面ロクロナデ。外面体部下半のロクロナデは粗い。底部は右回転糸切り。	
907	土師器 土堝Ａ２	土壙24	口径 21.6 腹径 22.8	体部外面に平行叩き（2.5条/cm)。内面はナデ調整を施した後、口縁部内外面を右から左へヨコナデ。	外面にスス付着
908	土師器 土堝 Ａ１	土壙24	口径 22.8 腹径 26.8	体部外面は平行叩き（３条/cm)。内面は体部上半が横方向（右→左）の刷毛（14条/1.5cm)、体部下半はやや粗い刷毛調整を施し、口縁部は内外面ともヨコナデ。	外面にスス付着
909	土師器 土堝 Ａ３	土壙24	口径 18.4 腹径 18.2	体部外面は平行叩き（３条/cm)。内面は体部から頸部に刷毛（16条/１cm）を施した後、口縁部は内外面ともヨコナデ。	外面にスス付着
929	土師器 小皿Ｉ Ｂ	Ｃ－５ 第１層	口径　6.6 器高　1.1 底径　4.8	内外面ロクロナデ。底部内面は指押さえ痕を残し、一方向の仕上げナデ。底部外面は右回転糸切り。	
930	土師器 小皿Ｉ Ａ３	Ｂ－７ 黒灰砂	口径　6.7 器高　1.1 底径　4.6	底部内面は指押さえによる成形の後、周縁をロクロナデ、中央は仕上げナデ。体部・口縁部は内外面ロクロナデ。底部外面は右回転糸切り。	内面若干炭素吸着
931	土師器 椀Ｉ Ｂ１	Ⅲ区 トレンチ	口径 11.0 器高　3.1 底径　5.7	調整は磨滅の為不明。内外ともロクロナデか。底部外面は回転糸切りか？	
932	土師器 皿Ａ２	Ｃ－５	口径 12.8 器高　2.7 底径　5.3	薄い造り。内外面ともに右回転ロクロナデ。底部外面は静止糸切りの可能性がある。内外面ともにロクロ目が残る。	胎土にクサリ礫含む
933	土師器 皿Ｅ	Ⅱ区	口径 11.7 器高　1.6 底径 10.3	口縁端部は肥厚する。底部は篦切りか。	多量のクサリ礫・石英を含む
934	土師器 土堝Ｂ	砂礫層	口径(24.2)	口縁部内外面とも横方向のナデ、体部内面はナデ調整を施す。体部外面の調整は不明。頸部内外面に指押さえ痕を残す。	
935	須恵器 小皿Ｂ	確認調査	口径　7.3 器高　1.3 底径　6.2	口縁端部は丸く納める。内外面ともにロクロナデ。底部内面に一方向の仕上げナデ。底部外面は静止糸切りを施す。	
936	白磁 碗底部	包含層	底径　5.8	高台は削り出す。高台裏の削り込みは浅い。内面には全面に乳白色の釉を施す。外面は体部に施釉。底部は露胎。	
937	白磁 碗底部	Ａ-10	底径　5.8	高台は削り出す。高台裏の削り込みは浅く、中央は床に接する。内面には全面に乳白色の釉を施す。外面は露胎。	

図　　版

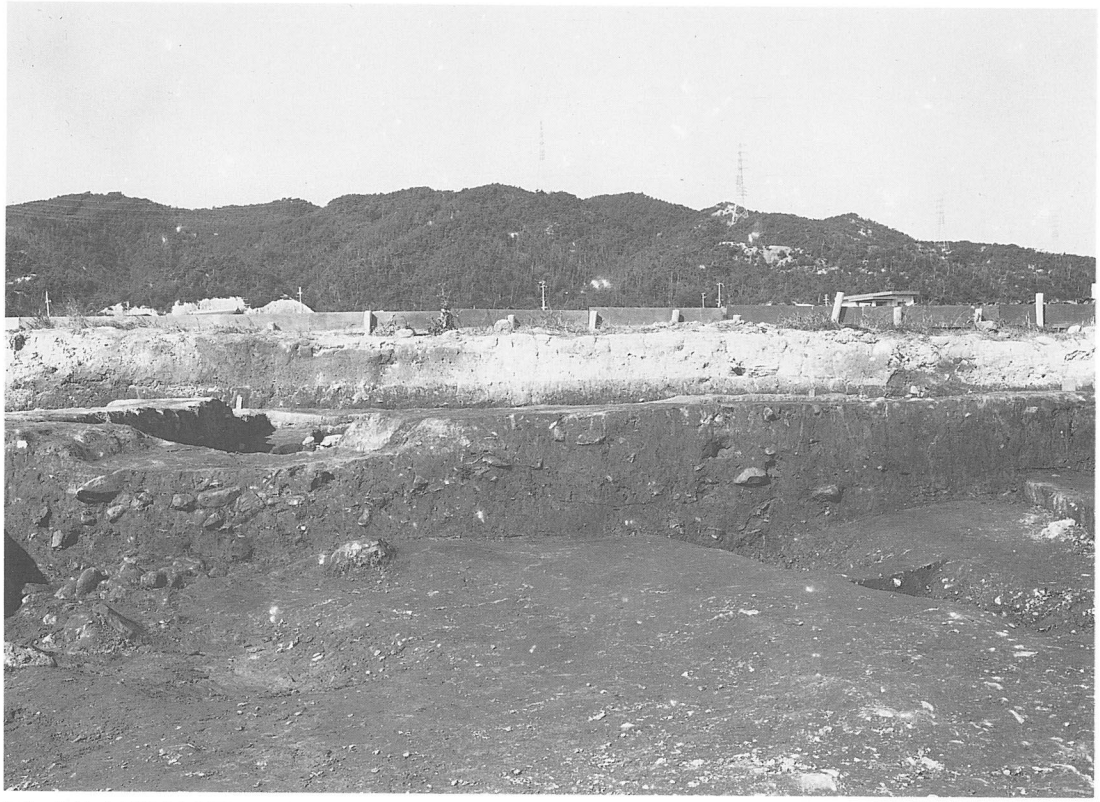
図版第一　遺跡航空写真

上）遺跡全景（南から）

下）遺跡全景（北から）



上）台地南側地区土層（調査区西壁）

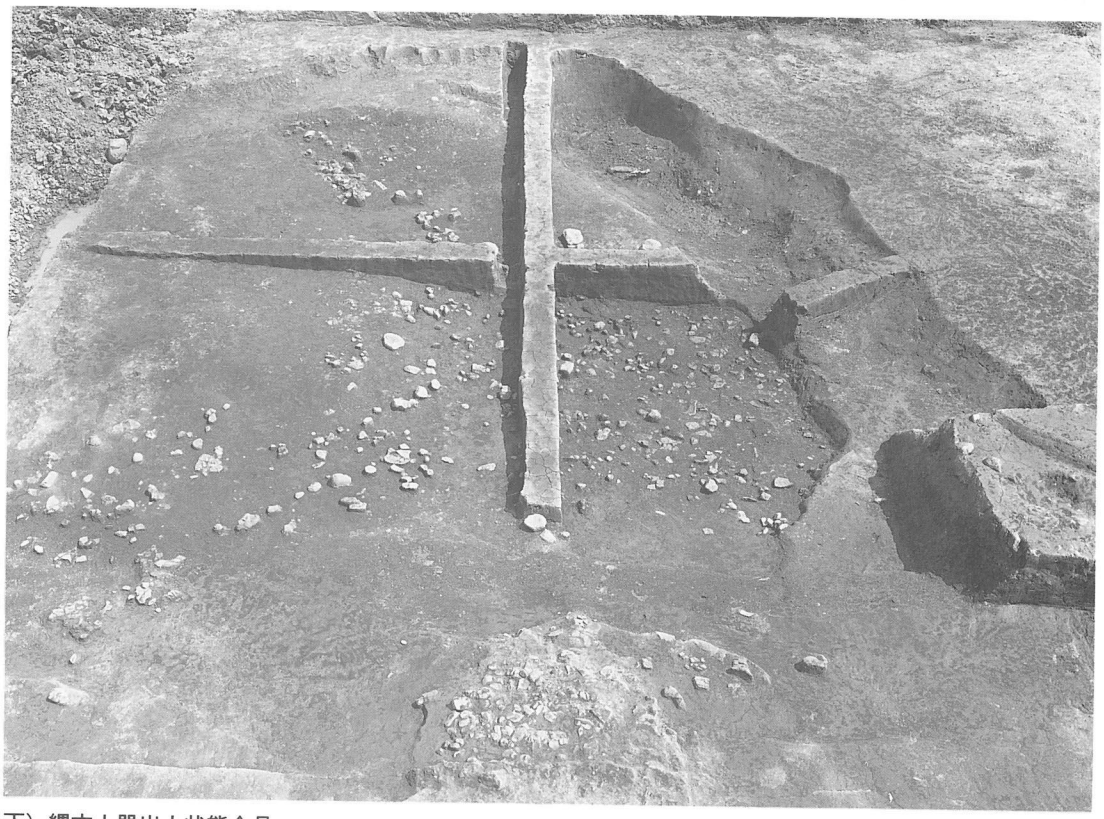


下）台地南側地区土層（B－9～10間）

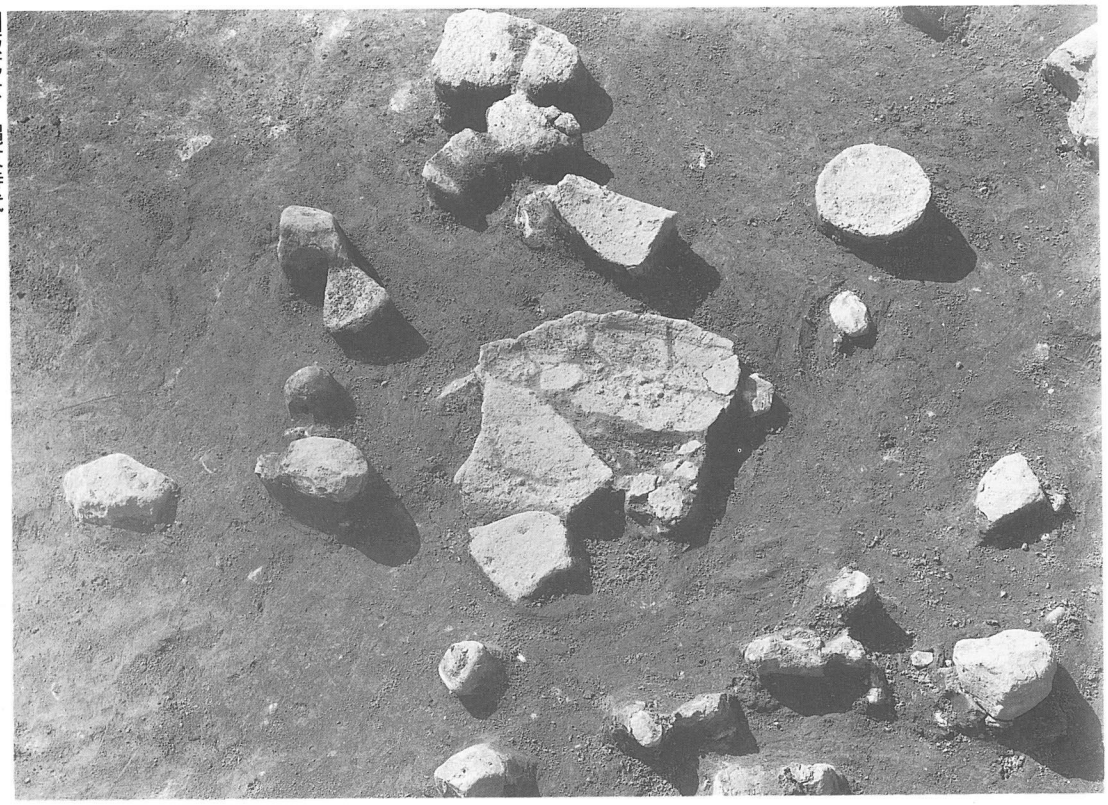
上）土壙 5 検出状況

下）土壙 5 完掘状況

上）縄文土器包含層（G－5～6間）



下）縄文土器出土状態全景



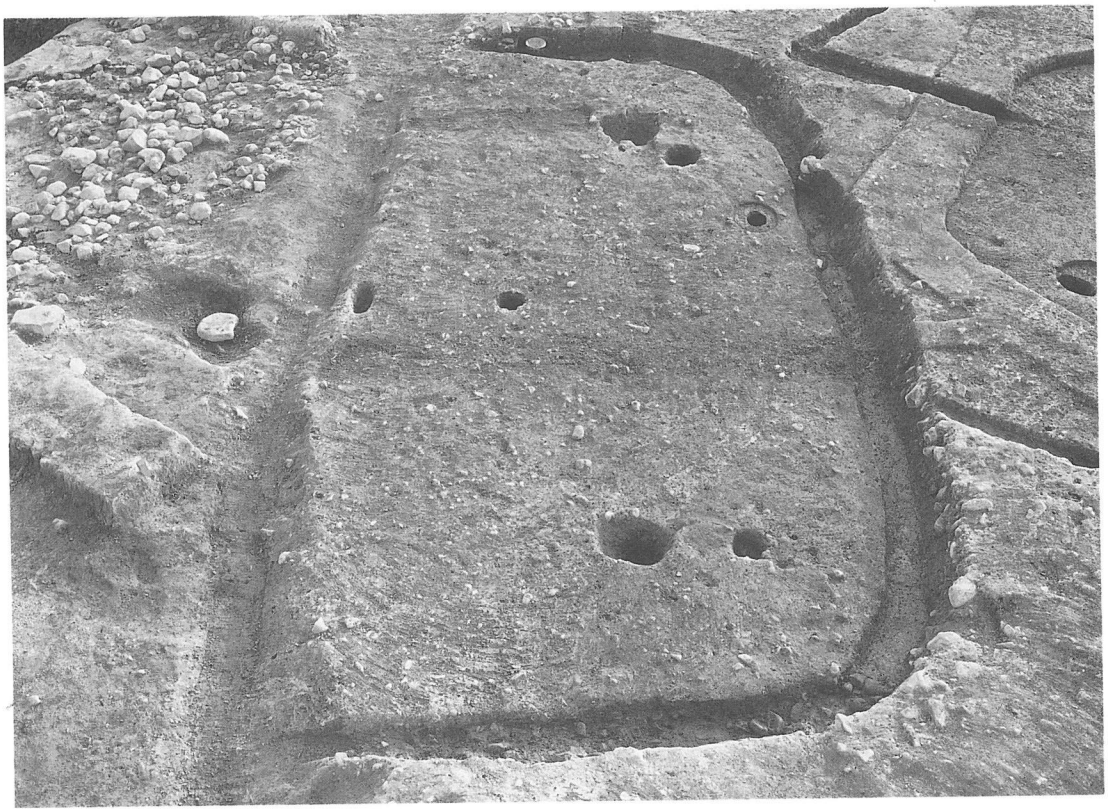
上）縄文土器出土状態

下）縄文土器出土状態

上）台地上の遺構全景（東より）

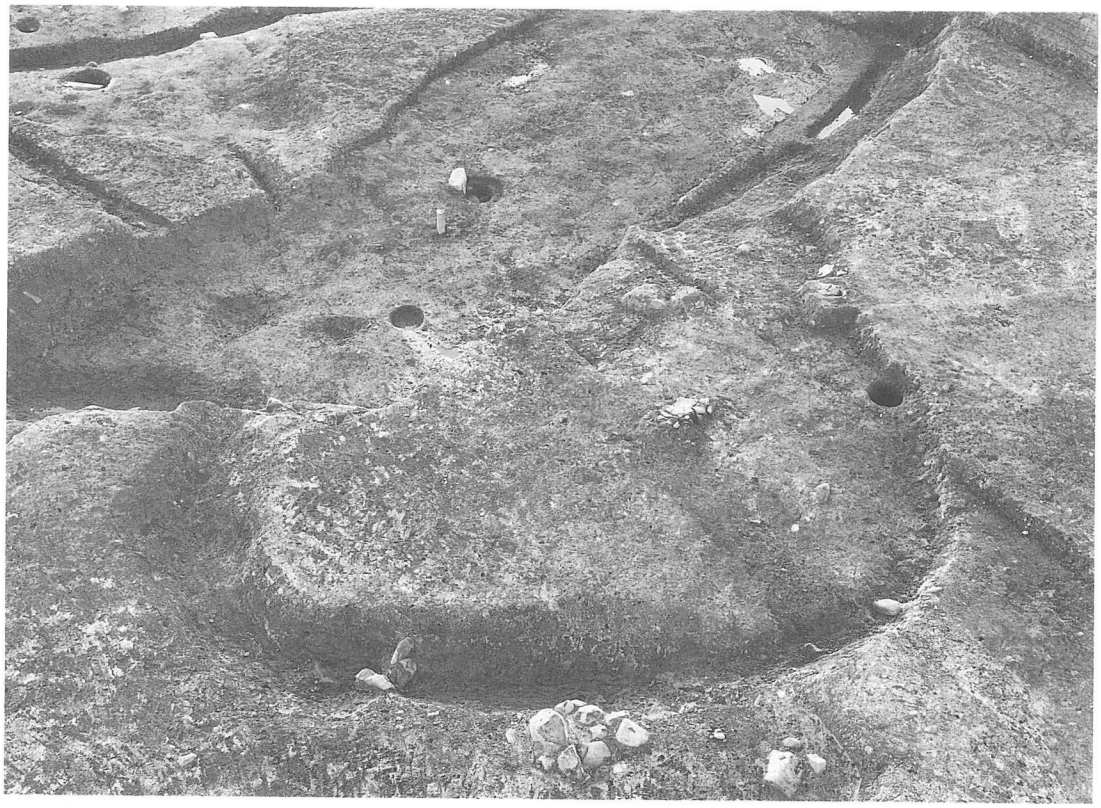
下）台地上の竪穴住居址群（北より）

上）住居址 4



下）住居址 1

上）住居址２・３



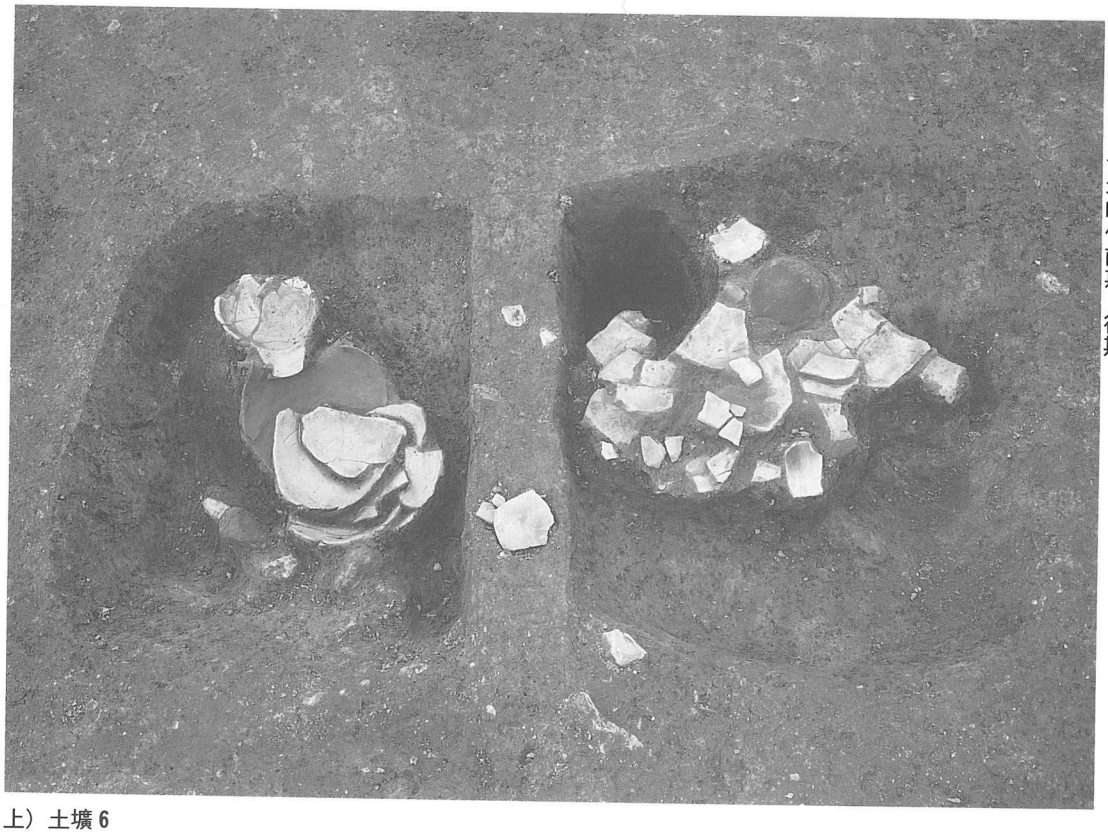
下）住居址５

図版第十　弥生時代～古墳時代前期

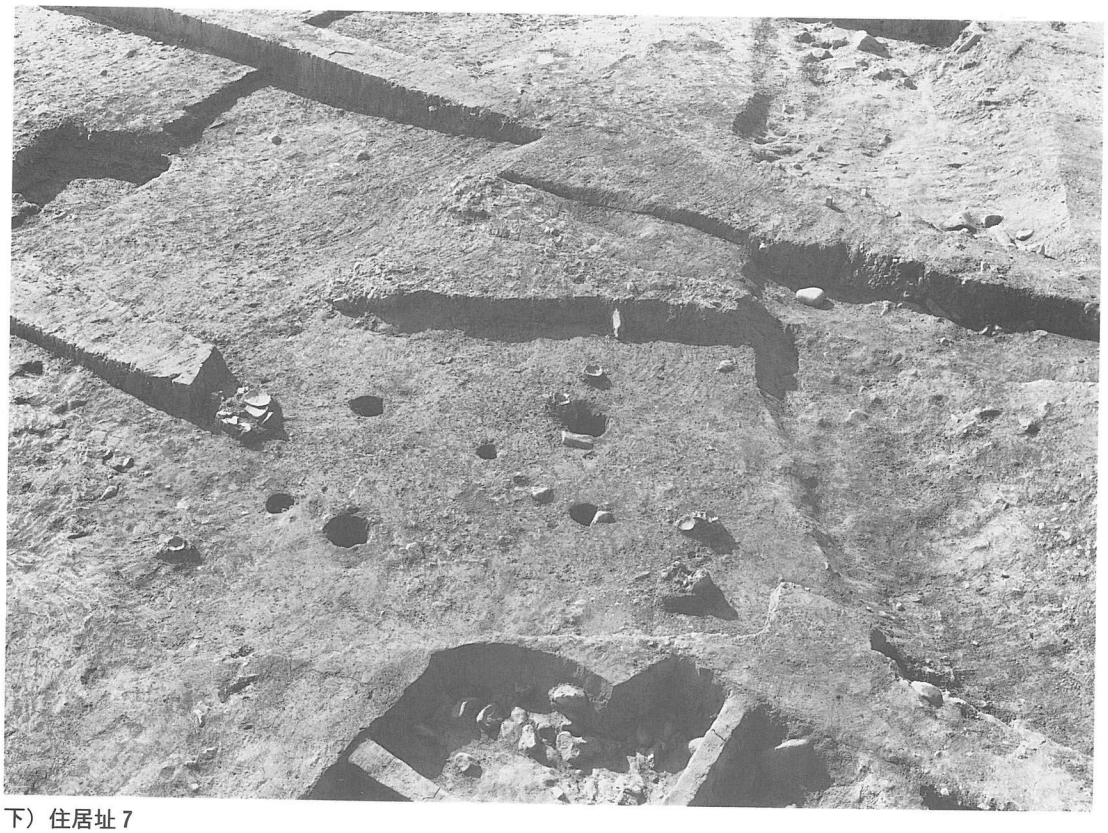
上）住居址 6

下）土壙 1

図版第十一　古墳時代前期～後期



上）土壙 6



下）住居址 7

上）北地区遺構全景（東より）

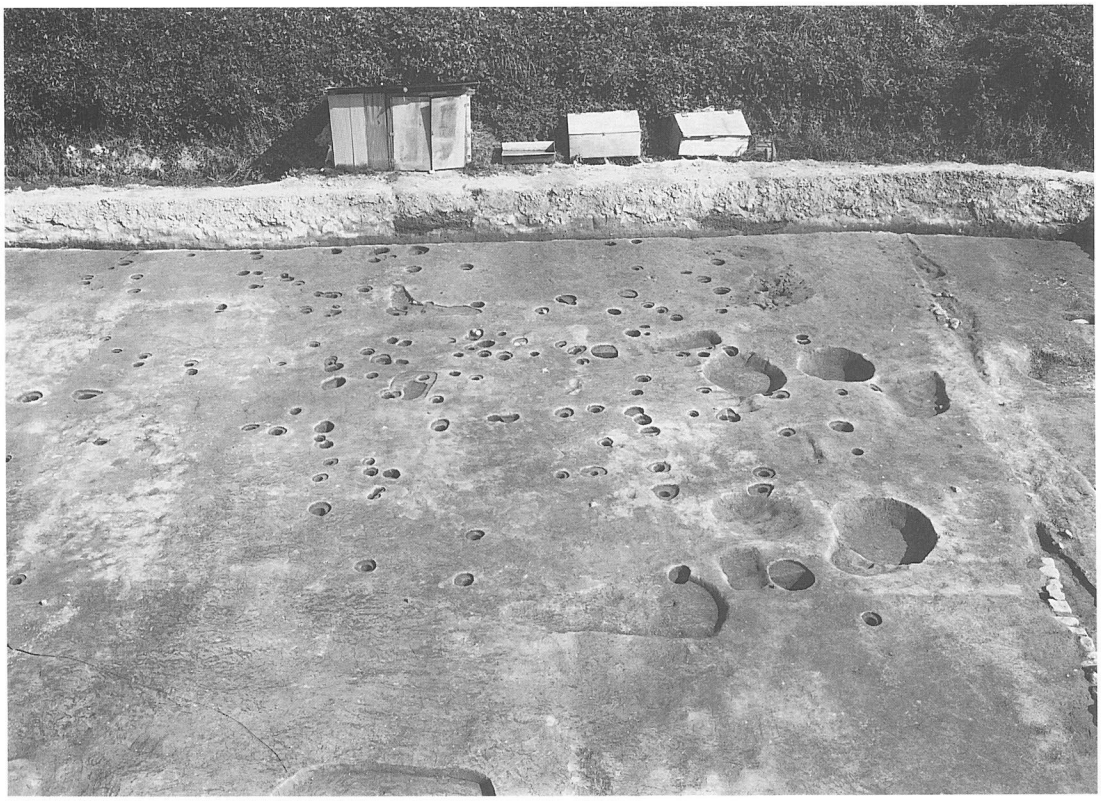
下）北地区東半遺構群（東より）

図版第十三　平安時代末～室町時代

上）建物址 1

下）溝 4

上）東地区全景（北から）



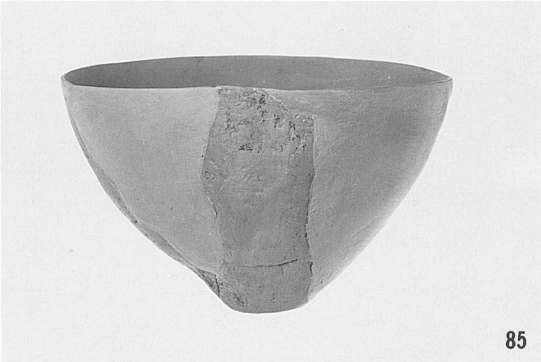
下）東地区全景（西から）

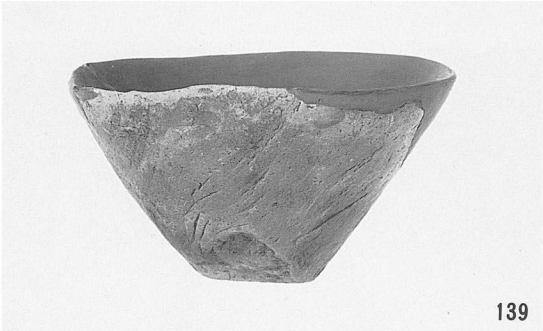
図版第十五　弥生時代～古墳時代前期の土器

76

86

84


85


139

137

144

172

146

147

150

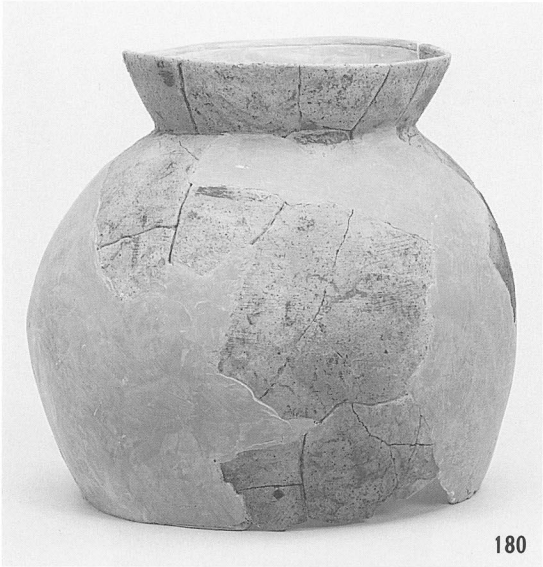
166

148

151

156

土壙１出土土器


180

179

182

185

183

188

186

C－7土器群

図版第十八　弥生時代～古墳時代前期の土器

204

251

247

223

225

260

261

包含層出土土器

298

299

303

294

289

288

278

280

279

包含層出土土器

図版第二十　弥生時代～古墳時代前期の土器

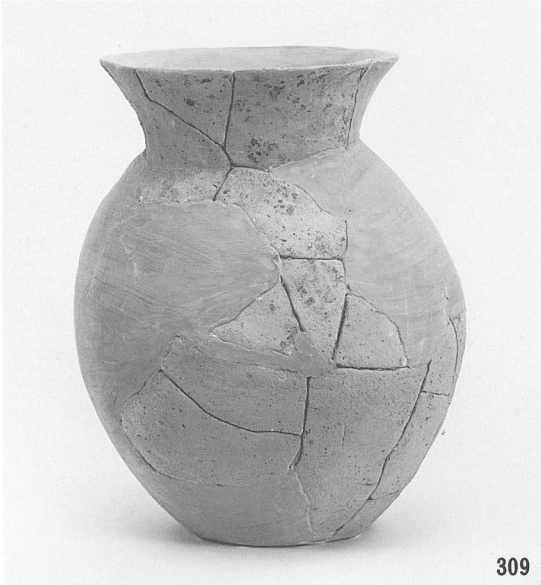
306

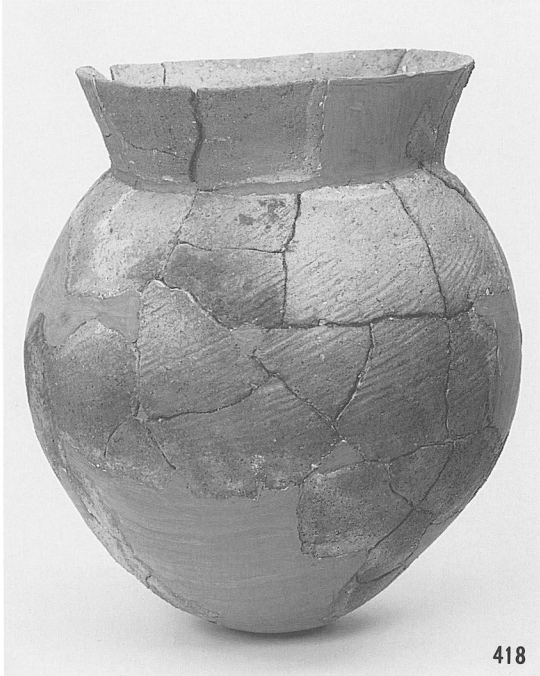
307

304

417

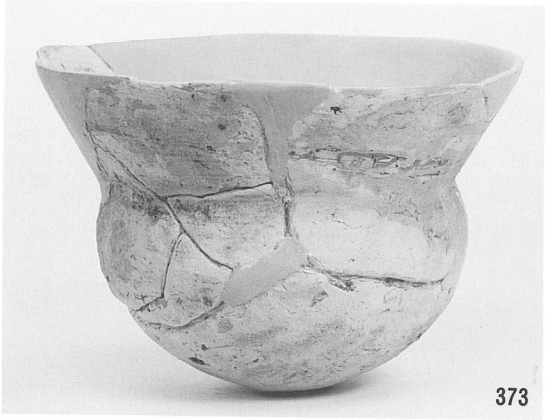
386


309


418

包含層出土土器

図版第二十一　弥生時代～古墳時代前期の土器


373

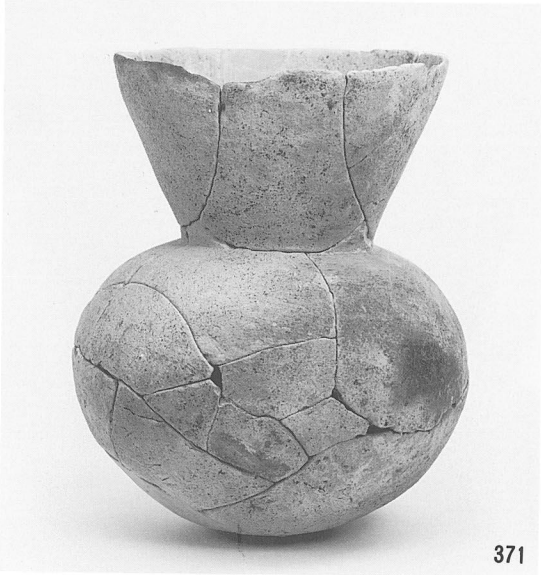
314

354

346

343

372


371

包含層出土土器

430

424

425

445

427

447

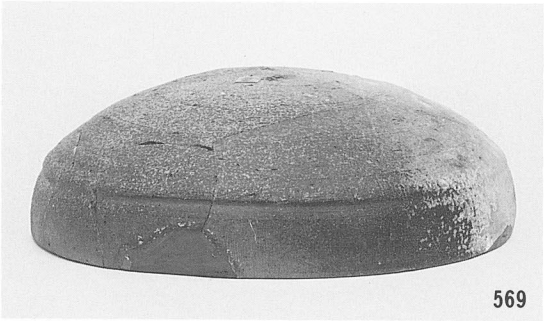
431

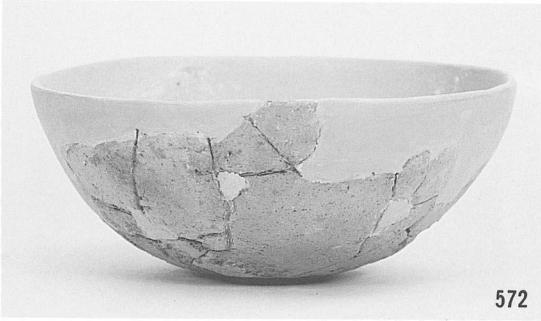
443

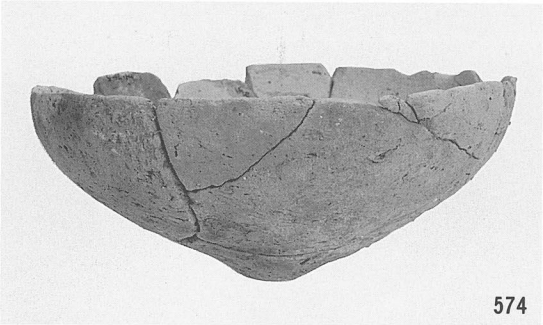
436

448

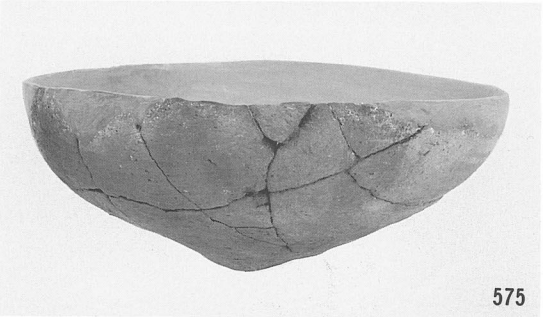
包含層出土土器


569


572


574

573


575

571

576

住居址 7 出土土器

図版第二十四　古墳時代後期～平安時代前半の土器

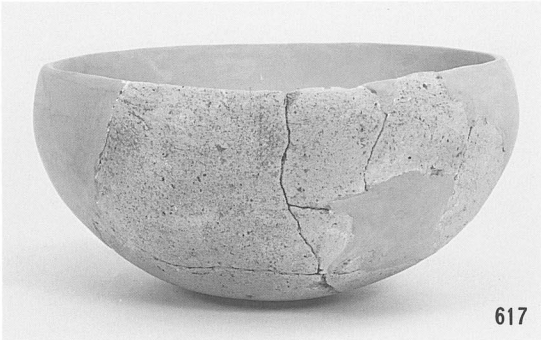
606

615

609

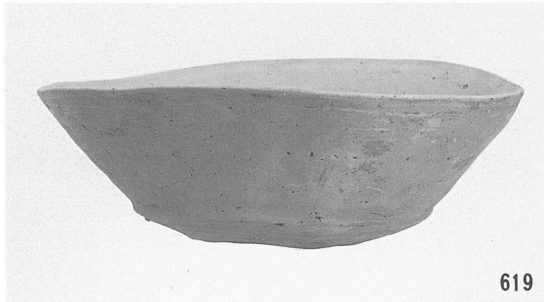
618

610


617

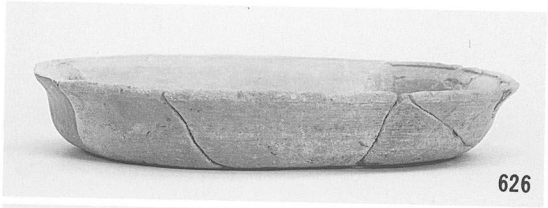
614

616


619

旧河道下層出土土器

図版第二十五　古墳時代後期～平安時代前半の土器

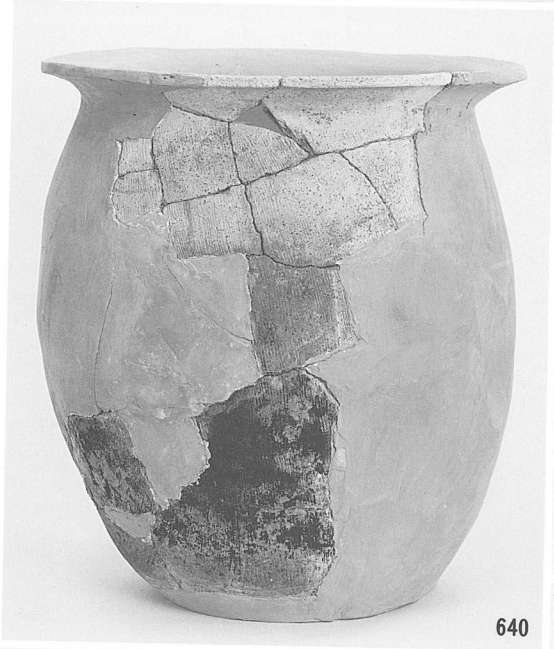

626

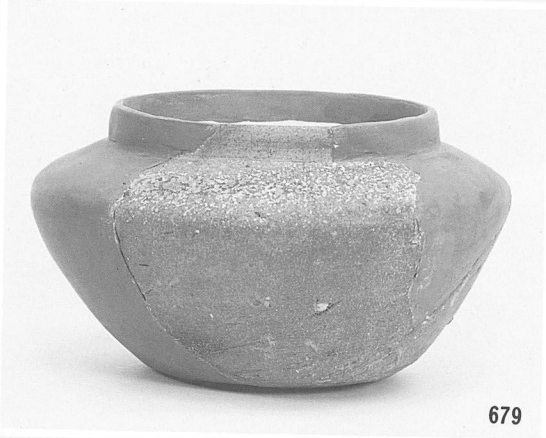
627

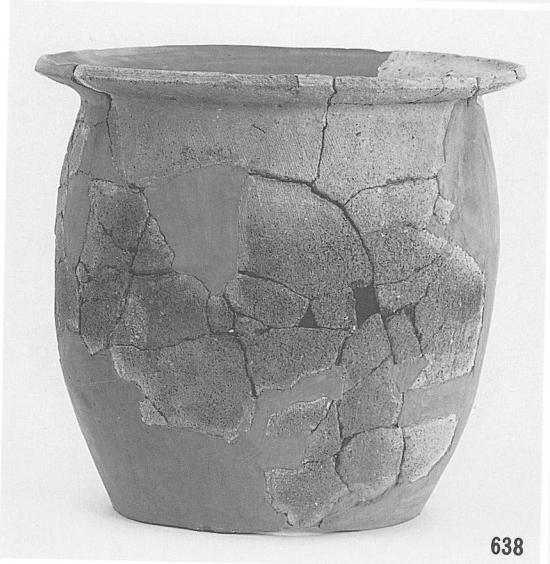
628

631

630


640

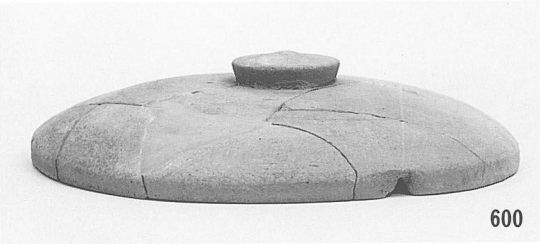

679

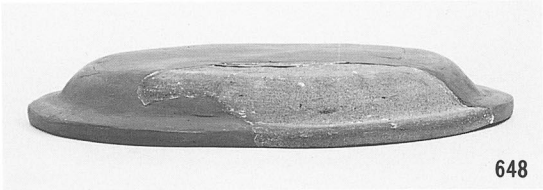

638

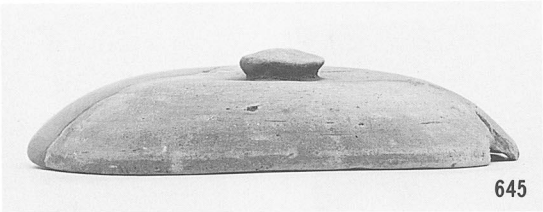
683

旧河道上層出土土器

図版第二十六　古墳時代後期～平安時代前半の土器


600


648


645

652

657

655

660

661

671

672

664

674

旧河道上層出土土器

754

756

757

758

759

761

764

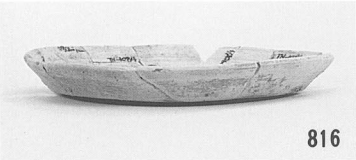
766

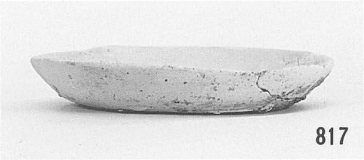
770

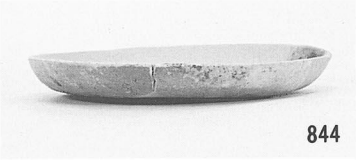
768

包含層出土土器

図版第二十八　平安時代末～室町時代の土器


816


817

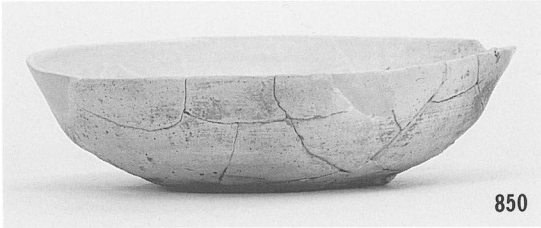

844

818

849

819

820


850

833

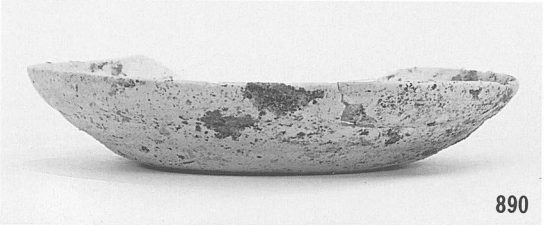
783

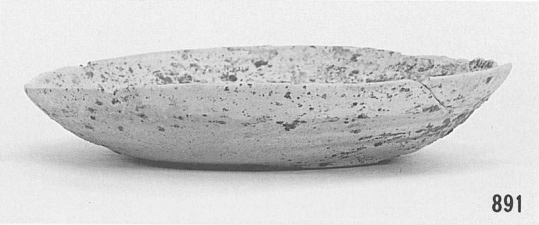
859

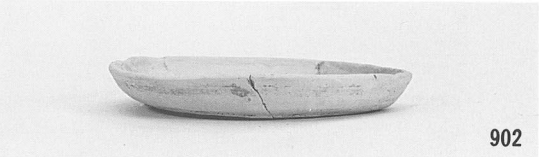
841

860

北地区遺構内出土土器





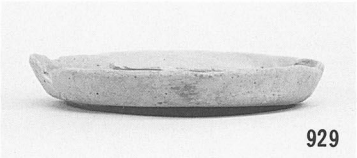


北・東・南地区遺構内出土土器

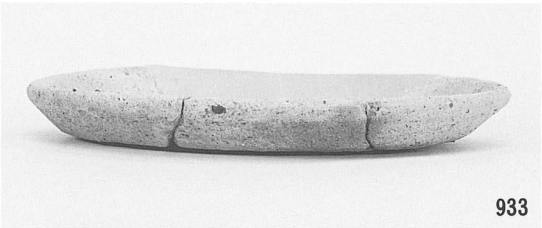
図版第三十　平安時代末～室町時代の土器

911

930


929

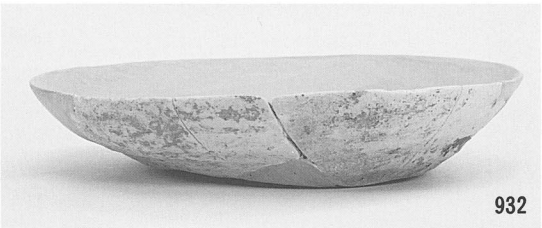
913


933

914

931

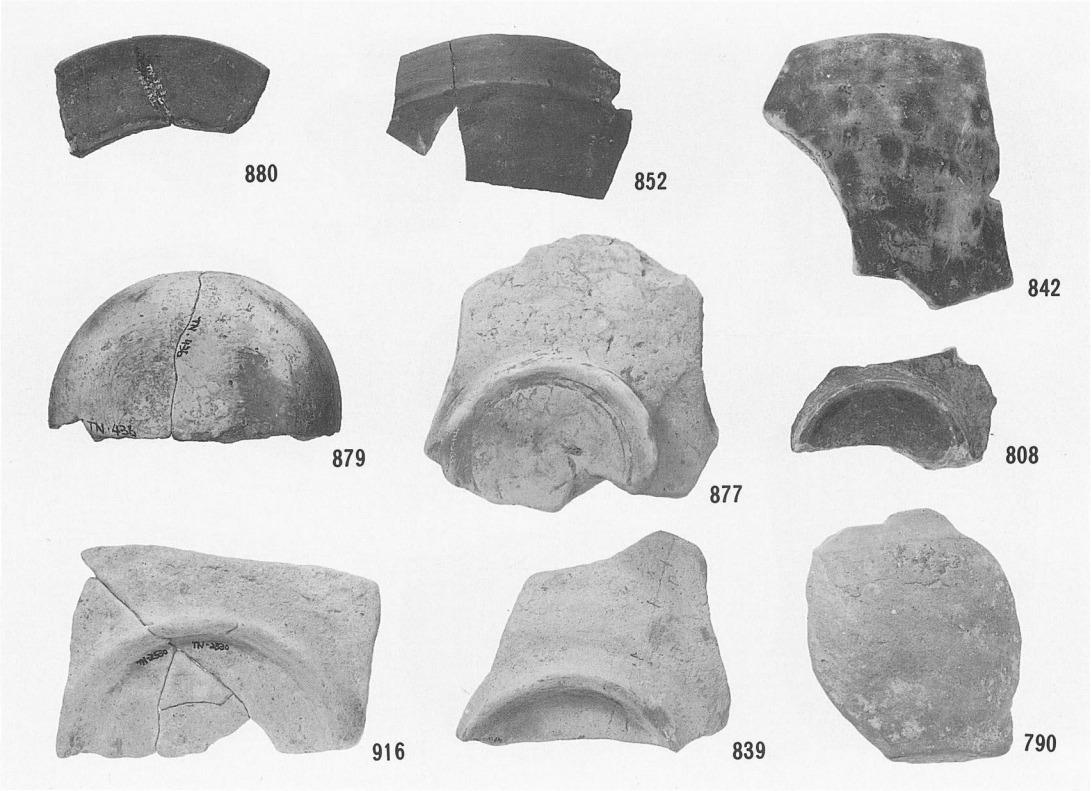
922

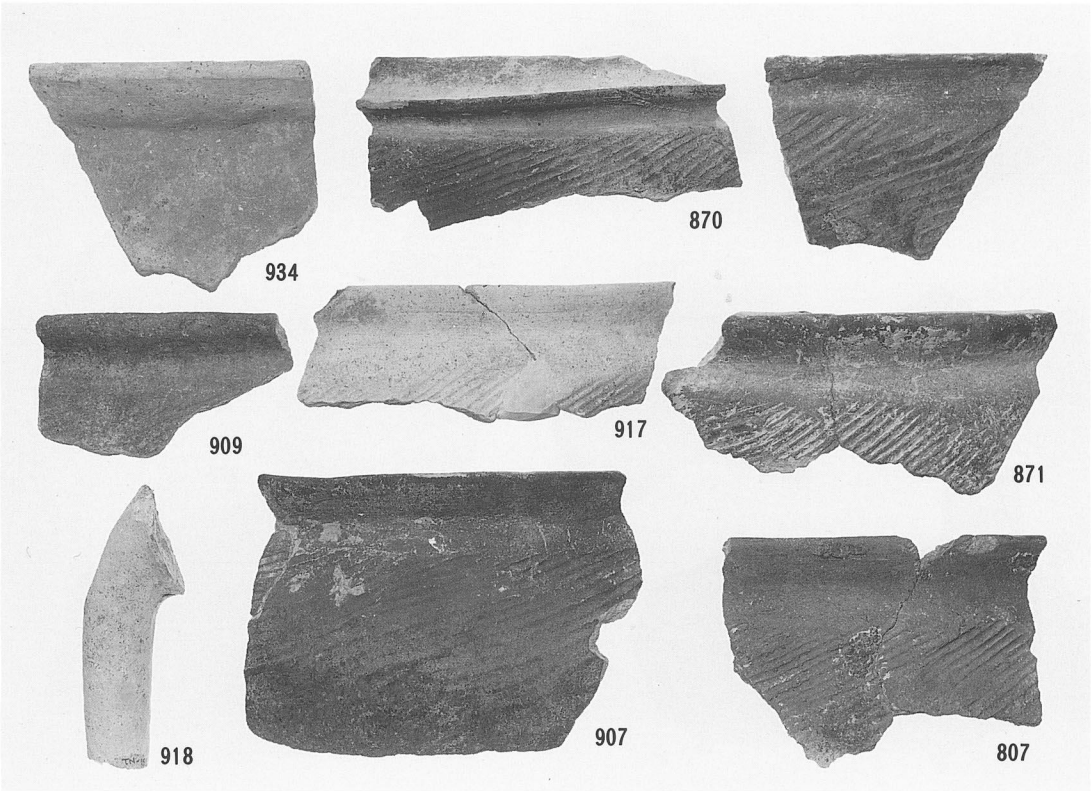

932

915

包含層出土土器

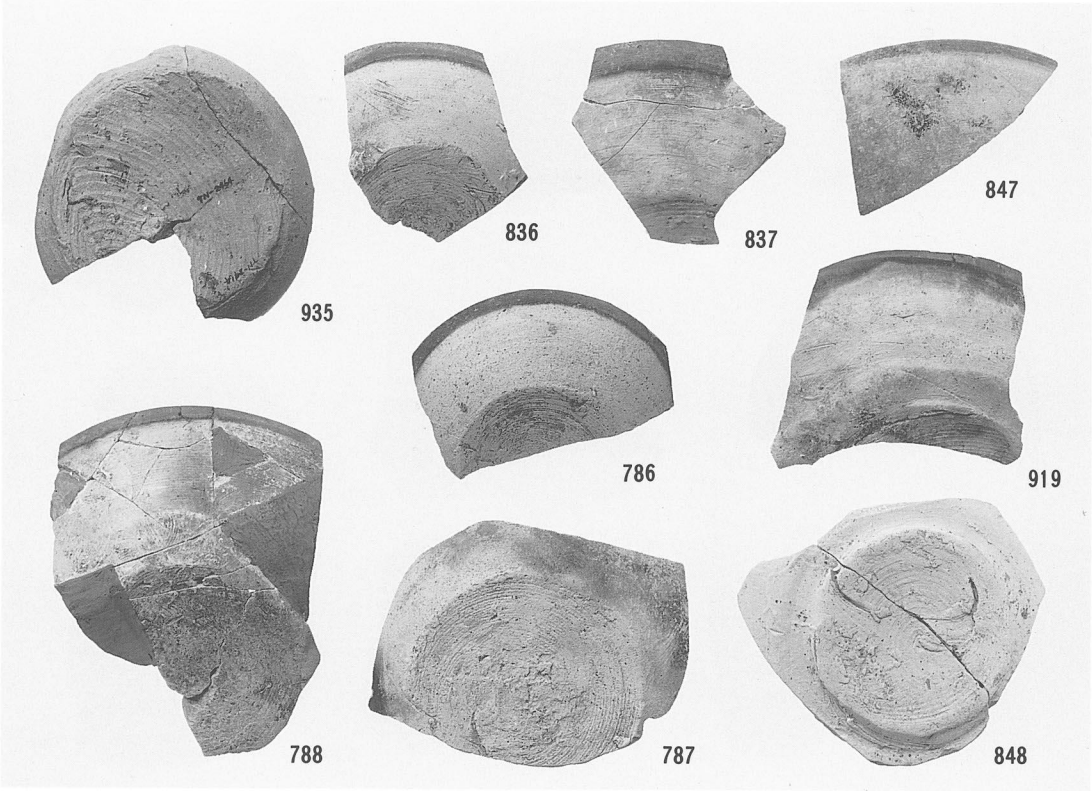
図版第三十一　平安時代末～室町時代の土器



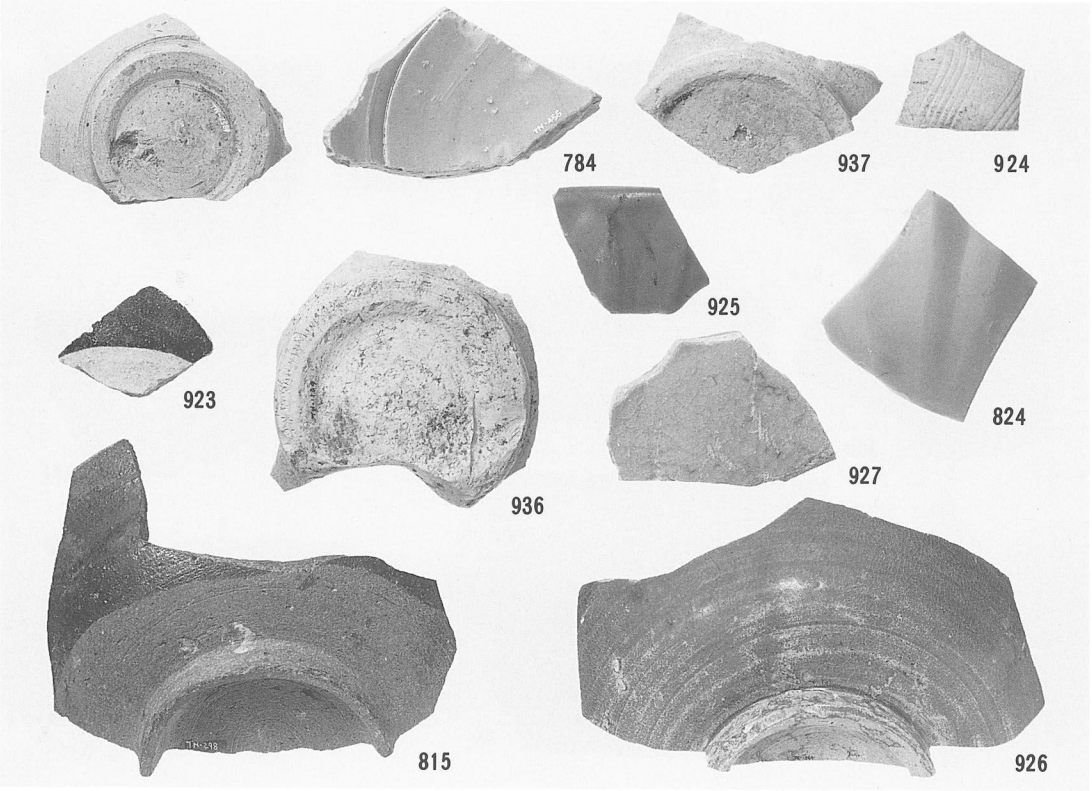


土師器

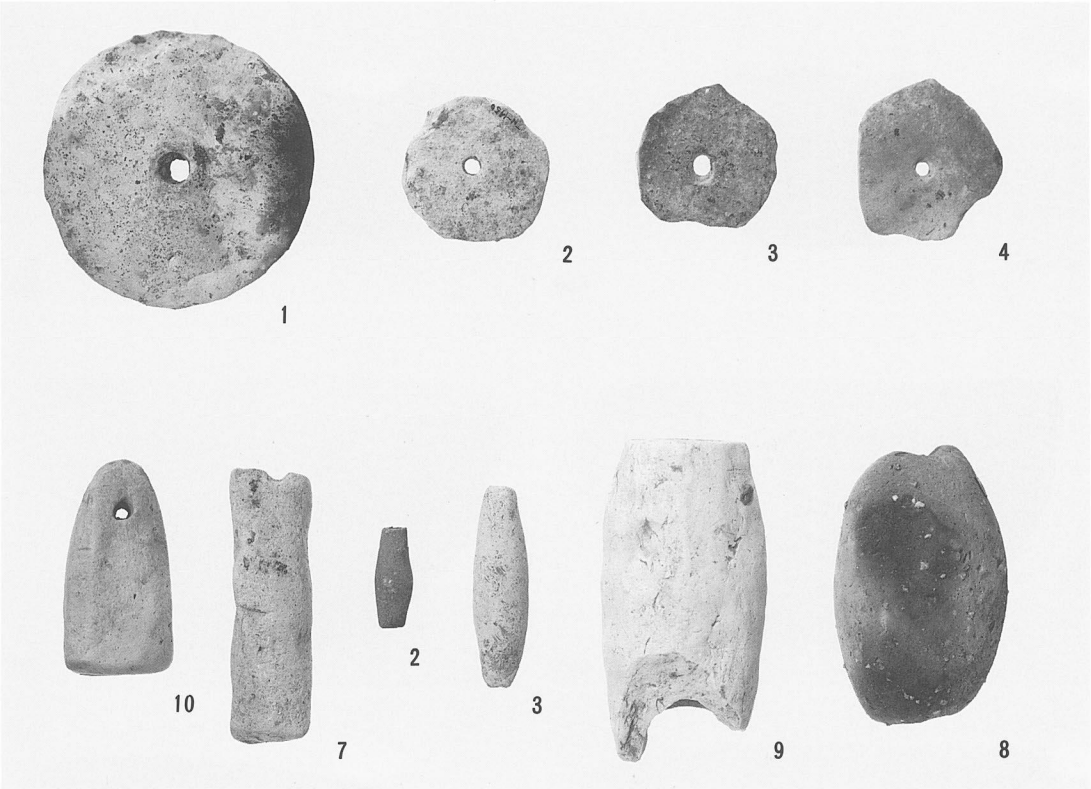
図版第三十二　平安時代末～室町時代の土器



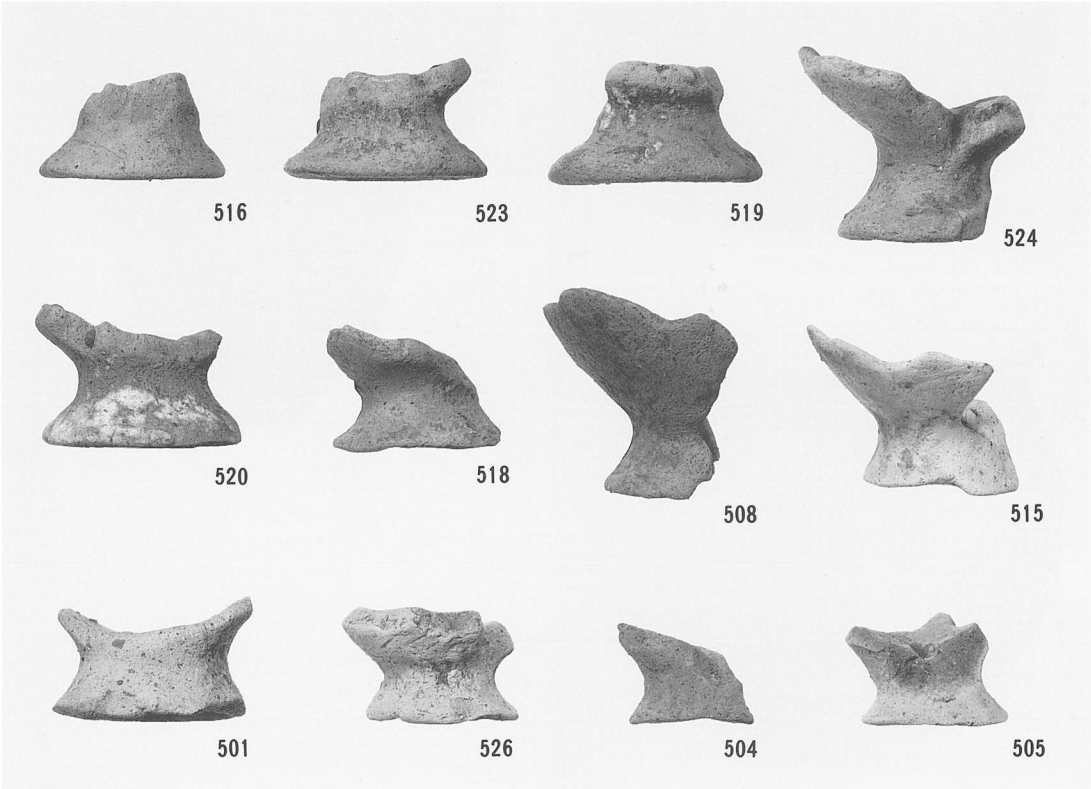
上）須恵器



下）陶磁器



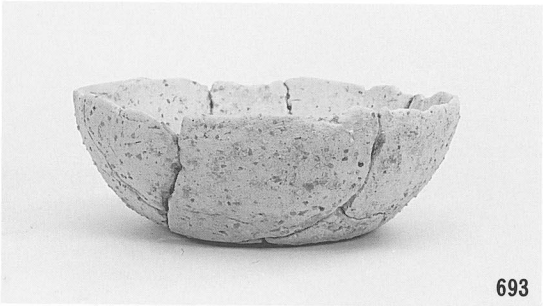
上）土錘・紡錘車



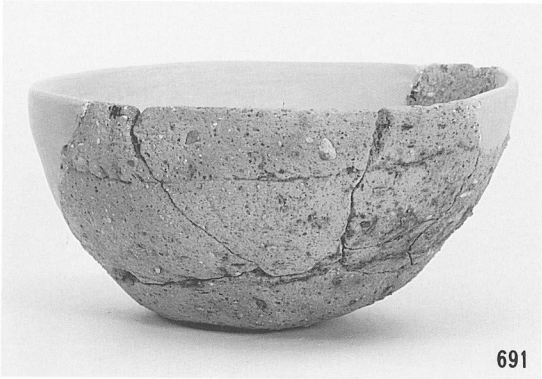
下）製塩土器

図版第三十四　製塩土器

690


693

692

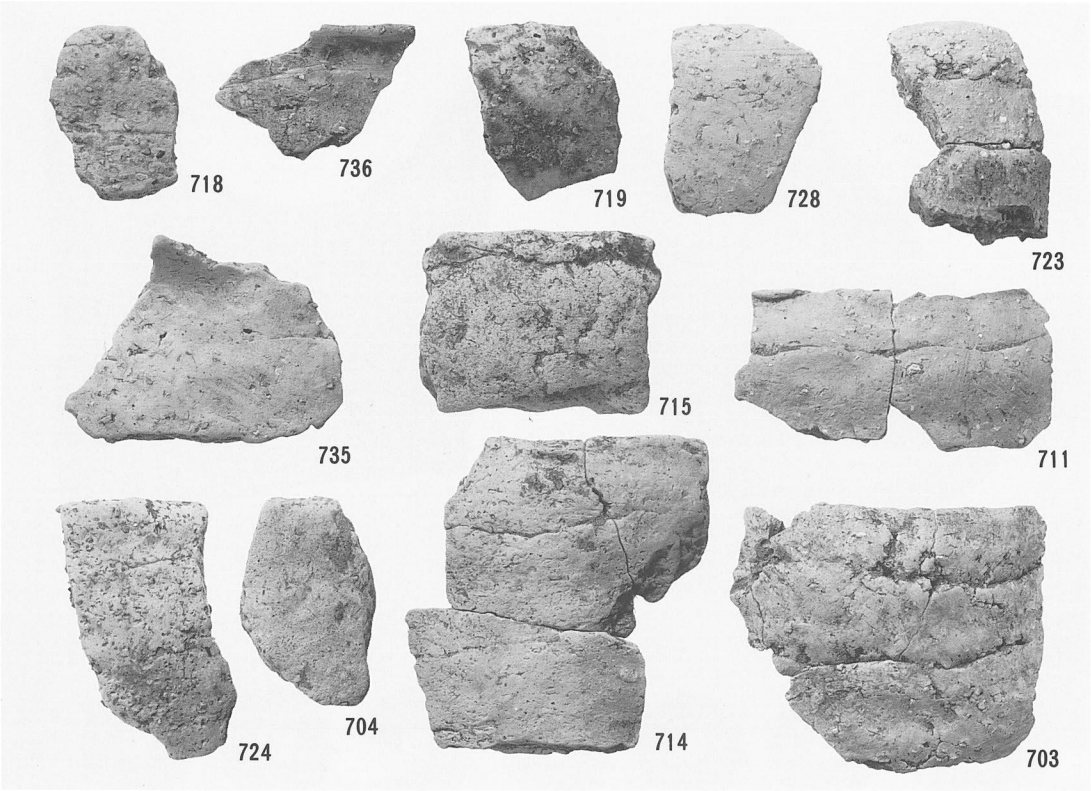

691

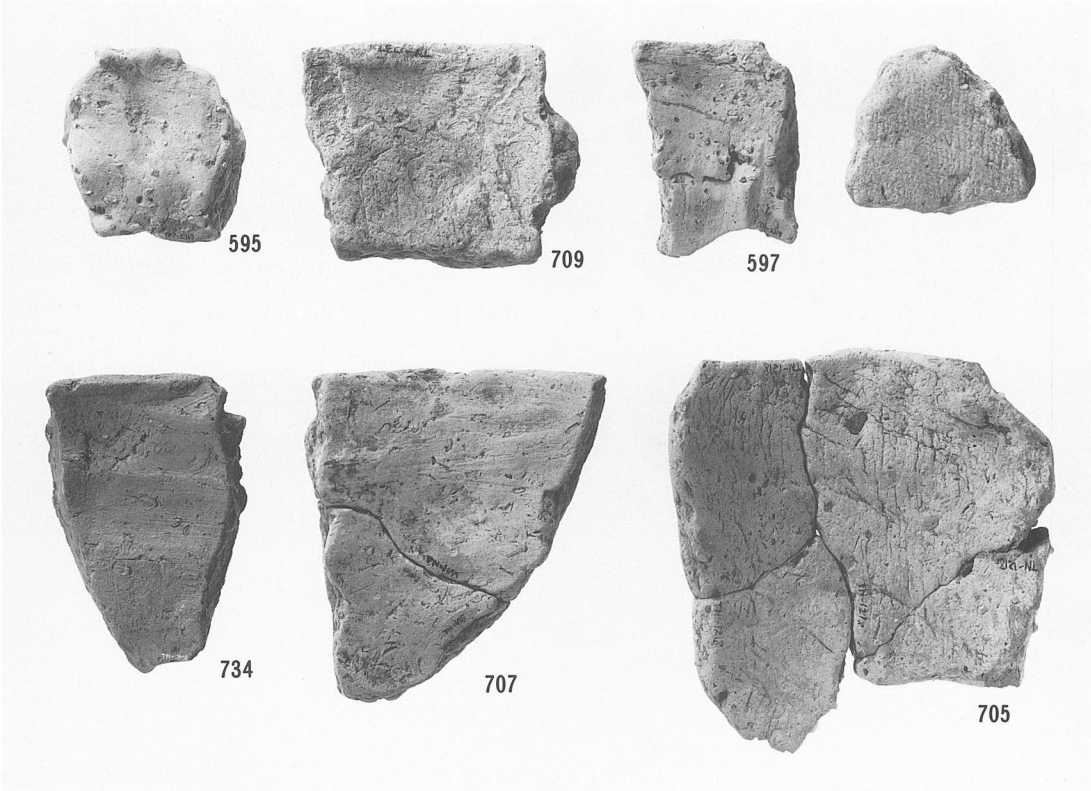
697

713

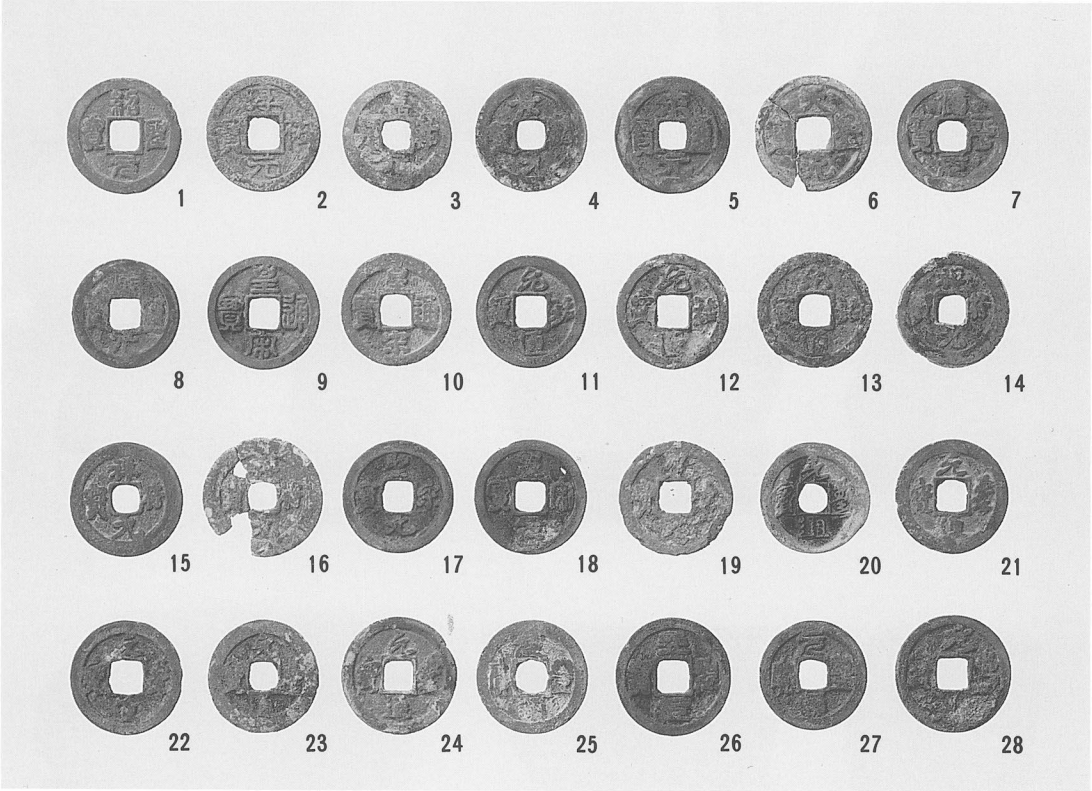
701

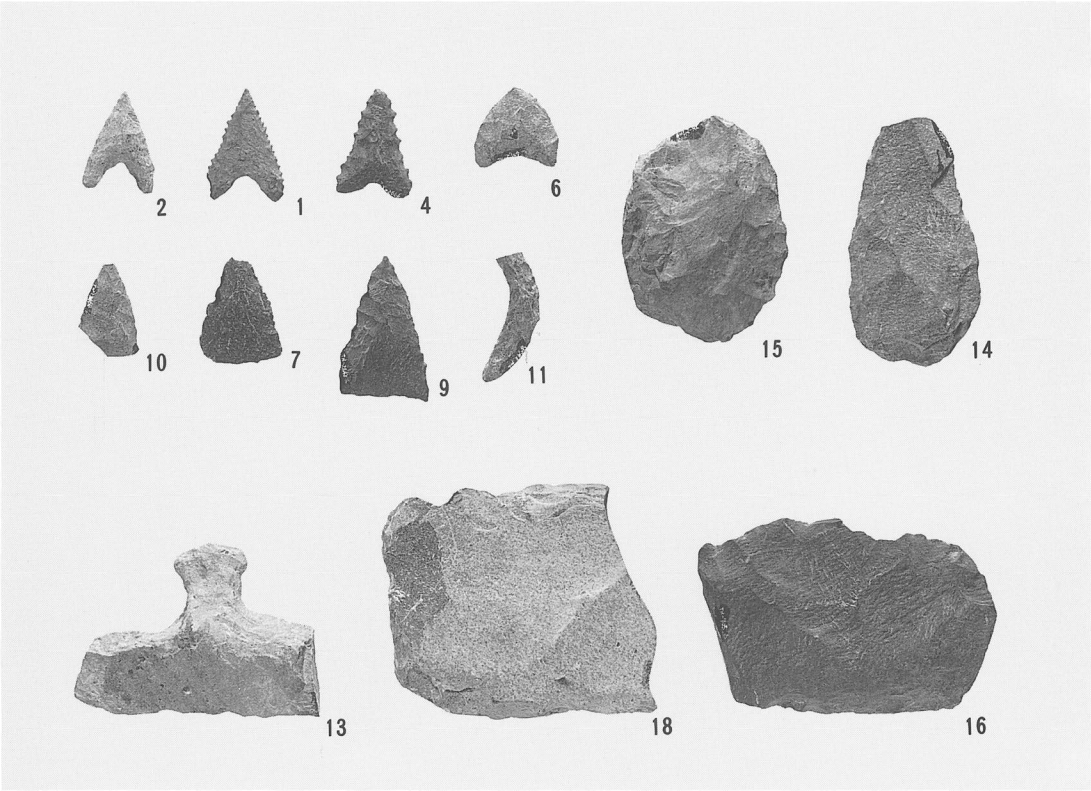
図版第三十五　製塩土器

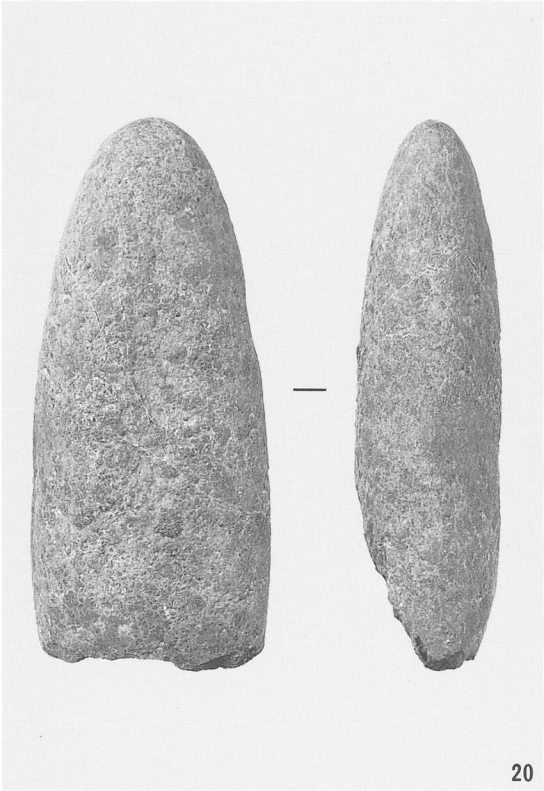

718
736
719
728
723
735
715
711
724
704
714
703


595
709
597
734
707
705

図版第三十六　墨書土器・鉄製品・銅銭




2
1
4
6
10
7
9
11
15
14
13
18
16


20

23

兵庫県文化財調査報告書　第73冊
谷町筋遺跡
平成2年3月31日　発行
編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL(078)531-7011
発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL(078)341-7711
印　刷　福田印刷工業株式会社
〒658 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3
TEL(078)811-3131(代)